琉球大学学術リポジトリ

宮古・八重山諸島先史時代における文化形成の解明：遺跡属性と生態資源利用の地域間比較を通した文化形成の考察

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2017-03-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山極, 海嗣, Yamagiwa, Kaishi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33725

宮古・八重山諸島先史時代における文化形成の解明

－遺跡属性と生態資源利用の地域間比較を通した文化形成の考察－

平成 27 年度

琉球大学大学院
人文社会科学研究科

比較地域文化専攻（考古学）
学籍番号：128092K
山極　海嗣

目　　次

第 1 章　宮古・八重山諸島の先史時代と問題提起

1. 宮古・八重山諸島の先史時代
2. 既存の先史時代研究の方向性とその課題
3. 島嶼環境の文化形成へのアプローチ
4. 本論における目的とアプローチ

第 2 章　本論の分析方法と分析対象の設定

1. 分析方法
2. 分析対象遺跡と基準の設定
3. 各時期における遺跡の概要

第 3 章　下田原期の文化内容と時空間変異の整理

1. 放射性炭素年代による年代観の整理
2. 土器から見た時空間変異
3. 属性分析から見た遺跡間の変異
4. 下田原期の文化内容と時空間変異の整理

第 4 章　無土器期の文化内容と時空間変異の整理

1. 放射性炭素年代による年代観の整理
2. 属性分析から見た遺跡間の変異
3. 無土器期の文化内容と時空間変異の整理
4. 浦底遺跡の再評価と貝斧文化の展開

第 5 章　下田原期と無土器期の比較

1. 遺跡の属性比較から見た両時期の比較
2. 資源利用とセトルメントから見た両時期の比較
3. 下田原期と無土器期の共通点と相違点

第 6 章　南方文化起源論の検証

1. 台湾・フィリピンにおける先史時代
2. 台湾における物質文化の展開と下田原期の比較
3. オーストロネシア語族北上の可能性
4. シャコガイ製貝斧における南方起源の検証

第 7 章　結論：先史宮古・八重山諸島の文化形成

1. 下田原期における文化形成
2. 下田原期から無土器期への文化形成
3. 無土器期の終焉とグスク文化に影響を受けた物質文化の展開
4. 結論：先史宮古・八重山諸島の文化形成論

第１章　宮古・八重山諸島の先史時代と問題提起

1. 宮古・八重山諸島の先史時代

・宮古・八重山諸島の地理

先島諸島とも呼称され宮古・八重山諸島は、沖縄島を主とする沖縄諸島の南西約 300 ㎞、中華民国台湾島の北東約 100 ㎞の東シナ海の洋上に位置する島嶼地域である。本地域は、宮古列島と八重山列島の二つの島嶼地域から構成されており、日本列島の西縁にあたる（図 1)。

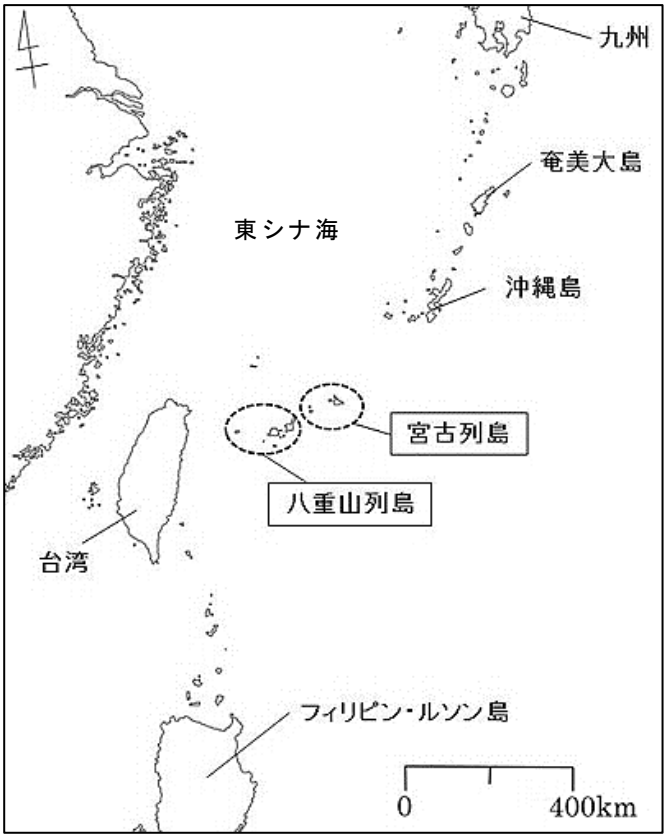


図 1. 宮古・八重山諸島の地理関係

地理関係において、九州地域から沖縄島までは、人間の目視によってお互いの島が視認可能である「有視界」の関係にあるが、沖縄島と宮古列島の間は両地域の中間の洋上においてもお互いを視認することができず、有視界の関係からは外れている。また、八重山列島最西端の与那国島（図 2）と台湾の間に関しては、与那国島から台湾の島影が視認できるものの、台湾からは与那国島の面積が小さくて視認できないという、一方通行的な視認関係に位置している。このような目視による地理関係は、特に帆船や航海技術が発達していない先史時代における人類の海上移動に大きな影響を与えていたものと考えられている（木下 2012)。

複数の島から構成される宮古・八重山諸島は（図 2)、行政区分上は宮古島・伊良部島・多良間島などは宮古列島に、石垣島・竹富島・小浜島・西表島・波照間島・与那国島などは八重山列島に分類されるが、多良間島は距離的には石垣島に近い立地を示している。

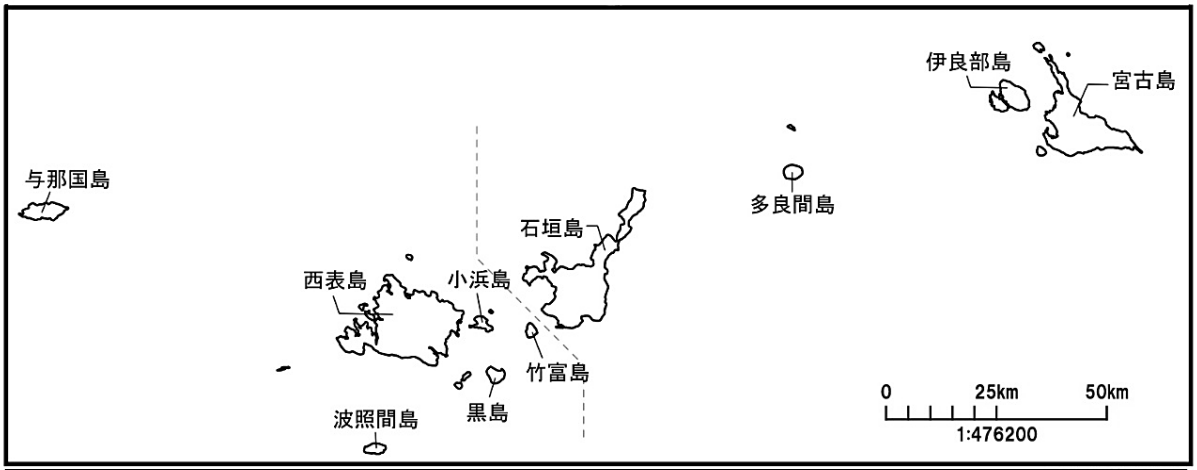


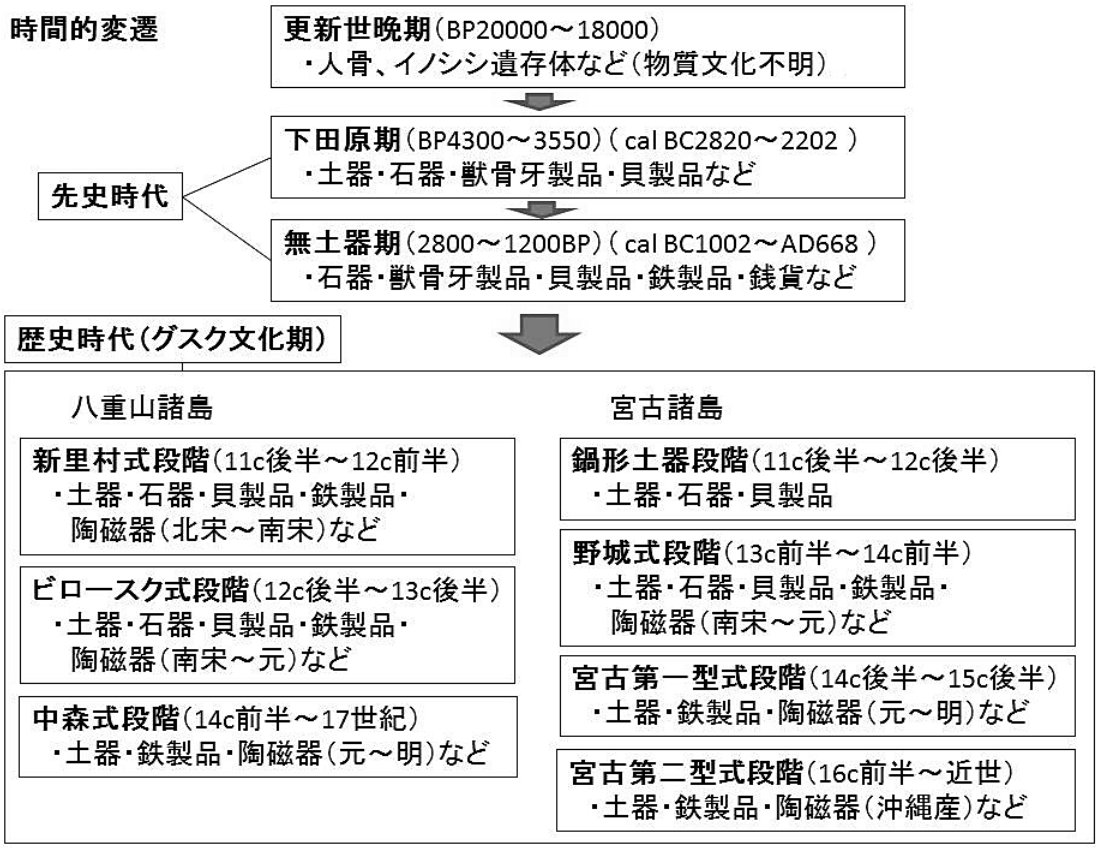
図 2. 宮古・八重山諸島内における島の立地関係（MAPAC 白地図を基に作成）

・宮古・八重山諸島の先史時代

宮古・八重山諸島における最初期の人類活動は BP20,000 年頃[1]から確認されている（Nakagawa et al. 2010、沖縄県立埋蔵文化財センター2013）。しかしながら、これらは古人骨の発見[2]によって確認されたもので、人類活動に伴う遺構や人工遺物は殆ど確認されていない。そのため、この時期の人々のもつ物質文化は考古学的には明確になっておらず、人類活動の空間的な広がりや、時間的な継続性は判然としていない状況にある。

宮古・八重山諸島で物質文化が確認できるのは、BP4,300 年（cal BC2,820）頃[3]以降で、この時期から 11 世紀後半頃に至るまでが、考古学的な先史時代と位置付けられる（表 1）。

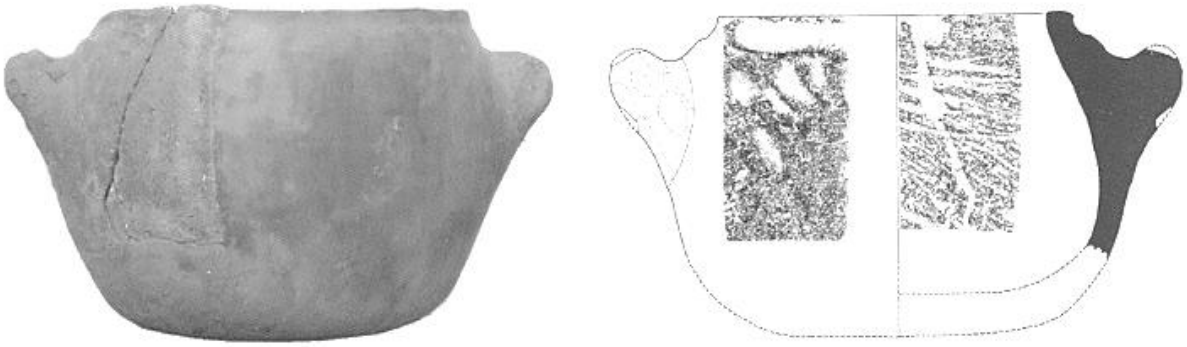
表 1. 宮古・八重山諸島の時間的変遷
（新里 2004、片桐 2012、名島 2013 を基に作成）
矢印で示した時期間の関係は、文化的継続性・連続性の解釈が未だ曖昧な状況。



宮古・八重山諸島の先史時代[4]は、約 BP4,300～3,550（cal BC2,820～2,202）年に位置する「下田原期（しもたばるき）」と、約 BP2,800～1,200 年（cal BC1,002～AD668）に位置する「無土器期（むどきき）」の、大きく二つの時期で構成されている。両時期とも、宮古・八重山諸島の複数の島に遺跡の分布が確認でき、多くの島で人類活動が行われたことが読み取れる。

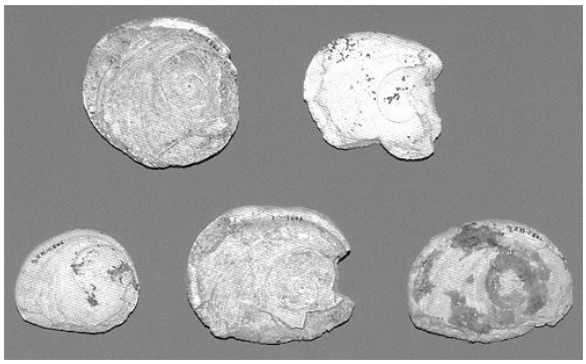
下田原期においては、当時の人々が利用したと考えられる土器や石器、哺乳類の骨牙製品、貝製品などが出土（図 3）する遺跡が確認されている。特に土器（図 3：1）に関しては、この時期の物質文化を特徴づける考古資料として「下田原式土器」の呼称が与えられており[5]、並行する時期の沖縄諸島で展開した土器文化とは特徴が異なることから、その文

化的な起源関係を示唆する資料としても注目されている。また、この時期の遺跡からは、農耕などの食糧生産を示す痕跡が確認されていないことから、主に狩猟・漁撈・採集を中心とした食糧獲得社会であったと考えられている（石垣市総務部市史編集課 2008）。

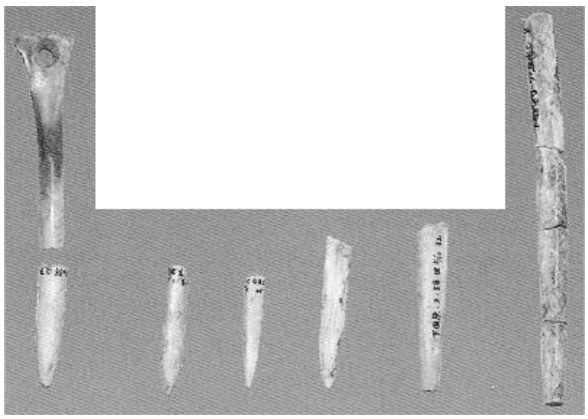


1：下田原期出土の土器（石垣市総務部市史編集課 2008）

2：下田原期出土の石器
（石垣市立八重山博物館提供）



3：下田原期出土のヤコウガイ蓋製品
（石垣市総務部市史編集課 2008）

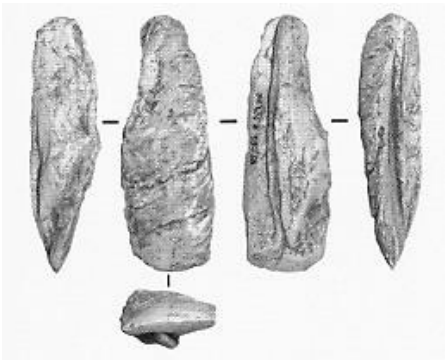


4：下田原期出土のイノシシ骨牙製品
（石垣市総務部市史編集課 2008）

5：下田原期出土のサメ歯製品
（石垣市総務部市史編集課 2008）

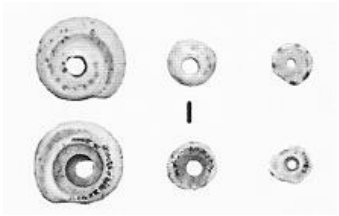
図 3. 下田原期の主な考古学的遺物（縮尺不同）

下田原期に次ぐ無土器期においては、下田原期と同様に石器や哺乳類の骨牙製品、貝製品などが出土するが（図 4)、時期名称にある通り、土器が出土しないという点が大きく異なっている。このように土器利用の物質文化から土器を利用しない物質文化へと変遷する先史時代の事例は世界的に見ても稀な現象で[6]、 加えてシャコガイの貝殻を材料した斧製品（貝斧）（図 4：1）が遺跡から出土することも、この時期の人々の物質文化を特徴づけている。無土器期の遺跡においても、下田原期と同様に農耕などの食糧生産を示す痕跡が確認されていない。このことから、この時期も主に狩猟漁撈採集を中心とした食糧獲得社会であったものと捉えられている（石垣市総務部市史編集課 2009)。



1：無土器期出土のシャコガイ製貝斧
（石垣市総務部市史編集課 2009）

2：無土器期出土の石器
（高宮・知念(編)2004）



3：無土器期出土の貝製品
（石垣市総務部市史編集課 2009）

3：無土器期出土の銭貨（開元通寶）
（石垣市総務部市史編集課 2009）

図 4. 無土器期の主な考古学的遺物（縮尺不同）

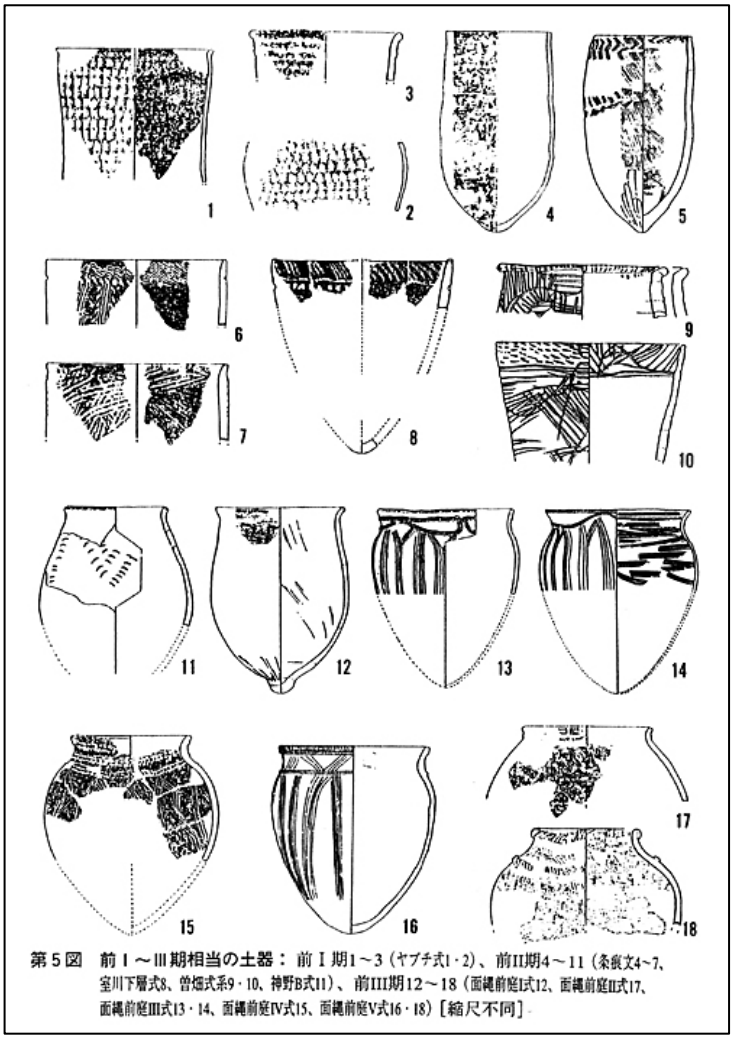
・沖縄諸島先史文化との関係

沖縄諸島は沖縄島を中心として、周辺の久米島や渡名喜島、慶良間諸島などを含む地域である。これらの島々は全て人間の目視できる範囲で立地しているが、先に述べたように同じ沖縄県に属する南西の宮古島とは約 300 ㎞の海を隔てており、沖縄諸島のいずれの島からも宮古島は視認することはできない。

沖縄諸島における人類の痕跡は、山下町洞穴遺跡（那覇市）出土の人骨（BP32,000 年頃）[7]や、港川フィッシャー遺跡（八重瀬町）（BP16,000 年頃）[8]出土の人骨が、比較的古い年代を示すものとしてよく知られている。この年代は、日本列島本州地域などでは「旧石器時代」[9]に属する時期に相当するが、現時点で明確に本州地域の「旧石器文化」を示す資料は確認されていない。一部の資料に関しては石器の可能性を残すが[10]、九州地域に展開した旧石器とは特徴が異なっており、ユーラシア大陸東南海岸部や台湾地域の旧石器とも特徴が一致しないことから、地域間の関係は判然としない状況にある（山崎 2014）。

沖縄諸島において継続的な物質文化が確認できるのは BP7,000–6,500 年頃で、この時期に爪形文と呼称される紋様をもつ土器（図 5：1-3）が出現する。この土器の出自に関しては、朝鮮半島や九州地域、宮古・八重山諸島とは異なることが指摘されており、沖縄諸島で生み出された可能性も示唆されているが（伊藤圭 2014）、明確な文化的起源に関しては明らかにされていない[11]。

BP6,300 年（cal BC4,274）頃になると、沖縄諸島では九州地域の縄文土器文化と繋がりが考えられる曽畑式土器（図 6：9-10）や、条痕文系土器（図 6：4-7）が出土するようになる。この土器に関しては、九州南部地域から奄美群島を経由した土器文化の伝播と、伝播先にて土器の地域的な特徴が展開すると言うプロセス（ローカル化）で解釈されており（横尾 2014）、この時期以降、沖縄諸島は九州南部から奄美群島までの地域間で断続的に影響し合いながら、土器文化が継続・展開していくこととなる。これらの土器に関しては形態や紋様、施文方法などの特徴を基に考古学的な型式設定がなされており、地域間比較を通した各土器型式の対応関係が整理されている（表 1）。



第５図　前Ⅰ～Ⅲ期相当の土器：前Ⅰ期1～3（ヤブチ式1・2）、前II期4～11（条痕文4~7、室川下層式8、曽畑式系9・10、神野B式11）、前III期12～18（面縄前庭I式12、面縄前庭II式17、面縄前庭III式13・14、面縄前庭IV式15、面縄前庭V式16・18）[縮尺不同]

図 5. 沖縄諸島前 1 期～3 期（表 1 に対応）相当の土器（縮尺不同）（伊藤慎 1999）

表 1. 奄美群島～沖縄諸島の土器編年（新里ほか 2014）

本土	トカラ	奄美北部	奄美南部	沖　縄	貝塚時代	C14（参考）	文化的画期			その他
		大島・喜界島	徳之島・沖永良部島等	沖縄本島・離島			石器	貝製品	骨製品	
旧石器時代～縄文草創期					[旧石器]	（沖縄）	低緯度旧石器（第Ⅰ段階）			
縄文早期	?	（喜子川？）	（＋？）	（大堂原・野国Ⅳ群）	前1期	6077±52BP	前琉球縄文式（第Ⅱ段階）	出現（実用品）（第１段階）	出現（実用品）	
	?	（＋？）	（＋？）	爪形文系　古段階（ヤブチ洞窟ヤブチ式）						
縄文前期	?	新１段階（ヤブチ式・野国タイプ）								貝塚形成
	?	新２段階（東原式等）								
	?	条痕文系　古段階（喜界町総合グラウンド・中浦４層）		条痕文系　古段階（＋）（ウフニクガマ・港川）	前2期		（石器群不明）	出現（装身具）（第２段階）		
	?									
	（＋）	新１段階（曾畑式・条痕文）（条痕文）				calBC4274-3704	琉球縄文式（第Ⅲ・Ⅳ段階）			
縄文中期		第２段階（室川下層式）（室川下層式・神野Ａ式）								
	（＋）	隆帯文系　古１段階（神野Ｂ式等）								
	（＋）	古２段階（具志川Ａ・Ｂ式）			前3期	calBC2623-2016				
	（＋）	新１段階（具志川Ｃ・神野Ｃ式）								
		新２段階（面縄前庭式）								集落の形成
	（＋）	新３段階（古我地原Ⅰ式）								
縄文後期	?	沈線文系　古段階（古我地原Ⅱ・Ⅲ式、ケジⅠ類等）	沈線文系　古段階（古我地原Ⅱ・Ⅲ式、志喜屋武当・下原Ⅲ１住）	沈線文系　古段階（古我地原Ⅱ・Ⅲ式・具志川島岩立Ⅶ層）	前4期			南島貝文化成立（第３段階）	発展	
	籠目文系	古１段階（面縄東洞式＋市来式・面縄東洞式）		新段階（仲泊式）						集団墓形成
	（＋）	古２段階（面縄東洞式・嘉徳ⅠＡ式・嘉徳Ⅱ式）								
	（＋）	新１段階（嘉徳ⅠＡ式・嘉徳Ⅱ式・神野Ｄ式）								
		新２段階（嘉徳ⅠＢ式・嘉徳Ⅱ式、長浜金久Ⅱ）		点刻線文系　古１段階（伊波式・神野Ｅ式）						黒曜石広域流通
	（＋）	（嘉徳ⅠＢ式・嘉徳Ⅱ式，面縄第２）		古２～３段階（伊波式）						
				中１段階（荻堂式・伊波式）		calBC2348-916				
	（＋）	肥厚口縁系　古１段階（「面縄西洞式」、手広13層）	（＋）	中２～３段階（荻堂式）						
				新段階（大山式等）						
	古２段階（「面縄西洞式」・犬田布式、宇宿小第１文化層）		古２段階（犬田布Ⅰｂ類・Ⅱ類、犬田布式）（犬田布Ⅰｂ類・Ⅱ類・犬田布式）（ナーデン当型）	古２段階（室川式、吹出原）（室川式、知場塚原）						ヒスイ広域流通
										墓制多様化
縄文晩期		新段階（宇宿上層式＝宇佐浜式・喜念Ⅰ式）			前5期	calBC1501-891				拠点集落形成
刻目突帯文		無文尖底系　仲原式（古）仲原式（新）				calBC1510-742				
					後1期					石棺墓導入
弥生前期	（＋）	阿波連浦下層式（古）				(2480±100BP)			減少	ゴホウラ・イモガイ・オオツタノハ交易
	（＋）	手広５層		阿波連浦下層式（新）				第１次貝交易（第４段階）		
弥生中期		沈線文脚台系　サウチ								遺跡立地の集約化
		イヤンヤ								
		長浜金久第Ⅳ		浜屋原式		(1680±50BP)				
弥生後期	（＋）	宇宿港					統琉球縄文式（第Ⅴ段階）			
				大当原式		calBC40-AD432				
古墳時代	?	スセン當式Ⅱａ						第２次貝交易（第５段階）		イモガイ・オオツタノハ・ゴホウラ交易
	?	スセン當式Ⅱｂ								
	?	くびれ平底系兼久式		くびれ平底系アカジャンガー式	後2期	calAD246-654		第３次貝交易（?）（第６段階）		ヤコウガイ交易？穀類農耕開始？
奈良・平安時代	（＋）	土師器	（川嶺辻）	フェンサ下層式		calAD581-1214	グスク式（第Ⅵ段階）	南島貝文化衰退		

注　1）貝塚時代前期については伊藤慎二（2011）に基づき、一部改編して作成。ただし、前２期古段階についてはより古くなる可能性がある（本書山崎論文考参照）。

2）貝塚時代後期の区分にはおおむね仲原式土器に求める説と阿波連浦下層式土器に求めるものがあるが、今回、仲原式（新）で区分しておく。

3）放射性炭素年代、石器・貝製品・骨製品の文化的画期については、それぞれの執筆者と合議して位置づけた。

土器編年（表 1）の前 4 期・5 期の時期には、沖縄諸島では産出しない黒曜石で製作された打製石鏃・不定形剥片石器が出土しており（大堀 2014）、その大半は佐賀県の腰岳（こしだけ）に産出することが理化学的な同定によって示されている（小畑ほか 2004）。また、前 4 期・5 期は、土器や石器のみならず、オオツタノハ製の貝輪など、貝製品に関しても九州南部～沖縄諸島における双方向的交流が確認されており（上村 2007）、貝製品製作の技術や、形態にも影響を与えたと考えられている（山野 2014）。沖縄諸島における最初期の土器（爪形文土器など）に関しては未だ来源が定まっていないものの、少なくとも BP6,300 年頃（cal BC4,274）以降、沖縄諸島は九州地域や奄美群島地域と断続的な影響関係を保ちながら、物質文化が形成・展開していったものとして捉えることができる。

このような沖縄諸島の物質文化とその変遷に対し、宮古・八重山諸島の物質文化は異なる点が多く確認されている。下田原期における下田原式土器の特徴は、沖縄諸島の土器型式とは一致せず、加えて土器を途中で喪失するという文化変遷（無土器化）は沖縄諸島では確認されていない。また、無土器期を特徴づけるシャコガイ製貝斧も、同様のものは沖縄諸島では出土しておらず、遺跡の遺構にも異なる点が多い。

しかし、11 世紀後半以降になると沖縄諸島と文化的関係を示すような遺物も確認できるようになる。この時期の沖縄諸島は、石積みを伴う構造物（グスク）によって特徴づけられる「グスク文化期（時代）」に入っており、宮古・八重山諸島でも沖縄諸島と共通した長崎産の滑石製石鍋（かっせきせいいしなべ）（図 6）の破片や、徳之島産のカムィヤキ（図 7）、大陸産陶磁器類の出土が確認できるようになる。また、このような北からの文化的影響を受けることによって、宮古・八重山諸島でも再び土器（図 8）が製作・利用されるようになる。11 世紀後半以降は、沖縄諸島と宮古・八重山諸島ともに、農耕技術が伝播・展開していく。これは食糧獲得社会から食糧生産社会への転換を示しており、このグスク文化の影響を受け始める 11 世紀後半に、宮古・八重山諸島の先史時代は終焉すると捉えることができる。

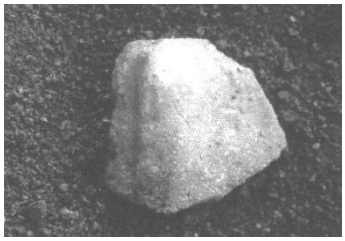


図 6. 滑石製石鍋
左：新里村東遺跡（竹富島）出土の滑石製石鍋破片（石垣市総務部市史編集課 2009）
右：博多遺跡群（福岡県）出土の滑石製石鍋（鹿児島県歴史資料センター黎明館 2015）

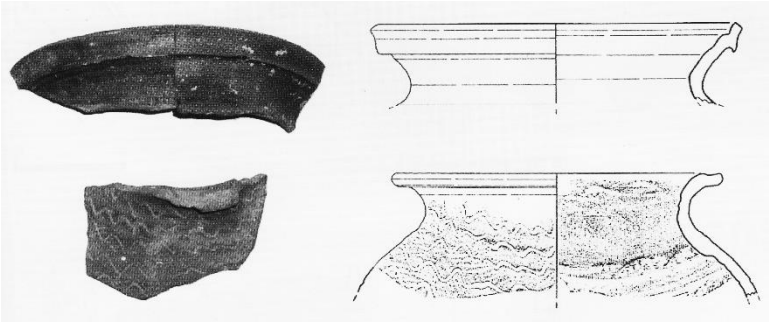


図 7. 新里村東遺跡出土のカムィヤキ破片（石垣市総務部市史編集課 2009）

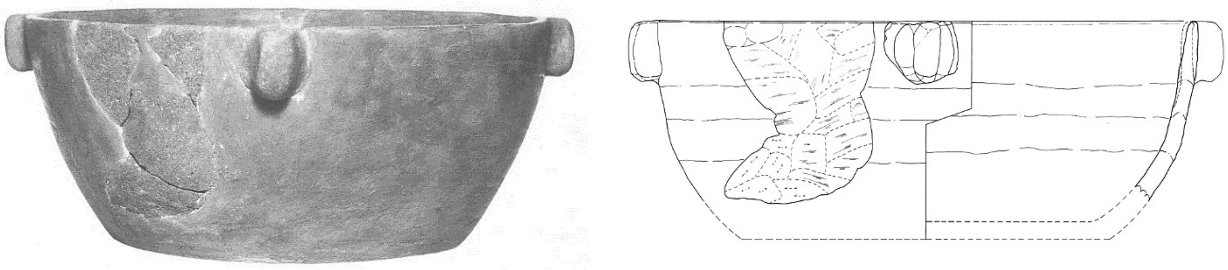


図 8. カイジ浜貝塚出土の新里村式土器（沖縄県教育委員会 1994）

2. 既存の先史時代研究の方向性とその課題

以上のように、宮古・八重山諸島の先史時代における物質文化は、現在は同じ「沖縄県」に含まれる沖縄諸島とは異なる特徴を示している。この沖縄諸島以北との相違は、九州地域から伝播し展開する縄文土器文化とは異なる文化系統である可能性を強く示唆しており、これは宮古・八重山諸島における先史研究の方向性にも大きな影響を与えている。

・沖縄諸島とは異なるという視点の構築

本地域の先史文化が、沖縄諸島の物質文化とは異なるという見解は、1900 年代初頭に、既に鳥居龍蔵によって示されている。鳥居は八重山諸島の発掘成果を通して、沖縄諸島と八重山諸島の遺跡を残した人々は別系統の民族であること、日本列島の縄文文化[12]の痕跡が沖縄諸島で途切れることを指摘し、また石器時代（先史時代）と青磁を使用した時代の人々が同一民族ではない可能性を指摘した（鳥居 1926）。

鳥居による見解は、第二次世界大戦などの混乱期を挟んだことで暫く検証が停滞するが、戦後に金関丈夫や国分直一らによって行われた、波照間島の下田原（しもたばる）貝塚発掘調査（金関ほか 1964）の成果によって追認されることとなる。金関らは発掘調査の成果から、同貝塚の土器と台湾南部地域の土器との関係を指摘しており（同前：11-12）、八重山諸島の先史時代を担った人々が東南アジアなどの南方にルーツを持つ可能性を指摘した。金関らのこの指摘は、国語学者の宮良当壮や言語学者の服部四郎から反論を受けるが[13]、これは日本国復帰（1972 年）直前の沖縄を背景とした「日琉同祖論」イデオロギーが強く影響した議論であったことが指摘されている（谷川 1971：289-291）。

金関らの調査と並行する時期、西村正衛らによる波照間島や西表島の発掘調査も行われており[14]、金関らの指摘と同様に八重山諸島の物質文化が沖縄諸島とは異なることが確認されている（西村ほか 1960）。また、資料の蓄積に伴い、土器や貝製品など、具体的な考古学的資料の比較から、沖縄諸島との違いが指摘されるようになった（国分 1968）。

西村らは、八重山諸島の調査を通して先史時代の「土器を持たない文化（無土器期）」から「土器文化（下田原期）」へと変遷するという基礎となる編年（早稲田編年）を提示したが（西村ほか 1960）、これは 1972 年に沖縄が日本国へ復帰して以降に行われた行政発掘調査によって、「土器文化から無土器文化へと変遷する」という編年観へと改められることとなった[15]。土器文化から無土器文化へという先史時代の文化変遷は、並行する時期の沖縄諸島の先史時代では確認されておらず、当初鳥居が示した沖縄諸島との違いは、物質文化の特徴だけではなく、その時間的変遷からも確認されることとなったのである。

・先史文化の南方起源という方向性の提示

「沖縄諸島と異なる」という事実は、鳥居がかつて指摘したように先史宮古・八重山諸島の文化系統が異なる可能性を強く示唆しており、その文化起源地は必然的に南に向けられることとなる。この南方における宮古・八重山諸島の文化起源地を探るという方向性は、本地域における先史時代研究大きな軸の一つとなっている。

物質文化の南方起源に直接的に言及したものとしては、沖縄諸島とは異なる物質文化（主に人工遺物）に注目し、その類似性を根拠に、周辺地域（台湾・フィリピン等の南方地域）に文化起源を求める論が提示されている（図 9）。その具体的な例としては、下田原期における土器（下田原式土器）を根拠に地理的に近い台湾に起源関係を求める説（国分 1968・1972、高山 1977、新田 1980）[16]、磨製石器から台湾或いは更に南方との関連性を指摘する説（国分 1972、金子 1993）[17]、貝製品や獣骨牙・魚歯製品の台湾との類似（Pearson1968、国分 1972、大濱 1999）[18]が示されており、主として台湾地域との関係が強く示唆されている。

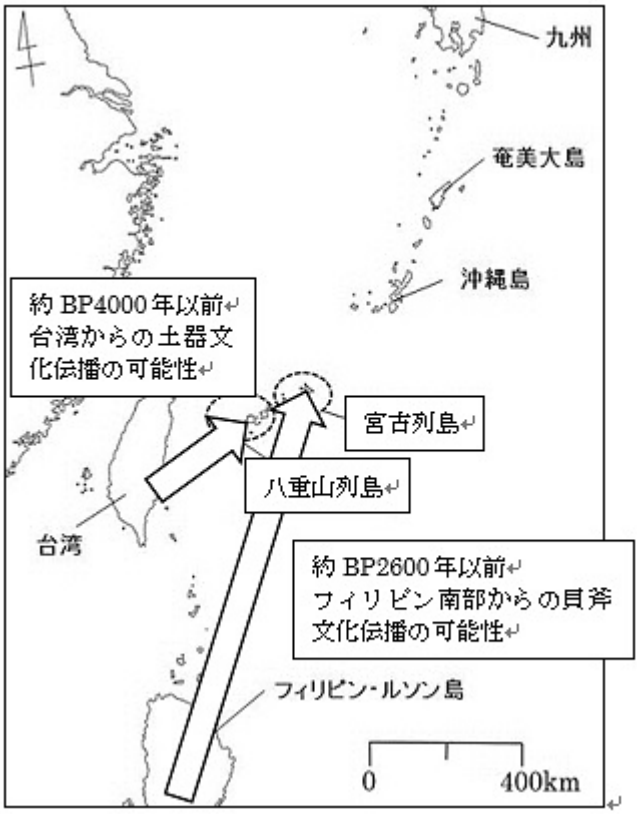


図 9. 既存の研究から示唆されている先史時代の宮古・八重山諸島の文化起源

無土器期に関しては、シャコガイの貝殻を用いて製作された貝斧の類似を根拠に、フィリピン南部にその文化起源を求める説（安里 1993、1994、2010）[19]が提示されており、こちらは台湾ではなくフィリピン地域との関係が示唆されている。

このように、既存の文化起源関係を探る研究は、特定の考古遺物における地域間の類似関係を基に、伝播論的な文化関係を明らかにしようという方向性をもって行われてきた。その中で、下田原期に関しては土器や石斧、一部の貝製品の類似から台湾に、無土器期に関してはシャコガイ製貝斧や集石炉の類似から、フィリピンなどの南方に起源を求める見解が提示され、一般的な認識としても共有されている（石垣市総務部市史編集課 2007）。

・先史時代における時空間的な細分化

特定の考古遺物の比較による文化起源の探究が行われる一方で、遺跡から出土する人工遺物における時間差と、それに伴う形式や技術などの変化を読み取り、先史時代における時軸上の序列化（編年）を図る作業も行われている。先史時代を構成する下田原期・無土器期はどちらも 1,000 年近い時間幅を有していることから、各々の時期における時間的な人工遺物の変化を明らかにすることは、文化起源を検証する上でも重要となる。

時空間軸上の位置付けを行う編年的な研究は、主に型式変化が読み取りやすい土器を対

象として行われており、下田原期に関しては、土器型式の変化の方向性が提示されている（岸本 2004a、伊藤慎 2006）[20]。土器以外では、石器に関する分類案が示されているが（高宮廣 1994・1995・1996b・1999 など）[21]、こちらは下田原期・無土器期における時間的な型式学的変化を示すには至っていない。

このような人工遺物の分類と編年化に伴い、宮古・八重山諸島先史時代における文化系統の分類・整理も行われている。これは主に下田原期・無土器期の文化的連続性・非連続性を問題としており、単一の文化を起源とする集団の連続として 2 つの時期を捉える文化一元論や、複数の文化集団を起源の融合を想定する二元論や多元論という形で纏められている（高宮廣 2001:213-217）[22]。また、下田原期-無土器期間の空白期間を根拠に文化的断絶を支持する説（金武 1994:86）や、東ポリネシアのモデルを援用した土器消失過程モデル（伊藤慎 2006:7-10）が提示されているが、いずれも確定するには至っていない。

・先行研究の問題点と課題

宮古・八重山諸島の先史研究は、「南方起源」という方向性を大きな軸としつつ、先史時代を構成する下田原期・無土器期の時空間的な整理を伴いながら、その文化起源が探し求められてきた。しかしながら、岸本義彦（2000）が指摘するように、漠然とした南方からの伝播が想定される一方で、具体的に関係する地域や遺跡は示されていないことも否定できない。

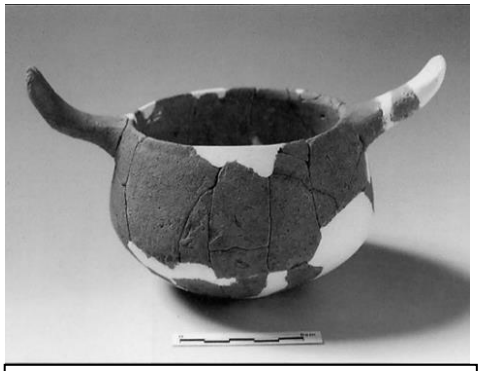


図 10. 長光遺跡出土の雙角鉢形器（施ほか 2001）

近年では、波照間島の下田原貝塚（下田原期）と台湾の潮來橋遺跡における石器の類似や、宮古島の長墓（ながばか）遺跡（無土器期）出土のスレート製石器と台湾新石器時代における石鎌や石包丁との類似を根拠に、台湾を起源とした下田原期・無土器期の連続性も指摘されている（ハドソン 2014）。また、R. Pearson（1969：110-111）が指摘した八重山諸島と台湾東海岸部における把手付き土器（図 10）と扁平片刃石斧の類似性を基に、台湾から拡散したオーストロネシア語族と八重山諸島を結び付ける見解も示されている（Summerhayes et al.2009）。しかし、いずれも具体的に関係する地域や遺跡を特定するには至っていないのが現状である。

更に、台湾の考古学的視点からは、下田原期と平行する時期の台湾が既に農耕を行っていた文化であることから、両地域の起源関係に否定的な見解も示されている（陳 2004）。また、台湾島南部とフィリピン北部の文化関係と比較しても、台湾・フィリピン北部両地域で共通する土器やネフライト製品は、宮古・八重山諸島からは出土していない。このことから、宮古・八重山諸島の文化形成は、台湾から南へと拡散していく人や物の動きとは異なる可能性が指摘されており（Summerhayes et al.2009：86-88、Pearson2013:76-80）、宮古・八重山諸島先史文化の起源として候補の一つに挙がる台湾島東海岸部の新石器文化は、叩き成形の土器、スレート製の石棺、玉（ネフライト）製品（図 11）、紡錘車など、宮古・八重山諸島と異なる文化要素も確認されている（Pearson2013、山極 2014）。

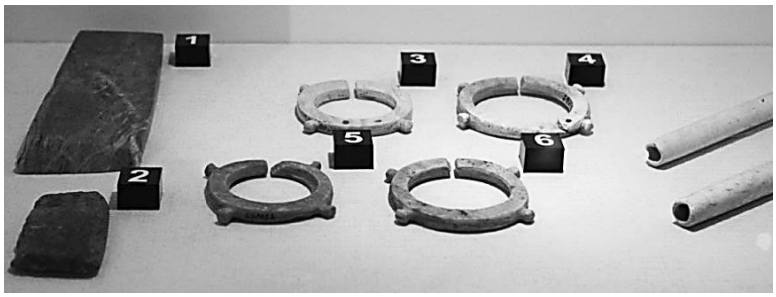


図 11. 卑南遺跡出土の玉製品（国立臺灣博物館所蔵：筆者撮影）

また、無土器期に関しては、並行する時期の台湾島東海岸部が金属器利用の時代に入っており、土器利用も継続していた（劉 2002）。同時期のフィリピン北部でも、台湾南部と関連した土器利用が確認されており（田中 2011）、こちらも宮古・八重山諸島の物質文化やその変遷とは異なる点が確認できる。

このように、宮古・八重山諸島の先史時代の文化的起源に関しては、「南方起源」という方向性が示されているものの、実際にはその起源地と考えられる台湾やフィリピンの文化とは異なる点が多い。既存の研究で示された起源論に関しても、一部の考古遺物の類似性を抽出して提示しており、全体的な文化要素には類似点以上に相違点が存在している。この点は、本地域における先史文化の起源関係を未だ特定できていない要因の一つとなっているとともに、本地域の先史時代における文化形成が「オリジナルの文化とそのコピー」と言う単純な文化伝播論では解釈が困難であることを示している。

3. 島嶼環境の文化形成へのアプローチ

単純な文化伝播論で解釈が難しいということは、本地域の文化形成に別の要因を考える必要がある。これに関しては、R. Pearson（1969・2013）が本地域の文化形成における創始者効果[23]やボトルネック[24]の可能性を指摘しており、マーク・ハドソン（2014）はこの考え方を支持した上で、島嶼環境における人々の生活様式や生存条件が、文化形成に影響を与えていたのではないかと指摘している。

これらの指摘は、起源地の文化が必ずしも移住先で完全に再現されるわけではないことを示しており、このことから、特徴的な一部の文化要素を取り上げて周辺地域と比較することのみが有効であるとは言い難い。ハドソンらの指摘を踏まえるならば、特徴的な考古遺物に限らず、遺跡を構成する考古学的情報全体から当時の人々の文化内容を整理し地域間比較を行う必要があるとともに、「島嶼」という生態環境も踏まえて文化形成を考察する必要があると言えるだろう。

・島嶼環境における人類の活動のリスクとメリット

「島嶼」と一口に言っても、その地質構造や、高い島・低い島の区別、土や水資源の豊かさなど島による環境は多様で、それはその島で生存する人々へ少なからず影響を与えている。印東道子（2002）は、このような島の違いを大きく「火山（かざん）島」[25]・「サンゴ島」[26]に分類した上で、各々における生態環境の特徴を次のように纏めている。

・火山島の特徴（印東 2002 を基に）

「陸島」（古い大陸性地殻により構成された島）と「洋島」（マントルから噴出するマグマによって形成された島）に分類される。生態資源[27]に関しては、岩石の種類が陸島の方

が圧倒的に多い。陸島は火成岩[28]、堆積岩[29]、変性岩[30]を産出するのに対し、洋島では大部分が火成岩で構成されている。この点は石器製作の石材利用に大きく影響している。土壌に関しては、風化の進んだ陸島の方がより豊かな土質を示しており、これは植物栽培に影響を与え、洋島は急な斜面の山肌が多く、降雨によって肥沃な表土が流されやすく効率が悪い（但し、後述のサンゴ島に比べると洋島の土壌は比較にならない程のミネラル分を含んでいる)。更に、岩石や土壌の性質は土器作りに利用する粘土の有無にも影響を与えており、土器の素材となる粘土は火山島にしか産出せず、陸島の方が上質な粘土が手に入る。粘土は地表近くの岩石が風化しその場で形成されるものと、岩石の屑が河川などによって運ばれ、川底に堆積して粘土層が形成されるものがあり、古い火山島（陸島）の方が多様な性質をもつ粘土が堆積しているからである。

また、火山島は後述するサンゴ島に比べると一般に降水量が多い。これは湿った風が山肌にあたって降雨を促すからであり、雨は河川となって海へ流れ込んだり、池や湖を形成したりする。降雨量は風上側に多く、風下側には少ないという傾向を示し、これに伴い植生も変化する。

この陸島と洋島に加え、島を取り囲むサンゴ礁の有無も島の環境を大きく左右する要件となる。周囲に発達したサンゴ礁を有する火山島は、外海の荒波から海岸線が保護され、海洋資源の豊かなラグーン（礁湖）[31]をもつ。一方、付近を寒流が流れるなど海水温が低く周囲にサンゴ礁が発達しない島では､荒波が島を直撃し､周囲が険しい岩礁に囲まれる。このような環境ではカヌーによる接岸が難しく、また小規模な島の場合は島全体が海中に没する可能性も存在する。即ち、サンゴ礁の有無が島の存亡にも関わっている。

・サンゴ島の特徴（印東 2002 を基に）

サンゴを形成するサンゴ虫は一定の条件を満たした場所で群生[32]し、結果サンゴ礁が形成される（造礁サンゴ)。サンゴ島は第 1 の型「環礁」、第 2 の型「隆起サンゴ島」に分類される（註 31 参照)。

二種類のサンゴ島は、どちらもサンゴ石灰岩が島の表面を覆っている。土壌主成分は炭酸カルシウムで、アルカリ性が強く、ミネラル分が乏しいので、生育・栽培可能な植物も非常に限られる。また火山岩起源の岩石は産出せず、一般に粘土も形成されないので、石器も土器も製作できない。

環礁島は、海抜が低いことから雨雲が通り過ぎるため雨量が少なく、土壌の水捌けが良いことから（サンゴ石灰岩は浸透性が高い）地表の保水率が低い。これは旱魃のリスクを高いことを示している。また、津波や高波による災害のリスクが高く、人が生き残ったとしても自生や栽培の植物に大きな被害が出るリスクを抱えている。しかし、環礁内側のラグーンは海洋資源が豊富であり、環礁の外側には回遊性の魚類、無人のサンゴ小島の海浜にはカメの産卵場が存在するなど、居住環境の悪さを補って余りあるメリットがある。

隆起サンゴ島は、環礁島に比べ周囲が険しい崖に囲まれ、カヌーによる接岸が難しい。また環礁島ほどはリーフが発達しない為、豊富な漁場となるラグーンに恵まれないことも多い。一方で、井戸によって少量ではあるものの真水が得られ、鳥の糞の堆積などによって環礁島に比べると土壌が肥沃である。裾礁に囲まれた火山島が隆起すると、島の周縁部が隆起サンゴで内側が火山島という、複合型の島もできる[33]。

このように、火山島とサンゴ島では生態環境が異なっており（表 3)、これに合わせて資源利用も異なった工夫が必要となる。特に土器の粘土や、石器石材の有無は、土器や石器を主な道具とした先史時代における文化形成に、少なからず影響していたことは間違いないであろう。また、ベン・フィッツヒュー（2002）は、孤立した島嶼環境における陸獣が、大陸に比べて獲得しやすいを指摘している。

表 3. 火山島とサンゴ島の生態環境の違い

・火山島（陸島・洋島）	・サンゴ島（環礁・隆起）
・鉱物資源が豊富（陸島＞洋島）	・鉱物資源が乏しい（土器・石器製作不可）
・土壌が肥沃＝植物資源が豊富	・土壌が貧弱＝植物資源が限られる
・水資源が豊富（降水多・河川・湖）	・水資源が乏しい（降水少・河川なし）
・災害のリスクが低い（津浪・高波・旱魃）	・災害のリスクが高い（津浪・高波・旱魃）
・サンゴ礁の有無が重要	・サンゴ礁が発達＝海洋資源が豊富

印東（2002）の示した島嶼環境の特徴はオセアニアにおける島の事例を基にしているが、このような島の環境の特徴は、宮古・八重山諸島にも該当する。H.L. Foster（1965）や木崎甲子郎（1985）によると、宮古・八重山諸島の地質は、火山島（陸島）＋隆起サンゴの複合島と、隆起サンゴ島から成り立っていることが分かる。火山島の性質を示すのは石垣島の大部分と、小浜島の北部（嘉弥真島を含む)、西表島の東北部のみであり、他の島は全て隆起サンゴ島に分類される（図 12)。オセアニアと異なるのは比較的若い火山島（洋島）がないことと、環礁島が無いことであるが、石垣島と西表島の間には「石西礁湖」という広範囲のサンゴ礁帯が広がっており、隆起サンゴ島でも比較的海洋資源に恵まれる。

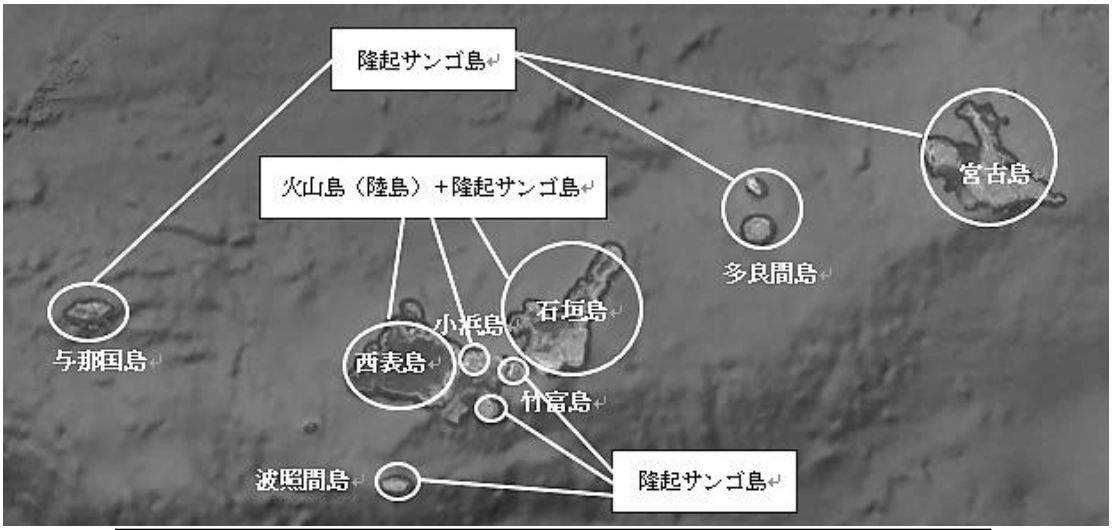


図 12. 宮古・八重山諸島における火山島・サンゴ島の分類

このような環境条件から見て、火山島・サンゴ島という島嶼環境におけるメリットとリスクは、宮古・八重山諸島の生態環境にも反映されていると考えてよいだろう。島嶼環境における人の移動と物質文化の形成に関しては、陸続きの大陸や、大陸と距離の近い島とは異なる文化形成過程が考えられているが（印東 1999、フィッツヒュー2002)、これはハドソンらが指摘した生態史的視点からの文化形成考察とも深く関わっている。

・島嶼環境における文化形成モデル

島嶼環境における人の移住・適応、文化形成に関しては、ベン・フィッツヒュー（2002）が北太平洋沿岸の先史文化発達過程から「海洋適応の島嶼モデル」を提示している。このモデルは島嶼環境における生物地理学的な理論（MacArthur and Wilson1967, Whittaker1998）を基礎としており、「既存の（陸上での）戦略で十分対応できるうちは、海洋交通と海洋経済を発展させるための技術的、戦略的、社会的な労力透過は行われなかったはずである。」（フィッツヒュー2002：53）とした上で、長期的な島嶼環境での生存においては、海洋資源に対する知識・技術、環境における道具機能の展開、経済形態の変化が必要であったとしている（同前）。フィッツヒューのモデルは北方の比較的寒冷な地域における適応をモデルにしているため、海獣狩猟の展開と生存への貢献度が注目されているが、孤立した島における陸上生物の多様性の関係（Whittaker1998）をもとに、島嶼環境における陸上生物の獲得し易さと絶滅のし易さを指摘しており、D. Yesner（1998）の示唆を基に、陸上資源（主に陸獣など）を取り尽くしてから海洋資源開発へ展開するというプロセスを導いている（フィッツヒュー2002）。

一方で、約 3,300 年前にオーストロネシア語族が拡散した、南方の比較的温暖なオセアニア島嶼地域（リモート・オセアニア）では、島へ植民する時点で栽培植物・家畜を持ち込み、当初から海洋資源を積極的に開発したものと捉えられている（印東 2012・2013）[34]。このような地域における文化形成に関しては、特にサンゴ島のような環境へ人が移住する際には、その環境における資源的限界を克服する為の環境に適した文化複合の選択や、新たな工夫の付加が生じることが指摘されており（印東 1999）、移住先において元々持っていた道具素材利用から獲得し易い資源利用への置換（Kirch & Yen 1982）や、素材の置換による道具の形態の変化（Dye 1990）、素材の欠乏による特定の人工遺物の消失（印東 2011）が起こるなど、生態環境における物質文化の変化も確認されている。

これらのモデルは、島嶼環境における人の移住に際しては、必ずしも元々保持していた物質文化が完全に再現されるわけではないことを示している。R. Pearson（1969・2013）の指摘するボトルネックや創始者効果は、元々持っていた物質文化における多様性の喪失、或いは文化複合の選択という形を示しており、元の物質文化からいくつかの要素が欠落していくマイナスの方向性で捉えることができる。加えて、印東（1999）の述べる「新たな工夫の付加」は、島嶼環境に対する文化的な面での適応過程を示しており、道具の材質置換や、新しい形態・用途・機能の付加などの、新しい要素が加えられていくプラスの方向性で捉えることができるものである。

北太平洋とオセアニア島嶼地域における島嶼適応モデルは、人の作り出す物質文化が生態環境と強く関わりがあることを示しており、特に先史時代の物質文化形成に関しては、生態環境における資源利用のもつ役割が大きい。既に示したように、火山島とサンゴ島の生態環境など、宮古・八重山諸島もまたリモート・オセアニアに見られるような島嶼環境の特徴に合致する点が多く、宮古・八重山諸島の先史文化形成が、単純な文化伝播論で説明ができないという課題は、本地域の文化形成における生態環境の要因を検証する余地があることを示している。これに関しては、宮古・八重山諸島における遺跡から読み取れる当時の人々の物質文化や資源利用、生活様式を読み取り、また周辺の地域との間における文化関係やネットワークの検証を通して考察する必要があるだろう。

4. 本論における目的とアプローチ

以上の点を踏まえ、本論文は宮古・八重山諸島の先史時代における文化形成をこれまでの周辺地域との文化的な関係という視点だけでなく、新たに島嶼環境への適応プロセスという視点を加えて解明を試みる。なお、ここで言う文化とは、考古学的資料の纏まりと、そこから復元できる生活様式の総体を指すものとして使用する[35]。

島嶼地域における人類の適応プロセスと物質文化の形成に関しては、当初という環境の特性から生態環境における資源利用が大きく影響しているものと考えられる。考古学的資料から推定できる宮古・八重山諸島の先史時代の生態資源利用に関しては、土器と粘土、石器と石材・貝製品と貝類、船材や住居材などと木材、動物遺存体と陸生/水生の生物などの関係を挙げることができる。資源利用という視点に関しては、既存の研究で、特定の遺跡における土器の胎土分析（新里ほか 2008、Summerhayes et al.2009、山崎ほか 2012）や、石器と石材産地の関係（島袋 2002）が示されている。しかし、これらは遺跡間の比較を通した下田原期や無土器期全体の考察には至っておらず、この点はハドソン（2014）の指摘する生態史的視点の不足に繋がっている。また、当時の生活とその痕跡となる遺跡を捉え込む枠組みは明確な形で提示されておらず、サンゴ島における水資源の確保と遺跡の立地関係などの島嶼環境における生存のシステムとセトルメントの関係など、総合的視点から当時の人々の文化を捉え、その形成プロセスを考察する必要がある。

加えて、下田原期・無土器期の各々における考古学的な時空間の整理に関しても未だ曖昧な点が多い。特に各々の時期は一括的な文化的特徴で捉えられる傾向が強く、例えば下田原期については土器が特徴的な遺物として取り上げられるが、遺跡間でも土器のバリエーションが存在し、付随するその他の人工遺物の組み合わせも異なっている。これは無土器期に関しても同様で、無土器期を特徴づける貝斧は一部の地域の遺跡に集中し、他の遺跡では石斧が主体に出土するなど、遺跡間のバリエーションが存在している。また、時間軸上に位置付けられた下田原期から無土器期、そして歴史時代へという変遷過程は一見連続した変化であり、最終的には現在の宮古・八重山諸島における人類集団・文化へと繋がるようにも見える。しかし、比較的生存条件が厳しい島嶼環境における過去の人類活動は、継続性と断絶を含んだ断続性という両方の視点から捉えていく必要があるだろう。

宮古・八重山諸島における先史文化の特異性が注目され始めた黎明期と異なり、現在は多くの発掘調査成果や研究データが蓄積されている。そこで、再度先史時代を構成する各時期の時空間的な文化変異を整理し、その枠組みとなる生存のシステムを示した上で、既存の研究で示された文化起源論を検証し、総合的に本地域における先史文化の形成へアプローチしなくてはならない。

そこで本論では、まず宮古・八重山諸島の先史時代各時期における物質文化の時空間的な整理とそれを捉える生存のシステムの検証から始め、それらの比較を通して、下田原期・無土器期という二つの時期の具体的な共通点と相違点を整理する。その上で、既存の研究で示された南方起源論に対し、台湾・フィリピン地域との比較を通して文化起源論を検証する。特に台湾とフィリピンは近年約 4,000 年前以降に「オーストロネシア語族の拡散」という大規模な人類移動が存在したとされている地域であり、本論ではそれらの人の動きや文化伝播のプロセスと比較することによって、南から北への人類移動を検証する。

そしてこれらの分析結果を踏まえた上で、本地域における文化形成を「他地域からの文

化伝播」と「島嶼環境における文化的適応」という視点の両面から検証し、結論を導く。

---

[1] BP は Before Present（或いは Before Physics）の略であり、本文では ^{14}C 年代（放射性炭素年代）の年代値を示す単位として使用する。1950 年を基点（BP0）として、数値の年数分遡った年代を示す。

[2] 白保竿根田原洞穴遺跡（石垣市）で出土した人骨のコラーゲンから、最古で約 BP20,000 年の年代が得られている（沖縄県立埋蔵文化財センター2013）。これは人骨自体の年代が 2 万年近く前のものであることを示している。しかし、人骨に伴う明確な人工遺物や、活動痕跡を示す遺構は確認されておらず、この人類集団の物質文化や、周辺地域の文化集団との関係、時間的な継続性に関しては現時点では判然としない。

[3] 本文の cal BC は較正暦年代を示す。^{14}C 年代は、^{14}C（炭素 14）の約 5730 年で半減するという性質を基に、試料中の炭素同位体から年代を推定する。この年代推定は待機中の ^{14}C 濃度が全ての時期を通して一定であるという前提に算出している。しかしながら、大気中の ^{14}C 濃度は太陽周期や地磁気の変化等によって必ずしも一定ではない。そこで樹木の年輪と、^{14}C 年代の対応関係を検証し、BP で示した基年代を校正したものが較正暦年代となる。較正暦年代は cal BC/AD で表される（BC は Before Christ、AD は Anno Domini と同義）。

但し、較正暦年代も課題が多く（測定資料の性質やクロスチェックの有無等）、厳密な絶対年代として扱うには危険性を有する。また、比較的早期に発掘調査が行われた遺跡に関しては、較正暦年代値が示されていないことも多い。このことから、本文では遺跡間の素体的な年代関係を捉えることも考慮し、基本的には BP 表記を用い、較正暦年代が示されているものに関しては必要に応じて BP と cal BC/AD を併記する形で用いる。

[4] 先史時代、歴史時代という区分は、基本的には「歴史記録に記載される以前の時代・記載され始めた後の時代」ということを指している。宮古・八重山諸島を含めた琉球弧の地域は、歴史記録に記載され始める年代は新しく、明確に「琉球」が歴史書に登場するのは明代（14－17 世紀）になってからである（豊見山 2010：161）。この時期の沖縄諸島は石垣を有する構造物＝グスクで特徴づけられるグスク文化が展開しており、この文化的特徴は考古学的には 11 世紀頃から確認できる。また、琉球弧内の歴史書が登場する年代は更に新しく、グスク時代は周辺地域の歴史記録に記される。すなわち、間接的な歴史時代であるとも言え、「歴史時代」或いは「原史時代」（他地域の歴史記録に記載される時代）と称されることもある。沖縄の考古学的には、グスク時代の文化的特徴が確認できる時期以降を歴史時代（原史時代）、それ以前を先史時代とするのが一般的となっており、本論でもその区分に従う。

[5] この土器に関しては別の呼称を与える研究者も存在している（e.g. 大濱 1999 など）。しかしながら、現在の一般的な考古学関係書籍（e.g. 沖縄県文化振興会 2003、石垣市総務部市史編集課 2009）や、博物館等では「下田原式土器」の名称が使用されている。大濱永亘（1999）は、「下田原式土器」の呼称に加え、「下田原期」の時期名称に関しても異議を唱えているが、こちらも現在は下田原期の名称が一般に普及している。このことから、本論では混乱を避ける為、「下田原期」と「下田原式土器」の名称を使用する。

[6] オセアニア島嶼地域（リモート・オセアニア）の先史時代では、土器文化が伝播する過程で土器の消失が起きる地域が存在することが確認されている（Le Moine 1987）

[7] 年代は人骨が出土した層の直上から検出された木炭から得られており（高宮廣ほか 1975）、層位関係が自然な堆積であるという前提で考えるのであれば、この年代より人骨は古く位置づけられるということになる。

[8] 港川フィッシャー遺跡の人骨（通称：港川人骨）の年代に関しては、当時の発掘過程や出土状況が曖昧である為、測定資料の炭化物と人骨の同時代性に課題を抱えているが、残存する記録や資料の注記から当時の人骨検出グリッドや供出資料との関係などの検証が行われており、年代値が追認できるとする意見も提示されている（諏訪ほか 2011）。

[9] 旧石器・新石器の区分は Sir. J. Lubbock によって提唱された石器時代の 2 区分で、新石器時代を「（前略）in which the stone implements are more skilfully made, more varied in form, and often polished.」（Lubbock1913:73）という特徴で説明している。また、土器の存在や、農耕・牧畜を持っていた可能性についても言及している。その後、V.G.Childe が食糧生産社会としての新石器時代を提唱し、新石器革命（Neolithic revolution）と称した（Child1936）。このことから、新石器時代は農耕社会に代表されるような食糧生産社会を指す傾向も存在する。
日本における「旧石器時代」は、主に縄文時代以前の時期を指す用語として使用されている。その経緯に関しては岡村道雄（2011）に詳しいが、現時点で日本の縄文時代は食糧生産を主体とした社会であったとは考えられておらず、Child らが提唱する Neolithic とは意味合いが異なることから、名称の利用には賛否が存在する（同前）。しかし、現在「旧石器時代」は一般的な名称として認知されている為、本論では基本的には各地域での時期区分名称の一つとして取り扱うこととする。

[10] サキタリ洞穴遺跡（南城市）、白保竿根田原洞穴遺跡（石垣市）では更新世晩期に属すると考えられる石英製の小型石器が出土しているが（沖縄県立埋蔵文化財センター 2013、沖縄県立美術館・博物館 2014）、明確な石器と認定するかに関しては賛否が存在する。また、この他にも扇形に加工した二枚貝や、腹縁部に穿孔した貝製品が確認されており、石器石材が少なく、貝資源が豊富な島嶼環境に適応した貝器文化として見る考え方も提示されている（山崎 2015、沖縄県立博物館・美術館 2014）。

[11] 近年、サキタリ洞穴遺跡から約 BP9,000 年の押引文を施した土器が確認されており（沖縄県立博物館・美術館 2014）、沖縄諸島における土器文化の始まりは更に遡る可能性も残している。

[12] 鳥居は縄文時代人のことをアイヌと表現している。これは当時の日本人起源に関するアイヌ説やコロッポックル説などの学史を反映している。

[13] この起源論争の起こりは、金関丈夫が新聞紙面で波照間島の言語に関して「（前略）私はことによると、インドネシア流のイントネーションを棄てかねた人々が、新に異系の日本語を採用したとき、その話法にそうように新来の言葉を変化させたのではあるまいか、これが琉球語のおこりではないかと考えはじめた。」（金関 1954）と述べた事に起因する。これに対し、国語学者の宮良当壮が反発し、琉球方言はあくまでも日本語の方言であること、イントネーションは言語系統に関して決定打とはならないこと、を主張して反論した（宮良 1954）。これを受けた金関は、下田原貝塚の発掘・表採の考古資料や、祭具、人々の身体的特徴に見られる台湾的要素と、宮良の批判が南方要素を完全否定するものではない点を以て反論している（金関 1955）。この様な論争に対し、言語学者の服部四朗は言語年代学を用いた分析から、京都方言と首里方言の分裂を 1450 年前（或いはそれよりも古い段階）とし、日本語（或いは日本文化）の南下説を支持し、宮良の論を支持する姿勢を取っている（服部 1955）。一方で、人類学者・考古学者の国分直一は、金関-宮良・服部の論争の要点を纏めた上で、服部の提示した年代の本土系文化・人の南下は、形質人類学や考古学的には考え難いこと、そして少なくとも八重山諸島の先史時代に関しては台湾地域などとの関連が疑われること、現在の琉球語が日本語の派生であることは疑いが無いとしても、その基層に南島語族系の諸語が存在する可能性は捨てきれないことを指摘し

ている（国分 1968・1971）。

[14] 先史時代の遺跡では、波照間島で金関らが発掘した地点に隣接する地点の遺跡（報告書では下田原貝塚と記される）や、西表島の仲間第一・第二貝塚などの遺跡が発掘調査されている。

[15] 1978 年に行われた石垣島の大田原遺跡の発掘調査（沖縄県教育委員会 1980）、1983～85 年にわたって行われた波照間島の下田原貝塚（金関らや西村らの発掘調査地点と隣接する地点）（沖縄県教育委員会 1986）の発掘調査の成果に因る。両遺跡とも、隣接した場所に無土器期の遺跡（大田原遺跡は神田貝塚・下田原貝塚は大泊浜貝塚）が立地しており、遺跡を包含する層位の層序完形で、有土器の層位が無土器の層位の下位に位置することが確認された。土層は攪乱されておらず、堆積した順に古いと考えられる。
　また、近年遺跡から出土した炭化物や貝殻から ^{14}C 年代が測定されており、遺跡の帰属年代が示されている。これらの示す年代も、下田原期の遺跡が無土器期の遺跡に先行することを示している。

[16] 国分直一は、直ちに結びつけられないとはしながらも、「台湾東海岸南部および、恒春半島沖の小琉球嶼の先史遺跡には近似の土器が見出される。」（国分 1968：18）や、「（前略）ある時期に八重山の先土器文化人が台湾東海岸の巨石文化の土器焼成技術を学んだものと見うる蓋然性は強いように思われる。」（国分 1972：427）と指摘している。また、高山純は「これは、張光直氏によって報告された竜山類似文化中の土器（Chang 1969：94, Fig. 56, 5）に似ているのではなかろうか。」（高山 1977：89）と述べており、新田重清は「（前略）筆者は、その源流を台湾およびパラオ諸島に求めようとする意見に賛成である。（中略）形状的な類似は台湾の The lungshanoid Culture に登場する外耳のある Sandy Red ware（Chang-Kwang Chih, 1969）に求められそうである。」（新田 1980：289）と指摘しており、両者とも台湾新石器時代中期に台湾島西南部に展開した鳳鼻頭遺跡出土の一部の土器に類似性を見出している。

[17] R. J. Pearson は、「卑南遺跡から出土した玄武岩製の打製石斧が形態的に見て西表島の仲間貝塚や波照間島の下田原貝塚で発見される石斧に酷似している」（Pearson1968）と指摘している。一方で、国分は早稲田の発掘調査報告（西村ほか 1960）では「（前略）ホアビニアンまたはバクソニアン・タイプを想起しておられる。仏領印度シナのホアビニアン文化層においては、上部において局部磨研石器を供出する。ホアビニアン-バクソニアンのインダストリーは片面と両面の加工技法を伴っている」（国分 1972：61）とし、「西表島にも石垣島にも先土器時代が確かめられている。与那国島でも後期ホアビニアンもしくはバクソニアン的な石器が発見されている。」（国分 1972：427）とする。金子エリカも「（前略）例えば石器の局部磨製技術は台湾西海岸部中北部の大安渓の中流地区に見出されるが、その地域の伴出土器は泥質の黒色土器である。その他の地域では、西海岸でも東海岸でも、局部磨製石器の製造は行われていない。また貝斧の使用例は発見されていない。これらの事実は、台湾を避けた流通経路があったことを示唆するように見える。したがって、台湾以外に目を向ける必要が当然ある。」（金子 1993：89）とするなど、台湾以南の東南アジア地域まで含んだ関係性が指摘されている。

[18] 国分は波照間島の下田原貝塚出土のフネガイ科リュウキュウサルボウの有孔貝製品を例にとり、「アナダラ属サルボウの殻頂部に穿孔して網の錘にする技法は竜山文化の末流を伝える台湾西海岸部南部の鳳鼻頭、同じく西海岸南部の赤褐色無文土器を出す高雄市寿山内惟洞穴前縁の貝塚から発見されている。」（国分 1972：333）と類似性を指摘、大濱永亘は更に「台湾との関係を示唆する資料に有孔サメ歯製品、ヤコウガイの螺蓋製敲打器・利器がある」（大濱 1999：53）とし、有孔サメ歯製品に関しては、三島格（1989：

248）を引いて「（前略）九州から南島（沖縄本島まで）の縄文時代の各遺跡から発見され、また、台湾でも北部における鮫歯状石製品、東部のジュゴン歯牙製垂飾（油子湖遺跡）、サメの石椎骨製品（墾丁寮遺跡・鵝鑾鼻遺跡）などの出土から沖縄との関係を述べている。」（同前）とし、ヤコウガイの螺貝製敲打器に関しては「台湾では貝刮器と報告されていて南部の恒春半島の墾丁公園内の史前遺跡や鵝鑾鼻遺跡からも出土している。」（同前）と指摘している。

[19] 安里嗣淳は、国分直一（1972）・高山純（1977）の指摘したフィリピンを含む南方諸島とのシャコガイ製貝斧の類似を基に、ミクロネシアやフィリピンの貝斧との比較を通して、東南アジア地域からの貝斧文化伝播の可能性を指摘した（安里 1993）。この時点では両地域には年代差（フィリピンの貝斧：約 4000-5000 年前、宮古島の貝斧：約 2500 年前）と、両地域の間に位置する台湾地域での貝斧の未発見の問題点を抱えていたが、安里はその後フィリピンのバロボク岩陰遺跡の発掘成果を根拠に、「バロボク岩陰遺跡上層における磨製貝斧の発生時期は約 2,500 年前よりそう古くない時期で、その後それほどの間隔をあけることなく周辺に波及していき、南琉球諸島にも達したのではなかろうか。」（安里 1994：157）と述べている。一方で、高山純は「（前略）是非検討して頂きたいと念願している新しい仮説は、先島のシャコガイ手斧は先島で磨製石斧や局部磨製石斧を製作していた人々によって製作されたものではないかという想定である。」（高山 2001：17）とし、宮古島・浦底遺跡出土の貝斧資料に磨製製品・局部磨製製品が含まれている事から、貝斧と磨製石斧の関係に言及した岸本の見解（岸本 1995）の重要性を指摘している（高山 2001）。この指摘に対し安里は、ちょうつがい部利用主体という貝斧特徴とその地理的分布、「腹縁部斜行型」が存在しないという点、バロボク岩陰遺跡発掘成果から見える型式学的貝斧発生、南琉球貝斧が磨製ばかりであること（試行錯誤段階の打製が無い）、を根拠に、高山の述べた自生説を否定している（安里 2010）。しかし一方で、「フィリピンの貝斧自体も実は出土量がわずか 10 個前後と、きわめて少ないのである。貝斧文化発生地とするにはあまりにも貧弱である。また、南琉球とはあまりにも遠い。貝斧の発生と展開の経緯、南琉球との系譜関係の解明は今なお不明と言うのが現状である。」（安里 2010：177）と課題点も認めている。

[20] 岸本義彦は、紋様要素に焦点を当てて、Ⅰ群（線紋系）とⅡ群（点紋系）に大別、更にⅠ群の第 1 類（幅広沈線紋）・第 2 類（細沈線紋）、Ⅱ群の第 3 類（爪形紋）・第 4 類（刺突紋）という細別を示し、Ⅰ群からⅡ群へ時間的に変化し、最終的に無紋化するという型式学的編年試案を示した（岸本 2004a）。伊藤慎二はこの岸本の編年を基にして、土器の器形組成・器形の単純化と無紋化を指摘し、西ポリネシアの土器消失プロセスとの類似性を述べている（伊藤慎 2006）。

[21] 高宮廣衞の分類は、石斧を平面形態（高宮廣 1994・1999）、研磨面（高宮廣 1995）、サイズ（高宮廣 1996b）で示されている。一連の研究は、各時期内の型式学的編年ではなく、下田原期と無土器期の違いに着目した視点で考察が示されているが、結論として①平面形では類型間の厳密な線引きが難しいこと、②器種・精粗は編年の目安にならないこと、③下田原期には厚型のものが多く、無土器期には少ないこと、④無土器期になると中型サイズが増加し、小型サイズが減少する傾向にあること、が述べられており（高宮廣 1994・1995・1996b・1999）、二つの時期間で明確な変化は示されていない。

[22] 文化系統の問題は、文化起源の問題とほぼ同じような形、或いは下田原期・無土器期の連続・非連続性で説明される。しかし、高宮廣衞（1996a）は先史時代を通して 3 種類の文化を設定しており、それぞれ下田原貝塚文化（土器文化・下田原期）・名蔵貝塚文化（貝斧文化・無土器期）・仲間第一貝塚文化（石器文化・無土器期）としている。高宮は、この各々の文化は（表記した順に）時間的変遷を辿るが、必ずしも系統関係が同じではなく、系譜関係が異なる可能性を指摘している。

[23] 創始者効果は、主に遺伝学で使用される用語で、移住集団が少数である場合、出自である母集団とは異なる遺伝子頻度（遺伝的特徴の偏り）が生じることを示している。これは突然変異ではなく、多様性の喪失として理解される（宝来 1997)。Pearson の述べる創始者効果は、これを文化に当てはめたもので、移住集団が少数の場合に、出自集団が持っていた文化的多様性が失われ、偶発的な文化要素のセレクションと均一化が起こることを指しているものと捉えることができる。

[24] ボトルネックは、主に遺伝学で使用される用語で、生物個体の減少に伴う遺伝的浮動の促進と遺伝子の均一化を指す。自然選択や性選択に比べ、偶発的な遺伝子の選択と、その子孫における遺伝子の均一化・多様性の喪失が起こる（宝来 1997)。現象のメカニズム自体は創始者効果と同様で、Pearson の述べるボトルネックも創始者効果とほぼ同じ意味を指しているものと捉えることができる。

[25] 火山活動をしている島という意味ではなく、単に火山の噴火により形成された島を指す。この中には非常に古い時期の火山活動によって形成され、風化により本来の火山の形が殆ど残っていない島も含まれる（印東 2002)。島の標高は比較的高くなる為、「高島（こうとう）」とも称される。

[26] サンゴ礁が離水（海面下に沈まなくなる状態）して島になったものを指す。火山島のすぐ近くサンゴ礁が取り囲むものを「裾礁（きょしょう）」といい、島との距離が少しあいてラグーンが発達するものを「堡礁（ほしょう）」という。そして、中央部の火山島が沈降・水没した後に周囲のサンゴ礁が離水してできる「環礁（かんしょう）」、一度海面下に沈んだ火山島が厚い石灰岩に覆われた後に隆起した「隆起サンゴ島」がサンゴ島の分類に含まれる。島の標高は比較的低くなる為、「低島（ていとう）」とも称される。

[27] 印東道子は、生態資源を「人間を取り巻く生態環境において、何らかの形で資源として認識されたもの」（印東 2007:37）と定義する。

[28] 岩石は 1 種または数種の鉱物が多数集まって形成されるが、その成因によって 3 種（火成岩・変成岩・堆積岩）に大別される（益富 1955 など)。火成岩（igneous rock）は地球内部の岩漿（がんしょう）（magma）が地殻中や地表に流れ出て固まったもので、①地下深所の高圧下で冷却凝固した深成岩（plutonic rock)、②岩漿が地表付近に噴出、又は地表に近い岩盤中に陥入し急激に冷却凝固した噴出岩または火山岩（effusive rock / volcanic rock)、③前 2 者の中間形質の半深成または脈岩（hypabyssal rock / dyke rock）の 3 種に細分される。

[29] 堆積岩（sedimentary rock）は、岩石成因による分類される岩石の一種。種々の岩石が破砕され、またはその成分の一部が地表や水域に沈殿堆積したもので、構成する材料と成因によって、①火山細屑岩（pyroclastic rock)、②風成堆積岩（aoerian fragmental rock)、③水成砕屑岩（aqueous rock)、④有機（生物）沈殿岩（organic deposits)、⑤化学沈殿岩（chemical deposits）に細分される（益富 1955)。

[30] 火成岩、堆積岩が長い期間、地殻内部の歪力や熱の影響を受け、もとの岩石の構造、組織、化学成分（鉱物成分）に変化を生じ、もとの岩石とは異なる性質を持つに至ったもの（益富 1955)。①主に圧力を受けて変性した動力変成岩（dynamo metamorphic rock)、②主に熱によって変性した熱変成岩（thermal metamorphic rock)、②両者の性質を併せ持つ動力熱変成岩（dynamo metamorphic rock）に細分される。

[31] 沖縄では「イノー」とも呼ばれる。木下尚子（2012）は、「琉球列島の裾礁は、世界のサンゴ礁の分布域においては周辺域にある北限のサンゴ礁で、小規模なものが多い。」（同前：17）としている。

[32] 明るく、海水がきれいで温かく、かつ年間の水温温度差が小さい必要がある。また、河口など真水の流れ込む場所では生育しない（印東 2002：52）

[33] 印東道子（2002）はその典型としてクック南部のマンガイアを挙げている。

[34] 入植時の動物の持ち込み自体は旧石器の段階から行われていたようである（印東 2012）

[35] 考古学的な文化は考古学的資料、物質文化の纏まりを基に文化集団を規定する。これは必ずしも民族や部族などの分類とは一致しない。

第 2 章　本論の分析方法と分析対象の設定

1. 分析方法

宮古・八重山諸島の文化形成の解明に向けて、本論は大きく二つの分析を通して作業を行う。その一は、宮古・八重山諸島の文化内容の時間軸上の整理と文化を捉え込む枠組みの考察であり、その二は、周辺地域との比較を通した起源論・文化伝播論の検証、恒常的なネットワークの考察である。

その一に関しては、遺跡を構成する考古学情報（以下「属性」とする）全体を基にした各遺跡の再評価と、遺跡間比較を通した時空間軸上[1]の位置付けを検証した。また、比較的出土数の多い考古学的資料（人工遺物）に関しては、層位・遺跡間で分類・比較を行い、時空間変異の検証を行った。特定の考古学的資料に関しては、既存の研究における蓄積が存在することから、それらの成果を援用しつつ、適宜データを追加して検証を行った。また道具素材の利用・食料資源の利用と地質環境のデータを組み合わせて、島の中での人の移動や生業といったセトルメント・パターンを検証した。

その二に関しては、その一で示した宮古・八重山諸島における先史時代の文化内容と、並行する時期の台湾・フィリピンにおける文化内容を比較し、それらの地域からの移住やと恒常的なネットワークの可能性から文化起源関係の検証を行った。特に約 4,000 年前以降のオーストロネシア語族の移動を含めた台湾・フィリピン間の人の移動は、複数の研究でその証拠となる物質文化や考古学的証拠が示されていることから、本論ではこれらの成果と比較しながら、南方の集団が北上して宮古・八重山諸島と関係を持った可能性を検証した。

そして、この一・二の作業を通して得られたデータを基にして、宮古・八重山諸島における先史時代の文化形成を考察し、結論を導いた。

2. 分析対象遺跡と基準の設定

本論で分析の対象とする遺跡は、BP4,300 年頃（cal BC2,820）から 11 世紀後半に位置する宮古・八重山諸島の先史時代と、それに並行する時期の台湾・フィリピンを対象とする。各々の地域における遺跡は「発掘調査の実施・報告が行われている」遺跡に限定する。これは宮古・八重山諸島の遺跡は地表踏査や表面採集[2]によって確認されている遺跡が多く、それらは帰属年代や同時代性の確保が難しいためであり、地表踏査や表採遺跡は基本的には分析から除外する。但し、帰属の時期が明確に断定できる表面採集遺物に関しては、参考データとして取り扱うこととする。また、攪乱層[3]の考古遺物に関しては、その旨を明記した上で、土層の攪乱状況や遺物の混合などに注意しながら、分析の対象に加える。発掘調査のデータは主に発掘報告書に記載されているデータを基にし、出土した考古遺物に関しては、発掘調査報告書と、筆者自らが実見し観察することによって得られたデータを基にする。なお、本論第 3 章以降で使用する図に関しては、基本的に人工遺物は 1/2 の縮尺で統一し、遺構や地図に関しては表示範囲の関係から図内に縮尺を記載した上で、縮尺は統一せずに用いることとする。

具体的な分析対象の遺跡とその地理関係に関しては、図 13・14 に記した通りである。また、各遺跡に対応する発掘調査報告書に関しては、表 4・5 に記した通りで、本論で取り

扱うデータは基本的に報告書に準拠する。なお、下田原期・無土器期のいずれに帰属するかが曖昧なトゥグル浜遺跡[4]に関しては、土器が出土しないことから無土器期における遺跡間比較に加えた上で、改めて下田原期・無土器期との比較を通して帰属時期を検証することとした。遺跡によっては複数回発掘調査が行われており、発掘調査地点が異なる遺跡も存在するが、これらの遺跡で同一の遺跡と認定されていないものに関しては、異なる遺跡として分けて遺跡の属性を取扱い、遺跡間で比較することとする。

3. 各時期における遺跡の概要

・下田原期の遺跡

分析に入る前に、下田原期・無土器期における各遺跡の簡単な概要を述べておきたい。まず、下田原期に関しては、宮古諸島の多良間島、八重山諸島の石垣島・西表島・波照間島に遺跡が点在する一方で、宮古島では遺跡が確認されていない（図 13）。

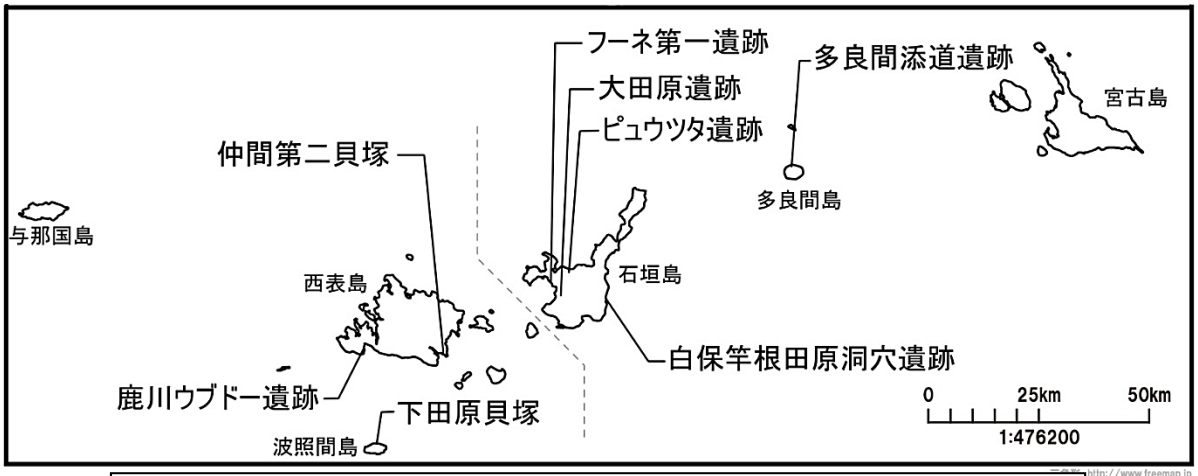


図 13. 下田原期における分析対象遺跡
（大田原遺跡は 2 回・下田原貝塚は 3 回異なる地点が発掘されている。）

このことから、多良間島の多良間添道遺跡が実質下田原期における最北端の遺跡となる。多良間添道遺跡は多良間島の北部海岸に位置しており、1995 年に発掘調査で土器や石器、貝製品の出土と、2 つの異なるトレンチ[5]における 4 層とⅣ層各々が遺物包含層であることが確認されている。

石垣島ではピュウツタ遺跡・大田原遺跡・フーネ第一遺跡・白保竿根田原洞穴遺跡が確認されている。ピュウツタ遺跡でⅢ層と無遺物の間層（Ⅳ層）を挟んだⅤ層で、土器や石器などの考古学的遺物が確認されている。ピュウツタ遺跡は、石垣島西北部の川平湾のやや西の海岸沿いに立地し、背後には於茂登岳がひかえている。大田原遺跡は石垣島西部の名蔵湾よりやや内陸に位置する遺跡で、1978 年と 1980 年に各々別の地点が発掘調査されている。1978 年の調査ではⅡ-Ⅳ層で、1980 年の調査ではⅠ-Ⅲ層で土器や石器が多量に出土しているが、1980 年の調査地点に関しては全層が攪乱状態である可能性が指摘されている(石垣市教育委員会 1982)。二つの大田原遺跡は同じ遺跡と扱われることが多いが、層位的に同一の遺跡であるかは検証されていない。そこで、本論では二つを別の遺跡として並べ、比較対象に加えることとした。フーネ第一遺跡は、1970 年代の沖縄県教育委員会

による一連の遺跡分布調査の過程で報告された遺跡で、名蔵湾に面する海岸付近の 2 つの地点（北地点と西地点）で遺物包含層が報告されている。西地点では 2 枚の遺物包含層が報告されているが、全体で土器や石器が出土したこと以外は、具体的な出土層位などについては報告されておらず判然としない（沖縄県教育委員会 1979a）。白保竿根田原洞穴遺跡は 2012 年に調査が行われた石垣島西部の洞穴遺跡で、更新世晩期に相当する年代を示す人骨が発見されたことで注目を浴びた遺跡でもある[6]。更新世晩期以降にも先史時代から中世に相当する遺物包含層が確認されており、下田原期に関してはⅢA2 層-ⅢB 層と、異なる地点の S 層が該当する。ⅢA 層に関してはⅢA1 層が無土器期に該当する層位と報告されているが、分層が難しく、遺物の出土報告には反映されていない点も多い[7]。また、ⅢB 層で出されている放射性炭素年代値も BP9,000 年から BP3,000 年まで幅広く数値が出てしまっており、ⅢA 層との境目もはっきりとしない[8]。更に S 層も下田原期と無土器期で上下分層されているのだが、遺物の出土層位には反映されておらず、曖昧な点が多い。これを踏まえ、本論では土器の出土する未攪乱の層位としてⅢA（1・2 の区別なし）・ⅢA-ⅢB・ⅢB・S 層（区別無し）を比較対象として取り上げることとした。

西表島では仲間（なかま）第二貝塚が 1959 年に西村正衛らを中心とした早稲田大学の調査団によって発掘調査されている（西村ほか 1960）。仲間第二貝塚は貝を含む土層が遺物包含層として報告されており、土器や石器の出土が報告されているが、詳しい土器の図の報告が無く判然としない。ただ、土器は全て無紋であることと、同時期に西村が同じく調査した下田原貝塚と同じ特徴を示す土器であることが報告されている（同前：141）。西表島では、竹富町教育委員会によって西表島西部の旧鹿川部落（かのかわぶらく）近くに鹿川（かのかわ）ウブドー遺跡が確認されている（竹富町教育委員会 2009）。こちらは本格的な発掘調査は行われていないが、試掘調査によって遺物包含層の存在と、土器や石器などの複数の考古学的遺物の報告がなされている。

波照間島では下田原（しもたばる）貝塚のみが報告されているが、1954 年（金関ほか 1964）、1959 年（西村ほか 1960）、1983-85 年（1986 年）に、波照間島北部の各々異なる地点が調査・報告されている。調査では土器や石器・貝製品や獣骨牙製品などが出土しているが、大田原遺跡と同様に同一の遺跡かどうかの検証がなされておらず、本論では便宜上別々の遺跡として取り扱うこととした。

表 4. 下田原期各遺跡の準拠する文献一覧

島名	遺跡名	報告書/文献
多良間島	多良間添道遺跡	多良間村教育委員会1996
石垣島	ピュウツタ遺跡	石垣市教育委員会1997
	フーネ第一遺跡	沖縄県教育委員会1979
	大田原遺跡(1978)	沖縄県教育委員会1980
	大田原遺跡(1980)	石垣市教育委員会1982
	白保竿根田原洞穴遺跡	沖縄県立埋蔵文化財センター2013
西表島	仲間第二貝塚	西村ほか1960
	鹿川ウブドー遺跡	竹富町教育委員会2009
波照間島	下田原貝塚(1954)	金関ほか1964
	下田原貝塚(1959)	西村ほか1960
	下田原貝塚(1983-85)	沖縄県教育委員会1986

・無土器期の遺跡

下田原期に対し、無土器期の遺跡は宮古島から八重山列島までの広い範囲で存在が確認されている。特に下田原期に遺跡が確認されていなかった宮古島では、長墓遺跡（長墓遺跡調査団 2013)・長間底遺跡(沖縄県教育委員会 1984)・浦底遺跡(城辺町教育委員会 1990)・アラフ遺跡（アラフ遺跡発掘調査団 2003)・友利元島遺跡（久貝 2014）と複数の遺跡が調査・報告されている。宮古島のいずれの遺跡でも目を引くのはシャコガイを利用した貝斧の出土で、特に浦底遺跡からは 200 点以上の貝斧が出土したとされるが（城辺町教育委員会 1990)、詳細な出土層位や数量の報告はなされていなかった。個別に遺跡をみていくと、長墓遺跡は宮古島東北部のやや内陸に位置し、異なるトレンチ（T1・T2）の 1-4 層で貝製品を中心とした考古学的遺物が出土している。長間底遺跡・浦底遺跡・アラフ遺跡はいずれも宮古島東部の海岸砂丘地に立地し、背後には切り立った断崖がひかえる。長間底遺跡はⅢ層で貝製品などが出土したほか、周辺に盛られていた土（盛土）から石器や貝製品が出土している。報告ではこの二つが一括して長間底遺跡の出土遺物として報告されているが（沖縄県教育委員会 1984)、厳密には分けるべきであり[9]、本論では区別して記載する。浦底遺跡はⅢ層とⅣ層が包含層であると報告されるが（城辺町教育委員会 1990)、層位ごとの出土遺物の報告はない。アラフ遺跡はⅢ・Ⅳ（a・b で分層）・Vb・Ⅵ層で石器や貝製品の出土が確認されている（アラフ遺跡発掘調査団 2003)。友利元島遺跡は宮古島の南部の入り江上になった海岸部に立地し、詳細な報告はまだなされていないものの、久貝弥嗣（2014）によってその概要が報告されており、貝斧の出土が確認されている。

宮古列島に属する多良間島では、西高嶺遺跡が確認されており、明確な人工遺物は確認できないものの 4 層と 10 層で火を利用した痕跡が、6 層で多良間島では産出しない火成岩の出土が確認されており（沖縄県教育委員会 2000)、いずれも多良間島における人類の活動を示している。無土器期の人工遺物は確認できないが、放射性炭素年代が BP2,000–3,000 年を示しており、土器の出土が無いことから、無土器期に属する可能性が存在する。

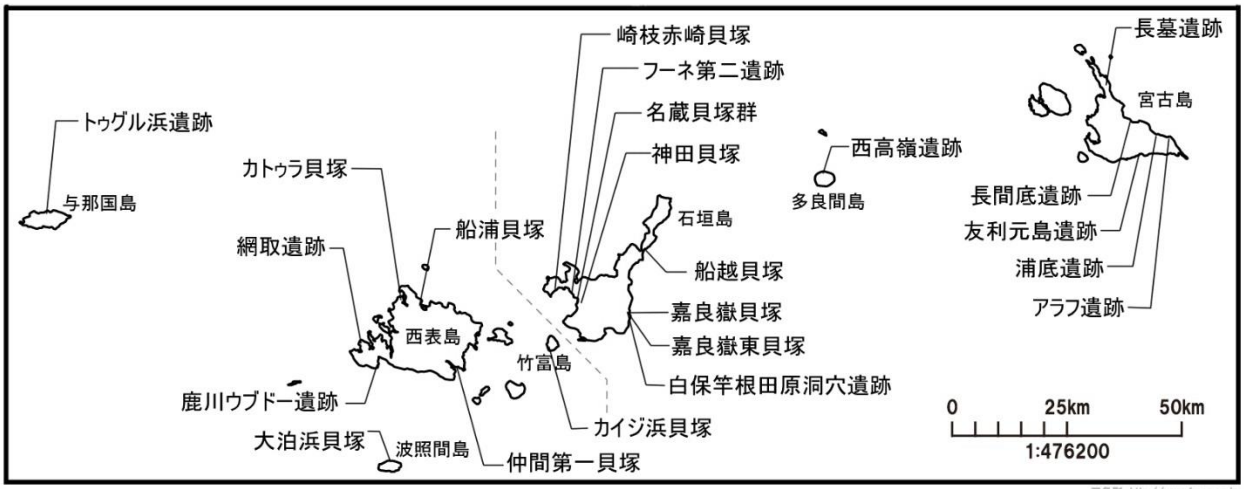


図 14. 無土器期における分析対象遺跡

（名蔵貝塚群は異なる発掘調査地点で構成された遺跡群としての総称。）

宮古島に対し、八重山列島の石垣島でも複数の遺跡が確認されている。崎枝赤崎遺跡は石垣島西部の崎枝半島の海岸部に立地し、Ⅰ層（攪乱)・Ⅱ層直上・Ⅱ層で人工遺物が確認

されており（石垣市教育委員会 1987）、Ⅱ層直上では唐代鋳造の銭貨：開元通寶が出土している。フーネ第二遺跡は下田原期のフーネ第一遺跡に隣接する遺跡で、2 つの地点：1 地点（3 層）・2 地点（5 層）で石器が出土している（沖縄県教育委員会 1997a）。名蔵貝塚群は名蔵湾に面した立地を示し、1978 年（沖縄県教育委員会 1979a）・1980 年（沖縄県教育委員会 1981）・1984 年（沖縄県教育委員会 1985a）に各々異なる地点が調査されている。本論では下田原期の例と同様に別々の遺跡として取り扱うが、いずれの調査地点も攪乱部分が多く、1984 年調査地点などは層位ではなく出土地点で報告がされており詳細の把握が困難な状況にあるが、名蔵貝塚群に関する本論における表記は基本的に報告書における表記に従うこととする。神田貝塚は名蔵貝塚群からやや内陸に位置し、大田原遺跡に隣接する。Ⅲ（a・b で分層）・Ⅳ層で（沖縄県教育委員会 1980）石器が出土している。船越貝塚は石垣島北部の海岸付近に立地し、3 層（沖縄県教育委員会 1979b）で石器の出土が確認されている。白保竿根田原洞穴遺跡は下田原期の同名遺跡と同じ遺跡で、下田原期の層位に関して述べたようにⅢA-1・S 層が無土器期に当たる。しかし、両層位とも出土遺物の出土層位が下田原期と分けられる状況になく、土器を除いた人工遺物を便宜上比較対象として提示した。但し、遺構に関しては下田原期と無土器期で分層されている。嘉良嶽東貝塚は、白保竿根田原洞穴遺跡の近くの嘉良嶽の麓に立地する。異なる二つの地点の 4 層とⅡ層で石器や貝製品が出土している。

石垣島の西に位置する竹富島では、南西部の海岸でカイジ浜貝塚が確認されている。この遺跡では、石器や貝製品が確認されるとともに、方形配列の柱穴が確認されており、上層では 11 世紀以降のカイジ村遺跡が確認されている（沖縄県教育委員会 1994）。

西表島では、下田原期の仲間第二貝塚に隣接した地点に仲間第一貝塚が立地しており、こちらは早稲田大学による 1959 年の調査（西村ほか 1960）と、上原静（1995）による調査・報告によって、各々石器や貝製品の出土が報告されている。この遺跡も個別に比較対象として取り扱うこととする。また、西表島南西部の鹿川ウブドー遺跡に関しては、白保竿根田原洞穴遺跡と同様に、同一の遺跡の中で下田原期と無土器期の包含層の堆積関係が確認されている（竹富町教育委員会 2009）。両時期の包含層の間には無遺物の間層が存在しており、無土器期の層位からは炭化物などが検出されている。一方で、船浦貝塚・カトゥラ貝塚・網取遺跡は下田原期の遺跡とは隣接しない。船浦貝塚は西表島東部の船浦湾沿岸に立地し、Ⅱ・Ⅲ層で石器や貝製品の出土が報告されている（Pearson1978）。カトゥラ貝塚は西表島北部の浦内川の河口に立地する水中貝塚で、A-B の異なるトレンチの 1-3 層で若干ながら貝製品の出土が報告されている（東海大学網取遺跡・カトゥラ貝塚発掘調査団 2007）。網取遺跡は西表島西部の旧網取部落付近の貝塚で、近世の堆積層位の下層（Ⅲa 層・3b 層）から、無土器期の貝製品などが出土している。

波照間島では大泊浜貝塚が確認されており、石器や貝製品が出土している（沖縄県教育委員会 1986）。大泊浜貝塚は複数の遺物包含層を有するが、出土遺物からは 6 層より上層は明確に 11 世紀後半以降であることが確実な考古学的遺物（滑石製石鍋破片・カムィヤキなど）が出土しており、6 層以下の 9・10・11・12・17 層を無土器期の遺物包含層として取り扱った。大泊浜遺跡では埋葬人骨も確認されているが、これは遺物や層位的に見て無土器期以降の歴史時代に属するものと考えられる。

与那国島のトゥグル浜遺跡は、与那国島北部の海岸部に立地し、現在の与那国空港の滑

走路の下に当たる。トゥグル浜遺跡に関しては、放射性炭素年代は下田原期を指すものの、土器が一切出土しておらず、Ⅰ層（攪乱）・Ⅱ層・Ⅱa層から石器や貝製品・獣骨牙製品が豊富に出土している。そこで本論では、トゥグル浜遺跡を無土器期の遺跡間比較の対象として取り扱い、下田原期と無土器期の比較を通してその位置付けを考察する。

以上のように、遺跡によって若干報告形式や、層位の捉え方などに相違が存在するケースも少なくない。本論ではこれらを同一のベースで比較できるよう、各々の遺跡における出土層位と出土遺物の関係を明確に記載した上で、遺跡間の比較を行い、遺跡の属性を捉え、その性格を考察することとする。

表 5. 無土器期各遺跡の準拠する文献一覧

島名	遺跡名	報告書/文献
宮古島	長墓遺跡	長墓遺跡調査団2013
	アラフ遺跡	アラフ遺跡発掘調査団2003
	浦底遺跡	城辺町教育委員会1990
	長間底遺跡	沖縄県教育委員会1984
	友利元島遺跡	久貝2014
多良間島	西高嶺遺跡	沖縄県教育委員会2000
石垣島	船越貝塚	沖縄県教育委員会1979b
	崎枝赤崎貝塚	石垣市教育委員会1987
	名蔵貝塚群(1978)	沖縄県教育委員会1979a
	名蔵貝塚群(1980)	沖縄県教育委員会1981
	名蔵貝塚群(1984)	沖縄県教育委員会1985a
	神田貝塚	沖縄県教育委員会1980
	嘉良獄貝塚	沖縄県教育委員会2000
	嘉良獄東貝塚	沖縄県立埋蔵文化財センター2009
	白保竿根田原洞穴遺跡	沖縄県立埋蔵文化財センター2013
竹富島	カイジ浜貝塚	沖縄県教育委員会1994
西表島	仲間第一貝塚(1959)	西村ほか1960
	仲間第一貝塚(1989)	上原1995
	船浦貝塚	Pearson1978
	カトゥラ貝塚	東海大学網取遺跡・カトゥラ貝塚発掘調査団2007
	網取遺跡	東海大学網取遺跡・カトゥラ貝塚発掘調査団2007
	鹿川ウブドー遺跡	竹富町教育委員会2009
波照間島	大泊浜貝塚	沖縄県教育委員会1986
与那国島	トゥグル浜遺跡	沖縄県教育委員会1985b、木村ほか2004

[1] 時間軸上の位置付けと、空間軸上の位置付けを意味する。時間軸上の位置付けとは、遺跡の時間差の設定であり、編年的位置づけなどが該当する。空間軸上の位置付けは地域差の設定であり、地理関係に基づいたグループ化などを指す。

[2] 地表踏査は遺跡の地表面を歩き調査を行うことで、表面採集はその際に考古遺物を採集することを意味する。地表面の考古遺物は先史～中世、近世や現代の考古学的遺物が混ざった状態である為、帰属する年代や時代を特定することが困難であるという問題を抱える。また容易に位置が移動する為、原位置（本来それが土中に埋没した位置、或いは当時利用・廃棄された位置）を保っているかどうかも判別ができない。

[3] 耕作や自崩れなどにより本来の堆積層位が崩れ、構成の層位や遺物が攪乱している層。

本来の堆積・層位が読み取れない為、時間的な前後関係や同時代性が確保できない。

[4] トゥグル浜遺跡は土器の出土が確認されていないため、無土器期的な遺跡であると言えるが、遺物が出土する層位からは下田原期に相当する年代が得られている（木村ほか 2004）。また、人工遺物の組成も下田原期の下田原貝塚に類似しており（安里 2003、山極 2014）、帰属時期が曖昧な状況に存在する。

[5] 発掘調査の際に設ける発掘区画を意味する。

[6] 現在の石垣新空港の滑走路に当たる。

[7] ⅢA-1・2 を纏めてⅢA 層と報告してしまっていることがある（沖縄県立埋蔵文化財センター2013）。

[8] ⅢA-ⅢB 層という中間的な出土層位の報告が確認できる（沖縄県立埋蔵文化財センター2013）。

[9] 盛土に関しては、出土遺物が「無土器期に属するかどうか」、「全ての遺物が同時代性を有しているか」、「Ⅲ層と同じ時期であるかどうか」が判然としないため、Ⅲ層出土の遺物とは区別する必要がある。

第 3 章　下田原期の文化内容と時空間変異の整理

本論第 1 章で示した問題提起を踏まえ、本章では考古学的情報を基に遺跡間の比較を行い、地域差などの空間軸の変異（バリエーション）や、時間的変化などの時間軸の変異と言う視点で、まず下田原期における物質文化の整理を行うこととする。

本章で取り扱う考古学的情報は、発掘調査された遺跡から得られる遺構や人工遺物、動物遺存体を取扱い、島の地質などの生態環境の情報も加えて人類活動として捉えた時空間的な変異を考察する。分析の対象となる遺跡の選定に関しては、本論 2 章に記載しているのでそちらを参照して頂きたい。また、同じ遺跡でも複数回発掘調査が行われた遺跡は、分析作業の便宜上まず別々の遺跡として取り扱い、比較・考察を行った[1]。

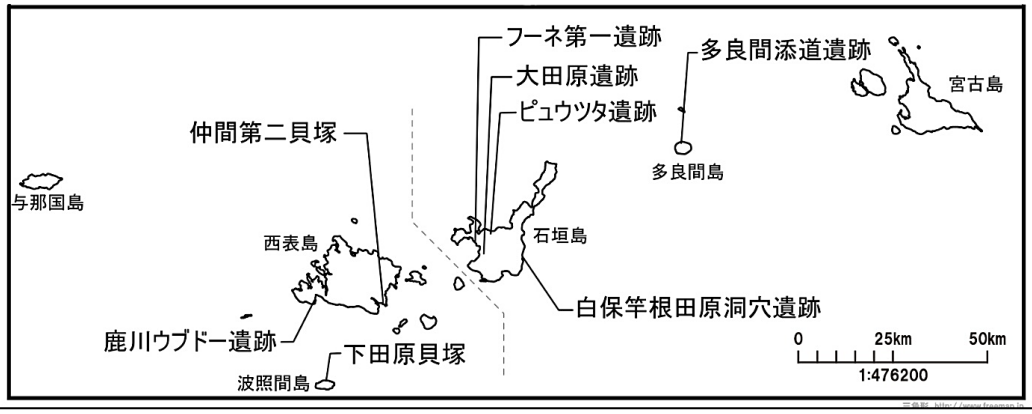


図 15. 下田原期の分析対象遺跡（大田原遺跡・下田原貝塚は別地点を複数回発掘。）

1. 放射性炭素年代による年代観の整理

遺跡間の比較に入る前に、まず下田原期の個々の遺跡の年代観を整理しておきたい。下田原期の複数の遺跡では、放射性炭素年代値（以下 ^{14}C 年代値）が示されており、各遺跡の年代観を読み取る上で、この数値を参考にすることができる（表 6）[2]。

表 6. 下田原期遺跡における ^{14}C 年代値一覧

島名	遺跡名	層位	C14年代値(測定資料)	補正年代	暦年較正年代(2σ)
石垣島	ピュウツタ遺跡	Ⅲ	4230±50B.P.(炭化物)	4250±50B.P.	BC 2820-2630
		Ⅴ	3870±50B.P.(炭化物)	4230±50B.P.	BC 2800-2760
	大田原遺跡(1978)	Ⅲ	3870±65B.P.(ｼｬｺｶﾞｲ)		
		Ⅲ	3970±95B.P.(ｼｬｺｶﾞｲ)		
		Ⅵ	1430±65B.P.(木炭)		
		Ⅷ	1880±65B.P.(木炭)		
	白保竿根田原洞穴遺跡	Ⅲa	1764±38B.P.(木炭)		BP 1810-1570
		Ⅲa-Ⅲb	3780±22(イノシシ)		BP 4236-4088
		S	3970±30B.P.(ヒト)		BP 4343-3851
波照間島	下田原貝塚(1983-85)	Ⅲ層	3660±70B.P(貝)	3550±65B.P.	
		Ⅲ層	3740±85B.P(木炭)	3630±80B.P.	
	下田原貝塚(1954)	不明	1310±90B.C.		
		不明	3580±65B.P		

※複数の年代値を示す層は、大幅に他の年代と異ならない限り最も新しい年代値を採用。引用文献は以下の通り。
ピュウツタ遺跡：石垣市教育委員会1997
大田原遺跡(1978)：沖縄県教育委員会1980
白保竿根田原洞穴遺跡：沖縄県立埋蔵文化財センター2013
下田原貝塚(1983-85)：沖縄県教育委員会1986
下田原貝塚(1954)：沖縄県教育委員会1980

しかし、^{14}C 年代値は下田原期の全ての遺跡で計測されていないため、この数値のみで全ての遺跡間細かい時期関係を読み解くことはできない。また、^{14}C 年代値は測定資料や

測定方法による年代値のバラつきが生じる為、幅を持った年代として捉える必要がある[3]。

^{14}C 年代の数値からは、下田原期が現時点ではピュウツタ遺跡の BP.3,870 年（BC2800-2760）頃を最古の年代とすること[4]と、下田原貝塚が比較的新しい年代を示していることが読み取れる。しかし、白保竿根田原洞穴遺跡と大田原遺跡の年代に関しては問題もあり[5]、前述した ^{14}C 年代値の特性も含めて考えると、年代が示された遺跡に関しても、この年代を基に細かい時間軸上の位置付けを行うことは適切ではないと言えるだろう。^{14}C 年代値は下田原期のおよその年代観を示すものとして捉え、より細かい遺跡の時空間的な変異に関しては、遺構や人工遺物などの遺跡を構成する考古学的情報（属性）に比較から導く必要がある。そこで、次項では、遺跡を構成する属性各々の遺跡間変異を確認しながら、下田原期における物質文化の時空間的な変異を考察することとしたい。

2. 土器から見た時空間的変異

・下田原式土器の分類・編年と問題

下田原期における時間的変化（編年）に関しては、土器による編年試案が示されている。これは土器が石器や貝製品などに比べて、形態が比較的素材による制限を受けにくいことから、その形態・紋様・製作技法などの時間的変化を読み解いて編年化しようという試みで、土器による編年は様々な地域でも採用される考古学的方法である。このような編年化に関しては、まず岸本義彦（2004a）の土器の紋様を基にした編年試案が挙げられる。下田原式土器には複数の紋様が施されているが、岸本はピュウツタ遺跡のⅤ層とⅢ層の有紋の土器の関係（図 16・17）を軸として、土器紋様の時間的な変遷を導いている（表 7）。

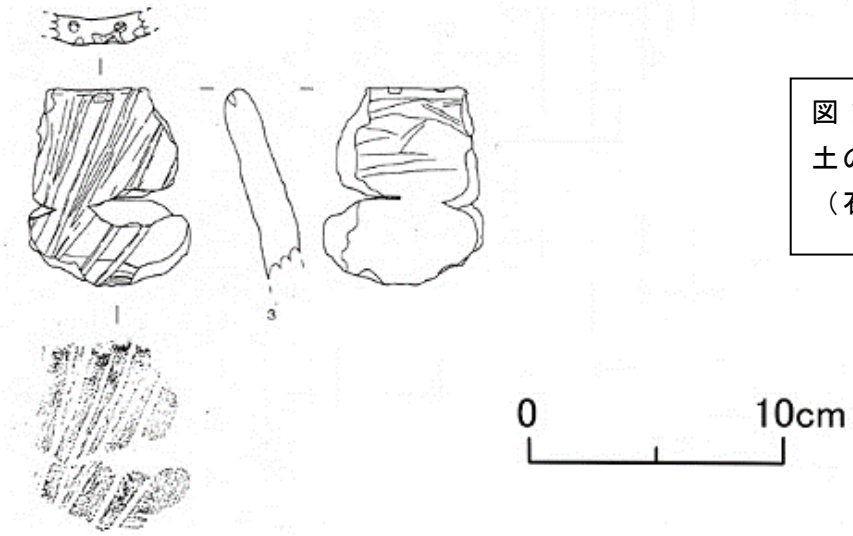


図 16. ピュウツタ遺跡 5 層出土の有紋（線紋）土器（S=1/3）（石垣市教育委員会 1997）

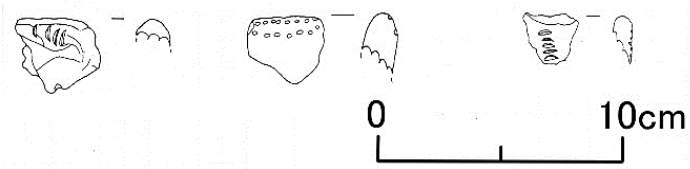


図 17. ピュウツタ遺跡 3 層出土の有紋（爪形紋・刺突紋）土器（S=1/3）（石垣市教育委員会 1997）

表 7. 岸本義彦による紋様の時間変遷（編年）（岸本 2004a）

Ⅰ群土器	→	Ⅱ群土器	→	無紋土器
第１類土器 → 第２類土器 （幅広線紋）　（細沈線紋）		第３類土器（爪形紋） 第４類土器（刺突紋）		

岸本はこの編年で、土器の器表面に沈線を施す線紋系の紋様（Ⅰ群土器）から、爪形紋[6]・刺突紋（Ⅱ群土器）へと変遷し、最終的には無紋化する流れを導いている。具体的な遺跡の時間差としては、ピュウツタ遺跡Ⅴ層を最古とし、次いで大田原遺跡・仲間第二貝塚から多良間添道遺跡・ピュウツタ遺跡Ⅲ層、フーネ遺跡へと変遷し、最も新しい最後期に下田原貝塚を位置付けている。更に伊藤慎二（2006）は、この岸本編年を基にして土器の器形の単純化の方向を指摘し、東ポリネシアの土器消失の事例を援用してそれが土器の消滅（無土器化）へと繋がった可能性を指摘した。

しかしながら、岸本や伊藤の示した編年や時間的変化の方向性は大きく二つの問題を有している。一つは、各遺跡で出土しているいずれの下田原式土器も紋様を持たない無紋土器が大半を占めており、有紋土器は少数であるという点である。紋様による編年は、多数の無紋土器が検証から漏れており、また無紋土器段階に位置づけた下田原貝塚の土器にも有紋土器が少数確認出来るため、完全に無紋化しているとは言い切れない。

また、もう一つは最も多数の土器が出土している大田原遺跡（1978・1980）において、層位的な出土傾向が全く考慮されていない点を挙げることができる[7]。岸本の提示した紋様変化はピュウツタ遺跡に関しては層位的な関係を軸にして組み立てているが、その一方で、大田原遺跡や下田原貝塚に関しては遺跡を一括して土器の傾向が捉えられており、時間的な位置づけが図られている。これは、大田原遺跡と下田原貝塚の発掘調査報告書における土器資料の報告方法に起因していると考えられ[8]、各遺跡の層位的な出土傾向を整理した上で、無紋土器を含めて遺跡間の比較を行う必要がある。

そこで本項では、まず下田原期の各遺跡で出土した土器資料を層位別に整理し、各々の遺跡における土器の出土傾向の再整理を行った。土器の出土層位は基本的に報告書の観察所見記録や土器の出土状況記録を参照し、大田原遺跡（1980）のように層位別の土器出土の報告が成されていない遺跡の土器に関しては、出土した土器資料に直接記載された層位・グリッドの記録（注記）から出土層位を復元し、整理を行った。

これらの作業を行った上で、口縁部の形態に注目して遺跡間比較を行い、既存の分類・編年と併せて遺跡間の土器の変異や時間的変化の可能性を検証した。土器の口縁部を取り扱った理由は、下田原式土器資料は破片資料が大半を占めるため、本来の器形全体図を復元することが極めて困難であるからである。加えて、土器の口縁部資料は、破片資料中で最も形を読み取ることが可能で、かつそのバリエーションが比較的確認できるため、遺跡間の変異や時間的な変化を読み取るのに適しているデータであることから、分析の対象として選定した。口縁部の類型に関しては既存の報告や研究（沖縄県教育委員会 1980、金武 2015 など）で分類案が示されているが、他の遺跡を含んだ包括的な類型には至っていないことから、これらを参考にしつつ、総合的な視点から捉えていくこととする。

・遺跡間における土器の出土傾向比較

形態に関する比較に入る前提として、まず各遺跡における土器の出土傾向を確認しておくこととしたい。土器の単純な出土数（破片での出土数）を比較すると、大田原遺跡（1978）で相対的に多くの土器資料が出土していることを読み取ることができる（表 8）。

表 8. 下田原期遺跡における報告された土器出土数

（「－」：部位毎の出土数報告がないもの。「○」：出土の報告はあるが、数量報告が無いもの。）

島名	遺跡名	層位	土器				合計
			口縁	胴部	把手	底部	
多良間島	多良間添道遺跡	Ⅳ	1				1
		4	5				5
石垣島	ピュウツタ遺跡	Ⅲ	30	158	3	4	195
		Ⅴ	19	30			49
	大田原遺跡（1978）	Ⅰ	19	1306	1	1	1327
		Ⅱ	9	400	3	2	414
		Ⅲ	104	2193	4	12	2313
		Ⅳ	1				1
	大田原遺跡（1980）	Ⅰ	14		2		16
		Ⅱ	2		2		4
		Ⅲ	54	3	9		66
	フーネ第一遺跡	西	－	－	－	－	○
		北	－	－	－	－	○
	白保竿根田原洞穴遺跡	Ⅲa	2	2			4
		Ⅲa-Ⅲb	1		1		2
		Ⅲb		1	2		3
		S	－	－	－	－	○
西表島	仲間第二貝塚	混貝	－	－	－	－	○
	鹿川ウブドー遺跡	灰褐色土	－	－	－	－	○
波照間島	下田原貝塚（1954）	2	－	－	－	－	65
		3直上	－	－	－	－	5
		2落込	－	－	－	－	6
	下田原貝塚（1959）	暗褐色土	10	92	4*	2	104
	下田原貝塚（1983-85）	Ⅱ	19	1	4	2	26
		Ⅲ	32		5	8	45
		Ⅳ	9		1	1	11
合計			331	4186	37	32	4662

*：胴部とは別に報告されているが、総数としては胴部に含まれると思われる。

しかし、各々の遺跡は発掘調査面積や、層位の堆積などが異なっており、破片の細かさなどによっても出土数は上下することから、単純な出土数の相対的関係だけで遺跡の関係を捉えるのは難しい。この出土傾向から読み取れるのは、多良間島・石垣島・波照間島に立地する各遺跡で、複数層位に跨って土器が出土していることだが、これは下田原期を通した土器の継続利用と、各遺跡内で出土する土器に時間差が存在する可能性を示している。また、ピュウツタ遺跡に関しては、Ⅲ層とⅤ層の間に無遺物の間層を挟み込む。これは土器が利用される二つの時期の間に、遺跡が利用されていない空白期間の存在を示している。

このように、出土する土器資料には、遺跡間の変異という可能性に加え、遺跡内での時間差の可能性が含まれている。この点に関しては、遺跡によっては層位別の報告がなされていなかったことから、既存の分類・編年研究には反映されていない部分が多い。そこで次項では、口縁形態を分析対象として取り上げ、層位間や各遺跡間における形態バリエーションの比較を通して、既存の研究で示された時間差を含めた時空間的な変異を検証することとする。

・土器口縁形態の変異

各遺跡で出土した口縁部資料を比較すると、石垣島のピュウツタ遺跡・大田原遺跡（1978・1980）・白保竿根田原洞穴遺跡では類似した口縁形態のバリエーションを確認することができる。おおよその類型は、①先細りする山形口縁（図 18：1）、②口唇部が平坦気味に丸みを持つ口縁（図 18：2）、③口唇部が完全に平坦に整形される口縁に大別することができる（図 18：3・4）。また、③は口唇部直下の外面を指で撫でて凹ませるものと、そうでないものにも細分することができる（図 18：4）[9]。このような形態的なバリエーションは既存の分類（金武 2015 など）でも指摘されていた要素である。

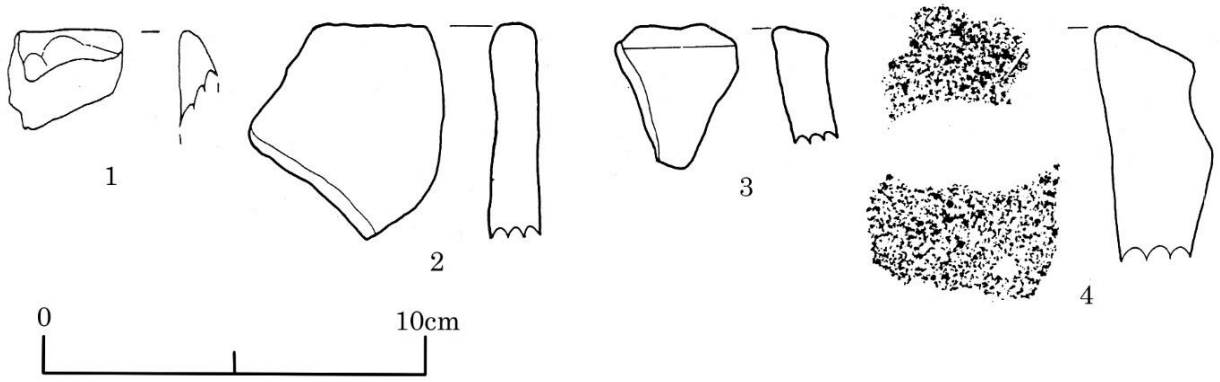


図 18. 下田原式土器の口縁形態 3 類型
（1：ピュウツタ遺跡Ⅴ層出土（石垣市教育委員会 1997）、2・3・4：大田原遺跡（1978）Ⅲ層出土（沖縄県教育委員会 1980））

しかし、これらの類型は類型間の区別が非常に難しく、①・②、②・③の中間を示すような口縁形態も多数確認できる。このことから、厳密な作り分けとしてではなく、バリエーションの幅として捉える方が妥当性を有している。石垣島以外の遺跡では多良間島の多良間添道遺跡（図 19）、波照間島の下田原貝塚（1954・1959）（図 20）で出土した土器の口縁形態も、この石垣島遺跡の土器バリエーションに含まれることが確認できる[10]。

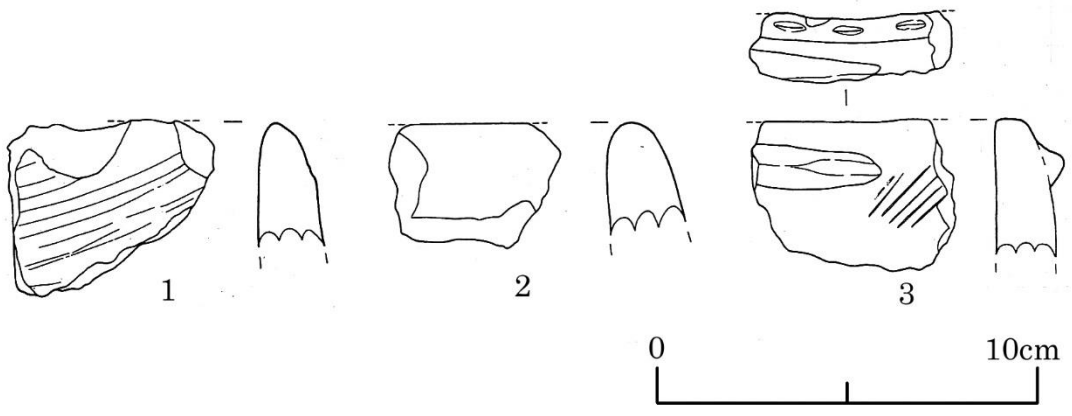


図 19. 多良間添道遺跡出土の下田原式土器
（1・2：4 層、3：Ⅳ層）（多良間村教育委員会 1993）

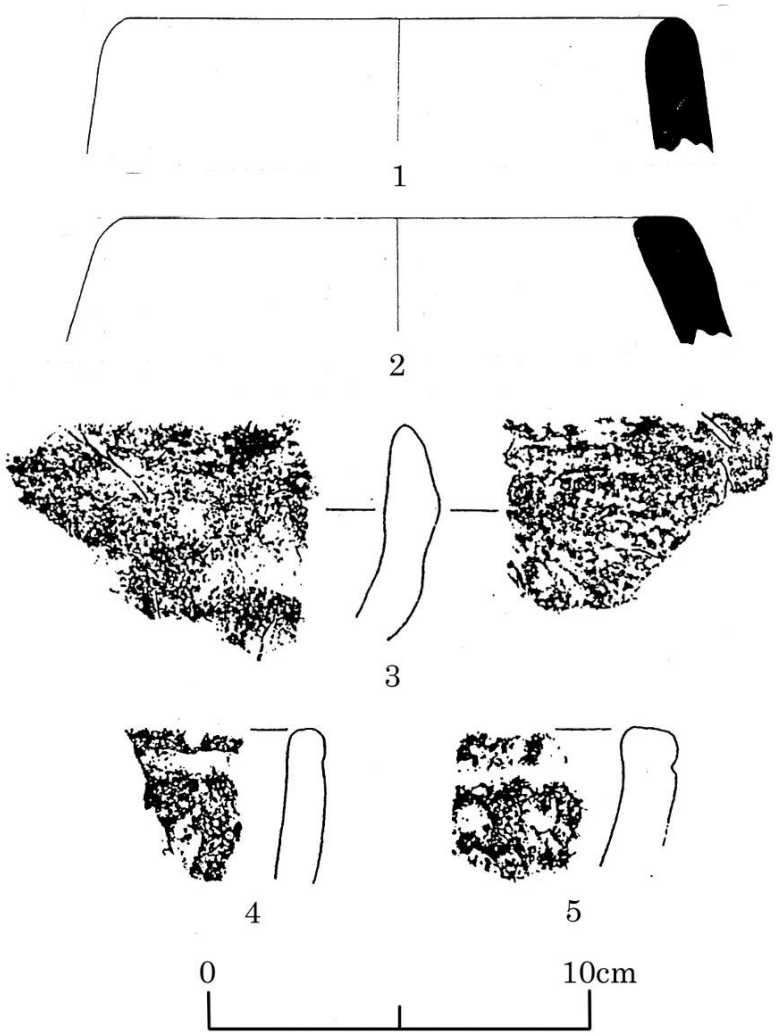


図 20. 1・2：下田原貝塚（1954）出土の土器（金関ほか 1964）
3‐5：下田原貝塚（1959）出土の土器（西村ほか 1960）

現時点の資料からは遺跡間での出土数分布の比較はあまり意味をなさないが、口縁形態の 3 類型は下田原期の全ての遺跡の土器に共通する要素であるということは確認することができる。しかしながら、下田原貝塚（1983-85）のみ例外的にこれら 3 類型に加え、口縁に向かって内湾する器形が口唇部で直口に立ち上がり、口唇部外面に凹みを有しやや外反するという、3 類型には含まれない口縁形態を確認することができる（図 21）。

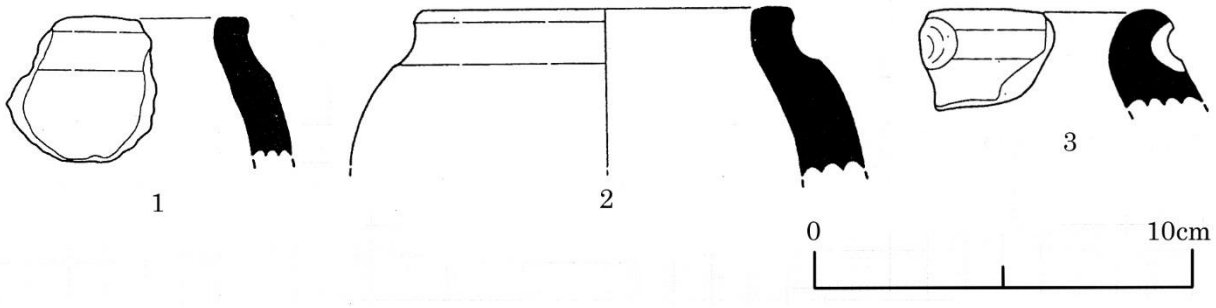


図 21. 下田原貝塚（1983-85）の下田原式土器（沖縄県教育委員会 1986）

下田原貝塚（1983-85）で確認されるこの類型は、大田原遺跡（1980）のⅢ層（攪乱）でこれに若干類似する器形が 1 点確認されているものの、他の遺跡では確認することができない。形態的には口唇部③の形態に近く、その形態からの派生として捉えることができる。

しかし、遺跡間の空間的な変異に対し、時間的な変異は確認し難い。各遺跡における時間的な変異を見てみると、ピュウツタ遺跡のⅢ・Ⅴ層、大田原遺跡（1978）のⅡ-Ⅳ層のように複数の層位で構成される遺跡でも、層位間で極端な口縁形態の偏りは見られない。また、特異な類型が確認される下田原貝塚（1983-85）も、Ⅰ-Ⅳ層では他の遺跡と同様に偏りは確認できず、特異な類型もⅣ層から継続的に確認することができる。これは、各々の遺跡での口縁形態のバリエーションが、複数層位を通して保たれていたことを示している。

既存の編年試案では、ピュウツタ遺跡Ⅴ層を最古とし、比較的新しい段階に下田原貝塚（1983-85）を位置付けている。これは ^{14}C 年代値の相対関係を参照しており、これに従えば、下田原貝塚（1983-85）で確認される特異な類型（図 21）は、時間的な変異を示しているものとして捉えることができる。但し、放射性炭素年代に関して述べたように、^{14}C 年代値の相対関係は絶対的であるとは言い切れないことから、これは土器以外の考古遺物との関係を踏まえて検証する必要がある。

ピュウツタ遺跡では比較的小型の土器が復元されており（図 22）、これは下田原貝塚（1983-85）で復元された器形（図 23）とは異なることから、伊藤慎二（2006）はピュウツタ遺跡から大田原遺跡（1978）、下田原貝塚（1983-85）という時間軸に沿って、土器の器形が単純化することを指摘した。しかし、小破片が多い資料状況では全体的な器形バリエーションの変化まで読み取ることは難しい。加えて、本論で示した土器の口縁部形態はむしろバリエーションが追加される傾向を示しており、器形の単純化を明確に支持することはできない。

また、下田原式土器に特徴的だとされる器壁外面に把手（図 23）を有する器形に関しては、把手を持つ土器が数量的にはマイノリティの傾向を示しており、現資料から各遺跡の層位間や、遺跡間での明確な変異は読み取ることができなかった。

図 22. ピュウツタ遺跡出土の復元土器（石垣市教育委員会所蔵：筆者撮影）

図 22. 下田原貝塚（1983-85）出土の復元土器（沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵：筆者撮影）

・土器紋様の変異

遺跡間の時間差に関しては、岸本義彦（2004a）が紋様変化と無紋化の方向性を示している（表 7）。出土土器総数に対する有紋資料の割合は少なく、現資料から明確な法則性を述べるのは難しいが、有紋土器の出土傾向は石垣島の遺跡に偏ることが見て取れる（表 9）。

表 9. 遺跡間における下田原式土器の紋様変異

			紋様（土器外面に施文）									紋様（内面）	
			爪型押紋系		線紋系				点紋系	紋様？			
島名	遺跡名	層位	縦列	横列	複斜	複縦	複横	交差	連点	爪痕	溝	爪形	連点
多良間島	多良間添道遺跡	Ⅳ			○					○			
		4			○	○							
石垣島	ピュウツタ遺跡	Ⅲ	○	○	○			○	○		○		
		Ⅴ			○	○	○				○		
	大田原遺跡1978	Ⅰ	○						○		○		
		Ⅱ	○							○	○		
		Ⅲ	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
		Ⅳ								○			
	大田原遺跡1980	Ⅰ											
		Ⅱ											
		Ⅲ	○	○					○		○		
	フーネ第一遺跡	西											
		北											
	白保竿根田原洞穴遺跡	Ⅲa							○				
		Ⅲa-Ⅲb											
		Ⅲb											
		S											
西表島	仲間第二貝塚	混貝											
	鹿川ウブドー遺跡	灰褐色土											
波照間島	下田原貝塚1954	2											
		3直上											
		2落込											
	下田原貝塚1959	暗褐色土							○				
	下田原貝塚1983-85	Ⅱ層											
		Ⅲ層											
		Ⅳ層					○						

※複数の紋様を組み合わせの場合は、紋様の種類ごとに記載

爪形押紋系(縦/横)：爪先を押し付けた模様を縦/横向きに配列するもの
線紋系(斜/縦/横)：複数の線紋を斜め・縦・横向きに配列するもの
線紋系(交差)：線紋同士を交差させるもの
点紋系(連点)：刺突による点紋を複数施すもの
爪痕：単体の爪先を押し付けた痕が残るもの
溝：一部分に線紋より短い複数の溝を施すもの
爪形(内面)：内面に横列の爪型押紋を施すもの
連点(内面)：内面に外面同様の連点を施すもの

出土する土器の紋様では、爪先を押し付けて紋様を施す爪型押紋系と、沈線を列状に配する線紋系の紋様の出土数が比較的多い。爪型押紋系はピュウツタ遺跡（Ⅴ・Ⅲ層）、大田原遺跡（1978・ 1980）で確認されており、線紋系は大田原遺跡（1978）、ピュウツタ遺跡（Ⅲ層）、多良間添道遺跡、下田原貝塚（1983-85）で共通性を示している。しかし、沖縄諸島の土器に見られる紋様形式のような明確な施文の規則性は見られず、施す範囲や箇所も特定の部位や範囲に限定されているわけではない。

^{14}C 年代値が比較的古い値を示すピュウツタ遺跡Ⅴ層では線紋系の土器が出土し、Ⅲ層では線紋系に爪型押紋系と連点紋系の土器が加わる。岸本が提示した時間的変化（表 7）はこの層位間の変異を基にしているが、線紋系から爪型押紋・点紋系への変化は大田原遺跡（1978）でも読み取ることができる（表 9）。また、攪乱の可能性が高いものの、比較的多くの土器が出土する大田原遺跡（1980）では爪形紋・連点紋系の土器しか出土していない。白保竿根田原洞穴遺跡のⅢa 層では連点紋系の土器が出土する。Ⅲa 層の帰属年代が判然としないが、Ⅲa-Ⅲb 層ではピュウツタ遺跡・大田原遺跡（1978）より新しい年代が

示されていることから、年代的にも近い可能性が考えられる。これらの情報を総合すると、石垣島の遺跡における紋様土器の出土傾向は、大田原遺跡の層位的な出土状況や、他の遺跡の資料を加えても、岸本が提示した紋様変化と合致することを確認することができる。

一方で、下田原貝塚(1983-85)に関しては、線紋系の有紋土器が 1 点、下田原貝塚(1959)では点紋系の土器が 1 点出土している。岸本・伊藤の両編年は、いずれも下田原貝塚を最後期に位置づけるが、その場合は波照間島の遺跡では必ずしも石垣島の土器紋様変化とは合致しない。しかし、下田原貝塚（全地点）は土器の出土数に対して有紋土器の総数が極端に少ない（表 8 の出土数に対して 1 点)。これは出土数が近いピュウツタ遺跡と比較すると顕著で、岸本が指摘する無紋化までは言いきれないものの、下田原貝塚に無紋土器が比較的多いという点は確認することができる。

・土器の製作技法・使用痕跡の変異

下田原式土器の製作技法に関しては、各遺跡の断片的な資料から、底部を手でこねて成形し、口縁部付近は粘土紐を積み上げる成形方法が存在したことを確認することができる。一方で、土器の器表面の叩き目や、内面の当て具痕等は確認できないことから、叩き板で器面をたたいて成形する「叩き成形」は利用されていない。下田原式土器の製作技法は基本的に遺跡間で共通しており、遺跡間や層位間でも明確な変化は読み取れない。

しかし、多良間添道遺跡、大田原遺跡（1978・1980)、ピュウツタ遺跡の土器の胎土にはいずれも 0.1-0.3 ㎝大の半透明白色の鉱物の頻繁に混入しており、これは土器に利用する粘土の混和材である可能性が考えられるが、下田原貝塚（1983-85）の土器胎土には殆ど確認することができない。土器の胎土に関しては、既存の研究において、土器の胎土分析が示されており（新里ほか 2008、Summerhayes et al.2009、山崎ほか 2012)、これらの研究成果は波照間島の下田原貝塚（1983-85)、多良間島の多良間添道遺跡の土器に利用された粘土が、石垣島に由来することを示しているが、Summerhayes ら（2009）は、ピュウツタ遺跡、大田原遺跡（1980)、下田原貝塚（1983-85）の土器胎土が各々異なる性質であることを示しており、遺跡間では土器胎土が一致しないことも示している。

土器胎土が示す遺跡間変異は、土器の焼成の質感にも反映されている。焼成に関しては数値化による相対化が難しいが、大田原遺跡（1978・1980）の土器の焼成が最も脆く、多良間添道遺跡、ピュウツタ遺跡の順で硬質な焼成を示している。最も焼成がよく硬質な質感を示すのは下田原貝塚（1983-85）の土器で、こちらは器表面が灰色に近い色合いを示す土器片も確認することができる。

土器資料から確認できる製作技法に対し、その使用を示す痕跡は殆ど確認できない。土器は一般的に煮沸用途が想定されることが多いが、いずれの遺跡の下田原式土器においても吹きこぼれ痕跡や炭化物の付着は確認できず、強い火を受けたススやコゲが付着した資料も少数に限られる。煮沸利用の土器は、口縁部の火を受けた黒ずみやス[11]、底部内面の顕著なコゲなどが残るが[12]、下田原式土器の口縁部や底部にはその特徴が殆ど確認できない。これは沖縄諸島の土器や、11 世紀以降の宮古・八重山諸島の土器と比べて大きく異なる点で、下田原式土器は煮沸用途に繰り返し利用するような使用は行われなかった可能性が高い。下田原式土器の厚手で脆い胎土や、内面の器面調整が粗く水分の浸透率が高い点も、煮沸用途で恒常的に利用されなかった可能性を高める要素である。

・小結：土器の時空間的変異

以上の作業通して、土器の視点からは次の三点を指摘することができる。

一は、口縁形態のバリエーションから見ると、下田原貝塚（1983-85）の一部の土器が特異性を示すということである。これは既存の編年における時間的変化の方向性、^{14}C 年代値から見ると、時間的変化を示している可能性が考えられる。但し、遺跡間の時間軸上の関係は課題があり、これは土器以外の考古学的情報との組み合わせから総合的に検証する必要がある。一方で、伊藤が指摘する器形の単純化は読み取れず、口縁形態に限れば、むしろバリエーションが増加する傾向が読み取れる。

二は、岸本が指摘する紋様の変遷（線紋系→爪型押紋・連点紋系）は、石垣島の遺跡に関しては共通しているという点である。一方で、下田原貝塚に関しては、有紋土器に対する無紋土器の占める割合が高い。下田原貝塚を最後期に位置づけるのであれば、これを無紋化の傾向と捉えることも出来るが、線紋系の有紋土器も 1 点確認されている。

三は、各遺跡の間で胎土・焼成が共通する土器が多量に出土する状況は確認できないということである。一連の胎土分析結果は、多くの遺跡の土器の粘土が石垣島に由来することを示しているが、その反面一か所における大量生産と分配・流通という土器生産システムは確認することができない。土器の使用痕から確認できる使用頻度や、土器自体の脆さを考慮すると、土器は各遺跡で使い捨てにされたものと考えることができる。

3. 属性分析から見た遺跡間の変異

ここまでを通して、下田原期の特徴的な人工遺物である土器を通して、遺跡間の時空間的な変異を検証した。そこで本項では、遺跡を構成する属性全体から各遺跡を再評価し、比較することによって遺跡間のバリエーションを抽出し､土器分析から提示できる変異と、時間差・地域差の可能性を検証することとしたい。

・遺跡間における立地環境の比較

遺跡の属性を比較するにあたって、まずは立地の変異を確認しておく。下田原期の遺跡の立地は、海岸近くの台地上に位置し、いずれも傾斜区分（日本地図センター1977）3 度未満の平坦な地形を選択している点で共通する。遺跡は現在ではやや内陸の標高 10m 付近に立地するが、所謂「縄文海進」と呼ばれる完新世の海面上昇のピークが約 5,000 年前であることから（前田 2007)、遺跡が形成された当時は海岸付近であったと考えられる。

下田原期の遺跡は、宮古・八重山諸島の複数の島に立地するが、本論第 1 章（「3. 島嶼環境の文化形成へのアプローチ」を参照）で示したように、各島の生態環境には違いが存在している。遺跡の数は隆起サンゴ島と火山島の複合島である石垣島・西表島に多く、いずれの遺跡も河川に近い環境を示している。この様な環境は水資源のみならず、石器の材料となる礫状の石素材にも恵まれている。サンゴ島では多良間島と波照間島の砂丘地に立地するが、無土器期遺跡が複数確認できる宮古列島の宮古島には、現時点で表採・発掘含めて下田原期の遺跡が確認されていない。

純粋なサンゴ島を除き、遺跡の立地環境の選択にはあまり大きな変異は見られない。但し、島における生態環境と利用可能資源の違いは、後述する人工遺物や動物遺存体に反映されている[13]。

・遺跡間における堆積層位の比較

立地環境に続いて、各遺跡の層位関係を確認しておこう。土壌が撹乱のない自然堆積である場合、遺跡の層位は上層が新しく、下層になるにつれて古くなる。つまり、考古学的遺物が含まれる遺物包含層の層位関係は、時間差を表現しているということになる。

下田原期の遺跡は、単一の文化層であると説明されることもあるが、実際には遺物包含層が単一のものと、複数のものに分類することができる。前者には多良間添道遺跡（多良間島）、フーネ第一遺跡（北地点）・白保竿根田原洞穴遺跡（ともに石垣島）、仲間第二貝塚・鹿川ウブドー遺跡（ともに西表島）、下田原貝塚（1954・1959）（波照間島）が含まれ、後者にはピュウツタ遺跡・フーネ第一遺跡（西地点）・大田原遺跡（1978）（ともに石垣島）、下田原貝塚（1983-85）（波照間島）が該当する。大田原遺跡（1980）に関しては全層攪乱の可能性が高いとされる（石垣市教育委員会 1982）。また、フーネ第一貝塚（北地点）、仲間第二貝塚の上層に関しても、耕作による攪乱を受けていることから完全に単一層であったかは断定し難いが、多良間添道遺跡の 7 ライン南側断面では、本遺跡が単一の文化層であることが確認できる（多良間村教育委員会 1996）。

ここで、注目できるのはピュウツタ遺跡のⅢ層とⅤ層の層位関係であり、遺物包含層（Ⅲ層・Ⅴ層）の間に無遺物の包含層を挟み込む状況が確認されている（石垣市教育委員会 1997）。これは、Ⅲ層の包含層が形成された後に一度遺跡が放棄され、自然の土壌堆積が起きた後に、再び人が戻ってきて包含層を形成するような活動が存在したことを示している。

また、複数の遺物包含層が形成されている大田原遺跡（1978）の周辺では、異なる地点に大田原遺跡（1980）や平地原（へいちばる）遺跡（表採遺跡）（沖縄県教育委員会 1980）が確認されており、これらの遺跡が立地する大田原遺跡周辺は、複数回にわたる顕著な利用の痕跡が確認できる。大田原遺跡は現在やや内陸に立地するが、当時の海面との関係から、石垣島西部の名蔵湾に近い環境であったと考えられる。名蔵湾周辺にはフーネ第一遺跡の他に、崎枝赤崎遺跡（表採遺跡）（大濱 1999）などが確認されており、比較的遺跡が集中する傾向にある（図 23）。後述する石器石材の獲得と併せて考えると、名蔵湾周辺域での頻繁な人の動きを想定することができる。

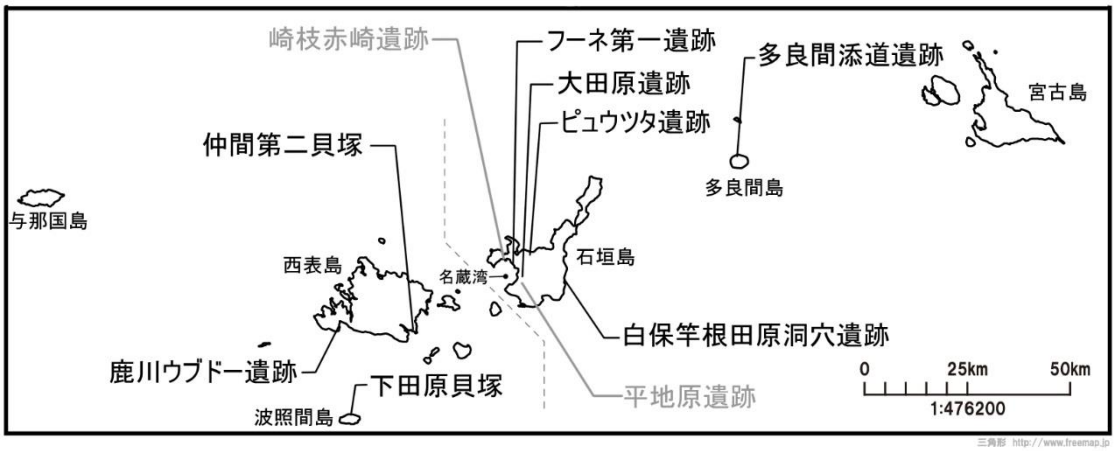


図 23. 遺跡の立地関係（崎枝赤崎遺跡・平地原遺跡は表採遺跡）

・遺跡間における遺構の比較

遺跡には、住居跡や墓葬跡など、当時の人々の生活やそれに伴う構造物の痕跡が残されることがあり、考古学的にはこれを遺構と呼称する。しかし、下田原期の遺跡からは明確な住居跡などの構造物の痕跡は確認されていない（表 10)。唯一確認されているのは規則性のない柱穴の痕跡で、下田原貝塚(1983-85)で検出されている(沖縄県教育委員会 1986)。柱穴はいずれも口径が 15-20 ㎝程度と比較的小さく、深さも 10-30 ㎝程度しかないため、住居に関わる痕跡だとしても比較的規模が小さく、強度の低いものであったと考えられる。大田原遺跡（1980）では直径約 2.5m、深さ約 20-30 ㎝の円形の窪みが検出されている。報告書ではこれを竪穴遺構と解釈するが（石垣市教育委員会 1982)、攪乱層であるため帰属年代が判然としない。この竪穴では柱穴の痕跡は確認されておらず、竪穴遺構が住居遺構であったと仮定しても、下田原貝塚同様に頑強な住居ではなかったと考えられる。

表 10. 下田原期遺跡の検出遺構一覧

島名	遺跡名	層位	火焼痕	焼礫	柱穴	ピット	溝	落込	礫敷
多良間島	多良間添道遺跡	Ⅳ 4		○					
石垣島	ピュウツタ遺跡	Ⅲ Ⅴ	○	○					
	大田原遺跡1978	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ							
	大田原遺跡1980	Ⅰ Ⅱ Ⅲ				○			
	フーネ第一遺跡	西 北							
	白保竿根田原洞穴遺跡	Ⅲa Ⅲa-Ⅲb Ⅲb S	○						○
西表島	仲間第二貝塚	混貝						○	
	鹿川ウブドー遺跡	灰褐色土							
波照間島	下田原貝塚1954	2 3直上 2落込						○	
	下田原貝塚1959	暗褐色土	○	○					
	下田原貝塚1983～1985	Ⅱ層 Ⅲ層 Ⅳ層 時期不明	○		○ ○		○		

火焼痕:炉跡・被熱面・炭化物集中などの火の使用痕跡。 **溝**:溝状の掘り込み。機能は不明。
焼礫:被熱した礫の散布。 **落込**:層位の一部が下層へと落ち込むもの。
柱穴:柱の跡と考えられる痕跡。明確な構造プランは不明。 **礫敷**:一面の礫の散布。機能は不明。
ピット:穴状の痕跡。柱穴とは異なるものとして報告。

一方で、当時遺跡で火が利用されていたことを示す痕跡（火焼痕）は、多良間添道遺跡、ピュウツタ遺跡、下田原貝塚（1983-85）で検出されている。下田原貝塚からは円形の焼土面と木炭や被熱した礫（沖縄県教育委員会 1986)、ピュウツタ遺跡では円形に並べられた石列の中央から炭化物が確認されている（石垣市教育委員会 1997)。多良間添道遺跡では明確な炉跡は確認されていないが、被熱した石灰岩礫が散発的に出土している（多良間村教育委員会 1996)。どの遺跡でも基本的に後述する土器や動物遺存体が出土している点を

考慮すると、いずれも炉に代表される火の利用があったものと考えられる。

遺構に関しては検出事例が少なく、明確な遺跡間の変異とまでは言い難いが、柱穴を伴う構造物の痕跡や、溝状の遺構（機能は不明）が下田原貝塚（1983-85）でのみ確認されている点は、土器の特異性と併せて注目することができる。また、全遺跡を通して明確な住居遺構が確認できず､比較的長期間にわたる集住や定住の痕跡は確認することができない。11 世紀以降になると、石垣島では石垣囲いの住居跡や区画の痕跡が確認されるようになるが、その様な居住様式と比べると、下田原期における定住の痕跡は非常に希薄である。

また、白保竿根田原洞穴の S 層では 3 個体分の人骨が検出されている。報告書ではこれを「崖葬墓」と報告しているが、人骨は解剖学的位置を保っておらず、副葬品も出土していない。他の遺跡に類例も無いことから、明確な墓葬とは現時点では断定し難い。

・遺跡間における人工遺物の出土比較

下田原期の遺跡から出土する人工遺物は土器以外に、石や哺乳類（主にイノシシ）の骨牙、魚類の骨や（サメの）歯、貝類を利用した人工遺物が出土している。本項では素材別にみた各々の道具に関して、土器同様にその層位間や遺跡間の変異を検証する。

①石器

・石器器種における変異

石器は石に打撃や研磨を加えて成形した道具で、下田原期の遺跡からは斧の刃先に当たる石斧[14]（図 24)、ハンマーに利用したと考えられる敲石、研磨や磨り潰しなどの磨く行為に用いたと考えられる磨石の 3 点セットが普遍的に出土する。この他にも研磨に利用された砥石、敲き台や磨り台として利用されたと考えられる石皿なども出土するが、上記の 3 点セットに比べると数は少ない（表 11)。

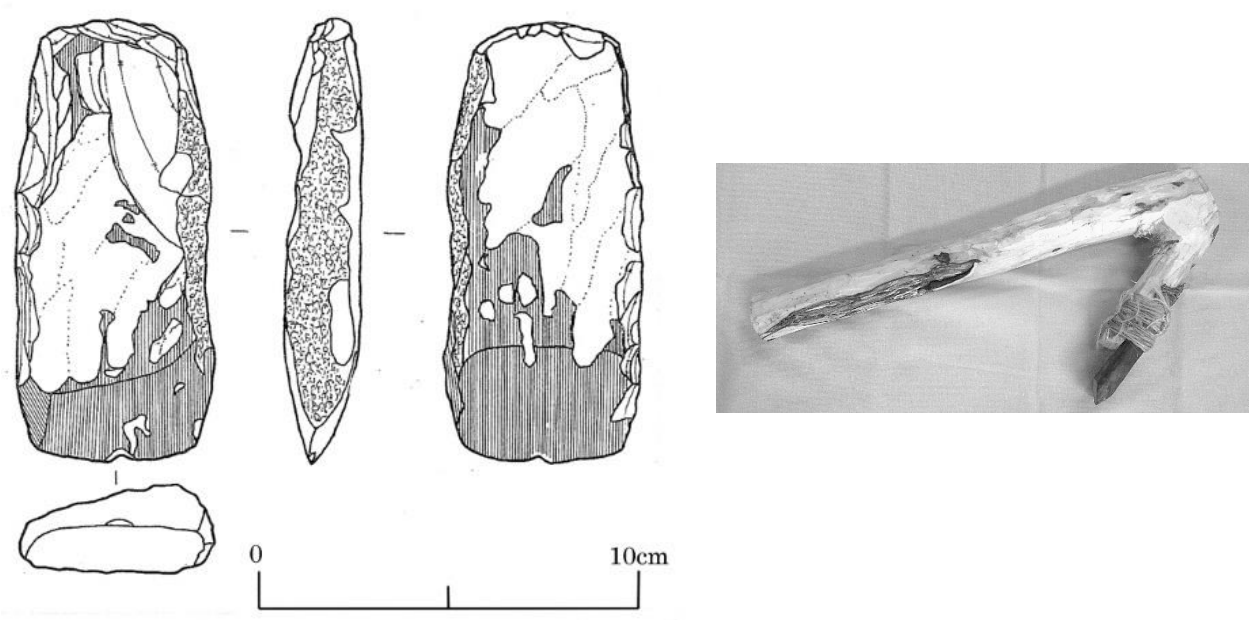


図 24. 左：大田原遺跡（1978）出土の変成岩利用石斧（沖縄県教育委員会 1980）と、右：推定される使用例

製作の視点から見ると、石斧は比較的扁平の石材を敲打による剥離で平面形を整えており（図 24)、敲石や磨石は棒状や丸みを持った石材を選択し、自然の形を利用して敲打や研磨に利用している。特に石斧に関しては、側面部を細かい敲打によって剥離し、平面形態を整え、研磨によって刃部を形成するなど、製作における加工が比較的入念である。

使用に関しては、石斧は斧として切る、或いは土を掘るなどの用途が考えられるが、石斧の中には刃部が磨滅して潰れ、敲石に転用されたと考えられるものも存在し、敲石や磨石にも敲打痕や磨り痕の両方が確認できる資料が存在することから、臨機応変に複数の用途に利用していたことが読み取れる。

石斧は石器の中で最も出土数が多く（表 11)、殆どの遺跡で出土していることから、当時の人々にとって非常に重要な道具と認識されていたものと考えることができる。大田原遺跡（1980）のみ、詳細な数量や出土層位、図の報告が無いものの、100 点以上の磨石が出土したと報告されているが（石垣市教育委員会 1982)、石斧が多くの遺跡で普遍的に確認できる石器である点には変わりはない。

表 11. 下田原期における石器の出土状況

島名	遺跡名	層位	石斧	敲石		磨石	敲/磨石	砥石	石皿	尖頭器	他	合計
				円礫	棒状							
多良間島	多良間添道遺跡	Ⅳ	1		1							2
		4	1		6							7
石垣島	ピュウツタ遺跡	Ⅲ	2				2	1				5
		Ⅴ	5			2			1			8
	大田原遺跡(1978)	Ⅰ	16	4		9						29
		Ⅱ	3	5								8
		Ⅲ	18	6		12			1			37
		Ⅳ										0
	大田原遺跡(1980)*	Ⅰ	11			3						14
		Ⅱ	6									6
		Ⅲ	86		2	6	1				1	96
	フーネ第一遺跡	西	1									1
		北					1					1
	白保竿根田原洞穴遺跡	Ⅲa		4							4	8
		Ⅲa-Ⅲb									1	1
		Ⅲb		3				1	1		2	7
		S		1								1
西表島	仲間第二貝塚	混貝		1				1				2
	鹿川ウブドー遺跡	灰褐色土										0
波照間島	下田原貝塚(1954)	2	6	3						1		10
		3直上	4									4
		2落込		1								1
	下田原貝塚(1959)	暗褐色土	6	1							1	8
	下田原貝塚(1983-85)	Ⅱ	17	2		5			1	3		28
		Ⅲ	15			3			1	2		21
		Ⅳ	1	1								2
合計			199	32	9	40	4	3	5	6	9	307

*:大田原遺跡(1980)は層位が不明であるが、敲石が100点以上出土したと報告されている。

石斧:磨製の刃部をもつ斧状製品
敲石(円礫):円礫を利用した敲石
敲石(棒状):杵状の石を利用した敲石
磨石:研磨面を持つ円礫
敲/磨石:敲打痕・研磨面を併せ持つ円礫
砥石:研磨面を持つ扁平の方形石器
石皿:敲打痕や研磨面を有する大型の石器。中央部などに凹面を持つ
尖頭器:小型の針状の石器。先端が鑿状になるものも存在。
他:共通の形態を持たず、加工や機能が曖昧な石器様の石。

石斧に関しては詳細な分類を行った高宮廣衞の一連の研究が示されているが（高宮廣 1994b・1995・1996・1999)、高宮が示した基本平面形 3 種（短冊形、撥型、狭刃形）は遺跡間で優位な偏りは見られず、比較的数が多い短冊形と撥形に関しては、いずれの遺跡でも確認することができる。研磨面の範囲に関しても同様で各々の遺跡の中で複数のバリ

エーションを確認することができ、遺跡間で明確な分布の偏りは読み取れない。

器種として遺跡間で変異を示すのは、むしろ石斧以外の石器で、棒状の敲石[15]（図 25）は多良間添道遺跡・大田原遺跡（1980）に、小型の針のように尖端を尖らせる石器（尖頭器）[16]（図 26）は下田原貝塚（1954・1983-85）に限定される。棒状の敲石に関しては、痕跡から推定できる用途は円礫の敲石と同様で、利用した素材の違いが形態の違いに繋がっているものと解釈できる。

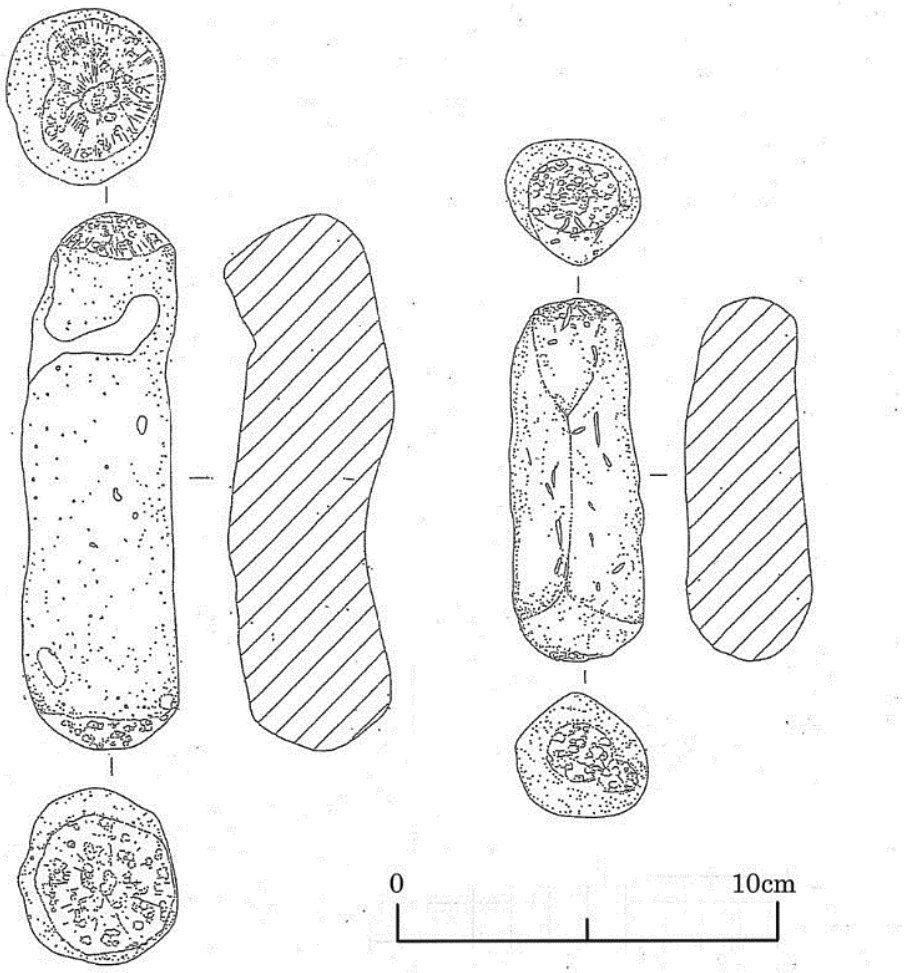


図 25. 多良間添道遺跡 4 層出土のサンゴ礫利用棒状敲石
（多良間村教育委員会 1996）

一方で、尖頭器（図 26）は長さ約 3.0-5.0 ㎝、幅約 1.0 ㎝の石材の先端を、複数の方向から研磨を加えることによって、錐状や鑿状の尖頭部を作り出している。製作技法や形態の選択に関しては、他の石器と大きく異なっており、比較的多量の石器が確認できる大田原遺跡（1978・1980）でもこのような人工遺物が一切確認できず、下田原貝塚（1954・1983-85）にのみ確認できる点は、大きな遺跡間の変異として捉えることができる。下田原貝塚に関しては、後述する獣骨牙製品や貝製品にも同様の手法で製作され、類似した形態を示す道具が確認されており、「錐状や鑿状の先端を有する道具の製作・利用」と言う点で特異性を示している。

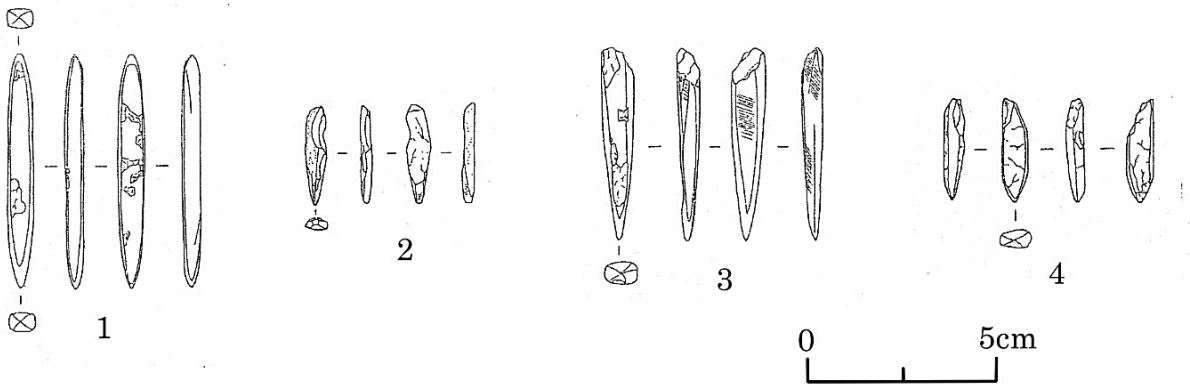


図 26. 下田原貝塚（1983-85）出土の尖頭器
（1・2：Ⅱ層、3・4：Ⅲ層）（沖縄県教育委員会 1986）

・石材の視点から見た変異と島間移動

石器の石材に関しては、島袋綾野（2002）が波照間島の下田原貝塚（1983-85）の石器石材と、八重山諸島の石材産出地との関係から、波照間島へ石垣島などから石器（或いは石材）が搬入されていたことを論じている。石材は、全体的に石斧には火成岩や変成岩（閃緑岩や緑色片岩）が利用されることが多く、敲石や磨石には変成岩・深成岩や砂岩・サンゴ石灰岩が利用されている。木崎甲子郎（1985）によって示された宮古・八重山諸島の地質構造によると、花崗岩類の火成岩は石垣島の於茂登岳（おもとだけ）周辺に、変成岩は石垣島と小浜島の北部[17]・西表島の東北部の一部に産地が限定され、砂岩に関しても石垣島と西表島・与那国島に産出が限られる。これは火山島とサンゴ島の特性とも関係しており、多良間島や波照間島などのサンゴ島では、サンゴ石灰岩以外の石材は産出しない（図 27）。

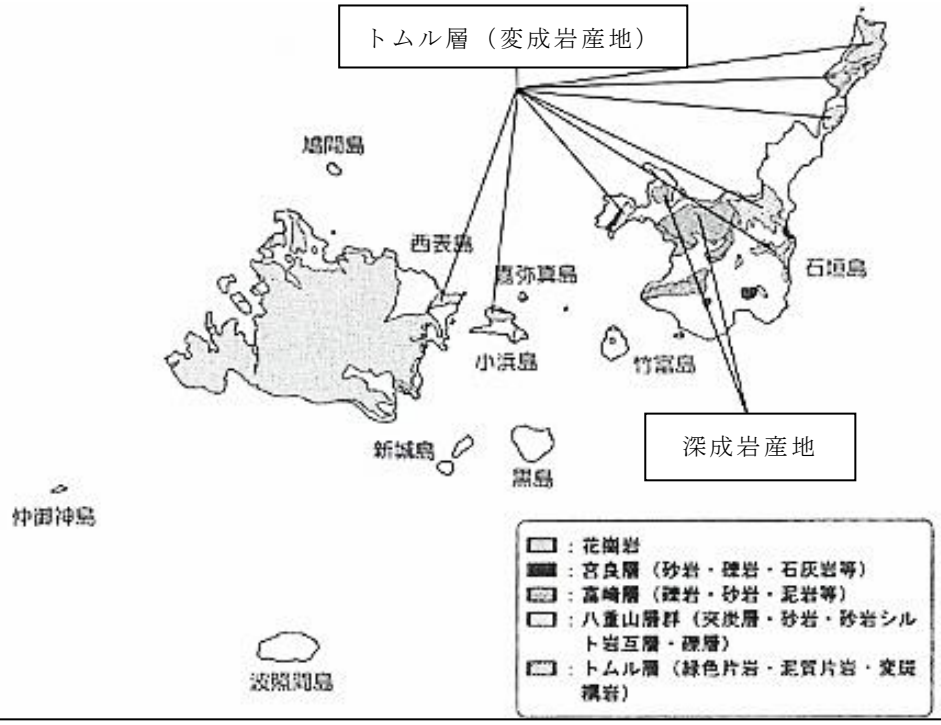


図 27. 木崎（1985）を基にした石材産地（島袋綾 2002 に一部追記）
（多良間島は波照間島と同じ地質、与那国島は石灰岩＋砂岩が産出する。）

この石材産地と石器に利用する石材の関係からは、比較的どの遺跡でも、石垣島にしか産出しない火成岩（多くは深成岩）を利用していることが読み取れる（表 12)。

表 12. 下田原期における石器利用石材（石材は報告書による分類に依拠）

島名	遺跡名	層位	石垣島	石垣島-竹富島	石垣島・小浜島北・西表島東北	石垣島・西表島・与那国島	全島	合計
			火成岩	石灰質砂岩・チャート	変成岩	堆積岩	石灰岩	
多良間島	多良間添道遺跡	Ⅳ			1		1	2
		4			1		6	7
石垣島	ピュウツタ遺跡	Ⅲ	4					4
		Ⅴ*	6		1			7
	大田原遺跡(1978)	Ⅰ	13		16			29
		Ⅱ	4		3	1		8
		Ⅲ	19		18			37
		Ⅳ*						0
	大田原遺跡(1980)*	Ⅰ	3		11			14
		Ⅱ			6			6
		Ⅲ	5	1	89	1		96
	フーネ第一遺跡	西*						0
		北*						0
	白保竿根田原洞穴遺跡	Ⅲa	7			1		8
		Ⅲa-Ⅲb	1					1
		Ⅲb	7					7
		S	1					1
西表島	仲間第二貝塚	混貝				2		2
	鹿川ウブドー遺跡	灰褐色土						0
波照間島	下田原貝塚(1954)	2*	○			○		0
		3直上*	○					0
		2落込*						0
	下田原貝塚(1959)	暗褐色土*			5	2		7
	下田原貝塚(1983-85)	Ⅱ	20		5	3		28
		Ⅲ	16	1	3	1		21
		Ⅳ*			1			1
合計			106	2	160	11	7	286

*:石材不明の石器がある遺跡・層位
○:数量報告がないが石材の報告がある層位

特に石垣島とは比較的距離の離れた波照間島で、石垣島産の石材が確認できる点は注目に値する[18]。また、多良間島では地元で獲得できるサンゴ石灰岩を利用するかたわら、多良間島では産出しない変成岩を利用した石器も出土している。これは、サンゴ島の遺跡でも、石垣島などから石材（或いは石器）を持ち込まれ、石器が利用されていたことを示しているが、一方でサンゴ島産出の素材を利用しようという工夫も読み取れる。

また石器器種に対する大まかな石材の選択も確認できる。石斧には閃緑岩などの火成岩や変成岩が利用されることが多く、石斧の平面形成形と、刃部成形・斧刃としての利用の点でこのような石材が適していたものと考えられる[19]。石斧の多くは扁平であるが、自然面を多く残しており、角礫ではなく円礫を利用傾向を示しており、母岩からの打ち割りではなく、河原や海岸などの自然礫を利用して製作されたものが多い。現在でも変成岩産地の近くの河口や海岸付近では比較的角が取れた石材が入手可能で、中には既にほぼ石斧の平面形に整っている石材も拾うことができる。一方で、敲石には深成岩や石灰岩が利用される。これは打撃に利用する上で、より硬質な石材が好まれたことを示している。石灰岩（サンゴ礫）の敲石は多良間添道遺跡でのみ出土しており、こちらは石材が産出しない島での資源利用の工夫が反映されている。磨石にも深成岩が用いられるが、砥石や石皿には砂岩などの堆積岩が利用される。磨石は広範囲の磨面を持つことから研磨に利用されたと考えられる。深成岩は表面の凹凸と硬質な石材が研磨に適しており、砂岩は岩石を構成する粗い粒子が研磨剤としての役割を果たしたと考えられる。

この様な石材と器種の関係からは、いずれの遺跡も石器製作において、石垣島の深成岩産地や、石垣島から小浜島・西表島の一部の地域に分布する変成岩産地とアクセスするこ

とが必要不可欠であったものと考えられる。この石材から見た島間移動は、土器胎土の分析から示された石垣島と結び付いた人の動きとも合致しており、土器と石器からは、様々な島に活動する場所を移しながらも、一定の地域（石垣島周辺）とは定期的にアクセスしていた下田原期の人々の姿を復元することができる。

②哺乳類骨牙製品・魚類骨歯製品

主にイノシシの骨や牙を利用した製品で、複数方向からの研磨によって錐状や鑿状の先端部を作り上げている（図 28）。この製作技法や、平面形態、先端部の形態は石器における尖頭器と共通していることから、同様の利用を想定することができる。

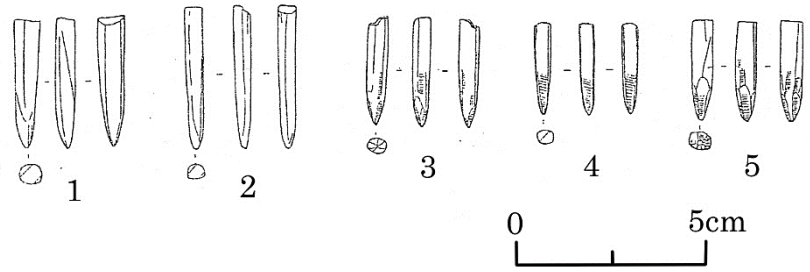


図 28. 下田原貝塚（1983-85 年調査地点）出土の骨牙製品
（1‐3：Ⅱ層、4・5：Ⅲ層）（沖縄県教育委員会 1986）

イノシシの骨牙製品に関しては、遺跡礫で出土の有無に違いが表れており、白保竿根田原洞穴遺跡の S 層と下田原貝塚（1954・1983-85）でのみ出土している。但し、尖端部を形成する骨牙製品に関しては下田原貝塚以外では確認されていない。動物骨は土中での残存が土壌の酸性度などにも影響されるが、製作技法・形態ともに類似した石器の尖頭器も本遺跡に出土が限られることを考慮すると、このような尖端部を有する小型の利器を製作・利用すること自体が、下田原貝塚（1954・1983-85）遺跡の特徴であると考えられる。

イノシシ骨以外ではクジラの骨やウツボの椎骨に穿孔したもの、サメ歯に穿孔した製品（図 29）が確認されているが、いずれも下田原貝塚（1983-85）に出土が集中し、下田原貝塚以外では白保竿根田原洞穴遺跡の S 層でサメ歯製品が 1 点確認されているに過ぎない。大田原遺跡（1978）やピュウツタ遺跡は貝類や哺乳類の動物遺存体が殆ど確認されておらず、獣骨牙・魚骨歯の製品に関しては酸性土壌による残存率の低さも出土に影響している可能性が有るが[20]、前述の尖頭器同様に、下田原貝塚（1983-85）の特性を示している。

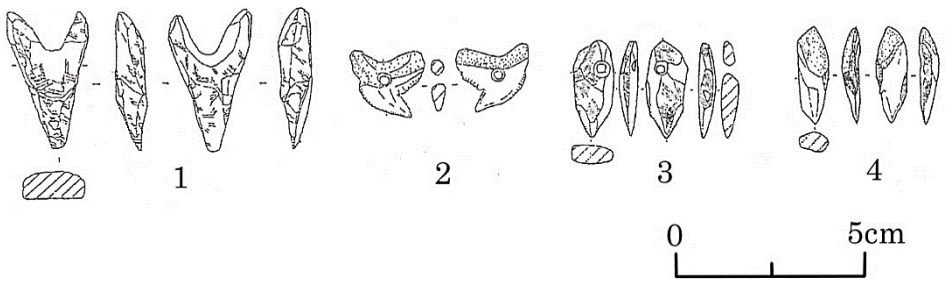


図 28. 下田原貝塚（1983-85 年調査地点）出土のサメ歯製品
（1・2：Ⅲ層、3・4：Ⅳ層）（沖縄県教育委員会 1986）

サメ歯への穿孔に関しては、孔が真円に近く、穴の断面も擂鉢状になっており、穴の周辺には同心円状の擦過痕が確認できる。これは回転運動による穿孔が行われていたことを示しており、錐状の尖端部を有する石器（尖頭器）やイノシシ骨製品との関係が伺える。また、サメ歯には先端を複数方向から尖らせているものも存在しており、尖頭器やイノシシ骨牙製品と共通した製作技法・形態も確認できる。

③貝製品

貝製品に関しても、獣骨牙製品・魚骨歯製品と同様に、出土が波照間島の下田原貝塚（1954・1959・1983-85）に集中し、同じサンゴ島の多良間島の多良間添道遺跡でも僅かに出土が確認できる（表 13）。

表 13. 下田原期における貝製品の出土状況

島名	遺跡名	層位	先端研磨	穿孔		研磨		敲打	剥離	合計
			ソデボラ科	二枚貝	巻貝	巻貝	タカラガイ	螺蓋	二枚貝	
多良間島	多良間添道遺跡	Ⅳ								0
		4				1				1
石垣島	ピュウツタ遺跡	Ⅲ								0
		Ⅴ								0
	大田原遺跡（1978）	Ⅰ								0
		Ⅱ								0
		Ⅲ								0
		Ⅳ								0
	大田原遺跡（1980）	Ⅰ								0
		Ⅱ								0
		Ⅲ								0
	フーネ第一遺跡	西								0
		北								0
	白保竿根田原洞穴遺跡	Ⅲa								0
		Ⅲa-Ⅲb								0
		Ⅲb								0
		S								0
西表島	仲間第二貝塚	混貝								0
	鹿川ウブドー遺跡	灰褐色土								0
波照間島	下田原貝塚（1954）	2		6			3	1		10
		3直上								0
		2落込		1						1
	下田原貝塚（1959）	暗褐色土		3					1	4
	下田原貝塚（1983-85）	Ⅱ	4	3	4			1	4	16
		Ⅲ	9	49	60			9	13	140
		Ⅳ			1		6	2		9
合計			13	62	65	1	9	13	18	181

※
先端研磨（ソデボラ科）：ソデボラ科のスイジガイやクモガイの突起を磨き尖端部を作るもの。
穿孔（二枚貝）：サルボウなどの二枚貝の殻腹に内側から刺突穿孔するもの。
穿孔（巻貝）：イモガイやウミニナなどの巻貝の螺頭のみを残し、中央部に回転穿孔するもの。天然の有孔素材も用いる。
研磨（巻貝）：トミガイの殻頂を削り取り、断面を研磨したもの。
研磨（タカラガイ）：タカラガイの殻頂を削り取り、断面を研磨したもの。
敲打（螺蓋）：敲打によって縁辺を打ち欠いたヤコウガイの螺蓋。
剥離（二枚貝）：ヒルギシジミなどの縁辺部を剥離したもの。

主な貝製品としては、ソデボラ科（スイジガイ・クモガイ）の突起先端を複数方向から磨き、錐状・鑿状の尖端部を作り上げる利器[21]（図 29）や、リュウキュウサルボウなどの二枚貝に殻の内側から刺突して孔を開けた製品（図 30）、巻貝の螺頭部だけ残しその中央部に回転穿孔で孔を開けた製品（図 31）、打撃によって縁辺部が打ち割られたヤコウガイの蓋（図 32）が出土している。その他にもタカラガイなどの殻頂を削り取って研磨したものや、ヒルギシジミなどの縁辺部などの剥離を促して、匙状に成形した製品も出土している。

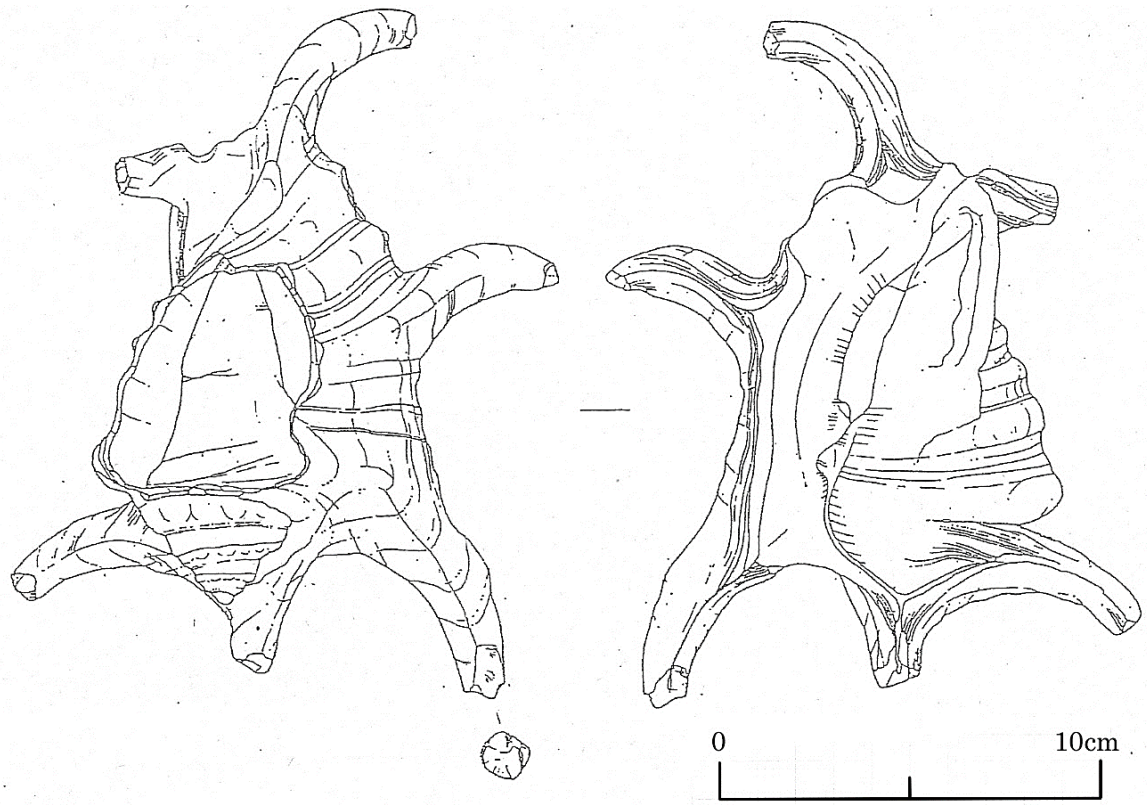


図 29. 下田原貝塚（1983-85）Ⅱ層出土のソデボラ科（スイジガイ）利器
（沖縄県教育委員会 1986）

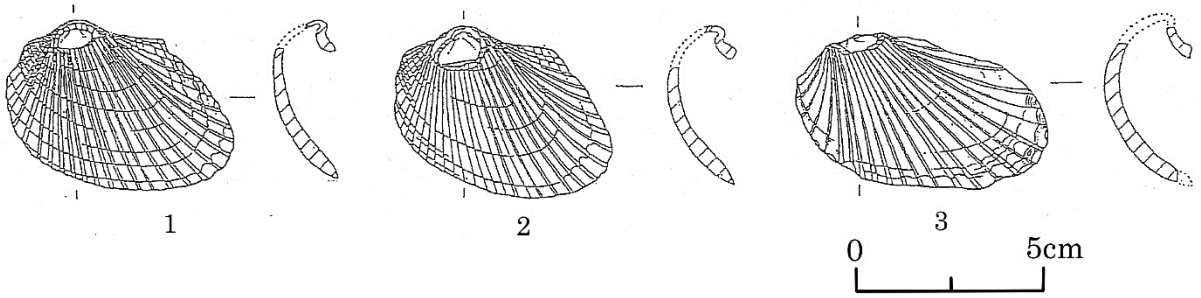


図 30. 下田原貝塚（1983-85）出土の二枚貝有孔製品
（1・2：Ⅱ層、3：Ⅲ層）（沖縄県教育委員会 1986）

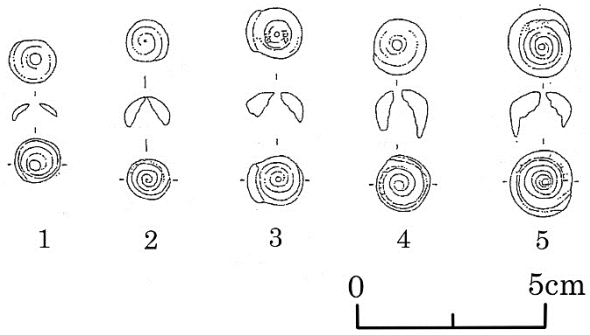


図 31. 下田原貝塚（1983-85）出土の巻貝有孔製品
（1：Ⅰ層、2‐5：Ⅱ層）（沖縄県教育委員会 1986）

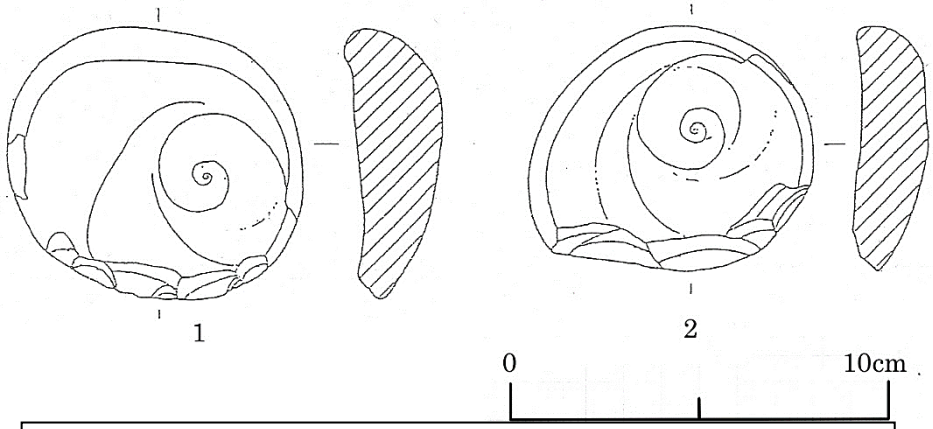


図 32. 下田原貝塚（1983-85）出土のヤコウガイ製利器
（1：Ⅲ層、2：Ⅳ層）（沖縄県教育委員会 1986）

ソデボラ科の利器に関しては、尖端部の成形が石器における尖頭器や骨牙製品の尖頭器とほぼ共通しており、同様の役割を持つ道具として製作・利用されていたものと考えられる。また、ヤコウガイの螺蓋に関しては打撃・敲打による剥離が顕著で、石器における敲石と同様の役割を担っていた可能性が考えられるが、打ち割られた鋭利な部分をスクレイパーとして利用した可能性も存在する。ただし、下田原期の石器にはスクレイパー状の石器が存在しておらず、このヤコウガイ製品は敲石や磨石に用いられる円礫と形状や重さが類似している。二枚貝の有孔製品やタカラガイの殻頂除去製品は、沖縄諸島の民俗事例（e.g. 岸上 1971）などから漁網錘の可能性が指摘されている（家田 1983・1998、島袋春 1997・2003a・2003b・2004）[22]が、網の出土や、それに伴うような一定箇所での纏まった貝製品の出土は確認できない。一方で、巻貝の螺頭部に先行する製品は、直径約 2.0 ㎝程度の小型のものも確認できる。サルボウ利用のものとは異なり、重量も非常に軽いことから貝錘の役割を果たせるとは考えられず、ビーズなどといった装飾品の類と考えるのが妥当であろう。また、巻貝の有孔製品は、サメ歯製品と同様に回転穿孔によって穿孔されており、錐状尖端部の道具との結びつきが考えられる。この他、ヒルギシジミなどの縁辺部などの剥離する製品の中には、剥離痕が鋭利な刃のようになるものも確認できるが、実際の使用や用途は判然としない。ヤコウガイの蓋製品同様にスクレイパー的用途であると考えるのであれば、下田原貝塚（1983-85）は道具機能においても特異であると捉えられる。

このように、貝製品に関しても下田原貝塚は他の遺跡と比べて特異性を示していることが読み取れる。また、貝製品の一部（ソデボラ科利器）には、石器やイノシシ骨牙製品と共通する要素（錐状・鑿状尖端）が確認できることから、素材だけではなく道具の機能・種類と言う点での特異性でもあると捉えることができる。哺乳類骨牙製品などと同様に、貝製品に関しても土中の残存度合いが問題となるが、ヤコウガイの蓋などは比較的法量が大きく、他の貝と異なり土中で容易に溶解するとは考え難い。また、大田原遺跡（1978）Ⅲ層では、比較的数量は少ないものの貝類が出土している（表 14）。出土している貝類にはリュウキュウサルボウやヒルギシジミも複数含まれており、貝製品が出土しないことを単純に土壌成分で理解するのは難しい。尖頭器などの道具の有無と同様に、貝製品の顕著な出土と言う点も、下田原貝塚の特異性として捉えることができる。

・動物遺存体の出土比較

以上のような人工遺物に加え動物遺存体を見てみると、全体的に貝類・魚類・イノシシの出土が目立つことがわかる（表 14）。相対的に石垣島の遺跡での貝類の出土が比較的少ないことが読み取れるが、これは土中の残存度合いも少なからず影響しているものと考えられる。但し、大田原遺跡（1978）では少ないながらも動物遺存体の出土が確認されており、大田原遺跡（1980）でも種数や数量報告は無いものの「これまでは皆無に近い状態のものが第 2 次調査で若干ながら出土」（石垣市教育委員会 1982：58）と述べられていることから、多少の出土は存在する。一方で、ピュウツタ遺跡では貝類・魚骨などは全く発見されておらず、「いわゆる「加工場」や「ゴミ捨て場」的な場所は、当該発掘地区とは別にあると推測される」（石垣島教育委員会 1997：98）と報告されている。

表 14. 下田原期における動物遺存体の出土状況

島名	遺跡名	層位	MINI	NISP								合計
				水生				陸生				
			貝類	魚類	哺乳類	甲殻類	カメ	鳥類	爬虫類	イノシシ	哺乳類	
多良間島	多良間添道遺跡	Ⅳ	175			1				20		196
		4	943	4						23		970
石垣島	ピュウツタ遺跡	Ⅲ										0
		Ⅴ										0
	大田原遺跡(1978)	Ⅰ		13								13
		Ⅱ		13	4					3	21	41
		Ⅲ	221	408	128					262	41	1060
		Ⅳ										0
	大田原遺跡(1980)＊	Ⅰ										0
		Ⅱ										0
		Ⅲ										0
	フーネ第一遺跡	西										0
		北										0
	白保竿根田原洞穴遺跡	Ⅲa	30＊	40			13	3	4	207	1	268
		Ⅲa-Ⅲb										0
		Ⅲb										0
		S	333＊	42		1	19		8	13		83
西表島	仲間第二貝塚	混貝	○							◎		0
	鹿川ウブドー遺跡	灰褐色土	○	○						○		0
波照間島	下田原貝塚(1954)	包含層一括	731	10						585		1326
	下田原貝塚(1959)	暗褐色土	○	○	○		○			◎		0
	下田原貝塚(1983-85)	Ⅱ	1488	327	69		209	130	2	7571	69	9865
		Ⅲ	2409	527	64		320	149	5	14453	64	17991
		Ⅳ	1320	37	6		22	2		251	6	1644
合計			7287	1421	271	2	583	284	19	23388	202	33457

＊:NISP換算のもの。　○:数量報告は無いが出土報告があるもの。　◎:数量報告は無いが、多量であると報告があるもの。

貝類:汽水域・鹹水域のものを含む。
魚類:全て海産のラグーン生息魚。
哺乳類(水生):ジュゴン・クジラ・イルカを含む。
甲殻類:カニ。
カメ:ウミガメ。
鳥類:アホウドリ、カラスが報告されるが、多くは種不明。
爬虫類:カエル・ヘビを含む。
イノシシ:イノシシ。
哺乳類(陸生):コウモリ、ネズミ。イノシシを除く。

石垣島の遺跡に比べ、動物遺存体の出土は下田原貝塚（全地点）で顕著で、貝類や魚類以外にもウミガメやイノシシの遺存体の出土も目立ち、イノシシの出土は西表島の仲間第二貝塚でも顕著であることが報告されている（西村ほか 1960）。全体的な出土状況（表 14）からは、いずれの島の遺跡でも、主に貝類・魚類・イノシシが利用されており、それを補う形でウミガメや爬虫類・鳥類が利用されていたことが確認できる。多良間島、波照間島には現在イノシシが生息していない為、当時の島間におけるイノシシの輸送や飼育の可能性が示唆されるが（e.g. 沖縄県教育委員会 1986 など）、イノシシは少なくとも更新世晩期頃から八重山諸島に生息していたことが確認されており[23]、現生しない島でも当時は生息していた可能性も残している。この点で、ベン・フィッツヒュー（2002）の「孤立した島嶼環境における陸獣が、大陸に比べて獲得しやすい」という指摘や、「島に移住した際にま

ず陸獣資源から開発する」とした指摘は、人とイノシシの関係と現在の生息状況に対して示唆的な意味を持っている。

魚類や貝類に関してはその種数や生息域にも注目することができるが、魚類に関してはいずれの遺跡でもブダイ科やフエフキダイ科が大半を占め、その他もベラ科やハリセンボン科などラグーンに生息する魚が大半を占める点は変わらない。下田原貝塚（1983-85）ではサメ目の出土が確認できるが、NISP（破片数）で 7%（n=69）程度に止まっている。

貝類に関しては遺跡間で貝種の変異が確認できる。比較的数量の出土している遺跡で見てみると、多良間添道遺跡では潮間帯に生息するイソハマグリが MINI（最少推定個体）で 88%[24]（n=986）と多数を占め、石垣島の大田原遺跡（1978）Ⅲ層ではリュウキュウサルボウやアラスジケマンガイなどの内湾生息の貝類が 76%（n=169）を占めている。多良間添道遺跡は砂丘地にある遺跡で、大田原遺跡も内湾地形の名蔵湾が眼前に広がっていることから、遺跡で出土する貝種も遺跡の立地環境を反映していると言える。西表島の仲間第二貝塚では数量の報告は無いが、ヒメジャコ、イシカケガイ、ヒルギシジミの出土が目立つことが報告されている（西村ほか 1960）。仲間第二貝塚は仲間川と海の境目に立地しており、サンゴ礁に生息するヒメジャコ、砂地に生息するイシカケガイ、汽水域[25]に生息するヒルギシジミは、やはり遺跡の立地環境を反映していると言える。波照間島の下田原貝塚に関しては、下田原貝塚（1954）でヒレジャコが 24%（n=179）、リュウキュウバカガイが 15%（n=106）、サラサバテイが 10%（n=71）を占めており、その他もヒメジャコやオニノツノガイなどサンゴ礁に生息する貝類が多い。特筆すべきはシャコガイやヤコウガイなどの大型の貝類が多い点（40%：n=296）である。波照間島はラグーンが比較的小規模で、リーフエッジの外側は急に深くなる地形を示す。リーフエッジに生息するシャコガイ科（ヒレジャコ・ヒメジャコ・シラナミ等）や、その外側の斜面に生息するヤコウガイが多い点は、このような海岸環境を示していると考えられる。これと同様に下田原貝塚（1983-85）でも、シラナミガイがⅣ層で 31%（n=422）、Ⅲ層で 14%（n=347）、Ⅱ層で 4%（n=66）を占めており、波照間島ではシャコガイ科が豊富であったことが伺える。一方で、下田原貝塚（1983-85）ではヒルギシジミがⅣ層で 36%（n=474）、Ⅱ層で 20%（n=298）を占めるなど、汽水域の貝類の割合も多い。同遺跡はイノシシの遺存体も多く、比較的陸寄りの食糧資源獲得も読み取ることができる。

4. 下田原期の文化内容と時空間変異の整理

ここまでの作業では土器と遺跡間の属性比較から、下田原期における遺跡間の変異を抽出した。これを受けて、本項ではこれを基に下田原期の文化内容を整理し、その時空間的な変異や変化のプロセスを検証することとしたい。

・下田原期の生活様式と遺跡を捉える枠組み

まず、下田原期の物質文化に関して整理してみたい。全ての遺跡を通して確認できるのは、下田原期の人々が食糧生産を軸とした社会ではなく、食糧獲得を軸とした社会であるということである。この点は人工遺物（道具）に明確な農耕具が無いという点や、農耕に伴う遺構や定住を示すような構造的な住居の痕跡が確認できないという点、動物遺存体に明確な家畜（馬や牛など）が確認できないという点から読み取ることができる。また、遺跡間における多量の土器の交換や分配・供給なども確認できず、動物遺存体からみる食糧獲得も、集積・貯蔵・分配と言ったシステムは確認できない。基本的には周辺で獲得でき

るものを利用し、その場（遺跡）で使い切るという生活様式であったと考えられる。

食糧生産手段を持たない食糧獲得社会では、一定期間同じ場所に留まると周辺の食糧資源を取り尽くしてしまうため、一定期間を挟んで移動を繰り返すことが生存に有利に働く。遺跡からは各遺跡に人々が定住し、各々がネットワークで結ばれるという関係は読み取れず、下田原期では一定期間の短期的居住と移動の繰り返しによって遺跡が形成されたと考えることができる。ピュウツタ遺跡のⅤ層とⅢ層の層位関係はこのような「繰り返しの利用」を示すものとして挙げることができる。

また、大田原遺跡（1978・1980）の立地する名蔵湾周辺地域は、表採の遺跡も含めて遺跡が集中する傾向を示しており、波照間島の下田原貝塚は、複数地点で遺跡が確認されるとともに、1983-85 年調査地点では複数の遺物包含層が確認できる。これは短期的居住と移動を繰り返す生活様式の中においても、一定の地域には複数回戻るという回遊的な動きをしていた可能性を示している。L. R. Binford（1980）は、採集狩猟社会において居住拠点（residential base）を定めてそこへ資源を持ち帰る「Collector」と、資源獲得に合わせて居住拠点そのものを移動させていく「Forager」という類型を提示しているが[26]、下田原期の人々は Forager に近い生活様式を採用していたものと捉えることができるだろう。

生態資源利用の視点から見てみると、いずれの遺跡においても普遍的に出土する道具である土器と石器の素材獲得において、石垣島周辺とアクセスことが不可欠であったことが読み取れる。石材に関しては、深成岩は石垣島中央部の於茂登岳、変成岩は石垣島の北部・中央部・西部・東部の一部、小浜島北部・西表島東北部の一部と、限られた地域にしか産出しない。石垣島・西表島の遺跡に関しては生存に不可欠な水資源が確保できる河川の近くに遺跡が立地するが、この様な場所は石器製作に適当な円礫にも恵まれた環境であった考えられる。遺跡が集中する石垣島の名蔵湾周辺域は、深成岩産地の於茂登岳、変成岩産地の石垣島西部の崎枝半島ともアクセスが容易で、ピュウツタ遺跡は於茂登岳の付近、白保竿根田原洞穴遺跡は石垣島西部の変成岩産地である嘉良嶽（からだけ）のすぐ近くに立地する。深成岩産地のみ於茂登岳に限られることから、於茂登岳に近い名蔵湾周辺域には高頻度のアクセスが存在し、それが遺跡の集中に反映されているものと考えられる。

一方で、石材が産出しない多良間島や波照間島では、一部の道具においてサンゴ石灰岩や貝類・獣骨等による素材の置換が確認できる。しかし、石斧に関しては素材の置換が行われずに石垣島の石材利用を継続しており、土器も同様に石垣島に産出する粘土を利用していた。これは、下田原期の人々が多良間島や波照間島のような石材や土器粘土が産出しない島では、道具材利用の工夫が行われる一方で、その島のみでは継続的に生活することが難しかったことを示している。

このように、下田原期の遺跡は、土器・石器を中心とした道具利用と、食緑獲得社会における短期的居住と、土器粘土・石材産地との間における移動の繰り返しというセトルメント・パターン（枠組み）で理解することができる。しかしながら、遺跡の属性の比較からみると、下田原期の遺跡の中で特異性を有する遺跡を抽出することができる。それが下田原貝塚の存在であり、これに関しては時間軸・空間軸上の位置付けにと言う視点で考える必要がある。

・下田原貝塚の特異性と時間軸上の位置付け

遺跡間における属性比較によって示したように、下田原貝塚（1954・1983-85）はイノシシなどの哺乳類骨牙を用いた製品、貝製品において、他の遺跡とは明確に異なる特徴を示している。また、石器に関しても複数方向からの研磨によって鑿状・錐状の尖端部を作り出す尖頭器を製作・利用する点が他の遺跡と異なっている。これと同様の製品はイノシシ骨牙やソデボラ科貝類を利用した製品にも確認することができ、これとセットになる可能性がある回転穿孔痕を残す貝製品も出土している。更に現時点ではその可能性を確定できないものの、ヤコウガイの蓋や二枚貝の縁辺部を打ち欠いた製品がスクレイパーの用途を持つ場合は、それらの道具の器種・用途に関しても特異性を有するということになる。下田原貝塚（1959）に関してはデータが少ないが、下田原貝塚（1954）と下田原貝塚（1983-85）に関してはこの特徴を共有している。また、下田原貝塚（1983-85）に関しては、土器の口縁形態の比較から、石垣島にはないタイプを確認することができる。この下田原貝塚の特徴は、石垣島に立地する遺跡とは異なる点が多い。

石垣島の遺跡では、土器の紋様に関してピュウツタ遺跡と大田原遺跡（1978）で線紋系から爪形紋・連点紋系へと変化する傾向を確認することができる。これは岸本（2004a）の提示した変化と一致するが、下田原期のセトルメントの形と併せて考えると、各遺跡を時間的序列に当てはめるのではなく、ピュウツタ遺跡のように利用・移動を繰り返す中で、石垣島の遺跡の中で土器が変化していくプロセスとして捉えることができる。但し、口縁形態は基本的に共通のバリエーションを保持している。多良間島の多良間添道遺跡も紋様・器形は石垣島の遺跡のグループと類似している。

一方で、下田原貝塚の土器における有紋土器は下田原貝塚（1983-85）Ⅳ層の 1 点に限られる。岸本（同前）はこれを無紋化とし、下田原貝塚を下田原期の最後期に位置づけている。安易には採用し難いが、^{14}C 年代では最も新しい年代が提示されており、最古年代を示すピュウツタ遺跡の土器と比較しても、紋様・口縁形態は異なる点が複数確認できる。

下田原貝塚（1954・1983-85）は石垣島産出の石材を利用した石器利用を中心としつつ、より近い西表島に産出する石材も利用し、敲打用途に関しては波照間島で獲得できる貝類への素材置換が見られる。これは同じ環境の多良間島でも確認できるもので、環境に適応した工夫であると捉えることができるだろう。これらは、石垣島の石材中心の道具製作・利用から、多良間島・波照間島における遺跡の物質文化が展開したことを示しており、両島の遺跡で石垣島産粘土の土器が利用されている点もそれを支持している。また、鑿状・錐状尖端を有する道具と回転穿孔が、下田原貝塚（1954・1983-85）以外で確認できない点は、下田原貝塚を最初期に位置づける上では理解が難しい。石垣島に遺跡を残した人々から下田原貝塚（1954・1983-85）のグループが分岐し、資源利用の工夫や鑿状・錐状尖端を有する道具と回転穿孔が追加されたと考える方がより妥当性を有している。

以上のことを踏まえると、岸本（2004a）が位置づけるように、ピュウツタ遺跡Ⅴ層を古段階とし、下田原貝塚を新段階とする点は支持することができる。しかし、各々の遺跡はその遺跡だけで完結しているわけでは無く、特に下田原貝塚は土器・石器から石垣島などの他の島とアクセスしていたことが確認できる。このことから、下田原期における古段階と新段階という時間差は、ピュウツタ遺跡や大田原遺跡などを中心とした回遊的な動き（古段階）と、下田原貝塚を中心とした回遊的な動き（新段階）の時間差として捉えることが

できる（図 33)。ここで提示した古段階は、岸本編年（岸本 2004a）の有紋段階（線紋系・爪型押紋系/連点紋系を含む）と伊藤編年（伊藤 2006）の第 1 期・2 期に相当し、新段階は岸本編年の無紋段階、伊藤編年の第 3 期に相当する。古段階にはピュウツタ遺跡・大田原遺跡（全地点)・白保竿根田原洞穴遺跡、フーネ第一遺跡などの石垣島の遺跡に加え、多良間島の多良間添道遺跡が含まれる。古段階の中でも土器紋様で更に二段階に細分ができる可能性があり、大田原遺跡（1978）の層位的出土状況で追認した岸本の編年試案（岸本 2004a）に従えば、ピュウツタ遺跡Ⅴ層や大田原遺跡（1978）Ⅲ層は古段階の比較的古く、ピュウツタ遺跡Ⅲ層や大田原遺跡（1978)、多良間添道遺跡Ⅳ層、白保竿根田原洞穴Ⅲａ層などが新しい位置にくることになる。ただし、あくまでも現資料に基づく位置づけである。

一方、新段階には波照間島の下田原貝塚（1954・1983-85）が含まれる。西表島の遺跡に関しては、出土資料が少ないことから分類が難しいが、現時点では下田原貝塚に見られるような特異性が確認できないため、古段階に近いと考えられる。但し、仲間第二貝塚に関しては有紋の土器が確認されておらず、下田原貝塚の土器との類似が指摘されていることから（西村ほか 1960)、古段階に関連する可能性は有している。

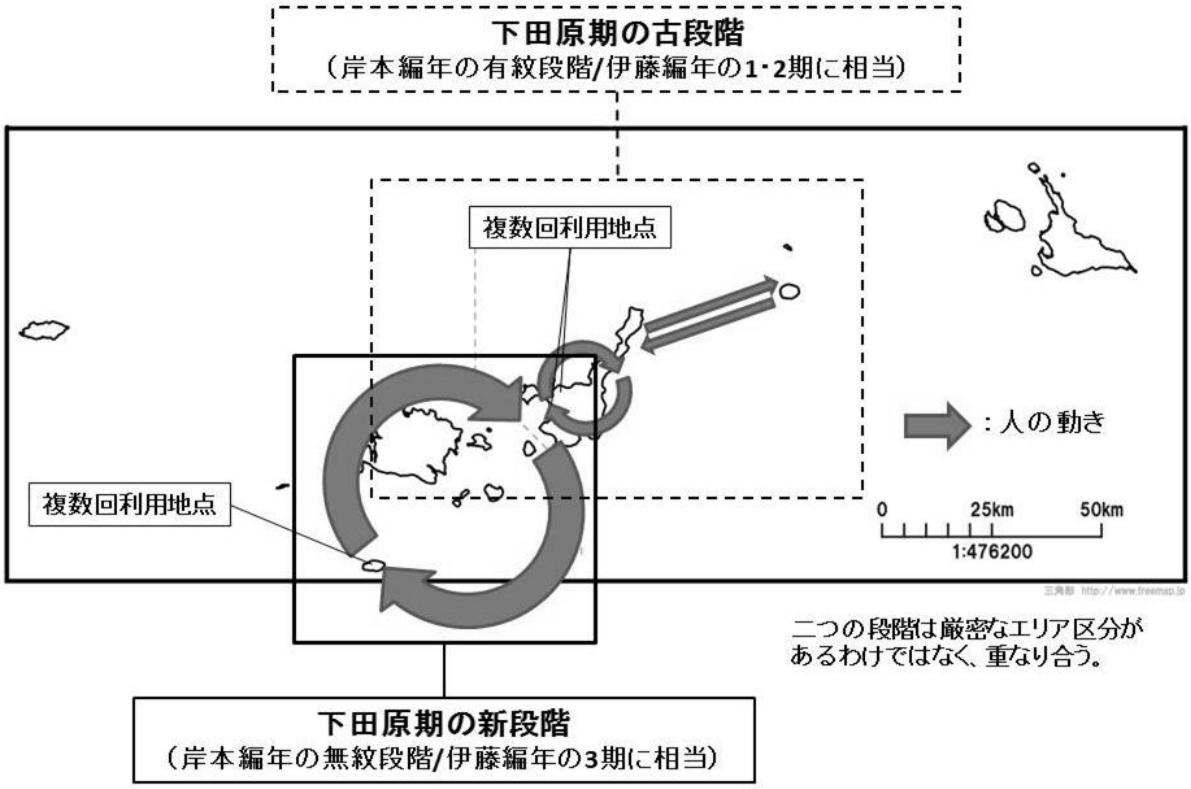


図 33. 下田原期における人の動きと時期区分

加えて、生態資源利用の戦略という視点でとらえてみると、多良間添道遺跡や下田原貝塚（1954・1983-85）における人類活動は、石垣島などの土器粘土や石材産地からは比較的離れたサンゴ島に居住するという環境条件の変化と、道具素材を石材からサンゴ島由来の素材へ置換するという工夫が確認できる。この点から見ると、多良間添道遺跡や下田原貝塚（1954・1983-85）は宮古・八重山諸島の中でも環境の異なる島への文化的に適応しようとする試みが行われた段階と捉えることが可能で、道具のバリエーションやサンゴ島

由来素材の顕著な利用という点からは、特に下田原貝塚（1954・1983-85）が位置付けられる新段階において発展したと考えることができる。下田原貝塚の特異性に関しては、周辺地域との関係も含めて検証する必要があるが、下田原期における古段階から新段階への変化は､すなわち石垣島を中心とした生活と資源利用というセトルメント･パターンから、より離れたサンゴ島への活動域を拡大したセトルメント・パターンへの変化という方向性を持っていたものと結論付けることができる（図 34)。

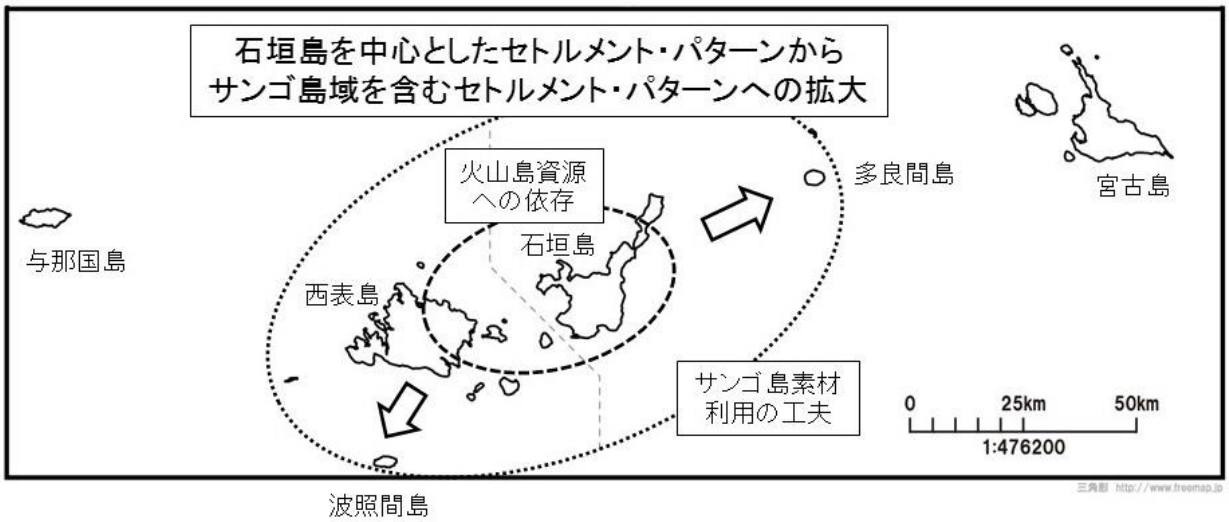


図 34. 下田原期におけるセトルメント・パターンの変化

また、本論で新段階に位置づけた下田原貝塚（1983-85）に関しては、その特異性を有する遺跡属性が、土器が出土しない与那国島のトゥグル浜遺跡と共通する点が多い（安里 2003a、山極 2014)。与那国島は主な石器石材が産出しない島で、トゥグル浜遺跡では貝類の道具材への利用も確認されていることから、下田原貝塚に見られるようなサンゴ島域への生活域の拡大という方向性とも合致する。しかし、トゥグル浜遺跡では現時点で土器が出土しておらず､「無土器」という性格を有している。そこでこの点に関しては、次章における無土器期における文化内容と時間軸の整理と、無土器期と下田原期の比較と併せて検証し、その関係や位置付けを結論付けることとしたい。

---

[1] 本文中での遺跡名の表記は、遺跡名＋調査年で記載する（e.g. 1978 年調査の大田原遺跡＝大田原遺跡（1978))。

[2] 年代の表記方法は報告書に従う。同層位で複数の年代値を示すものは、同層における他の年代値と極端に異ならない限り最も新しい値を採用した。暦年較正年代は基本的に信頼水準が最も高い 2σ を採用し、1σ しか示されていないものは(1σ)、σ の区別ないものは(*)を付して表記した。

[3] 名島弥生（2014）は、測定資料や測定法、暦年較正年代の有無から、年代値における信頼性の序列化を示している。本論ではこのような指摘を踏まえつつも、各遺跡や層位の大まかな年代観を示すものとして、報告書にて報告された年代値を一覧として提示した。

[4] ピュウツタ遺跡のⅢ層とⅤ層では逆転した年代（下層の方が新しい年代を示す）が提示

されている。Ⅲ層・Ⅴ層の堆積状況は未攪乱とされていることから（石垣市教育委員会 1997)、層位学的な視点ではⅤ層がⅢ層よりも古くなる。炭化物は土中に堆積する以前に炭化していた場合、その土層の年代より古い年代を示している可能性もあり、層位的な関係から見てもⅤ層の年代をそのまま採用することはできない。この為、現時点ではⅢ層の年代を参考的な年代として採用せざるを得ない。

[5] 大田原遺跡のⅥ層・Ⅷ層では、その上に堆積するとされるⅢ層より新しい年代が示されている。但し、報告書の層位図（沖縄県教育委員会 1980）では 37 ライン以外ではⅥ層・Ⅷ層は示されておらず、鑑定資料の炭化物やシャコガイがどの地点から出土したかは明記されていない。37 ラインは神田貝塚の遺物包含層と大田原遺跡の包含層が重なり合う地点ではあるが、大田原遺跡と報告されている炭化物が採取されたⅥ層・Ⅷ層がどちらに帰属するかは報告書からは読み取れない。報告書内では、この複数の年代に関して「無土器の遺跡よりは古い」とする一方で、「(年代の）この差は、貝殻と木炭という試料の違いによるのか明らかではない」としており、曖昧な部分を残している（同前：41)。
　また白保竿根田原洞穴遺跡のⅢa 層では最古は 9158±31BP（暦年較正 10450-10239BP（イノシシ）（括弧内は測定対象資料））から 3734±24BP（イノシシ)、2179±73BP（イモガイ）などの複数の年代値が示されており、最も新しい年代値は 1764±38BP（暦年較正 1810-1570BP（木炭））と、バラつきが大きい。単純な年代で見ればⅢa 層の中に更新世晩期から無土器期までの年代幅があるということになってしまう為、帰属年代が判然としない。しかし、Ⅲa-Ⅲb 層で約 3700BP（暦年較正約 4200BP（イノシシ））が示されている為、それに近いか或いはそれより新しい年代である可能性が高い。

[6] この爪形押紋は沖縄諸島の土器における爪形文とは異なり、爪先を押し当てて弧状の模様を列状に並べるものである。

[7] 但し、大田原遺跡の 1980 年調査地点は全体的に攪乱を受けており、本来の層序ではない可能性が指摘されている（石垣市教育委員会 1982)。

[8] 大田原遺跡の発掘調査報告書（沖縄県教育委員会 1978・石垣市教育委員会 1980)、下田原貝塚の発掘調査報告書（沖縄県教育委員会 1986）では、土器が口縁器形分類毎に掲載されており、層位別の土器の報告がなされていない。下田原貝塚の報告書に関しては、観察記録の項目から、各土器資料の帰属層位を確認することが可能ではあるが、大田原遺跡（沖縄県教育委員会 1978）に関してはそれも困難である為、土器資料に直接記載された注記を確認する以外に方法が無い。

[9] これら 3 つの類型に見られるバリエーションは、ピュウツタ遺跡（石垣市教育委員会 1997)・下田原貝塚（1983-85)（沖縄県教育委員会 1985）の報告書でも認識されており、大田原遺跡（1978)（沖縄県教育委員会 1980）の報告ではピュウツタ遺跡や下田原貝塚の分類基準とは異なるものの、前述の口縁形態は分類に反映されている。報告書では各々より細かい基準を設けてはいるが、口縁形態の傾きなど観察者の視点によっては見解に相違があるものも多い 。また、分類基準も各遺跡で報告された資料の分類に止まっており、時間的な変異などには言及されていない。そこで本論では、下田原期の遺跡全体の土器に比較的客観的に認識できる口縁バリエーションとして類型を提示した。

[10] 石垣島のフーネ第一遺跡、西表島の仲間第二貝塚・鹿川ウブドー遺跡に関しては、土器の出土報告があるものの、遺物の形態や詳細の報告が無く、現時点では検証ができない。

[11] 土器を置き火において繰り返し使用した場合、土器の口縁部の内外面には温度の高い火が回り込む為、顕著に黒ずむなどの痕跡が残り、煮炊きをした場合には吹きこぼれ痕な

どが外面に付着する（小林正 1999）。

[12] 底部内面のコゲは、煮炊きに伴う「カラ炊き」時に顕著に付着するとされる（小林正 1999）。

[13] 井上イリーナ（2015）は特に名蔵湾沿岸の遺跡（大田原遺跡、平地原遺跡）の立地環境に関して、動物遺存体やマイクロアトールサンプルの分析から、当時がマングローブ植生を伴う湿地帯環境であったことを示している。

[14] 本来は木製の柄とセットになった道具である可能性も考えられるが、木製品は土中の残存が悪く、現時点では 1 点も確認されていない。

[15] 遺跡によっては「石杵」とも報告される（石垣市教育委員会 1982）が、意味する所は同じである。

[16] 遺跡の報告書によっては石針、尖頭器、鑿状製品、石製ドリル等と呼称される（沖縄県教育委員会 1985・1986）。この石器は石斧に比べると比較的小型で、形態が多様であるが、複数方向からの研磨によって尖端部や鑿状の刃部を作り出す点は共通している。本論では便宜上尖頭器と呼称することとする。

[17] 小浜島の北部に位置する嘉弥真（かやま）島を含む。

[18] 下田原貝塚（1983-85）出土の石斧に関しては閃緑岩と報告される石器が多い。閃緑岩は深成岩であることから、石垣島との強い関わりが考えられるが、実際に石器を観察してみると閃緑岩と報告されて石斧にも変成岩に類似した石材が複数確認できる。この点は石材の鑑定者が報告書によって異なることに起因している。また石器は表面が風化している為、石材の判定は肉眼では難しいという問題も抱えている。このことから、表 12 で示した下田原貝塚（1983-85）の産出石材は、数値ほど極端に石垣島に依存してはいなかった可能性が有る。西表島の東北部でも変成岩が産出することから、深成岩の幾つかは変成岩である可能性が考えられる。また同様の事例として、斑糲岩の存在がある。斑糲岩は深成岩であるが、木崎甲子郎（1985）によれば、トムル層では変性斑糲岩が産出する。そのため、斑糲岩と報告された石材に関しても変性斑糲岩である可能性が考えられる。しかしながら、花崗岩の石器も出土していることから、石垣島から石材や石器が運ばれたことは間違いがなく、下田原貝塚を形成した人々は石垣島とのアクセスしていたことが読み取れる。

[19] 変成岩は打撃によって一定方向に剥離し易く、成形しやすい。一方で花崗岩や堆積岩・石灰岩は任意の成形が難しい。また、刃部の形成も難しく、堆積岩は強度が比較的脆い為、斧刃としての利用には向いていない。

[20] この土壌特質はしばしば指摘されることがあるが、実際に層の土壌を比較分析したデータは示されておらず、単純に土層の包含層を有する遺跡と、砂層の包含層を有する遺跡と言う対比で語られるにとどまっている。

[21] 報告書や概説書ではスイジガイ製利器・クモガイ製利器と呼称されることが多い。

[22] 家田や島袋による一連の研究（家田 1983・1998、島袋春 1997・2003a・2003b・2004）は、民俗学的視点と考古学的な視点の両面から有孔貝製品と貝錘の関係を検証しており、シャコガイを用いた有孔貝製品で表面の水磨、穿孔した孔の周縁の調整などの条件を満たしたものに関しては、貝錘である可能性が高いものとして分類している。

[23] 白保竿根田原洞穴遺跡では、下田原期よりも下層や、古い年代を示す層位からイノシシの遺存体が出土している（沖縄県立埋蔵文化財センター2013)。

[24] 小数点以下は四捨五入して表示する。

[25] 淡水と海水が混ざり合う境界域。マングローブ林などが群生する。

[26] R. Binford（1980）は、セトルメント・生業・資源獲得を総合的に settlement=subsistence system という視点に集約し、採集狩猟民のシステムに二つの類型（forger と collector）を提示している。Forager では、基本的に貯蔵は行わず、資源を獲得したら residential base（居住ベース）まで帰還する。Binford はサンの事例などから、資源獲得によってこのような residential base の頻繁な移動と、更に離合集散による集団規模の拡大縮小を特徴として挙げており、これは資源分布に依存する。

一方、collector では、少なくとも 1 年の特定の時期に食糧の貯蔵が行われ、遠隔地における資源獲得の為の Task group が編成され、residential base に資源が持ち帰られる。この為、Residential base の移動は forger に比べて少ない。但し、小川（2001）は羽生淳子（1990）の例を引きつつ、Binford の forger と collector が必ずしも対極的な狩猟採集民の 2 類型ではなく、「フォーレジャーとコレクターの 2 つの戦略においては、集団そのものを資源の所在地に移動させるマップ・オンと、タスク・グループによるロジスティックなシステムが程度の差こそあれ複合的に用いられ、両者の差異が漸移的なものであることを説明している。」（小川 2001：21）としている。

第 4 章　無土器期の文化内容と時空間変異の整理

本章では、下田原期の分析に引き続き、無土器期の時空間的な整理を行うこととする。無土器期の遺跡は宮古・八重山諸島の複数の島に分布する。本論では、発掘調査・報告の行われた無土器期の 20 遺跡[1]に、下田原期・無土器期のどちらの時期に属するのか評価が曖昧なトゥグル浜遺跡[2]を加えた計 21 遺跡を分析の対象とした（図 35）。各々の遺跡のデータは、報告書・文献[3]に準拠する。また、複数回発掘調査が行われている遺跡は、下田原期と同様に調査年ごとに分類し、出土層位は報告書の表記に従う。

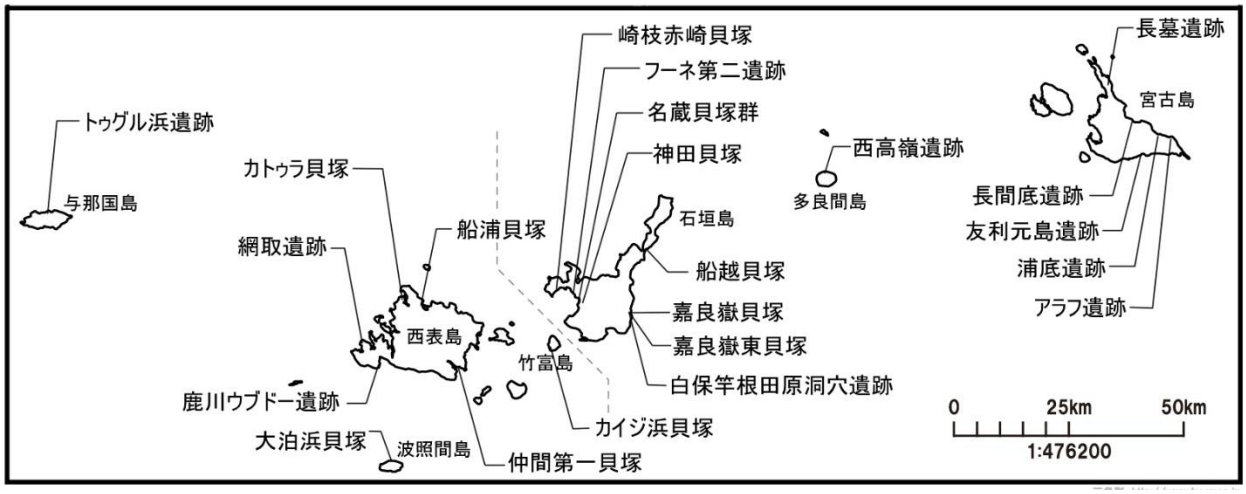


図 35. 無土器期の分析対象遺跡の立地（MAPAC 白地図を基に作成）

1. 放射性炭素年代による年代観の整理

遺跡の比較に入る前提として、各遺跡の年代的な位置づけを整理しておく。発掘調査が行われた無土器期遺跡では放射性炭素年代値（^{14}C 年代値）が示されている（表 15）[4]。

^{14}C 年代値以外では、石斧の細かい分類案が示されているが編年化にまでは至っておらず[5]、現時点では ^{14}C 年代値が遺跡年代の基準となっている。下田原期と同様に ^{14}C 年代値は測定資料や測定方法による年代値のバラつきが生じることから幅を持った年代指標として捉える必要があるが、下田原期と比べて年代値が測定されている遺跡が多く、年代観を捉える上では指標となるデータに恵まれている。

現時点では ^{14}C 年代値を基にした遺跡の時間軸上における詳細な時間軸上の位置づけは困難であるものの、年代値の全体的な相対関係を見ると（表 15）、トゥグル浜遺跡を除く八重山列島の遺跡に比べて宮古島の遺跡が古い年代を示す傾向にあることが読み取れる。しかしながら、宮古島の長墓（ながばか）遺跡（T1-3 層）は AD572-646 年の年代値、友利元島（ともりもとじま）遺跡（15 層）は AD674-776 年の年代値を示しており、アラフ遺跡（Ⅲ層）は AD10-120 年の年代値を示すものの、上層（Ⅱ層）から後続する時期のものと考えられる土器が出土することから（アラフ遺跡発掘調査団 2003）、11 世紀に近い時期まで時間幅をもつ可能性が高い。これらは、八重山列島に遺跡が確認される時期に、宮古島でも遺跡が形成されるような人類活動が存在したことと、それが無土器期の終末期まで継続したことを示している。また、八重山列島の崎枝赤崎（さきえだあかさき）貝塚（Ⅱ層直上）では開元通寶（かいげんつうほう）が出土するが、これは下限年代が特定できる為[6]、その層位或いは上層を古くとも AD621 年以降に位置づけることができる。

表 15. 報告書に基づく無土器期遺跡の ^{14}C 年代値一覧

島名	遺跡名	層位	C14年代値(測定資料)	暦年較正年代(2σ)
宮古島	長墓遺跡	T1-2層	1922±22BP(イノシシ)	AD 48-129
		T1-3層	1452±20BP(人骨)	AD 572-646
		T1-4層	3080±30BP(木炭)	cal BC1228-1222
		T1-7層	4038±27BP(チョウセンササ゛エ)	BC 2209-2004
	アラフ遺跡	Ⅲ層	1920±40BP(炭化物)	AD 10-120
		Ⅴb層	2220±40BP(炭化物)	cal BC 385-180
		Ⅴc層	2310±40BP(炭化物)	cal BC 410-360, 280-240
		Ⅶ層	2760±40BP(炭化物)	BC1000-820
	浦底遺跡	Ⅲ層	1880±75BP(不明)	
		Ⅳ層	2340±75BP(不明)	
	友利元島遺跡	15層	1270±22BP(炭化物)	cal AD674-776
多良間島	西高嶺遺跡	4層	2420(+600,-560)BP(炭化材)	
		6層	2170±210BP(炭化材)	
		10層	2940±180BP(チョウセンササ゛エ)	
石垣島	名蔵貝塚群(1978)	2地点(Ⅱ層)	920±75BP(不明)	
	神田貝塚	Ⅲ層	1270±80BP(木炭)	
		Ⅳ層	940±65BP(シャコガ゛イ)	
	嘉良嶽東貝塚	4層	1550±30BP(チョウセンササ゛エ)	cal AD758-937
	白保竿根田原洞穴遺跡	ⅢA層	1764±38BP(木炭)	1810-1570BP
		S層	3970±30BP(ヒト)	4524-4299BP
		X層	1925±22BP(木炭)	1924-1822
竹富島	カイジ浜貝塚	3層(0-2区)	870±75BP(シャコ゛ウ)	
		4a層(0-2区)	1360±140BP(木炭)	
		4b層(0-2区)	1480±75BP(シラナミ)	
西表島	船浦貝塚	Ⅲ層	1330±70BP(shell)	AD620±50(670±50)*
		Ⅳ層	1400±70BP(shell)	AD550±70(510-660±70)*
	カトゥラ貝塚	A-1層	1410±40(イノシシ歯)	
		B-1層	1470±40(二枚貝)	
	網取遺跡	Ⅲ層(D)	1540±40BP(イノシシ?)	cal AD591-596(1σ)
		3-B層(F2)	1590±40BP(獣骨)	cal AD480-531(1σ)
		11層(L)	2010±40BP(貝)	cal AD270-460
波照間島	大泊浜貝塚	6層	1350±75BP(木炭)	
		10層	1770±70BP(木炭)	
		11層	1560±70BP(木炭)	
与那国島	トゥグル浜遺跡	遺物包含層	4297±29BP(ナカ゛ジャコカ゛イ)	cal BP4410*

2. 属性分析から見た遺跡間の変異

・遺跡間における立地環境の比較

無土器期の遺跡は、北は宮古島から南は波照間島まで分布するが、地理的に宮古島と重山列島間の距離が離れており、与那国島も西表島とは約 60 ㎞の距離がある。本論 1 章でも触れたが[7]、地質学的には石垣島と西表島以外は基本的に隆起サンゴや堆積岩の島で、石垣・西表島に比べ水資源が得難く、植物や石材資源に乏しい環境を示す。

無土器期の遺跡は、一般的に海岸砂丘地に立地することが知られているが、具体的な立地環境は一様ではない。石垣島と西表島の間には広範囲のサンゴ礁（石西礁湖）が広がるが、遺跡が比較的集中する石垣島西部の名蔵湾は内湾の海岸地形を示し[8]、西表島西部や波照間島・与那国島は比較的礁湖の範囲が狭く、リーフエッジの外側が急峻な海岸地形を示している。また、石垣島西部の神田貝塚や東部の白保竿根田原洞穴遺跡、宮古島の長墓遺跡は比較的内陸に位置しており[9]、仲間第一貝塚やカトゥラ貝塚は大きな河川に隣接、嘉良嶽東貝塚は土層から当時湿地帯であった可能性が高い（図 36）。神田貝塚は下田原期の大田原遺跡と隣接し、白保竿根田原洞穴遺跡は下田原期の層位の上層に無土器期の層位が位置しているが、下田原期に比べこの時期は海水面が現在に近い状況まで低下しており、より内陸的な立地環境になっていたと考えられる。

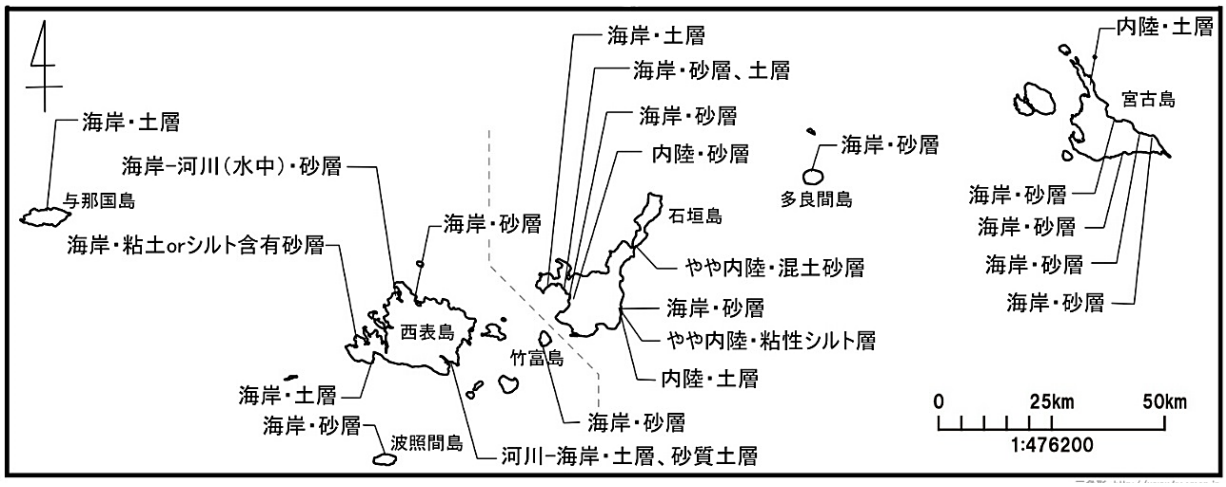


図 36. 遺跡の立地と遺物包含層の土質
（土層は報告書に基づく。複数の土層が表記されている遺跡は、複数回発掘された遺跡の土層を示す。地図は MAPAC 白地図に基づく）。

宮古島では東海岸部に遺跡が多く、長間底（ながまずく）遺跡、浦底（うらそこ）遺跡、アラフ遺跡は急峻な石灰岩台地の裾と、海に挟まれた砂丘後背地に立地する。このような地域は湧水を通して水資源が確保しやすく、友利元島遺跡の立地する南部海岸も湧水に恵まれた地域である。水資源との関わりは八重山列島の遺跡でも確認でき、多くの遺跡は現在の環境から見ても河川や洞穴水流と隣接した立地であることが確認できる。

遺跡の立地環境からは、当時の人々の主な活動の場が海岸から海にかけての範囲であり、水資源の確保が重要であったことが読み取れるが、地域的な纏まりや時間的な変化は読み取れない。むしろ活動領域と最低限の生存条件に合致すれば、異なる生態環境にも柔軟に適応したものと考えられる。この点は、後述する動物資源からも確認することができる。

・遺跡間における堆積層位の比較

続いて、各々の層位関係を読み解いてみる。下田原期のピュウツタ遺跡で確認された無遺物層を間に挟み込むⅢ層とⅤ層の関係が確認されたが[10]、無土器期でも宮古島ではアラフ遺跡のⅢ層−Ⅳb 層、Ⅳc 層-Ⅴb 層間で（アラフ遺跡発掘調査団 2003）、波照間島では大泊浜貝塚の 6 層-9 層、14 層-17 層間で（沖縄県教育委員会 1986）、無遺物の堆積層が確認されている。下田原期と同様に、これらの遺跡は繰り返し利用された可能性が高い。

また、複数の遺物包含層で構成される遺跡も多く、宮古島では長墓遺跡・アラフ遺跡・浦底遺跡が該当し、八重山列島では石垣島の崎枝赤崎貝塚、神田貝塚、竹富島のカイジ浜貝塚、西表島の仲間第二貝塚（1959）、船浦貝塚、カトゥラ貝塚、網取遺跡、波照間島の大泊浜貝塚、与那国島のトゥグル浜遺跡が該当する。これらの遺跡は、各遺跡の層位間で時期差が存在するということになる。

遺跡の分布と言う点では、下田原期に遺跡の集中が見られた名蔵湾周辺域で、無土器期の遺跡が比較的集中している様子が確認できる。特に名蔵貝塚群はⅠ-Ⅴ地点のスポット状に点在する貝塚群で、各地点を 1 遺跡とすると、多くの遺跡が集中していると読み取れる。一方で、下田原期には確認できなかった西表島の西部や与那国島、宮古島へも遺跡の分布

は拡大しており、宮古島の中では複数の遺物包含層を有する遺跡や、繰り返し利用したと考えられる遺跡など、宮古島の中で継続した人間活動を伺わせる遺跡を確認することができる。

・遺跡間における遺構の比較

無土器期遺跡で確認できる遺構は、火焼痕（炉跡・炭化面・炭化物集中部）、ピット、柱穴、大型貝類集積、礫敷き、溝状遺構、集石遺構[11]、方形配列の柱穴遺構[12]、竪穴遺構[13]が確認されている(表 16)[14 15]。遺構の種類はバラつきが多く、纏まりを確認し難いが、集石遺構は宮古島の遺跡に検出例が多く、竪穴遺構も宮古島のアラフ遺跡にしか確認されていない。反対に、方形に配列された柱穴痕跡は八重山列島の遺跡でのみ確認されており、宮古島と八重山列島という地理的な纏まりで違いを示している。

表 16. 無土器期遺跡の検出遺構

島名	遺跡名	層位	火焼痕	集石	貝集積	溝状	ピット	柱穴(様)	配列柱穴	礫敷	竪穴
宮古島	長墓遺跡	T2-2層					○				
		T1-3層					○				
		T1-3～4a層					○				
	アラフ遺跡	Ⅲ層		○							
		Ⅲ層下面		○							
		Ⅳb層			○						
		Ⅳc層	○	○							
		Ⅴb層	○				○				○
		Ⅴc層		○							○
	浦底遺跡	Ⅲ層orⅣ層	○	○							
	長間底遺跡	－									
	友利元島遺跡	15層		○			○				
多良間島	西高嶺遺跡	4層	○								
		10層	○								
石垣島	船越貝塚	3層						○			
	崎枝赤崎貝塚	Ⅱ層									
	フーネ第二遺跡	－									
	名蔵貝塚群(1978)	2地点(層位不明)	○			○					
	名蔵貝塚群(1980)	Ⅴ地点A地区				○	○		○		
		Ⅴ地点B地区					○				
		Ⅴ地点C地区					○				
		Ⅱ地点					○				
	名蔵貝塚群(1984)	－									
	神田貝塚	－									
	嘉良嶽貝塚	－									
	嘉良嶽東貝塚	－									
	白保竿根田原洞穴遺跡	ⅢA1層(S1-S3層)	○								
竹富島	カイジ浜貝塚	3層(0-2区)	○								
		3層-4a層(0-2区)		○							
		4b層(0-2区)							○		
西表島	仲間第一貝塚(1959)	－									
	仲間第一貝塚(1989)	－									
	船浦貝塚	Ⅱ層	○								
	カトゥラ貝塚	－									
	網取遺跡	2b層(D1)			○						
		3a-3b層(F2)			○						
	鹿川ウブドー遺跡	－									
波照間島	大泊浜貝塚	6層	○					○			
		10層	○					○	○	○	
		11層	○								
与那国島	トゥグル浜遺跡	層位不明					○				

方形配列柱穴の遺構と竪穴遺構は、いずれも炉跡や灰坑を伴っており、居住などの生活に関わる遺構であると考えられる。類例が少ないものの、これは宮古島と八重山列島の間で、住居遺構の形態や様式が異なる可能性を示している。

カイジ浜貝塚の方形配列柱穴遺構や、アラフ遺跡の竪穴遺構は、重なり合いや切り合い関係が存在することから（図 37)、繰り返し構築・利用されたことが読み取れる。また、アラフ遺跡・大泊浜（おおどまりはま）貝塚は、遺物包含層の間に無遺物の包含層を挟み込む状況も確認できることから、当時の人々は遺跡から離れた後に、特定の遺跡へは再び戻ってきて生活したことを示している。このような遺跡は、宮古島・八重山列島の両地域で確認することが可能で、どちらの地域の中でもこのような回遊的な人の動きが存在したと考えられる。

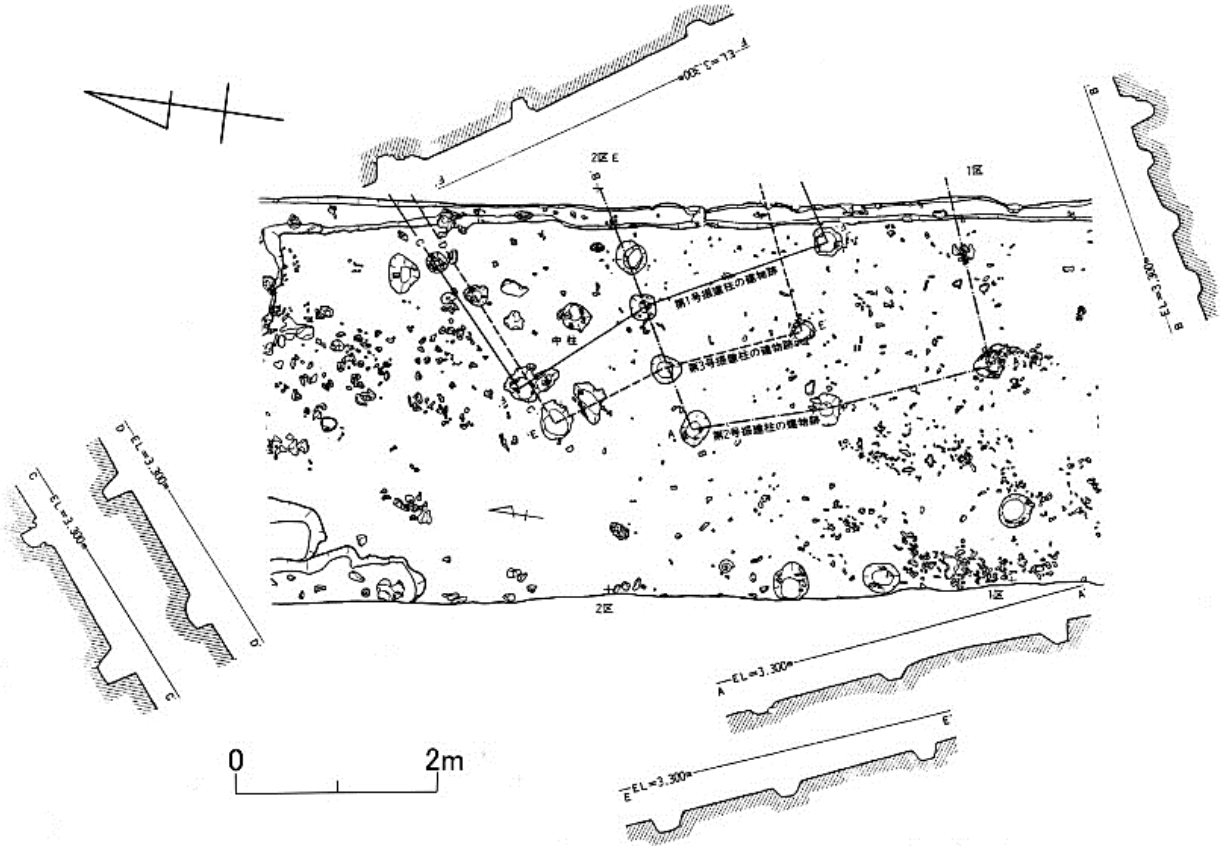


図 37. カイジ浜貝塚 4b 層検出の方形配列柱穴
（3 基の重なり合い関係）（沖縄県教育委員会 1994）

・遺跡間における人工遺物の出土比較

無土器期の遺跡から出土する人工遺物は、製作素材から石器・貝製品・イノシシ骨牙製品・サメ歯製品・魚骨製品と、鉄製品・銭貨に分類することができる。下田原期と異なり土器は出土していない。以下では素材別にみた人工遺物に対し、層位間・遺跡間の変異を検証することとする。

①石器

石器は多良間島を除いた全ての遺跡からも出土しており、多良間島の西高嶺（にしたかみね）遺跡（6 層）では、石器ではないものの、多良間島では産出しない未加工の火成岩が 5 点出土している（表 17）[16]。

表 17. 無土器期遺跡における石器出土状況
（出土数量が不明のものは○で表記。浦底遺跡は写真報告された点数に基づく。
西高嶺遺跡の「他」のみ未加工の石材を示す。）

島名	遺跡名	層位	磨製刃部			敲打		磨面						合計
			打製	石斧	石刃	円礫	杵状	敲磨石	磨石	砥石	石皿	有孔	他	
宮古島	長墓遺跡	－												0
	アラフ遺跡	Ⅳ層	1											1
		Ⅴc層						1						1
	浦底遺跡	Ⅰ or Ⅱ層										2		2
		Ⅲor Ⅳ層		2				4						6
	長間底遺跡	盛土		11		3			2					16
	友利元島遺跡	－												0
多良間島	西高嶺遺跡	6層											5	5
石垣島	船越貝塚	3層		5										5
	崎枝赤崎貝塚	Ⅰ層		29										29
		Ⅱ層		15	1									16
	フーネ第二遺跡	1地点3層		1										1
		2地点5層				1								1
	名蔵貝塚群(1978)	－												0
	名蔵貝塚群(1980)	Ⅱ区黒砂層		4								2		6
	名蔵貝塚群(1984)	Ⅱ-Ⅳ地点		8		4								12
		Ⅳ・Ⅴ地点		1										1
	神田貝塚	Ⅲa層	1	1										2
		Ⅲb層		4		1						1		6
		Ⅳ層	1	2		1	1		1		1			7
	嘉良嶽貝塚	Ⅱ層					1							1
	嘉良嶽東貝塚	4層								1				1
	白保竿根田原洞穴遺跡	ⅢA層				4							5	9
		S層				1								1
竹富島	カイジ浜貝塚	3層							1					1
		4層		2										2
		5層				1								1
西表島	仲間第一貝塚(1959)	混貝土層		9		1				1				11
		黒色土層		7										7
	仲間第一貝塚(1989)	Ⅱ層		2		1	2							5
	船浦貝塚	Ⅱ層			○	○							○	○
		Ⅲ層		○										○
		Ⅳ層				○								○
	カトゥラ貝塚	－												0
	網取遺跡	－												0
	鹿川ウブドー遺跡	－												0
波照間島	大泊浜貝塚	6層		4										4
		12層		1										1
与那国島	トゥグル浜遺跡	Ⅰ層		51		3			2				5	61
		Ⅱ層		39		24					5			68
		Ⅱa層		68		22			3	2	6	1	1	103
合計			3	266	1	67	4	5	9	4	12	6	16	393

石器の器種に関しては、石斧の出土数が最も多い（表 17）。石斧（図 38）は、母岩からの打割、或いは自然礫から比較的扁平な石材を獲得し、側面部を細かい敲打調整によって平面形を成形、研磨によって刃部を作り出した石器である。この点は下田原期の石斧と大きく異なる点はない。このように研磨によって刃部を作り出す人工遺物は、石器の中では一部を除いて石斧しか存在が確認されていない[17]。石斧以外の器種は、自然形を残した状態で敲打・研磨の痕跡を残す、比較的単純な石器で構成されている。特に敲石と磨石は形態が類似するものが多く、敲打・研磨の両痕跡を有する資料も確認できることから、敲打や研磨、磨り潰しなど、一定の用途に限定せず、臨機応変に複数の用途に利用されていたことが読み取れる。

石斧に関しては分類試案が示されているが（高宮廣 1994・1995・1996a・1999）、遺跡間で出土数のバラつきが大きく、石器の形態や器種の分類では各遺跡の層位間や、遺跡間の明確な纏まりは読み取れない。そこで、石器全体で遺跡間の出土数を比較してみると、帰属時期が曖昧なトゥグル浜遺跡を除き、石器の出土は石垣島や西表島東部に立地する遺跡に偏ることが読み取れる（表 17）。特に石斧の出土の偏りは顕著で、宮古島の遺跡における出土数は少数に止まっている[18]。宮古島の遺跡の石器の出土傾向は、後述する貝製品に比べると非常に対照的な傾向を示している。

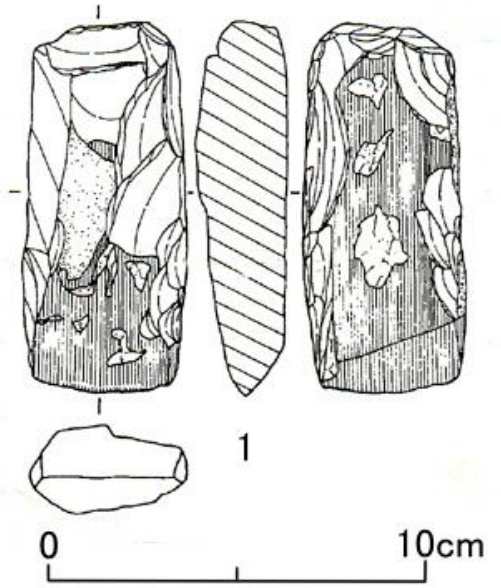


図 38. 神田貝塚Ⅲb 層出土の石斧
（沖縄県教育委員会 1980）

石器は石材から当時の人々の資源利用と、島嶼間移動を読み取ることができる。石器器種に対する石材の利用傾向は、石斧には主に緑色片岩や変性斑糲岩を用い、敲石・磨石・石皿には花崗岩・砂岩・石灰岩を用いるという当時の人々の一定の石材選択が確認できる。この緑色片岩や変性斑糲岩は八重山列島の一部に分布するトムル層に産出が限られており、花崗岩は石垣島中央部の於茂登岳（おもとだけ）周辺、砂岩は石垣島の富崎層と宮良層、西表島の八重山層群などに産地が限定されることが明らかとなっている（島袋 2002 など）。石材の産出地と遺跡との地理関係は、石垣島西海岸の名蔵湾周辺の遺跡が石材産地のトムル層や於茂登岳に最も近く、石器の出土数も多い。石垣島東部の遺跡や西表島の東海岸部の遺跡も、トムル層とのアクセスが比較的容易な環境にある[19]。一方で、宮古島や波照間島・与那国島では現地で堆積岩以外の石材を獲得することが出来ないことから、これらの島では海を渡って変成岩や火成岩の石材（或いは石器）を運ぶ必要があったことが読み取れる[20]。

与那国島のトゥグル浜遺跡では緑色片岩の石器が大半を占める。本遺跡も島外から石材が運ばれたと考えられるが、石材産地と遠いにも関わらず全遺跡中で最多の石器出土数を示している。また、遺跡で出土する石製ドリル（図 39）[21]は他の遺跡での出土例が確認できず、石器の出土数・器種は他の無土器期の遺跡との間で違いが確認できる。この石製ドリルは、製作技法、形態ともに下田原貝塚（1983-85）で出土した尖頭器と共通している。

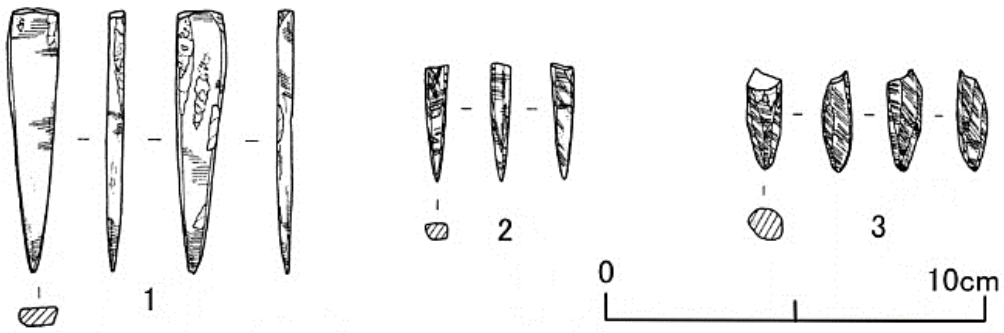


図 39. トゥグル浜遺跡出土の石製ドリル
（1、2：Ⅰ層出土、3：Ⅱa 層出土）（沖教委 1985b：49）

②貝製品

石器に対して、貝製品の出土傾向は遺跡間の纏まりがより明確に読み取れる。各遺跡の出土状況（表 18）[22]を比較すると、貝製品の出土が宮古島の遺跡に集中していることと、特に貝斧においてその傾向が顕著であることが確認できる。

表 18. 無土器期遺跡における貝製品出土状況
（出土するものの数量が不明のものは○で表記。遺跡の○層上部・下部は便宜上同一層で統一。浦底遺跡出土貝斧は 200 点以上と報告。層位不明品は除外。）

島名	遺跡名	層位	磨刃	敲打		研磨				有孔			加工	合計
			貝斧	シャコ	蓋	ソデボラ	シャコ	タカラ	イモ	二枚貝	巻貝	ソデボラ	その他	
宮古島	長墓遺跡	T1-1層	1					1			11			13
		T1-2層	3	1							6			10
		T1-3層	2							1	3			6
		T2-1層									4			4
		T2-1-2層									1			1
		T2-2層									6			6
		T2-3層									2			2
		T2-4層						1		1	4			6
	アラフ遺跡	Ⅲ層	2	1		10	1				1			15
		Ⅳb層	3			2							1	6
		Ⅳc層	3			1					1			5
		Ⅳ層（区別なし）		1							1			2
		Vb層	1			1							2	4
		VI層				1								1
	浦底遺跡	ⅢorⅣ層	200?						○		○	○		0
	長間底遺跡	盛土	9											9
		Ⅲ層	2										1	3
	友利元島遺跡	15層	15	1										16
多良間島	西高嶺遺跡	-												0
石垣島	船蔵貝塚	-												0
	崎枝赤崎貝塚	Ⅰ層	1								3			4
	フーネ第二遺跡	-												0
	名蔵貝塚群（1978）	-												0
	名蔵貝塚群（1980）	Ⅱ区黒砂層				2		2		13	1		1	19
		Ⅱ区3号柱穴								1			1	2
		Ⅴ区黒砂層						1		16	3			20
	名蔵貝塚群（1984）	Ⅰ-Ⅱ地点	2			1		7		160				170
		Ⅳ・Ⅴ地点								4				4
		Ⅴ地点								6				6
	神田貝塚	-												0
	嘉良嶽貝塚	Ⅱ層			1									1
	嘉良嶽東貝塚	-												0
	白保竿根田原洞穴遺跡	-												0
竹富島	カイジ浜貝塚	3層						1			1		1	3
西表島	仲間第一貝塚（1959）	-												0
	仲間第一貝塚（1989）	Ⅱ層								1				1
	船浦貝塚	Ⅱ層	○				○			○				○
		Ⅲ層									○			○
	カトゥラ貝塚	A1-1層											1	1
		B1-1層									1		2	3
		C1-1層											11	11
		C1-2層											2	2
	網取遺跡	Ⅲa層								1				1
		3b層								1				1
	鹿川ウブドー遺跡	-												0
波照間島	大泊浜貝塚	6層				1							1	2
		9層				1				1				2
		12層									1			1
与那国島	トゥグル浜遺跡	Ⅰ層			163					1	1		1	166
		Ⅱ層			34									34
		Ⅱa層			129	1								130
合計			44	4	327	21	1	13	0	207	51	0	25	693

貝斧は（図 40）、浦底遺跡で確認された 200 点以上の数量が群を抜いており、アラフ遺跡（Vb 層）の BC410-240 年から、長墓遺跡（T1-3 層）や友利元島遺跡（15 層）の AD776 年頃まで確認できる。一方で、八重山列島の遺跡における貝斧出土事例は少なく、名蔵貝塚群（1984）と崎枝赤崎貝塚、船浦貝塚に限られる。この中で名蔵貝塚群（1984）はよ

り後の時代の考古学的物との攪乱状況にあることから帰属時期が判然としないが、崎枝赤崎貝塚の貝斧出土層（Ⅰ層）は攪乱状況にあるが後続時期の遺物が混入せず、また開元通寶が出土する未攪乱層（Ⅱ層直上）の上層にあることから、古くともAD621以降に位置づけることが可能で、船浦貝塚の貝斧出土層（Ⅱ層）も石斧や石器出土層（Ⅲ・Ⅳ層）の上層に位置することが確認できる。船浦貝塚のⅢ層上部では鉄製品が出土しており、貝斧は石斧や鉄製品より新しく、Ⅲ層の ^{14}C年代のAD620-720頃以降の年代に位置づけられる。

その他の貝製品では、巻貝螺頭部に穿孔する製品の出土が長墓遺跡に、二枚貝有孔製品の出土が名蔵貝塚群（1980・84地点）に集中するが、名蔵貝塚群は後続時期遺物との攪乱状況にあり、多量の二枚貝有孔製品の帰属時期は、無土器期に限定することができない。

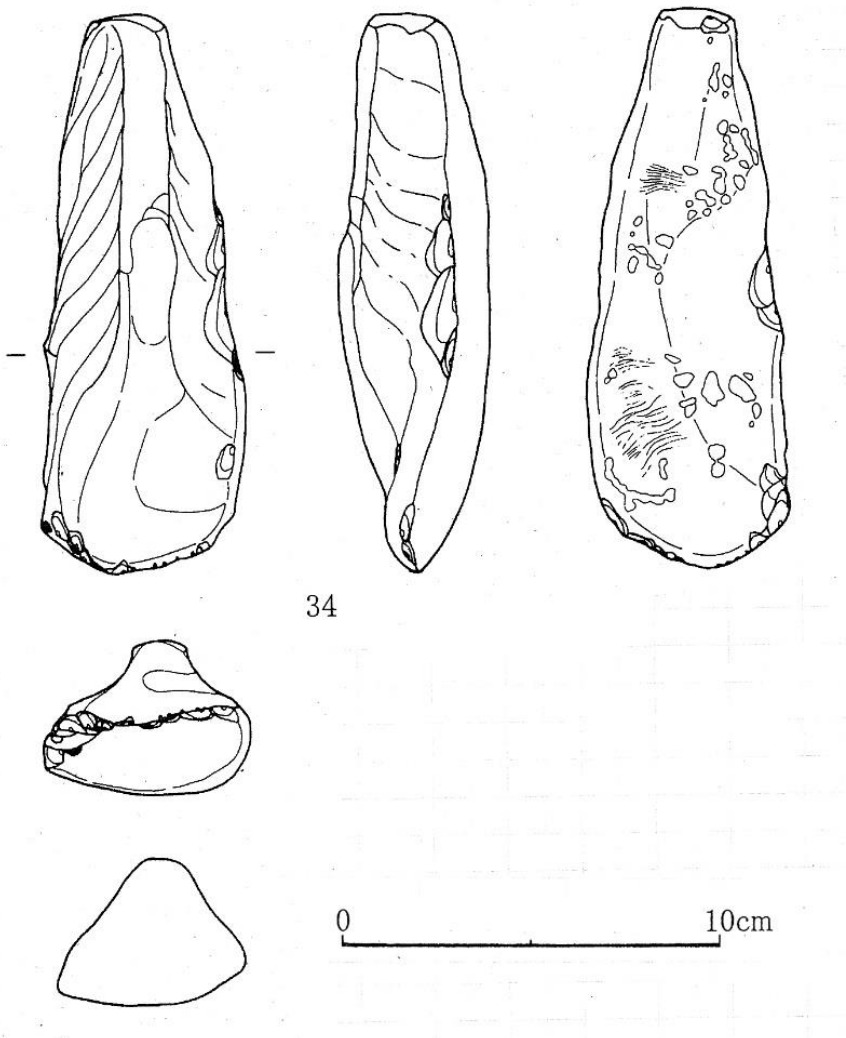


図 40. アラフ遺跡Ⅴb層出土のシャコガイ製貝斧
（アラフ遺跡発掘調査団 2003）

貝斧は、シャコガイ科などの貝類の分厚い部分（ちょうつがい部など）を利用し、敲打調整によって平面形を整え、研磨によって刃部を形成する。製作技法や形態は石斧と類似しており、人工遺物全体を通して磨製の刃部を有するのは石斧と貝斧に限られる。貝斧の材料となる貝類は、宮古島の周辺の海や海岸部で獲得することが出来るが、長墓遺跡では風化した死貝の利用や、水磨を受けた未製品の大型貝類が確認でき（長墓遺跡調査団 2013）、

海岸部で採取できる貝殻が利用されたことが読み取れる。また、宮古島の遺跡では貝斧以外のソデボラ科（図 41）、シャコガイ科、イモガイ科などを利用した貝製品も多数出土しており、貝類を道具材料へ積極的に利用する傾向を示している。

このような貝製品の出土傾向は、石器と比べると対照的である。特に磨製刃部をもつ人工遺物に関しては、宮古島の遺跡では海や海岸部で利用する貝類を用い、八重山列島では時には海を渡って運搬しながら石材を用いるという、資源利用の違いが存在していることになる。

石斧の出土傾向に関して特異性を示すトゥグル浜遺跡は、貝製品に関しても多量のヤコウガイの蓋を利用した製品の出土する点で宮古島・八重山列島のいずれの遺跡とも特異性を示す。反面、包含層からの貝斧の出土がなく石斧が多い点は、八重山列島の遺跡と類似した資源利用傾向を示している。

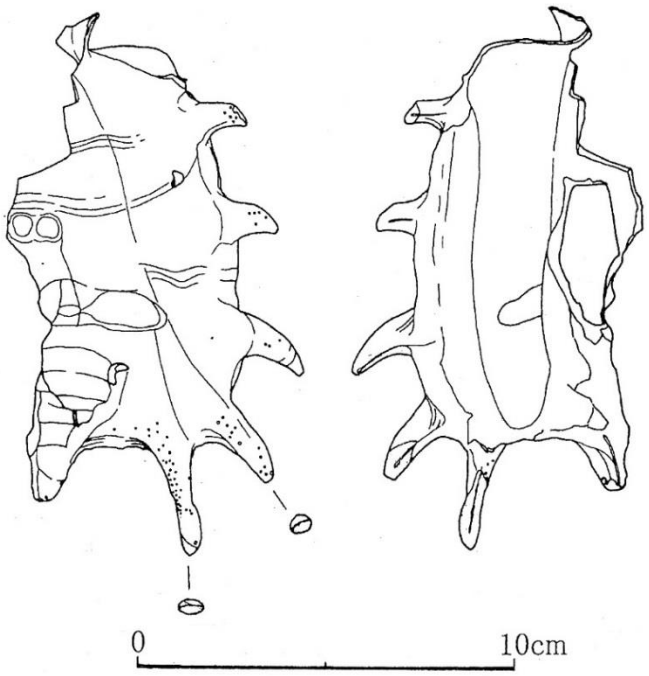


図 41. アラフ遺跡Ⅳb 層出土のソデボラ科（クモガイ）製品（アラフ遺跡発掘調査団 2003）

③獣骨牙製品・魚骨歯製品

貝製品以外では石材以外の材質を利用する製品として、イノシシの骨・牙や、クジラの骨、魚類骨・サメ歯を利用した製品が出土する。サメ歯製品（図 42）は宮古島の遺跡に出土が多く、特に長墓遺跡に出土が集中している（表 19）[23]。長墓遺跡には小型巻貝の螺頭部に穿孔した製品の出土も多いが、儀礼的な要素を示す証拠は確認することができない。

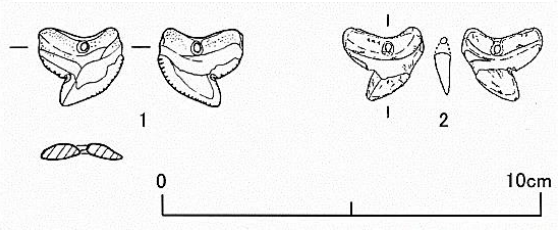


図 42. サメ歯製品（1：長墓遺跡 T1-3 層出土、2：アラフ遺跡Ⅴc 層出土（アラフ遺跡発掘調査団 2003）

イノシシなどの哺乳類骨を利用した人工遺物は、トゥグル浜遺跡での出土が目立つものの、明確な規格性を読み取ることはできず、また遺跡間でも共通した要素は確認できなかった。ただ、アラフ遺跡で出土したイノシシ歯製品に関しては、研磨加工や形状はサメ歯製品の特長と類似している。また、魚類骨を利用した人工遺物に関しては、サメの椎骨の断面中央に穿孔したものが確認されているが、これはトゥグル浜遺跡に出土が限られており、他の無土器期の遺跡からは確認されていない。

表 19. 哺乳類骨牙・魚骨歯利用製品出土状況（○：数量不明のもの）

島名	遺跡名	層位	イノシシ 研磨・有孔 骨	イノシシ 研磨・有孔 牙	イノシシ 研磨・有孔 歯	クジラ 骨	魚類 有孔 魚椎骨	魚類 有孔 サメ歯	合計
宮古島	長墓遺跡	T1-1層						11	11
		T1-2層						5	5
		T1-3層						3	3
		T2-1層						4	4
		T2-1-2層						1	1
		T2-2層						6	6
		T2-3層						2	2
		T2-4層						4	4
	アラフ遺跡	Ⅳ層(区別なし)			1				1
		Ⅴb層						1	1
		Ⅴc層						1	1
	渭底遺跡	ⅢorⅣ層	○			○		○	0
石垣島	白保竿根田原洞穴遺跡	S層		1				1	2
西表島	網取遺跡	Ⅲa層	1						1
与那国島	トゥグル浜遺跡	Ⅰ層	2	1			1		4
		Ⅱ層					1		1
		Ⅱa層	4				7	5	16
合計			7	2	1	0	9	44	63

④鉄製品・銭貨

石器・貝製品・哺乳類骨牙・魚類骨歯製品は、宮古・八重山諸島内で材料資源を獲得し製作することができる。これに対し、鉄製品や銭貨（開元通寶）は、宮古・八重山諸島で生産することが不可能であるため、明確に諸島外から持ち込まれたものとして位置づけることができる。

鉄製品に関しては八重山列島の遺跡に出土が限られ（表 20）、各々の遺跡で出土する製品の形態は共通性がなく、用途も判然としない（図 43：上）。出土位置に関しては、船浦貝塚では、石器の出土層（Ⅳ層）より上層で、貝斧が出土する層（Ⅱ層）かそれより下層（Ⅲ層上部）から出土しており、カイジ浜貝塚では石斧や方形配列柱穴遺構の層（4・4b 層）の上層（3 層）から出土している。長墓遺跡（T1-3 層）で出土する鉄滓も同様で、比較的新しい層位（AD572 - 646 年）から確認されている。銭貨に関しては表採例が多く、崎枝赤崎貝塚が唯一包含層からの出土例（図：43：下）となっているが、石斧が出土する層（Ⅱ層）の上層（Ⅱ層直上）から出土している。無土器期の銭貨は表採例も含めて、八重山列島に事例が限られる

表 20. 鉄製品・銭貨の出土状況

島名	遺跡名	層位	鉄製品	鉄滓	開元通寶	合計
宮古島	長墓遺跡	T1-3層		1		1
石垣島	崎枝赤崎貝塚	Ⅰ層			6	6
		Ⅱ層直上			27	27
竹富島	カイジ浜貝塚	3層	1			1
西表島	船浦貝塚	Ⅱ-Ⅲ層	4			4
合計			5	1	33	39

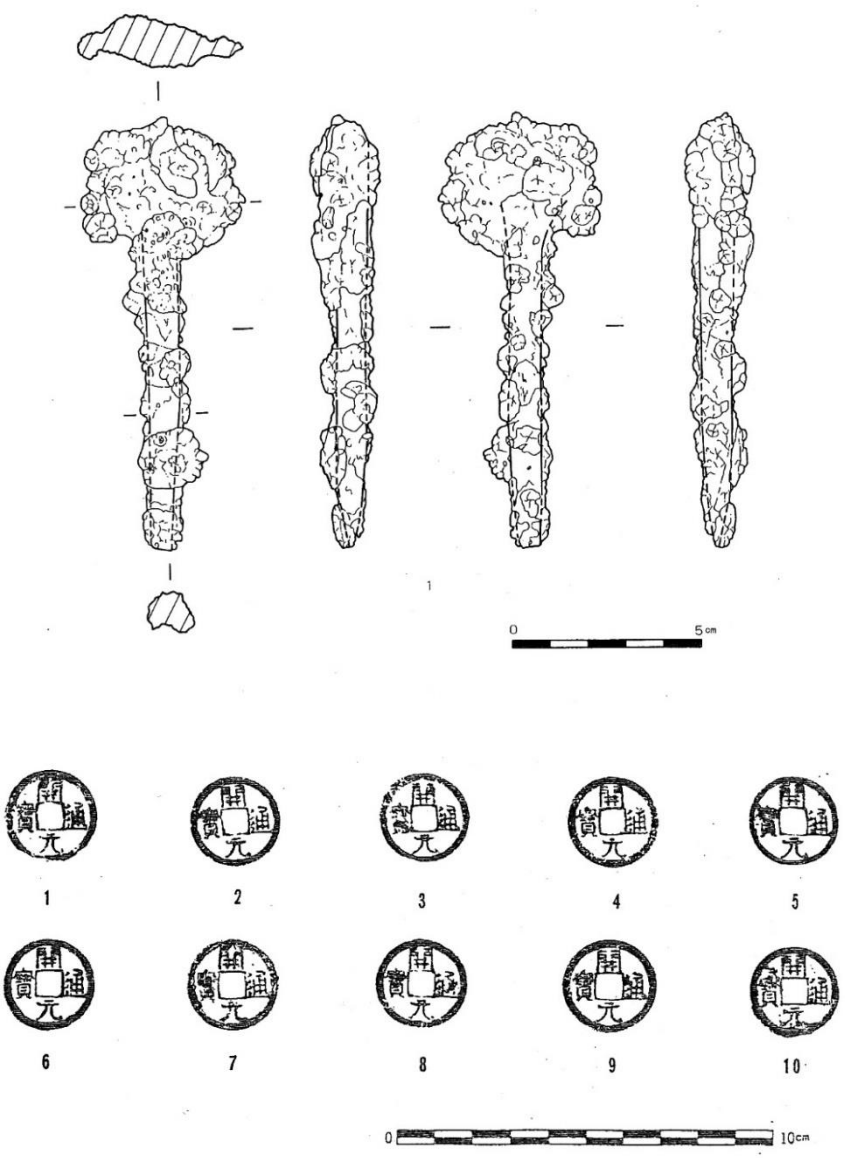


図 43. 無土器期遺跡出土の鉄製品・銭貨
上:カイジ浜貝塚 3 層出土の鉄製品（沖縄県教育委員会 1994）。
下:崎枝赤崎貝塚Ⅱ層直上出土の開元通寶（石垣市教育委員会 1987）

以上のように、人工遺物からは、石器（特に石斧）・鉄製品・銭貨の出土が目立つ八重山列島と、貝製品（特に貝斧）・サメ歯製品の出土が目立つ宮古島という纏まりが読み取れる。この中で、石器と貝製品の出土比率は地域差を示しており、これは石材産地との地理的な関係や生態環境の関係と合致する傾向を示している。加えて、宮古島における貝斧利用は BC410-240 年頃から AD674-776 年の時期まで確認できるのに対し、八重山列島での貝斧出土事例は古くとも AD621 年以降で、石斧や鉄製品・開元通寶よりも新しい時期に位置するという時間差も示唆している。また、トゥグル浜遺跡に関しては、石器とその石材利用は無土器期における八重山列島の遺跡に近い要素を示すが、石材産地との地理的関係と石器の出土数、石製ドリル、多量のヤコウガイの蓋製品という点では、八重山列島のみならず無土器期遺跡全体とも異なる特異性を示している遺跡と言える。

・動物遺存体の出土比較

動物遺存体は、単純な出土数は貝類・魚類・イノシシが多く、少数のカメや鳥類・爬虫類などがそれに続く。この出土傾向は地域間で大きな違いは確認できない（表 21）[24]。

表 21. 動物遺存体の出土状況

（*：NISP のもの。○：数量報告が無いもの。◎：数量報告が無いが多量と報告されるもの。）

島名	遺跡名	層位	MINI	NISP							
				水生				陸生			
			貝類	魚類	哺乳類	甲殻類	カメ	鳥類	爬虫類	イノシシ	哺乳類
宮古島	長基遺跡	T1-1層	395	106			44			30	71
		T1-2層	433	1226			83	25	16	117	352
		T1-3層	107								
		T1-4層	49								
		T1-5層	86								
		T1-6層	51								
		T1-7層	110								
		T2-1層	65	139			1	5	10	17	71
		T2-2層	42	22			2		4	21	55
		T2-3層	83							11	38
		T2-4層	99	4				1	1	5	17
		T2-5層	24								
	アラフ遺跡	Ⅲ層	745	○					○	○	
		Ⅳb層		○					○	○	
		Ⅳc層	83	○					○	○	
		Vb層								◎	
		Vc層	32								
	浦底遺跡	ⅢorⅣ層									
	長間底遺跡	Ⅲ層	1164								
	友利元島遺跡	15層	◎	○						◎	○
多良間島	西高嶺遺跡	4層									◎
石垣島	船越貝塚	3層	13407	68							
	崎枝赤崎貝塚	Ⅱ層	◎								
	フーネ第二遺跡	-									
	名蔵貝塚群(1978)	-									
	名蔵貝塚群(1980)	Ⅱ区	4722								
		Ⅴ区	4240								
	名蔵貝塚群(1984)	Ⅱ-Ⅳ地点	251	1						27	2
		Ⅴ地点	1031								
	神田貝塚	Ⅲa層	52609	3152	1	1	11	6		1386	8
		Ⅲb層	5389	2685	3	4	95	5		2055	3
		Ⅳ層	461	2						206	
	嘉良嶽貝塚	Ⅱ層	8								
	嘉良嶽東貝塚	4層	30								
	白保竿根田原洞穴遺跡	ⅢA層	30*	40			13	3	4	207	1
		S層	333*	42		1	19		8	13	
竹富島	カイジ浜貝塚	3層	6231	527		52	20		12	241	29
		4層	2513	133		2	3		6	192	2
		5層	814	4		2				12	52
西表島	仲間第一貝塚(1959)	混貝土層	◎	○						◎	○
		黒色土層									
	仲間第一貝塚(1989)	Ⅱ層	4964*		○					○	
	船浦貝塚	Ⅱ層	◎	○	○		○	○		◎	○
		Ⅲ層	○	○	○		○	○		◎	○
	カトゥラ貝塚	A1-1層	89								
		A2-2層	156								
		B1-1層	71								
		B1-2層	167								
		C1-1層	120								
		C1-2層	27								
		C1-3層	5								
	網取遺跡	3-4層	1105	435	6		35	2	37	186	
	鹿川ウブドー遺跡	黒色土層	○	○							○
波照間島	大泊浜貝塚	6層	915	127	1		57			725	
		9層	225	37	2		59	3		1755	
		10層	76	79			35		16	1121	1
		11層		2			11			480	
		12層	20	2			6			772	

出土数に関しては発掘面積などの関係から単純に比較するのは難しいが[25]、各々の遺跡で出土する貝類遺存体の生息域は、下田原期の遺跡と同様に遺跡の周辺環境を反映している。内湾環境の石垣島名蔵湾周辺の神田貝塚では遠浅の砂地に生息するアラスジケマンガイがⅢa 層で 85%（n=44975)、Ⅲb 層で 72%（n=3859）と圧倒的である一方で、シャコガイ科などサンゴ礁生息の大型貝類や、リーフエッジ生息の貝類は少ない。名蔵貝塚群（1980）においても、第Ⅱ地点でアラスジケマンガイが 30%（n=1435)、カワラガイ 26%（n=1242)、リュウキュウサルボウ 17%（n=812)、第Ⅴ地点でアラスジケマンガイ 46%（n=1971)、リュウキュウサルボウ 12%（n=491）と、名蔵湾の環境に合致した貝種の出土が目立つ。西表島仲間川の河口に隣接する仲間第一貝塚では、仲間第二貝塚と同様に汽水域とサンゴ礁域の貝類が報告されており（西村ほか 1960)、浦内川の水中に立地するカトゥラ貝塚では全層位を通してヒルギシジミやオオモモノハナなどの汽水産の貝類が豊富に出土している。神田貝塚は下田原期の大田原遺跡に隣接し、仲間第一貝塚も仲間第二貝塚に隣接するが、どちらの遺跡もほぼ下田原期と同様の生態環境を反映した貝類が出土していること読みとれる。

一方で、竹富島のカイジ浜貝塚では 3 層でマガキガイが 28%（n=1723）を占めるものの、37%を総数比 2%以下の 157 種の貝類が占めており、一定の種に偏らない傾向を示している。この様な傾向はカイジ浜貝塚の全層で確認できる。竹富島はサンゴ島であることから、全ての時期を通じて多種多様な貝類が採捕されていたことが伺え、大型のシャコガイ科の出土も普遍的に確認することができる。同じサンゴ島の波照間島の大泊浜貝塚では 6 層でシラナミが 22%（n=199）と目立ち、9 層ではサラサバテイ 33%（n=75）に次いでヒレジャコが 17%（n=39)、10 層でもヒメジャコ 36%（n=27）とシャコガイ科の大型貝類の出土が目立つ。全層位通して、汽水産のシレナシジミや、リーフエッジに生息するサラサバテイなどが多い点も併せて、下田原期の下田原貝塚とよく似た出土状況を示しており、波照間島の生態環境を反映しているものと理解できる。一方で、同じ八重山列島のサンゴ島においても与那国島ではまた違った出土状況を示している。与那国島のトゥグル浜遺跡ではヤコウガイの出土数が群を抜いており、Ⅰ層で 72%(n=513)、Ⅱ層で 77%(n=207)、Ⅱa 層で 77%（n=745）と圧倒的な割合を示しており[26]、これはヤコウガイ製品の多さとも相関している。

無土器期になって遺跡の分布が拡大したサンゴ島：宮古島の遺跡に関しては、アラフ遺跡のⅢ層でチョウセンサザエの出土が 46%(n=6)、Ⅲ層下面で 11%(n=82)、Ⅳc 層で 13%（n=11）と目立ち、ミヤコヤマタニシがⅢ層下面で 26%(n=191)、Ⅳc 層で 25%(n=17)、他にも種不明のマイマイがⅢ層下面で 11%(n=83)、Ⅳc 層で 26%(n=21) を占めるなど、海産と陸産の貝類を混在して採捕している。同様の傾向は同じ宮古島の長墓遺跡にも確認することができる。このような貝類のバリエーションは、遺跡立地からも確認できる多様な環境への柔軟性を示している。

一方で、魚類はブダイ科やフエフキダイ科など礁湖や内湾に生息する魚類が大半で、外洋魚類は確認できない。海産哺乳類に関しても、いずれの遺跡でも NISP の計測で非常に少数しか確認されておらず､遺跡全体を通して外洋での漁撈活動を示す要素は極めて薄い。

陸生生物に関しては、イノシシ遺存体が殆どの島の遺跡で出土している。イノシシは、現在の宮古島や波照間島・与那国島には生息していない為、石垣島や西表島からの持ち込

みか、自生種の絶滅という可能性が考えられているが（長墓遺跡調査団 2013、久貝 2014）、イノシシが現生しない島の遺跡における層位別での出土状況は、各々の島で複数の層位に跨る期間において継続的にイノシシが利用されていたことを示している。特に波照間島の大泊浜貝塚で比較的多数のイノシシ遺存体が出土する傾向は、同じ島で下田原期に属する下田原貝塚と共通しているのは興味深い。これは、下田原期と無土器期という異なる時期にもかかわらず、波照間島では同様の食糧の利用が行われていたことを示している。

動物遺存体の出土傾向は、いずれも遺跡周辺域での食糧利用を示しており、遺跡間における恒常的な食糧交換や、集積・分配といった関係は読み取れない。イノシシに関しては、現生しない島への、人による持ち込みの可能性が考えられるが、自生していた種が継続的に捕獲されて絶滅した可能性も残している。

3. 無土器期の文化内容と時空間変異の整理

・無土器期の生活様式と遺跡を捉える枠組み

以上の分析を踏まえ、纏めとして下田原期の物質文化に関して整理することとする。ここまで示した遺跡の属性比較からは、まず無土器期においても人々が海を越えて島々を移動して生活していたことが読み取れる。遺構・人工遺物・動物遺存体からは、無土器期が食糧生産を軸とした社会であったとは考え難く[27]、定住生活に基づいた人工遺物や食糧の生産・分配という関係は読み取れない。立地環境に基づく食糧資源獲得や、道具の消耗に伴う道具材資源獲得の必要性を考慮すれば、比較的短期的な居住と、資源獲得の為の移動を繰り返していたと考えられ、遺跡の立地からは、特定の生態環境に限定せず海岸沿いに移動先を選択していたものと考えてよいだろう。宮古島、八重山列島の両地域では、遺構の重なり合いや遺物包含層間の無遺物層から、繰り返し利用されたと考えられる遺跡が確認できることから（宮古島：アラフ遺跡、八重山列島：カイジ浜貝塚・大泊浜貝塚）、移動しつつも特定の場所には再び戻るという回遊的な移動[28]をしていたものと解釈できる。

移動経路に関しては、八重山列島では石器と石材の関係から、石材産地とのアクセスが読み取れる（図 44）。石材産地との移動は、宮古島と石垣島の間にも確認できるが、宮古島の遺跡では石器の出土が少なく、貝製品の出土が多い。特に宮古島の遺跡に出土が目立つ貝斧の存在は、無土器期の遺跡全体で最も出土が多い刃部磨製の人工遺物を、宮古島に

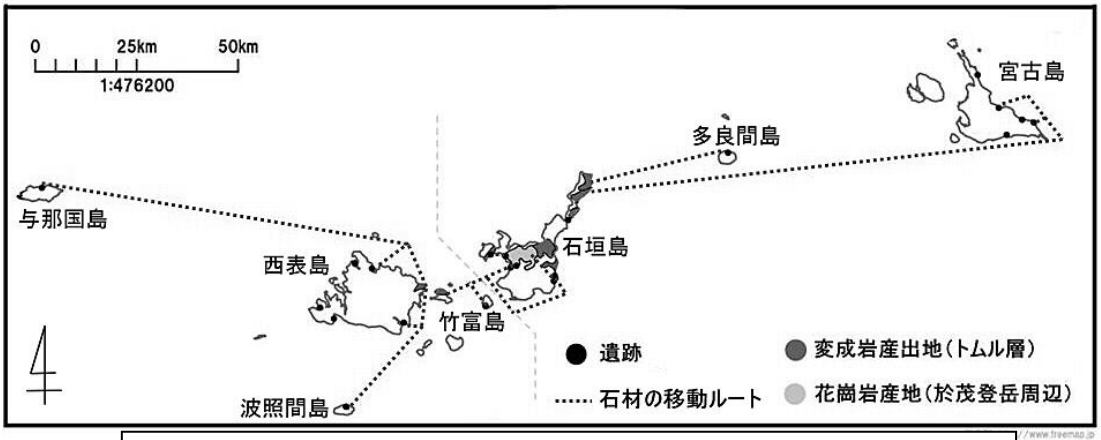


図 44. 遺跡出土の石器石材から読み取れる移動経路
（石材産地との最短距離を結ぶ）（MAPAC 白地図に基に作成）

遺跡を残した人々が石材に頼ることなく製作可能であったことを示している。これは結果的に石材産地との移動の必要性を低下させ、宮古島での長期間における活動に有利に働いたものと考えられる。またこの時期に土器を利用しないということは、土器粘土を獲得するために石垣島とアクセスする必要がないということであり、下田原期に比べて石垣島以外の島での継続的な活動の自由度や柔軟性は向上している。

^{14}C 年代や遺物包含層の層位関係から確認できるように、宮古島における人類活動は長期間に及んでいる。この背景には貝類資源の利用によって、石材産地との頻繁な行き来を必要としなくなったことが影響を与えていると考えられる。すなわち、宮古島の遺跡における貝斧や貝製品利用は、生態環境に適合した資源利用であると捉えることができる。

これとは対照的に、八重山列島の貝斧を含む貝製品の利用は、石器に比べ希薄であった。特に波照間島の大泊浜貝塚（6・9・12 層）では、アラフ遺跡や長墓遺跡で人工遺物の素材に利用されるシラナミやヒレジャコが貝類遺存体の 10～20%を占めるものの、それらを利用した人工遺物は出土していない。これは宮古島地域と八重山列島地域で、道具材料に対する資源利用が異なっていたことを示しており、遺構の違いなども含めると、二つの地域間では頻繁な人や物の行き来や、文化的交流関係が密接ではなかったことが読み取れる。

一方で、鉄製品や銭貨は周辺地域との間のアクセスを示す証拠であり、開元通寶は中国南沿海部や台湾・沖縄諸島、或いは日本列島との人や物の行き来を示唆する。しかし、遺跡からは無土器期の宮古･八重山列島における貨幣流通や貨幣経済の展開は確認できない。また、鉄製品や銭貨の出土層位と前後時期の遺構や人工遺物、動物遺存体との関係を見ても、この外来遺物に伴う大きな物質文化や資源利用の変化は読み取れない。

・宮古島地域と八重山列島地域の時間軸上の関係

高宮廣衞（1996b）は無土器期の遺跡を「貝斧主体文化」と「石斧主体文化」に分類したが[29]、ここまでに示した分析結果からは、この分類を生態環境における資源利用の違いに基づいた「宮古島地域」と「八重山列島地域」という地域性に展開することができる。この二つの地域の時間的関係は、^{14}C 年代では宮古島地域の遺跡が先行する（表 15）。しかし、宮古島の遺跡の年代値や遺跡の層位関係は、宮古島地域と八重山列島地域が、遺跡属性の違いを有したまま並存していた期間が存在することを示しており、これは単純に宮古島から八重山列島へ遺跡の分布が移り変わるという構図ではないことを示している。

八重山列島の遺跡は BP1,600 年頃（大泊浜貝塚 11 層）から年代が確認されているが、八重山列島の遺跡では貝斧の材料に恵まれる島の遺跡でも、宮古島のような資源利用は確認できない。このことから、宮古島にいた集団が BP1,600 年の時期に八重山列島に移住し、八重山列島に遺跡を残す集団になったと考えるのは妥当ではない。また、崎枝赤崎貝塚、船浦貝塚の層位的な出土状況は、八重山列島では貝斧よりも石斧が古い可能性を示しており、貝斧や貝製品利用が八重山列島で拡大する様子は確認できない。これは、少なくとも比較的新しい時期に、宮古島から八重山列島へ貝斧を持ち込むような人の動きがあった反面その影響は少なく、二つの地域は資源利用の違いを保持していたものと考えられる。

このように、無土器期の宮古島と八重山列島は地域差を有するが、浦底遺跡で出土する石器の存在は、BP1,800 年頃に宮古島に遺跡を残した人々が八重山列島における石材の存在を認識していたことを示している。また、地理的に石垣島に近い多良間島の西高嶺遺跡

では、BP2,100 年頃を示す層（6 層）から石垣島産の火成岩が出土することから、八重山列島における石材利用が現在示されている年代よりも古く遡る可能性が存在している[30]。

更に、比較的確認されている遺跡の時間幅が広い宮古島の遺跡に関しては、下田原期と同様に古段階と新段階に分類できる可能性が存在する。^{14}C 年代値で見た場合、浦底遺跡やアラフ遺跡の下層は比較的古い年代を示すのに対し、アラフ遺跡の上層や友利元島遺跡は比較的新しい年代や層位を示していると考えられるためである。しかし、無土器期では時間的な指標となる土器が出土しない。その為、時間的な変異を見る対象としては、宮古島の遺跡で普遍的に多数の出土があり、かつ形態や製作技法にある程度のバリエーションの変異が存在する可能性が高い貝斧に限られるが、これを整理する上では、比較的古い年代で石器と 200 点以上の貝斧を出土した浦底遺跡の資料の再評価が不可欠となる。

4. 浦底遺跡の再評価と貝斧文化の展開

浦底遺跡は宮古島の東海岸の海岸砂丘地に立地する遺跡で、1987 年から数年にかけて発掘調査が行われた。この調査において、200 点以上のシャコガイ製の貝斧が出土したとされるが、その調査報告は現在（2016 年 10 月時点）もなされておらず、貝斧の出土した層位や遺構、貝斧と共に出土した石器や貝製品などの詳細は殆ど明らかにされていない。浦底遺跡に関しては、調査の概報（城辺町教育委員会 1990）が刊行されており、その中の記述に基に、遺跡のおおよその層位と出土遺物、年代に関しては知ることができる。また特定の人工遺物に関してはその写真（高宮・知念 2004）で形態等を確認できるが、全体的な特徴を把握するのは不可能で、浦底遺跡の出土遺物の多くは未だ謎に包まれている。

しかしながら、浦底遺跡の調査で出土した資料は、現在沖縄県の文化財として収蔵・管理されている[31]。収蔵されている考古学的遺物には各々出土トレンチ（グリッド）・層位が注記として記載されており[32]、凡その出土位置と、人工遺物の形態や製作技法は観察によって確認することができる。

本項ではこれらの資料を活用して[33]、既存の調査概報（城辺町教育委員会 1990）に、注記や観察を基にした考古学的遺物の整理を加えて浦底遺跡の再評価を行い、宮古島の長墓遺跡・長間底遺跡・アラフ遺跡・友利元島遺跡との比較を通して、宮古島における貝斧文化の展開と八重山列島の貝斧との関係を考察する。

・浦底遺跡の層位の整理

浦底遺跡の層位に関しては、概報では第Ⅲ層と第Ⅳ層が遺物包含層であると報告されており、第Ⅲ層で BP1,880±75 年、2,180±75 年、2,200±75 年、第Ⅳ層で BP2,340±75 年、2,520±80 年の ^{14}C 年代値が提示されている（城辺町教育委員会 1990）。このⅢ層とⅣ層は、遺物の注記にも確認できるが、注記に記載された出土グリッドによって層位の堆積が異なることが確認できる。出土グリッドは「あ」～「つ」及び、「い'」～「き'」の平仮名に 17～104 の数字が組み合わされており、各々グリッド設定の x 軸と y 軸を示している。この中で、「え」～「つ」の 17～66 グリッドと、「い」・「あ」・「い'」～「き」の 92 - 104 グリッドは距離が離れており、かつ層位表記も異なっていることから、異なる発掘調査区域であるものと考えられる。そこで本項では便宜上、前者を 1 地点、後者を 2 地点として各々の層位における出土状況を検証することとした。

まず 1 地点に関しては、注記から表採・攪乱・Ⅰ層・Ⅱa 層・Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅲb 層・Ⅳ層・Ⅳa 層・Ⅳb 層・Ⅳc 層の表記が確認できる。人工遺物はいずれの層位からも出土しており、無土器期を特徴づける貝斧も同様にいずれの層位からも出土している。しかし、Ⅱ層からは 11 世紀後半以降の土器と考えられる土器片が出土しており、無土器期の包含層をⅢ層・Ⅳ層と位置づける概報の報告とは大きく矛盾しない[34]。

2 地点に関しては、表採・Ⅰ層・Ⅱ層・Ⅱ層アゼ・Ⅲ層・Ⅲ層下部・Ⅳ層上面・Ⅳ層・Ⅴ層・Ⅴ層下部の表記が確認できる。こちらも、いずれの層からも人工遺物・貝斧が出土しているが、Ⅰ~Ⅳ層が 1 地点のⅠ～Ⅳ層に対応するかは判然とせず、調査概報（城辺町教育委員会 1990）には記載がなかったⅤ層が存在している。

また、浦底遺跡では石灰岩が集積され、火焼痕を示す集石遺構が多数（considerable number）報告されおり、earth-ovens か stone boiling、stone steaming の用途が想定されている（城辺町教育委員会 1990)。正確な数は判然としないが、注記からは 111 号まで集石遺構のナンバリングが存在することが確認できる。注記を基にすると、少なくとも 19・21・22・26・27・43・82・111 号は 1 地点から検出されたことが分かり[35]、111 号までの集石遺構は 1 地点に位置する可能性が高いが、帰属する層位までは確認できない。

前述のように、本遺跡は詳細な報告書が刊行されていないことから、厳密な層位関係の把握は非常に困難である。そこで、本項では概報と矛盾しない 1 地点と、概報と異なる 2 地点を分離して、各々の出土傾向と貝斧の特徴を見ていくこととする。

・出土した人工遺物の整理

浦底遺跡から出土した人工遺物は、概報では石器（石斧・磨石・敲石・石皿・有孔石器)、貝製品（シャコガイ製貝斧・プレート状イモガイ製品・ホラガイ有孔製品・巻貝有孔製品)、骨牙製品（鯨骨製骨針・イノシシ骨製骨針・イノシシ牙有孔製品)、サメ歯有孔製品が確認されている（城辺町教育委員会 1990)。

今回確認した人工遺物もほぼ概報で紹介されたバリエーションを示しており、貝製品に関しては若干概報に追加されるバリエーションが存在する。

① 石器

石器に関しては石斧・敲石・磨石・石皿が 1 地点・2 地点の両方から確認できる（表 22・23)。本章を通して示してきたように、宮古島の他の遺跡と比べると、八重山列島の無土器期遺跡に普遍的な石斧が出土する点は特異性を示している。石斧の出土は 1 地点のⅡ層、及びⅣb 層で確認されており、浦底遺跡の比較的古い段階で石斧と石材利用が認識されていたことを示している。石斧の形態や製作技法も、無土器期の他

表 22. 浦底遺跡における石器の出土
（1 地点：注記を基にした層位復元）

	石斧	敲石		敲磨	磨石	石皿	合計
		円礫	棒状				
表採						1	1
撹乱						1	1
Ⅰ層						1	1
Ⅱ層	1					4	5
Ⅲ層			1		1	4	6
Ⅳa層			1	2		2	5
Ⅳb層	1				1	3	5
Ⅳc層							0
Ⅳ層（区別無）		1				1	2
合計	2	1	2	2	2	17	26

石斧：磨製の刃部を有する斧刃製品。
敲石：円礫：敲打痕を有する円礫。棒状：敲打痕を有する棒状石器。
敲磨：敲打痕・磨面を兼ね備える石器。
石皿：磨面・敲打痕・凹み面を有し、大型のもの。

の遺跡の石斧の特徴と共通しており、ある程度自然礫の形状を活かしつつ、敲打剥離によって平面形態を整え、研磨により刃部が形成される（図 45）。

出土数に関しては、石斧よりも石皿の出土が目立っており、無土器期の遺跡でも最多の出土数を示している。石皿は研磨面を持ち、重量が 800～1,000g 以上に至るような大型の石器で、中央部に凹面を有する。材質は砂岩を用いたものが多く、それらの砂岩はガラス質の光沢を多量に含有する。また、砂岩以外では石灰岩を用いた石皿も数点出土しており、石灰岩の石皿は宮古・八重山諸島の先史時代を通して他に例を見ない。日本列島における縄文時代の石皿は堅果類の磨り潰し・敲打に用いられたと考えられることが多いが、浦底遺跡では石皿の量に対して、敲石や磨り潰しに使って摩耗した磨石の出土が比較的少ない。むしろ、凹面以外にも平坦な研磨面を有しており、研磨面に炭酸カルシウムと考えられる白色の付着物が確認できる石皿があるなど、貝類の研磨との関連を示す痕跡が確認できる。この点は、後述する貝斧の出土数と比べると、貝斧製作（研磨）に石皿が用いられた可能性を示唆している。

表 23. 浦底遺跡における石器の出土
（2 地点：注記を基にした層位復元）

層位	石斧	敲石		敲磨	磨石	石皿	合計
		円礫	棒状				
Ⅰ層							0
Ⅱ層						5	5
3層上面						1	1
Ⅲ層						2	2
Ⅳ層							0
Ⅴ層					1	1	2
合計	0	0	0	0	1	9	10

石斧：磨製の刃部を有する斧刃製品。
敲石：円礫：敲打痕を有する円礫。棒状：敲打痕を有する棒状石器。
敲磨：敲打痕・磨面を兼ね備える石器。
石皿：磨面・敲打痕・凹み面を有し、大型のもの。

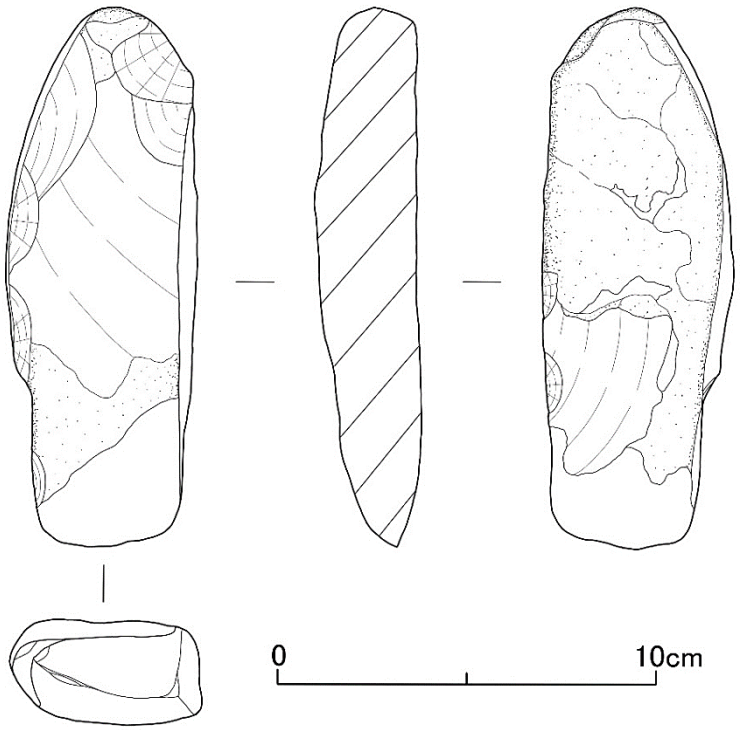


図 45. 浦底遺跡 1 地点Ⅳ層出土の石斧
（筆者製図・沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵）

石器に利用された石材を見てみると、いずれの層位でも堆積岩が多いことが分かる（表24)。堆積岩は砂岩や泥岩で構成されており、敲石や磨石には泥岩・砂岩、石皿には砂岩が利用されている。一方で、石斧には黒色片岩・緑色片岩の変成岩が用いられている。この点は下田原期・無土器期の他の遺跡における石斧への石材利用と共通している。

砂岩や泥岩などの堆積岩は宮古島で普遍的に産出するわけではないが、浦底遺跡が立地する東海岸部には堆積岩の島尻層が存在する。一方で、変成岩に関しては最も近い産出地でも石垣島北部までアクセスしなければならない。変成岩が、少なくとも1地点のⅣb層より上で出土していることは、貝斧を製作・利用していた無土器期の浦底遺跡において、別の島（おそらく石垣島）から石器・石材が持ち込まれていた可能性が高いことを示している[36]。この他に、石灰岩製の石皿も出土しており、こちらも磨面を持つことから、研磨に利用されたことが確認できる。これは、貝斧などの製品の研磨作業に砂岩などの堆積岩以外の石材が利用できることを示しているが、層位的な出土傾向とその数を見る限り、主に堆積岩が研磨材料として好まれていたことが読み取れる。

表 24. 浦底遺跡の層位間石材分布

1地区

層位	変成岩	堆積岩	石灰岩	合計
表採		1		1
撹乱		1		1
Ⅰ層		1		1
Ⅱ層	1	4		5
Ⅲ層		4	2	6
Ⅳa層		4	1	5
Ⅳb層	1	3	1	5
Ⅳc層				0
Ⅳ層(区別無)	1		1	2
合計	3	18	5	26

*変成岩:緑色片岩･緑色千枚岩･黒色片岩
*堆積岩:砂岩･泥岩
*石灰岩:サンゴ･貝･海砂を含有する石灰岩

2地区

層位	変成岩	堆積岩	石灰岩	
Ⅰ層				0
Ⅱ層		4	1	5
Ⅲ層上面		1		1
Ⅲ層		2		2
Ⅳ層				0
Ⅴ層			2	2
合計	0	7	3	10

*変成岩:緑色片岩･緑色千枚岩･黒色片岩
*堆積岩:砂岩･泥岩
*石灰岩:サンゴ･貝･海砂を含有する石灰岩

②シャコガイ製貝斧

シャコガイ製貝斧は全層位に跨って総計200点近く出土しており、1地点ではⅣ層（a-c含む)、2地点ではⅤ層の出土が最も多く、集石遺構からも出土が確認できる（表25・26・27)。また、浦底遺跡の貝斧は平面形を成形し研磨によって刃部を付した「製品」に加え、平面形は成形するが刃部を付していない「未成品[37]」、明確な人為的な加工が確認できないものの貝斧の平面形に整っている「素材」としてのシャコガイが出土している。未成品に関しては、平面形態・利用部位が製品と類似しており、敲打剥離による平面形成形以外には明確な加工痕・使用痕が無いことから、製品に加工される以前の段階のものである可能性が高いと考えるが、切っ先が鋭利なものもあり、そのまま使用された可能背も残している。素材は明確な人為的な加工痕が確認できないが、平面形や利用部位は貝斧と共通している。これら素材は複数の層位で確認できることから、貝斧に使用する素材として持ち込まれたものと捉えることができる。製品としての貝斧は、敲打によって平面形が整えられたものに加え、自然の風化や水磨によって形が整ったものを利用したものも存在しており、このような素材を基に石器に目立つ石皿に代表されるような泥岩・砂岩や石灰岩を利用して研磨し、製作されていたのではないかと考えられる。

表 25. 浦底遺跡 1 地点における貝斧の出土状況

層位	貝斧(製品)	貝斧(未成品)	貝斧(素材)	合計
表採	19		1	20
撹乱	5	1		6
Ⅰ層	5	1	1	7
Ⅱa層	1			1
Ⅱ層	26	3	1	30
Ⅲ層	15		2	17
Ⅲb層	2			2
Ⅳ層(区別無)	4	1	1	6
Ⅳa層	19	7		26
Ⅳb層	38	9	1	48
Ⅳc層	2			2
層位不明	2			2
合計	138	22	7	167

*Ⅲ層の1点はⅣ層の1点と接合。Ⅲ層1点としてカウント。
*製品:磨製の刃部を有するもの。破損品も含む。
*未成品:打割や敲打等の人為加工を有するが、磨製刃部がないもの。
*素材:明確な人為加工を持たないが、貝斧に類似する平面形をもつもの。

表 26. 浦底遺跡 2 地点における貝斧の出土状況

層位	貝斧(製品)	貝斧(未成品)	貝斧(素材)	合計
表採	1			1
Ⅰ層	4	2		6
Ⅱ層	4	6	1	11
Ⅱ層アゼ	1			1
Ⅲ層	5	8	1	14
Ⅲ層下部	1			1
Ⅳ層上面	1			1
Ⅳ層	4	4	3	11
Ⅴ層	13	4	3	20
Ⅴ層下部	1			1
合計	35	24	8	67

*製品:磨製の刃部を有するもの。破損品も含む。
*未成品:打割や敲打等の人為加工を有するが、磨製刃部がないもの。
*素材:明確な人為加工を持たないが、貝斧に類似する平面形をもつもの。

表 27. 浦底遺跡の遺構における貝斧の出土状況

層位	貝斧(製品)	貝斧(未成品)	貝斧(素材)	合計
19号集石			1	1
21号集石			1	1
22号集石		1		1
26号集石		2		2
27号集石		1		1
43号集石		1		1
111号集石	1			1
集石内			1	1
合計	1	5	3	9

*製品:磨製の刃部を有するもの。破損品も含む。
*未成品:打割や敲打等の人為加工を有するが、磨製刃部がないもの。
*素材:明確な人為加工を持たないが、貝斧に類似する平面形をもつもの。

最も出土数が多いシャコガイ製貝斧は、層位間での類型化と時間的変化が読み取れる可能性がある。概報でも類型案が示されているが（表 28）（城辺町教育委員会 1990）、この分類はシャコガイの利用部位で大別し、刃部形成（片刃/両刃）とサイズで更に細分した類型の提示となっている。しかし、点数比率や数値、層位間変化は示されていない。

表 28. 浦底遺跡出土貝斧の既存の分類（城辺町教育委員会 1990）

・A 類：シャコガイ蝶番部利用型（図 45）

- **a**：外側に研磨した刃を施すもので、斧の基端部に向かって薄くなる。
  小型（6～9 ㎝）、中型（9~13 ㎝）、大型（13 ㎝以上）が存在。
- **b**：外側に研磨した刃を施すもので、斧の頭部に向かって薄くならない。
  中型と大型が存在。
- **c**：内側に研磨した刃を施すもの。
  中型と大型が存在。
- **d**：外側と内側の両面に研磨した刃を施すもので、薄く平らな刃をもつ。
  小型と中型が存在。

・B 類：シャコガイ肋部利用型（図 46）

- 円形のカーブをもった刃をもつ
- 丸ノミの形状に類似する。

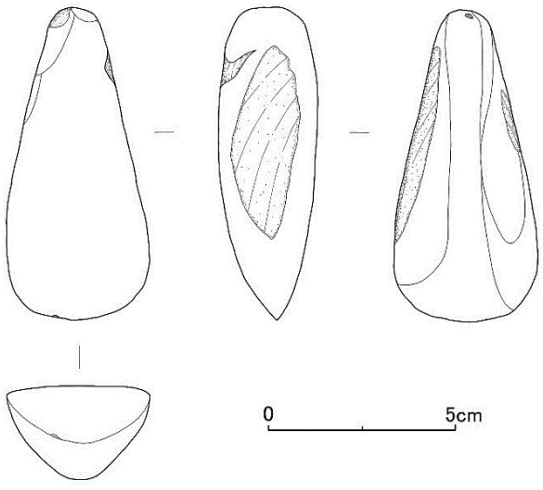


図 45. 浦底遺跡 1 地点Ⅳb 層出土の A 類貝斧
（筆者製図・沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵）

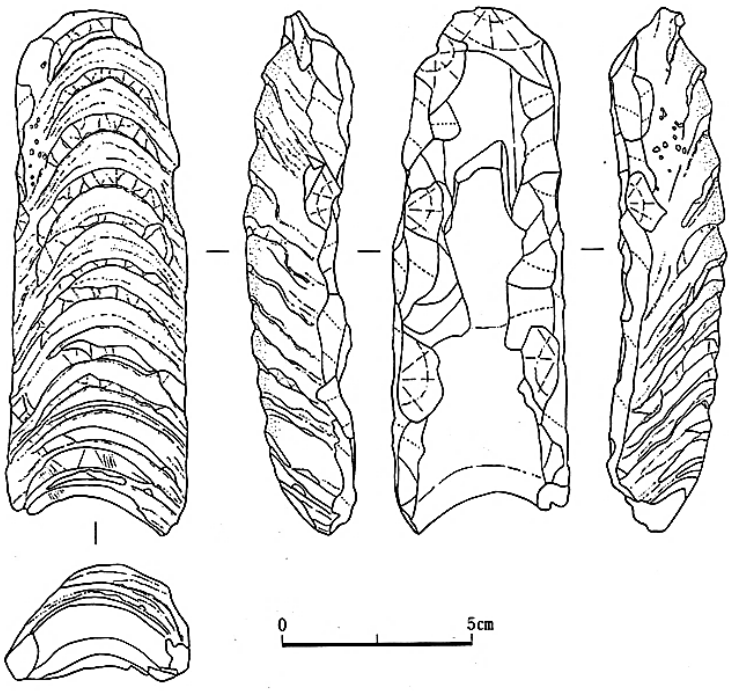


図 46. 浦底遺跡出土の B 類貝斧（2 地点Ⅳ層）
（岸本 2004b：332）

そこで、実物資料の観察を通して検証してみると、A 類のシャコガイの利用部位は溝のある蝶番（hinge）部分の利用（図 47：A）が最も多く全体（n=215）の 60%を占めることが確認できた（表採・攪乱除く。未成品・素材含む）。一方で、B 類の肋部利用型（図 47：B）は 10%程度で、他にも貝殻の縁辺部（図 47：C）を利用したもの、蝶番の溝の無い側（図 47：D）を利用するもの、部位は特定できないが貝殻の分厚い部分の内層部（殻の表面部を取り除いた貝殻の中心部）だけを利用したものと、複数のバリエーションが確認可能で、利用部位は 2 類型で大別できるとは言い難いことが読み取れる。B 類はむしろ丸ノミ形刃部を持つことから（図 46）、道具の機能的な違いとして分類されている面があるが、その場合は刃部形態から蝶番利用型も含めて再分類する必要がある。

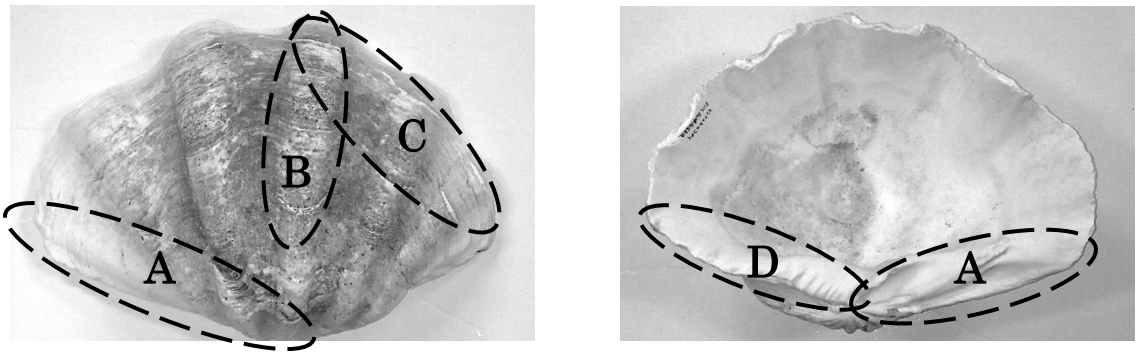
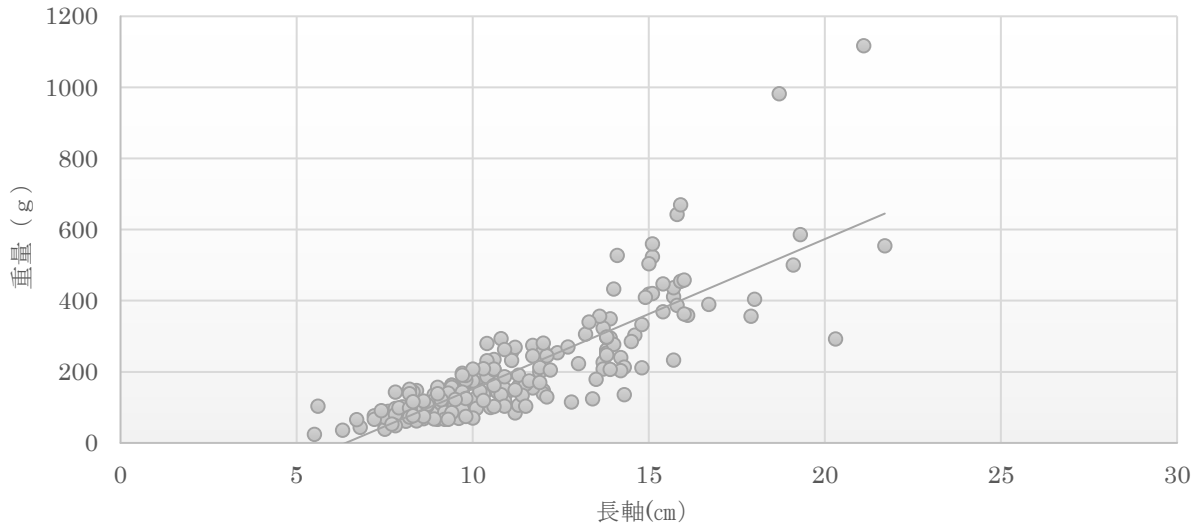


図 47. 貝斧の利用部位（ヒレジャコガイを例として）

一方で、実際に浦底遺跡出土のシャコガイ製貝斧における完全な片刃は、刃部が確認できる資料（n=136）の僅か 5%程度に過ぎない。貝斧は殻の外側（45 図左）と内側（45 図右）に研磨を施して刃を付すが、殻内外両面を研磨する貝斧が多く、片側の研磨が極端に強い刃が 24%、両側ともほぼ同程度に研磨する両刃が 71%と最多を数える。

サイズに関して検証してみると（表 29）、貝斧の長軸の長さ（縦の長さ）では、7-12 ㎝にサイズが集中することが読み取れる。既存の分類では、小型（6～9 ㎝）、中型（9~13 ㎝）、大型（13 ㎝以上）と分けているが、長軸サイズの分布は 7-12 ㎝、13-16 ㎝、17 ㎝以上で凡その纏まりを示しており、大型のサイズは少ない傾向を示している。また、重量は長軸サイズと比例する傾向を示しているが、こちらも 200g 以下に集中し、600g を超す重量の貝斧は僅かで、こちらも大型の貝斧が浦底遺跡では少ないことを示している。

表29. 浦底遺跡貝斧サイズ比率（縦：重量(g)／横：長軸(cm)）
（n=194 表採・攪乱を除く。中央線は線形近似）



貝斧の分類に関しては、石斧の断面形の分類との比較から言及した示唆（松葉 2007）も存在するが、貝斧の断面形は素材の形（蝶番や肋など）に影響される部分が大きく、加工も元の形態を大きく変化させるようには行われていない。

貝斧に関しては、平面形成形と刃部成形における加工痕が顕著で、比較的製作労力が投下されていることが読み取れる。これは、これらの形態変異に製作者の選択が働いている可能性を示している。特に刃部形態（片刃/両刃・平面形・断面形）に関しては、既存の分類（表 28）で丸ノミ形の B 類が類型化されているように、道具の機能的な分類や作り分けを反映させている可能性が高い。浦底遺跡の貝斧に関しては、これらを層位間で比較することによって、貝斧の時間的変化にもアプローチできると考えるが、この点に関しては宮古島における他の遺跡で出土した貝斧との関連も踏まえて、後述することとしたい。

③貝斧以外の貝製品

貝斧以外の貝製品では、ソデボラ科のスイジガイを加工した人工遺物の出土が目立つ（表 30）。このスイジガイ製の遺物は、スイジガイの突起を研磨し、鑿状・錐状の尖端部を作り上げており、他の遺跡で出土するスイジガイ製利器と形態や製作技法は共通している。

表 30. 浦底遺跡出土の貝製品（貝斧を除く）

1地点

層位	スイジガイ				イモガイ	巻貝			二枚貝		ソデボラ科	合計
	鑿	錐	鑿/錐	不明	プレート	有孔	研磨	孔/磨	有孔	剥離	有孔	
表採(地区不明)	3			7	1		1				2	14
撹乱						1						1
試掘				1								1
21号集石											1	1
26号集石				1								1
82号集石				1								1
Ⅰ層							1					1
Ⅱ層	4		1	3			2	1	1		1	13
Ⅲ層	1	1		1					1		2	6
Ⅲb層	1											1
Ⅲ層アゼ				1								1
Ⅳ層(区別無)	1			1	1	1						4
Ⅳa層		2		2							1	5
Ⅳb層上部											1	1
Ⅳb層	4	1		2					1	2	1	11
合計	14	4	1	20	2	2	4	1	3	2	9	62

*一段目は素材の貝類。ソデボラ科はホラガイ・スイジガイ・クモガイを含む。ホラガイが最多。
・スイジガイ:鑿:鑿状尖端。錐:錐状尖端。鑿/錐:複数突起で両方の尖端を有す。不明:破損して先端形状不明。
・イモガイ:プレート:イモガイの殻側面をプレート状に切り出したもの。研磨加工はなし。
・巻貝:有孔:孔を刺突/回転穿孔で穿つもの。研磨:孔は無いが研磨するもの。孔/磨:孔と研磨を兼ね備えるもの。
・二枚貝:有孔:刺突で殻に内部から外へ向けて孔を穿つもの。剥離:敲打で縁辺部を剥離したもの。
・ソデボラ科:有孔:殻の外側から刺突や打撃で孔を穿ったもの。製品ではなく食用の為の加工である可能性がある。

2地点

層位	スイジガイ		イモガイ	巻貝		二枚貝	タカラガイ	ソデボラ科	不明	合計
	鑿	不明	プレート	有孔	孔/磨	有孔	有孔	有孔	鑿状	
Ⅰ層									1	1
Ⅱ層	1	1				1				3
Ⅲ層	1		1	2		1	1	1		7
Ⅳ層	3	1		2				1	1	8
Ⅴ層	1				1	2				4
合計	6	2	1	4	1	4	1	2	2	23

*一段目は素材の貝類。ソデボラ科はホラガイ・スイジガイ・クモガイを含む。ホラガイが最多。
・スイジガイ:鑿:鑿状尖端。不明:破損して先端形状不明。
・イモガイ:プレート:イモガイの殻側面をプレート状に切り出したもの。研磨加工はなし。
・巻貝:有孔:孔を刺突/回転穿孔で穿つもの。孔/磨:孔と研磨を兼ね備えるもの。
・二枚貝/タカラガイ:有孔:刺突で殻に内部から外へ向けて孔を穿つもの。
・ソデボラ科:有孔:殻の外側から刺突や打撃で孔を穿ったもの。

スイジガイ以外では、長墓遺跡と共通する巻貝の螺頭部に穿孔する巻貝有孔製品や、二枚貝の殻に内面から穿孔する有孔製品が出土しており、宮古島の他の遺跡との共通する人工遺物が確認されている。一方で、ソデボラ科のホラガイに穿孔したものや、イモガイの殻の側面部を細長く切り取ったものが出土しており、これは他の遺跡では確認できない。但し、これらは他に研磨などの加工や使用痕も無いものも多く[38]、貝の食用利用時における加工であった可能性も残されている。

また、貝種は不明ではあるが、尖端部が鑿状に加工された貝製品が 2 地点から 2 点確認されている。概報（城辺町教育委員会 1990）では小型貝斧と報告されているが、長軸（長さ）3-4 ㎝、短軸（幅）0.7-1.8 ㎝、重さ 5-8g と非常に小型で、前述のシャコガイ製貝斧のサイズと比較しても大きく異なる。これらと類似したサイズでは、鑿状尖端のスイジガイの突起（突起のみの加工と利用）が出土していることから、貝斧ではなく鑿状のスイジガイ利器に共通する機能を持った道具であると考えられる。

④獣骨牙・サメ歯製品

石器・貝製品以外では、イノシシの骨や牙、サメの歯を加工した製品が出土しており、数量は少ないものの、比較的下層から上層まで出土が確認できる（表 31）。

表 31. 浦底遺跡出土の獣骨牙・サメ歯製品

1地区

層位	イノシシ骨	イノシシ牙			サメ歯	合計
	研磨	研磨	有孔	磨/孔	有孔	
Ⅰ層						0
Ⅱ層	1		1		1	3
Ⅲ層						0
Ⅳa層					1	1
Ⅳb層				1		1
合計	1		1		2	4

*一段目は製作素材を示す。
イノシシ骨:研磨:イノシシの骨の一部を磨き、錐状の尖端部を作るもの。
イノシシ牙:研磨:イノシシの牙の一部を磨き、尖端部を作るもの。
イノシシ牙:有孔:イノシシの牙に回転穿孔で孔を穿つもの。
イノシシ牙:磨/孔:イノシシ牙に回転穿孔し、一部を磨くもの。
サメ歯:有孔:サメ歯の付け根に刺突/回転穿孔で穿孔したもの。

2地区

層位	イノシシ骨	イノシシ牙			サメ歯	合計
	研磨	研磨	有孔	磨/孔	有孔	
Ⅰ層						0
Ⅱ層		1			1	2
Ⅲ層				1	2	3
Ⅳ層	1					1
Ⅴ層	1					1
合計	2		0		3	5

*一段目は製作素材を示す。
イノシシ骨:研磨:イノシシの骨の一部を磨き、錐状の尖端部を作るもの。
イノシシ牙:研磨:イノシシの牙の一部を磨き、尖端部を作るもの。
イノシシ牙:有孔:イノシシの牙に回転穿孔で孔を穿つもの。
イノシシ牙:磨/孔:イノシシ牙に回転穿孔し、一部を磨くもの。
サメ歯:有孔:サメ歯の付け根に刺突/回転穿孔で穿孔したもの。

イノシシ骨を利用した製品は尖端部しか残存していないが、トゥグル浜遺跡や下田原期の下田原貝塚で出土する骨針とほぼ共通しており、複数方向からの研磨で錐状の尖端部を作り出している（図 48）。イノシシの牙に関しては回転穿孔で孔を穿つものの、研磨は殆ど加えず、尖端はほぼ天然の形状を保っている。

図 48. 2 地点Ⅳ層出土のイノシシ骨製品
（筆者製図・沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵）

サメ歯の製品に関しては、サメの歯の天然の形状を保ち、歯の根元部分に刺突・回転穿孔で孔を穿つ。こちらも形状や技術は、長墓遺跡やアラフ遺跡のものと同じものである。

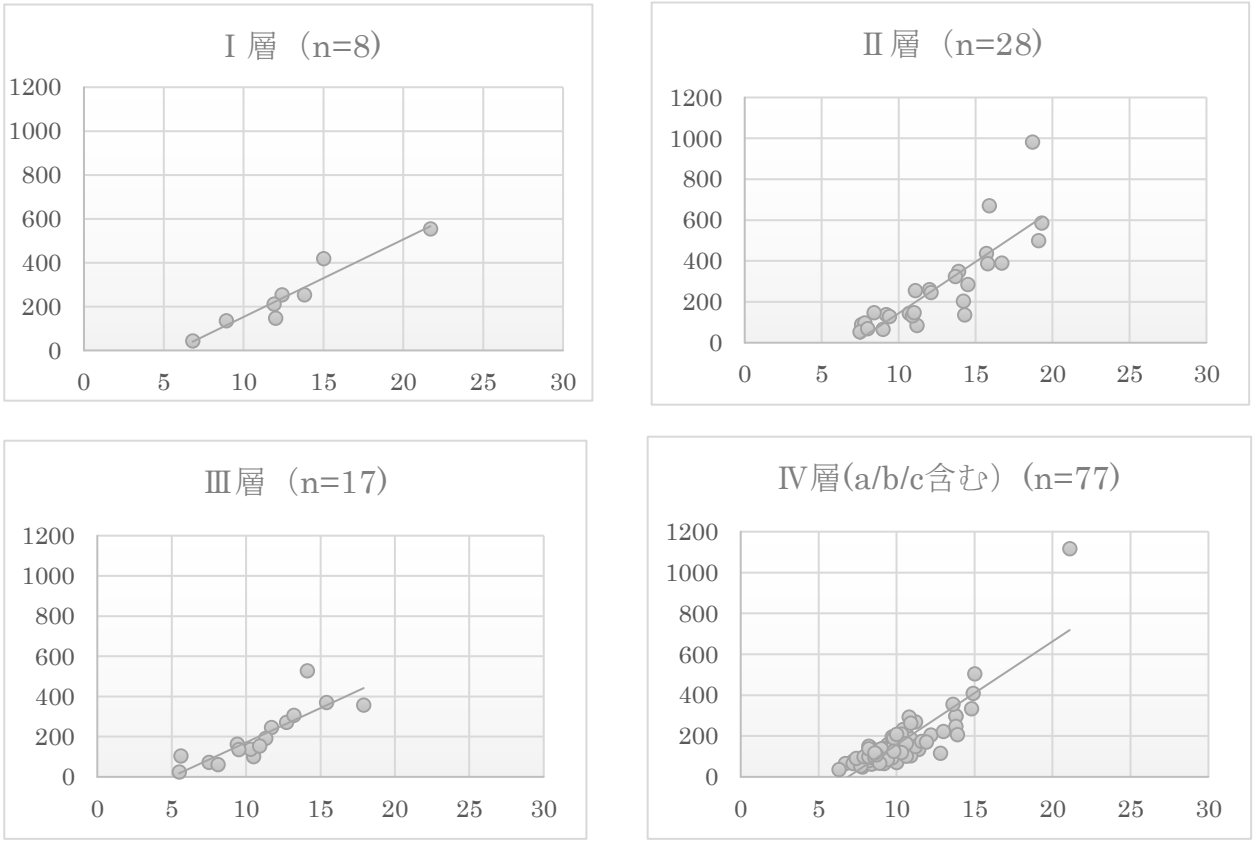
・浦底遺跡出土貝斧の時間軸上変異と、遺跡間の比較

浦底遺跡の貝斧に関して触れた様に、本遺跡では多数の貝斧が出土しており、サイズや形態に変異が存在する可能性が考えられる。そこで本項では、さらに踏み込んでサイズや刃部形態から見たバリエーションの可能性と、層位別に見た時間的変異にアプローチする。

① 浦底遺跡の貝斧の時間的変異

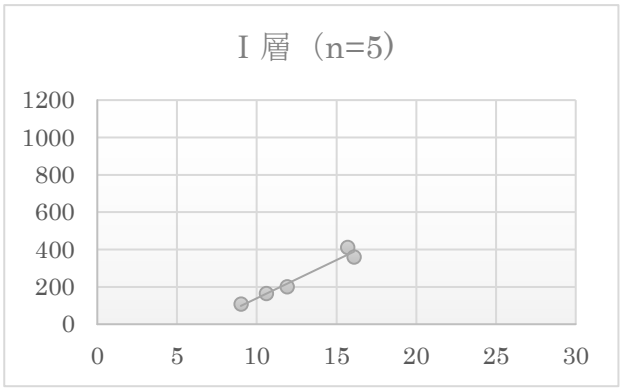
浦底遺跡全体の貝斧サイズに関しては、貝斧の長軸の長さ（縦の長さ）が 7-12 ㎝に比較的集中し、重量も比例の関係にあることが読み取れる。これを層位別に見てみると、1 地点では下層のⅣ層から上層のⅡ層に向けて、大型で重量のあるサイズが増加し、サイズバリエーションにバラつきが生じる傾向が読み取れる（表 32）。層位によって出土数が異なるが、比較的出土数の多く分布がばらつきやすいⅣ層で、長軸 7-12 ㎝、重量 200g 以下にサイズの分布が集中している傾向を示している。

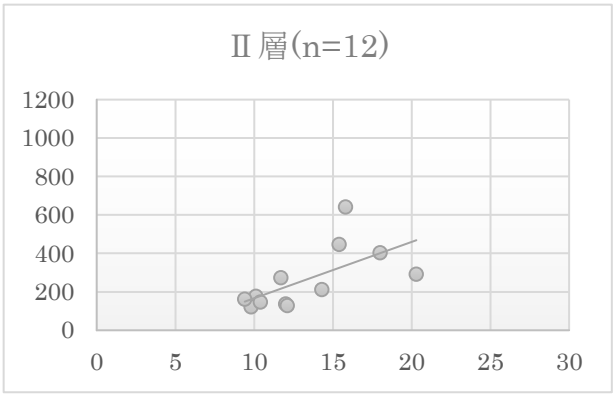
表 32. 1 地点における貝斧のサイズ分布（縦:重量(g)/横:長軸(cm)・線:線形近似）

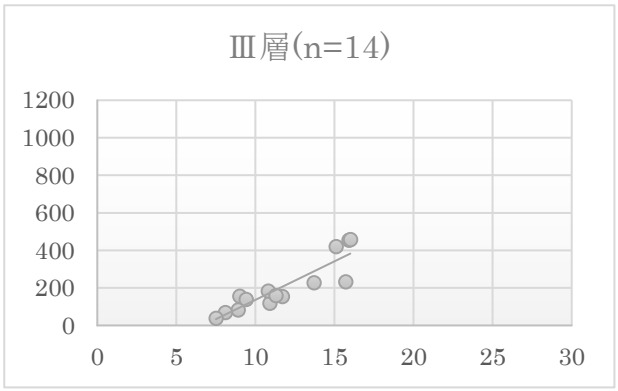


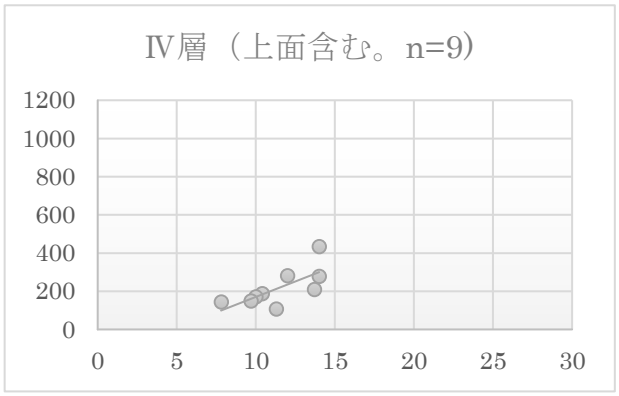
1 地点に対し、2 地点での貝斧の出土数は少ないが、サイズの分布は 1 地点の傾向と大きく変化しない。また、こちらも下層であるⅤ層から、上層のⅡ層にかけて 1 地点の同様にサイズ分布が並行する傾向が読み取れる。Ⅴ～Ⅲ層では長軸 15 ㎝以下、重量 400g 以下にサイズが分布するが、Ⅱ層ではより大型で重量が重い個体が出現し、サイズのバリエーションが増加している。2 地点は 1 地点に比べると出土数は少なく、纏まりや傾向を読み取るのは難しいものの、上層にかけて大型で重量の重いサイズが増え、サイズバリエーションが増加するという傾向が共通する点を指摘することができる。

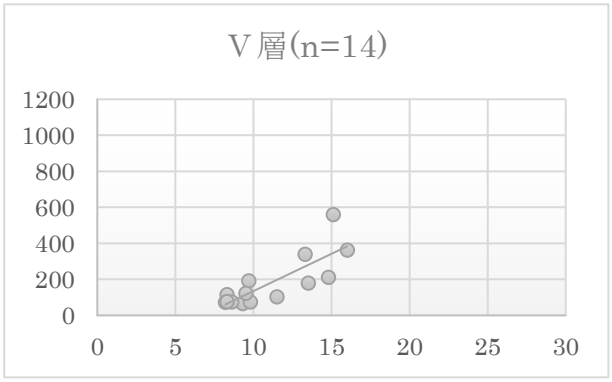
表 33. 2 地点における貝斧のサイズ分布（縦:重量(g)/横:長軸(cm)・線:線形近似











続いて、貝斧の刃部形態の変異を検証することとする。前述の浦底遺跡の属性分析における貝斧の項目で示しているように、刃部の成形は最も加工が入念に行われており、その形態によって機能分化している可能性が考えられる。そこで本項では、貝斧の刃部における「平面形態」・「刃部の付け方」・「刃部の断面形」からアプローチを試みた。

「平面形態」に関しては、大きく A：直線状、B：蛤の縁のように円弧の刃縁、C：断面形が丸ノミで平面形が A・B とは異なるもの、に大別した（図 49）。C に関しては C1：刃縁が凹状になるもの、C2：刃縁が凸状になるもの、C3：刃縁が直線状になるものに細別することができる。C タイプは実質、概報（城辺町教育委員会 1990）で示された B 類に該当する。A・B に関しても、平面から見た刃縁が左右対称ではなく斜めになるものが確認できるが、点数が少なく、今回は分類を見送った。

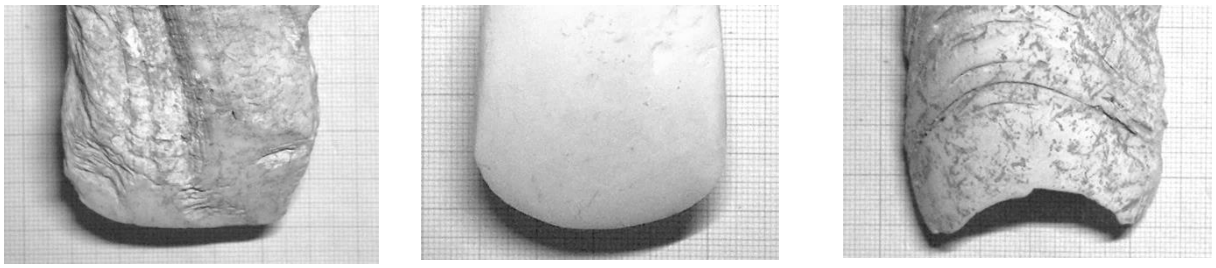


図 49. 貝斧の刃部平面形分類（左：A タイプ、中央：B タイプ、右：C タイプ）

「刃部の付け方」に関しては、a：殻の内外の片側からのみ研磨する「片刃」、b：殻の内外両側から研磨するが明確に片側からの磨きだしが強い「半両刃」、c：殻の内外からの磨きだしが殆ど同程度な「両刃」に分類することができる（図 50）。

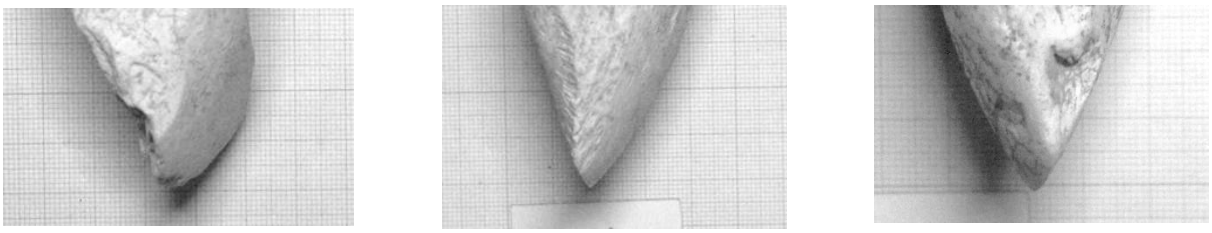


図 50. 貝斧の刃部の付け方分類（左：a タイプ、中央：b タイプ、右：c タイプ）

「刃部の断面形」は、刃縁を垂直方向から見た時の刃縁頂部の形を指し、1：直線状の刃縁、2：弧状の刃縁で弧の頂部が殻の外側に向くもの、3：弧状の刃縁で弧の頂部が殻の内側を向くものの 3 種に分類した（図 51）。平面形で C タイプに分類した丸ノミ形は、刃部断面形では 2 の弧状（外側へ頂部が向く）タイプに該当し、断面形のみで見れば丸ノミ形は他の平面形 A・B の 2（弧状刃縁）タイプと大きく異なることはない。

本項では、刃部形態をこれら 3 つの視点からの分類を組み合わせて表現し（e.g. B-c-3）、バリエーションの有無と、層位間の傾向・時間的変化を検証することとする。

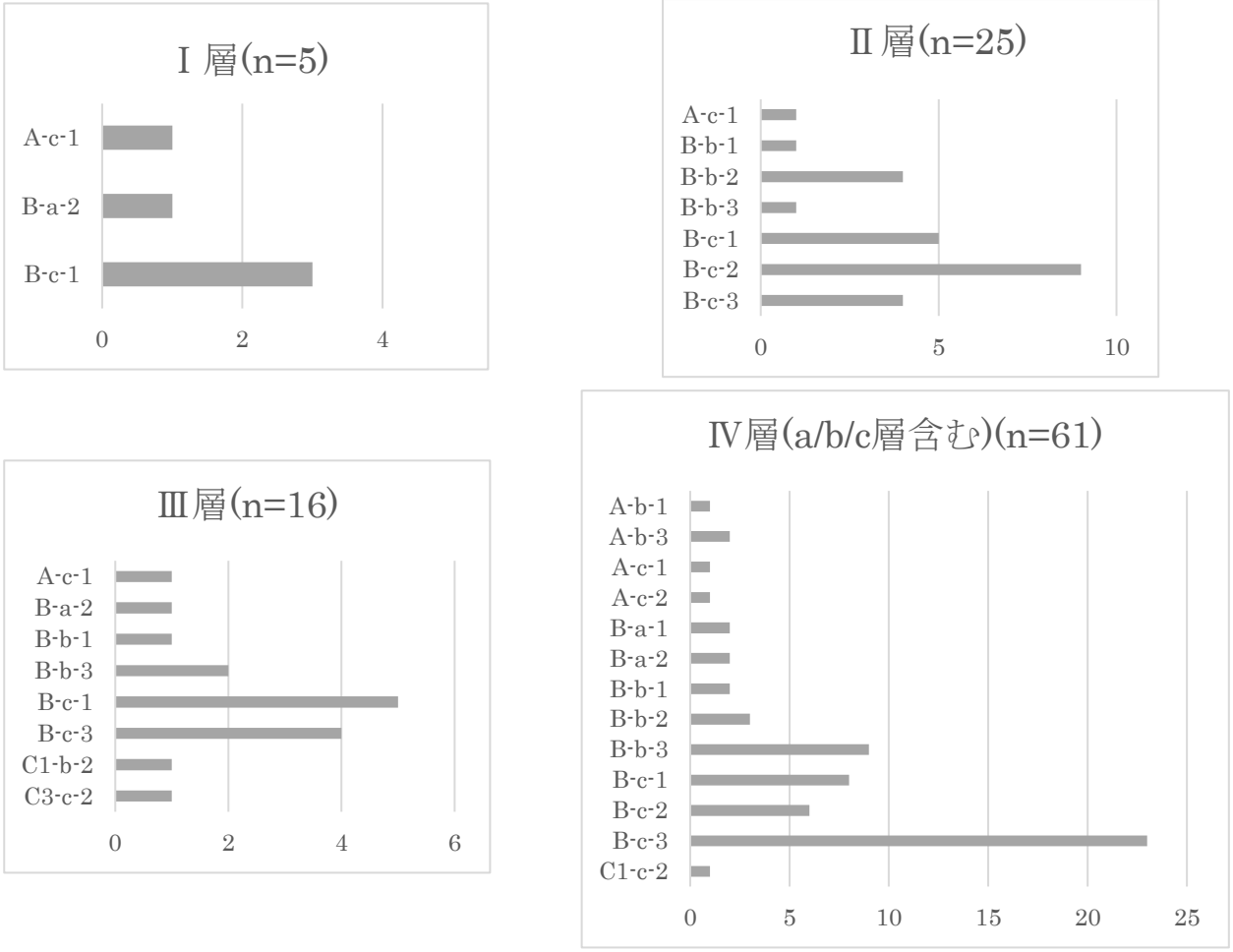
図 51. 貝斧の刃部平面形分類
左：直線状刃縁（1 タイプ）
中：弧状刃縁（殻外に弧状の頂部が向くもの）（2 タイプ）
右：弧状刃縁（殻内に弧状の頂部が向くもの）（3 タイプ）

まず、1 地点に関して見てみると（表 33）、全体的に概報の B 類に当たるシャコガイの肋部（rib）を利用した丸ノミ形の平面形 C タイプが少なく、蝶番（hinge）や殻腹や縁辺を利用した蛤刃の B タイプが多いことが読み取れる。また、刃の付け方では完全な片刃である a タイプは少なく、殻の内外両面から磨く b か c タイプが大半で、両刃の c タイプが

いずれの層位でも多数を占めることも確認することができる。刃部断面形に関しては、全層を通して直線状に比べて弧状の刃縁が多い。いわゆる丸ノミ形も弧状刃縁に含まれるが、このような弧状刃縁の機能を有する貝斧が主として必要とされていたことを示している。

属性の組み合わせで見た場合、最も出土数が多いⅣ層では B-c-3 タイプが 30%以上を占めており、次いで B-b-3 が多いなど、刃部断面の 3 タイプ（弧状刃縁の頂部が殻内部を向くタイプ）が目立つ。このタイプはⅢ層でも確認できるが、Ⅱ層では減少し、Ⅰ層には見られない。2 地点に関しては、刃部が確認できる個体が少ないが、こちらも B-c-3 は下層のⅤ層やⅢ層のみでしか確認できず、刃部断面の 3 タイプはⅡ層以降に見られない。

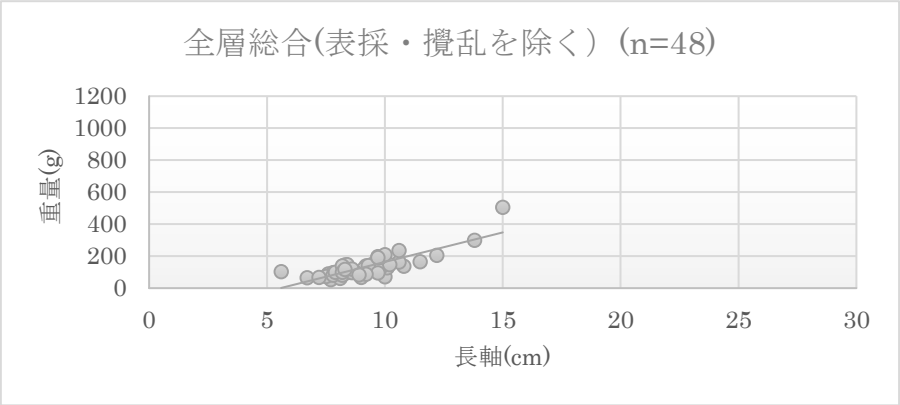
表 34．1 地点の貝斧刃部形態変異（刃部が残存する個体のみで計測）



B-c-3、B-b-3 タイプは 3 タイプの刃部断面で共通しているが、他にも貝斧の全面を研磨した全磨製が多いという点と、比較的小型の製品が目立つという点が共通する。B-c-3 に関しては 3 タイプ刃部（n=35）の 86%を全磨製品が占めており、残りも胴部の凸部や側面などを磨き込み、殻外に当たる面を平坦に整形する。B-b-2 に関しても同様で、全磨製が全体（n=12）の 67%を占め、残りも胴部の凸部や側面などを磨き込み、殻外面を平坦に整形しており、刃部のみを磨いたものは 1 点に止まっている。全磨製と殻外面の平坦整形は B-c-3、B-b-3 などの刃部断面 3 タイプの特徴であり、素材として必ずシャコガイの蝶番（hinge）を利用する点は共通している（図 45）。

また、これらのタイプのサイズを確認してみると（表 35）、その殆どが長軸 10 ㎝前後かそれ以下で、重量が 100g 程度の小型の貝斧が多いことが読み取れる。1 地点・2 地点ともに下層で小型の貝斧が多くなる傾向があることは既に示したが、その小型の貝斧の多くは B-b-3 や B-c-3 タイプが占めていることが読み取れる。

表 35. A-b-3/B-b-3/B-c-3 のサイズ分布（縦:重量(g)/横:長軸(cm)・線:線形近似）



以上のように、浦底遺跡の貝斧は、下層から上層にかけて貝斧のサイズに大型のものが増加するということと、全磨製の弧状刃縁（殻内に弧の頂部が向く）タイプ：B-c-3、B-b-3 の貝斧が減少していく傾向が読み取れる。一方で、刃部形態における平面形態・刃部の付け方・刃部断面形態におけるどのバリエーションも、基本的に全層で確認することができることから、貝斧の道具としての機能が明確に変化していく様子は確認できない。現資料から指摘できるのは、サイズや製作工程、形態に存在した一定の纏まりが、上層にかけてばらつくようになるということである。全磨製や殻外面を平坦に整形する貝斧の比率が減り、自然面を残す貝斧が増えるという点は、貝斧製作における工程の効率化（簡素化）という傾向としても解釈することができるだろう。

浦底遺跡の層位に関する情報で述べたように、現時点での本遺跡の層位の把握は人工遺物の注記に拠っている。その為、現時点での層位間の特徴は、暫定的なものとなっており、厳密に時期差を示しているかどうかは曖昧な部分を残さざるを得ない。そこで、次項では宮古島における他の遺跡の貝斧との比較を通して、浦底遺跡で確認された貝斧の時間的変化を検証することとする。

②宮古島の遺跡間で見た貝斧の変異

浦底遺跡の貝斧の特徴を踏まえて、本項では宮古島の他の遺跡である長墓遺跡・長間底遺跡・アラフ遺跡・友利元島遺跡と比較することとする。遺跡で示された放射性炭素年代は、アラフ遺跡の下層が浦底遺跡と同様に比較的古く、長墓遺跡と友利元島遺跡が比較的新しい年代値を示している。

・長間底遺跡の貝斧

長間底遺跡ではⅢ層から 3 点貝斧が出土しており、遺跡近くの盛土からも 8 点貝斧が出土している。但し、Ⅲ層と盛土が同じ時期であるか、無土器期に属するかどうかは判然としない。また、Ⅲ層に関しても具体的な年代値は示されていない。

Ⅲ層で出土した貝斧に関しては、浦底遺跡で出土した貝斧と大きく製作技法は変わらない。図 52 の 1 は蝶番部とは逆のサイドのみを打割・敲打して平面形を成形し、2・3 は両側面を敲打で整形する。刃部を付しているのは 2 のみで、蛤刃・両刃・若干弧状（外側へ弧の頂部がくる）の刃部を持つ B-c-2 タイプに当たる。2 は一見全磨製に見えるが、貝殻の内層部を利用した製品で自然面を残している。浦底遺跡に見られる全磨製製品は敲打痕も磨き潰すが、長間底遺跡の貝斧にはそれが見られず、基本的に刃部磨製に止まる。

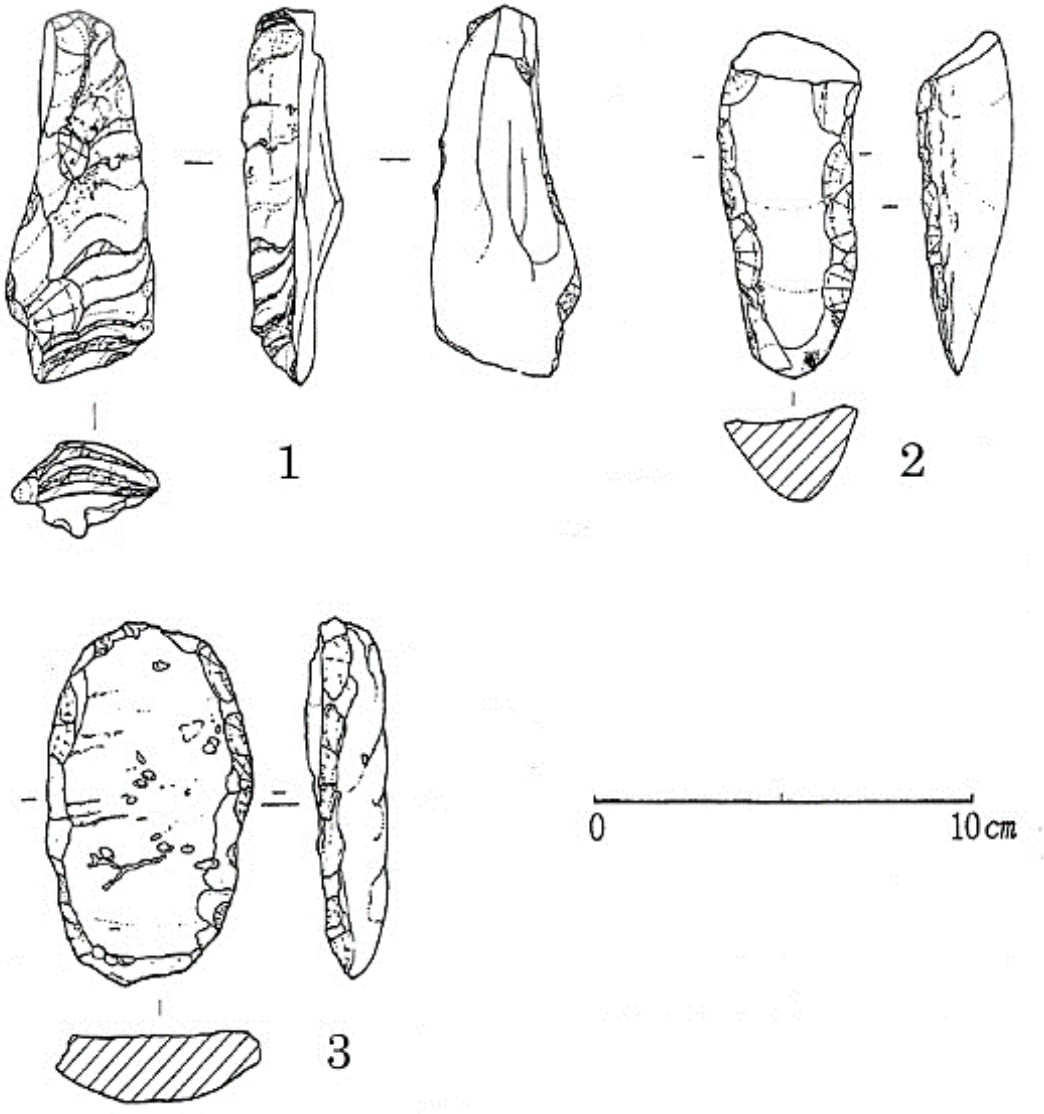


図 52. 長間底遺跡Ⅲ層出土のシャコガイ製貝斧（1・3 は刃部無し）
（沖縄県教育委員会 1984）

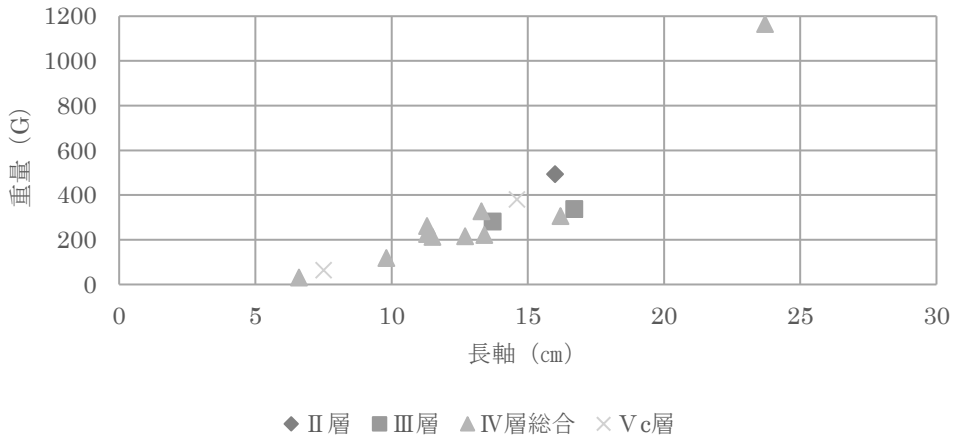
・アラフ遺跡

アラフ遺跡では、Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅳb 層・Ⅳc 層・Ⅴb 層で貝斧が出土している。本遺跡では複数の層位で放射性炭素年代値が示されており、Ⅱ層では cal AD782-857、Cal AD1,215 の値が示されていることに加えて土器を供出することから、無土器期以降の沖縄本島のグ

スク時代に並行する時期か、それに近い時期の属するものと考えられる。Ⅲ層では Cal AD80、Cal AD120、Ⅴb 層では Cal BC 390 が得られており、Ⅳ層では年代値が示されていない。アラフ遺跡では報告書（アラフ遺跡発掘調査団 2003）では報告されていないが、貝斧が 4 点纏まった状態で出土しており（江上 2007)、報告に拠ればこれはⅣ層に当たる位置からの出土であるものと考えられる。

アラフ遺跡は比較的貝斧が複数出土している。そこで、そのサイズの分布を見てみると（表 36)、浦底遺跡の下層（Ⅳ層）に比べてやや大型の貝斧が多い傾向を読み取ることができる。出土している貝斧は長軸 10 ㎝前後、100g 程度の小型のものも確認できるが、いずれも比較的下層のⅣ層やⅤc 層からの出土となっている。

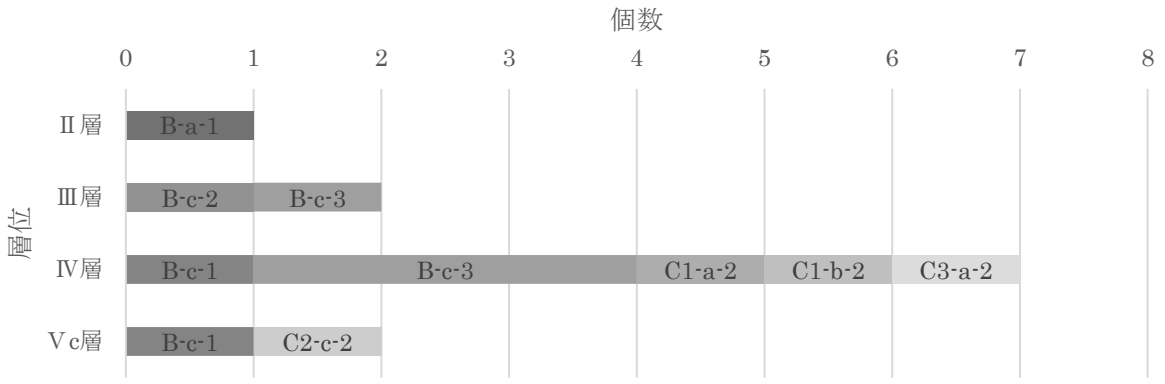
表 36. アラフ遺跡出土貝斧のサイズ分布(n=15　表採・攪乱を除く)



刃部の形態に関して見てみると(表 37)、B-c-3 タイプが最も多く出土しており(図 50)、シャコガイの肋を用いる C タイプの貝斧も古い段階から確認することができる。

B-c-3 タイプは長軸 10 ㎝前後～最大約 16 ㎝で、1 点 300g の比較的大型のものも見られるが（図 53)、他は 200g 前後に収まっており、殻外面を研磨して平坦にする点や蝶番部（hinge）利用は、浦底遺跡の B-c-3 タイプと共通した特徴を示している。但し、浦底遺跡の B-c-3 タイプの入念に磨き込んだ全磨製のものに比べると、比較的自然面を残した粗い作りとなっている。

表 37. アラフ遺跡出土貝斧の刃部形態変異（刃部残存製品に限定）



また、比較的新しいⅡ層で出土している貝斧はシャゴウガイ（Hippopus hippopus）を利用した貝斧で、刃部以外を磨かない。アラフ遺跡で出土する貝斧は全磨製の製品が、12点中2点と、比較的少ない傾向を示している。

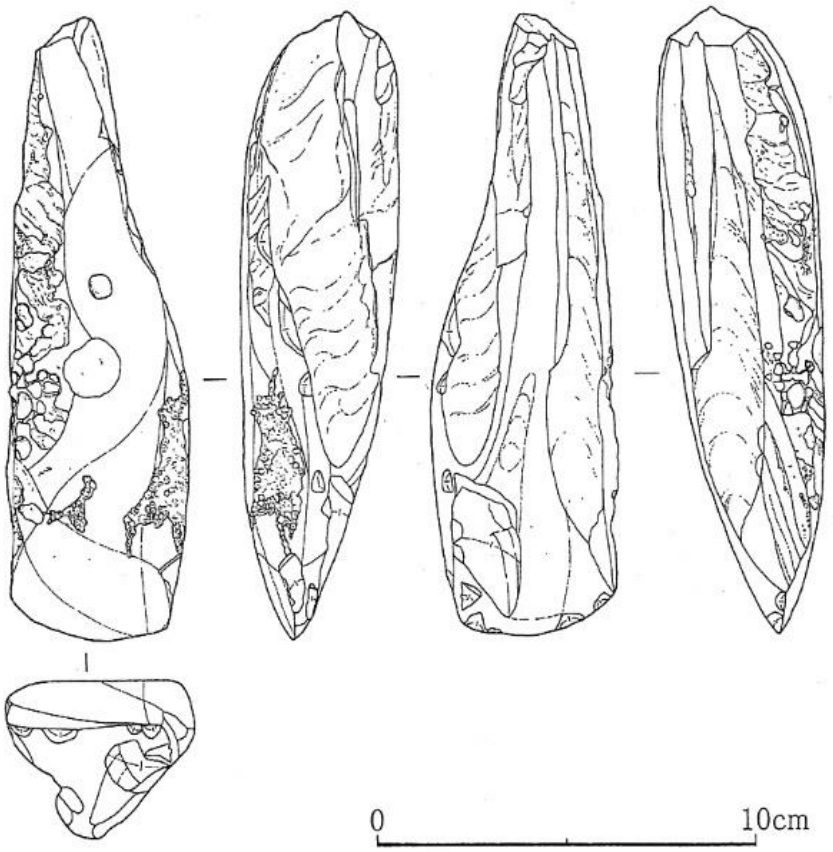


図 53. アラフ遺跡Ⅲ層出土の貝斧（アラフ遺跡発掘調査団 2003）

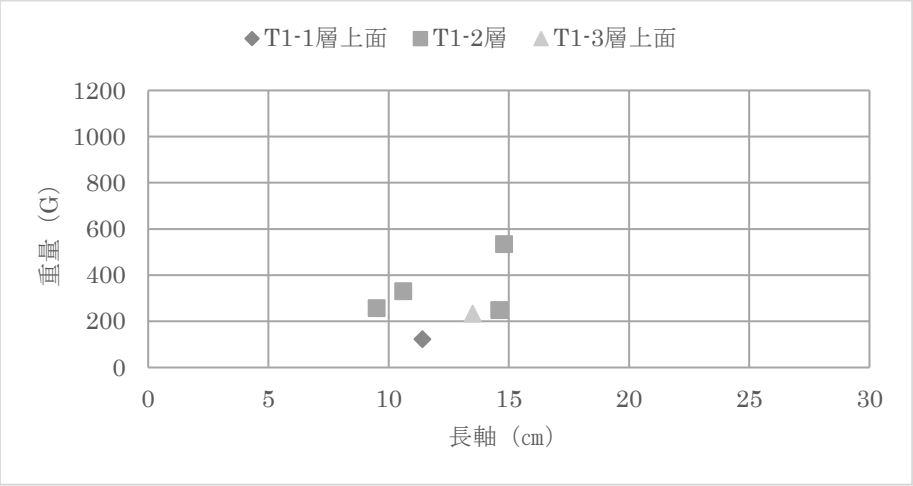
・長墓遺跡

長墓遺跡は、二つのトレンチ（T1/T2）で構成され、T1 トレンチの 1 層・2 層・3 層上面から貝斧が出土している（長墓遺跡調査団 2013）。T1-2 層では放射性炭素年代で AD48-129 年、T1-3 層では AD572-645 年の値が示されており、2・3 層は逆転する年代になっていることから T1-2 層は少なくとも T1-3 層の年代よりは新しい年代である可能性が高い。

出土した貝斧は表採を除くと 6 点で、纏まりを見ることは難しい。サイズに関しては長軸 10-15 ㎝、重量約 100g-600g の間に分布する（表 38）が、浦底遺跡のような時間軸上の変異を認めるまでには至らない。

個々の貝斧を見てみると、B-c-3 のように入念な研磨と、殻外面が平坦に整形された貝斧は存在せず、T1-2 層・3 層上面の局部磨製の貝斧 2 点は敲打整形のみで作りが粗い（図 54）。また、6 点中 4 点は研磨した刃部を有さない、貝斧の未成品であると考えられる。

表 38. 長墓遺跡の貝斧サイズの分布（n=6）



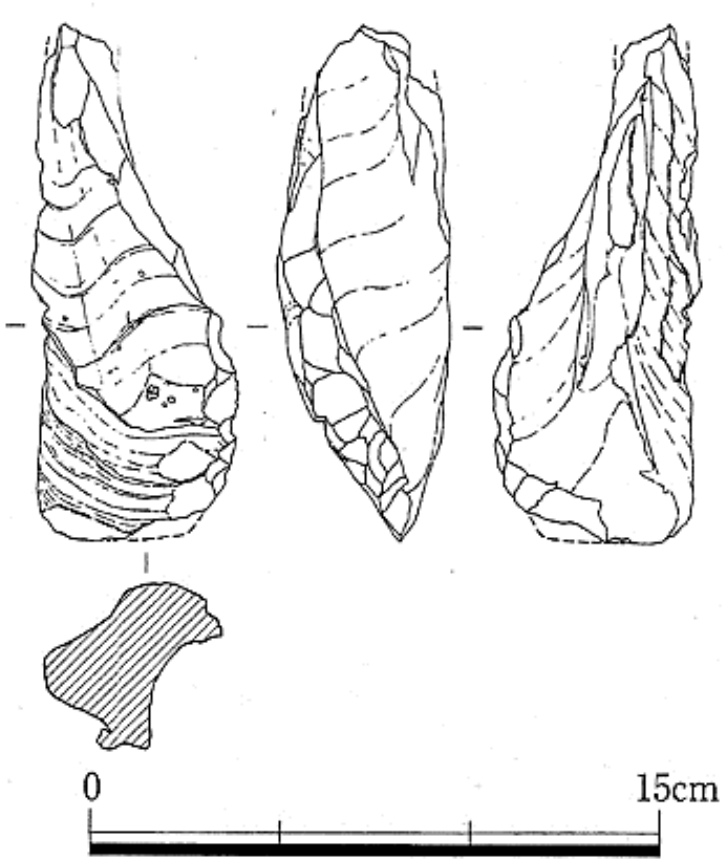


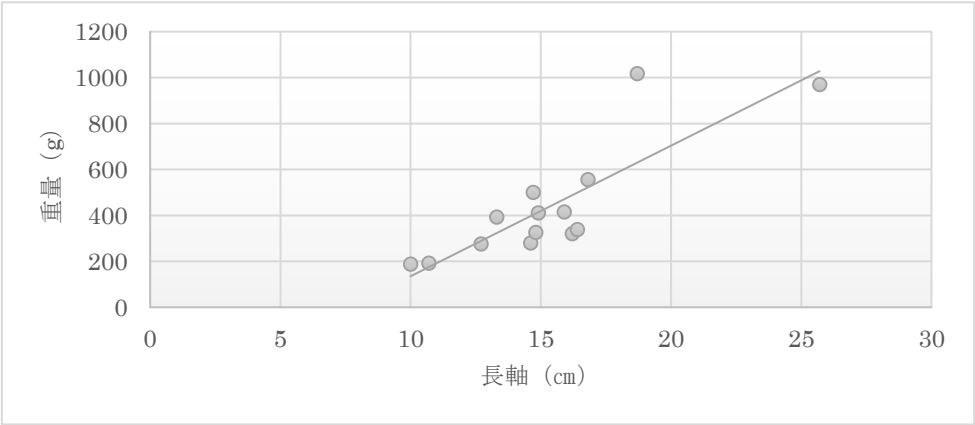
図 54. 長墓遺跡 T-1 トレンチ 3 層上面出土のシャコガイ製貝斧
（長墓遺跡調査団 2013）

・友利元島遺跡

友利元島遺跡は 15 層で無土器期の遺物包含層が、13 層でグスク時代の土壙墓が検出されており、無土器期と 11 世紀以降の時期との複合遺跡である。15 層からは 15 点の貝斧が出土しており、これは浦底遺跡に次ぐ出土数となる。15 層では ^{14}C 年代の較正年代値で AD 674-776 年, AD 408-535 年の値が示されており、長墓遺跡の T1-2・3 層、アラフ遺跡のⅡ層と同様に比較的新しい年代が提示されている。

出土した貝斧のサイズ分布を見てみると（表 39)、長軸 15 ㎝前後、400g 前後の比較的大型の貝斧が多く、長軸が約 20 ㎝からそれ以上、重量が約 1 ㎏近くなる非常に大型の貝斧も確認できる。貝斧のサイズの分布は浦底遺跡 1 地点のⅡ層に類似している。

表 38. 友利元島遺跡の貝斧サイズの分布
（n=14 表採・破損品を除く。線は線形近似）



刃部形態に関しては、刃部平面形 A・B タイプ、刃部断面 1・2 タイプが万遍なく出土しており、刃の付け方も a から c タイプまで確認することができる（表 39)。一方で、浦底遺跡、アラフ遺跡に共通する B-c-3 のような、殻内側へ弧状の頂部がくる弧状刃縁や全磨製の貝斧は確認できない。殻外面を研磨し、比較的平坦に整形する貝斧（図 55）は 2 点確認できるが、11 点が刃部のみの局部磨製（図 56）で、もう 1 点は胴部の凸部を磨くに止まる。B-b-3 や B-c-3 が確認できない点は、サイズと併せて、浦底遺跡Ⅱ層で B-b-3 や B-c-3 が減少していく傾向や、全磨製品が減少していく傾向と一致する。

表 39. 友利元島遺跡の貝斧における刃部形態の変異

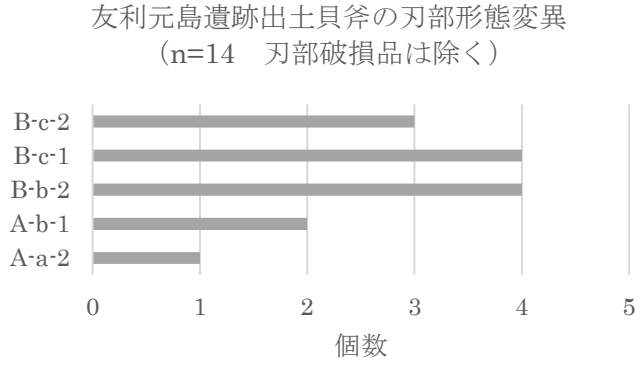


図 55. 友利元島遺跡出土の貝斧（S=1/2 殻外面研磨）
（筆者撮影・宮古島市教育委員会所蔵）

図 56. 友利元島遺跡出土の貝斧（S=1/2 刃部磨製）
（筆者撮影・宮古島市教育委員会所蔵）

・遺跡間比較から見える宮古島の貝斧の時間的変異

浦底遺跡の貝斧に関しては、層位的な特徴から、貝斧の大型・重量サイズの増加、B-b-3 や B-c-3 のような入念に研磨を施す製作コストが高い貝斧（図 57）は、時間的変化とともに比率が減少することが読みとれる。

一方で、大型で重量が有り、研磨は刃部などの局部に止まる貝斧（図 58）の比率は、比較的新しい時期の浦底遺跡上層（Ⅱ層）に向かって増加する。これに対し、浦底遺跡のⅢ層・Ⅳ層よりも比較的新しい年代を示すアラフ遺跡の貝斧は、浦底遺跡のⅢ・Ⅳ層とⅡ層両層の貝斧と共通した特徴を有しており、長墓遺跡、友利元島遺跡の貝斧は、浦底遺跡のⅡ層の貝斧に一致した特徴を示すなど、浦底遺跡の層位的な貝斧の変異は、遺跡間の時間的な変異とも共通していることが読み取れる。

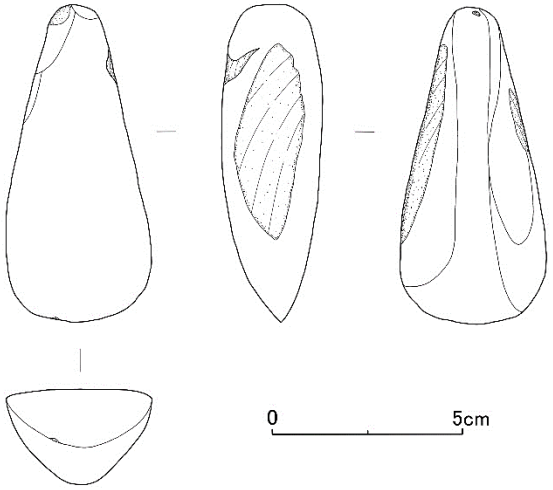


図 57. 浦底遺跡の B-c-3 タイプの貝斧
（図 45 と同図）

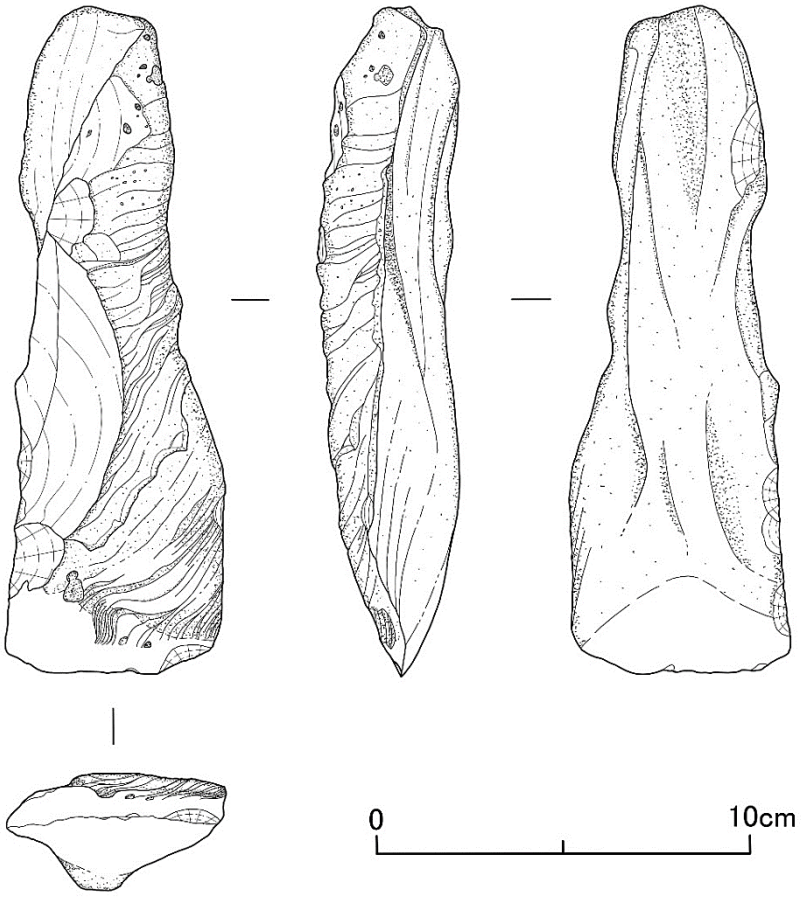


図 58. 浦底遺跡Ⅱ層出土の A-c-1 タイプの貝斧
（筆者製図・沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵）

特に長軸 10 ㎝前後、重量 200g 以下の非常に小型で、全磨製の B-b-3、B-c-3 タイプへの偏りは浦底遺跡の下層でしか確認できない。これは宮古島における貝斧文化の比較的古い段階の特徴であると考えられ、時期が新しくなるにつれ貝斧の大型バリエーションの増加と、研磨面の縮小が生じたと捉えることができる。

・浦底遺跡の再評価と、貝斧文化の展開

① 浦底遺跡の再評価

既存の報告では､浦底遺跡は多量の貝斧を出土することで特徴づけられてきた｡しかし、本論の分析を通してまず注目したいのは、1 地点のⅣ層や 2 地点のⅤ層など、浦底遺跡の下層に当たる層位で複数の石器が確認できるということである。これらの石器は変成岩や堆積岩が利用されており、特に変成岩は宮古島では産出しない。この変成岩性石器の存在は、宮古島における無土器期の遺跡を形成した人々が、浦底遺跡の下層にあたるような比較的最初期の段階で宮古島以外の島で産出する石材の存在と、それを利用して道具製作することを知っていたことを示している。八重山列島では宮古島の遺跡ほど古い年代を示す無土器期の遺跡が確認されていないが、浦底遺跡の石器は現在遺跡が見つかっているより古い段階に、宮古島と八重山列島との間で人の行き来が存在した可能性を示している。

一方で、浦底遺跡で出土した多量の貝斧と研磨面を持つ石皿は、浦底遺跡や宮古島の中で道具の製作から利用までのサイクルが成立していた可能性を示している。石皿は一般的に堅果類の敲打や磨り潰しといった加工用途が想定されることが多いが、敲石や磨石の出土は石皿に比べて少数に止まっており、異なる利用方法を示唆する。石皿の中には、研磨面に白色の粒子が付着しているものも確認することができ、かつ磨面を有する多量の貝斧が存在する点を鑑みれば、石皿が貝斧の研磨に利用された可能性は極めて高いと言えるだろう。また、石皿には泥岩や砂岩の堆積岩に加え、数量は少ないものの石灰岩を利用した研磨面を有する石皿を確認することができる。これは道具の研磨作業が宮古島で獲得できる素材でも可能であったことに加え、場合によってはより得やすい材質も積極的に利用していこうとする工夫が行われていたことを示している。

浦底遺跡の石斧や石皿からは、この時期に浦底遺跡を形成した人々が石垣島等の火山島で獲得できる変成岩のような硬い石材で斧状の道具を作ることや、堆積岩の石材で研磨することによって道具を製作するという技術を共有していたことを読み取れる。その上で、材質に関しては極力サンゴ島で獲得できる素材を用いて道具を制作していたものと捉えることができる。

浦底遺跡での貝斧の出土数は、本遺跡での貝斧の生産の可能性を示唆している。打割や敲打によって平面形を整えた貝斧の未成品や、水磨や風化などによって平面形が整った貝の素材が製品と共に多数出土すること、そして研磨面を有する石皿の存在は、本遺跡における貝斧生産の可能性を支持する要素であると言えるだろう。

本遺跡は現時点では正確な報告がなされておらず、提示されている放射性炭素年代値に関しても、調査年代が古いことや、複数機関によるクロスチェックが行われていないことから､層位の関係や､年代的な位置づけに関しては曖昧な点を残さざるを得ない｡しかし、本論で概報と注記を基に復元した貝斧の層位間バリエーションは、他の遺跡と比較しても

齟齬がなく、貝斧製作・利用の時間的変化と捉えてよいものと結論付けることができる。また、宮古島の無土器期に関しては、近年浦底遺跡やアラフ遺跡の下層に代表される「前期」と、長墓遺跡や友利元島遺跡に代表される「後期」という時期区分の可能性が示されているが（久貝・大堀 2015）、本論で示した貝斧の時間的変化もこの区分と合致した時間的変化として設定することができるものである。

②宮古島における貝斧文化の展開と八重山列島との関係

本章「3. 無土器期の文化内容と時空間変異の整理」で述べたように、無土器期遺跡において宮古島の遺跡は比較的古い年代値を示している。これに関して、江上幹幸（2015）は、宮古島の遺跡に集石遺構が多いことも踏まえ、八重山列島を経由しないで、いずれの地からか貝斧を携えた人々が宮古島へ直接移住した可能性を提示した。しかし、浦底遺跡における石器の出土状況は、比較的早い時期から宮古島の人々が八重山列島の石材を利用しており、更に石斧や研磨する為の石材利用の知識を共有していたことが確認できる。この石斧と貝斧は、製作に関して大きく異なる点はなく、両者とも自然形を基に打割や敲打で平面形を整えて研磨によって刃部を形成し、平面形や刃部のバリエーションも石斧と貝斧で共通した点が多い。これは、石斧製作とほぼ同じ技術や工程が貝斧に用いられていたことを示している。本章の遺跡の属性分析が示すように、両地域が素材利用に代表される地域差を保っていたことは読み取れるが、両地域は全くの別系統の文化集団であると捉えるよりも、浦底遺跡下層の石斧の存在などから考えて無土器期の初期段階にも宮古島-石垣島間の行き来が存在したことは考える方が妥当性を有しているものと考えられる。

宮古島における貝斧文化の展開は、放射性炭素年代や貝斧の遺跡間比較を基にすると、浦底遺跡の 1 地点Ⅳ層の特徴が比較的古い段階に位置づけられる。この特徴はサイズにおける長軸が 10 ㎝前後、重量が 200g 程度に纏まり、刃部形態が B-b-3 や B-c-3 に代表される、蝶番部（hinge）利用・全磨製（殻外面の平坦整形）・弧状刃縁（3 タイプ）に纏めることができる。そして、この特徴をもった貝斧はⅢ層、Ⅱ層を経るにしたがって比率が減少していき、反対に大型で重量のあるサイズで刃部と胴部の一部を磨いた製品・刃部のみを磨いた局部磨製製品などのバリエーションの貝斧が増加していく傾向を示す。比較的新しい時期に位置づけられる長墓遺跡や友利元島遺跡の貝斧は、このような浦底遺跡から確認できる時間軸上の変異と共通しており、これらは宮古島の中での貝斧文化の時間的変遷を示しているものと考えられる。

しかしながら、これは単純に各遺跡が時間的序列で整理できることを示しているわけではない。本章の「3. 無土器期の文化内容と時空間変異の整理」における無土器期の生活様式と遺跡を捉える枠組み関して示したように、宮古島の遺跡は移動を繰り返して生活する人々の回遊的な動きの中で形成されているものと考えられる。久貝弥嗣・大堀皓平ら（2015）は、宮古島の編年の中で、アラフ遺跡Ⅶ層[39]を最古とし、浦底遺跡Ⅴ層、アラフ遺跡Ⅲ層、浦底遺跡Ⅲ層、長墓遺跡、友利元島遺跡の順で時間的位置付けを行っているが、本論で示した貝斧から見た推移もこれと矛盾しない。回遊的な動きの中で宮古島の遺跡各々の層位に時間差が生じたものと解釈することができる。

貝斧は八重山列島の遺跡でも僅かに出土しているが、いずれも比較的新しい年代に位置づけることができる（本章「2. 属性分析から見た遺跡間の変異」を参照）。包含層からの

出土事例は、西表島の船浦貝塚と石垣島の崎枝赤崎貝塚に限られるが、船浦貝塚の貝斧は図の報告が無く詳細が判然としない。崎枝赤崎貝塚の貝斧（図 59）に関しては、殻内外からの敲打剥離で平面形を整え、蛤刃・両刃・直線刃部断面を有するタイプであることが確認できる。長軸も 14 ㎝程度で、重量も比較的重く、友利元島遺跡で出土した貝斧と共通する点が多い。現時点では八重山列島における貝斧の「出土」例は少なく、貝斧の時期的な特徴を読み取るのは難しいが、崎枝赤崎貝塚の貝斧は出土層位（Ⅰ層）が示す年代と矛盾しない特徴を示している。

その一方で、石垣島の名蔵貝塚群（1979）5 地点やカンドウ原遺跡、西表島の上原部落内遺跡などでは、浦底遺跡の下層で確認された B-b-3 や B-c-3 タイプの貝斧が採取されている（図 57）（沖縄県教育委員会 1979a、岸本ほか 1995）。八重山列島では遺跡から出土した事例は少ないものの、表採では多くの貝斧が確認されている（大濱永寛 2015）。残念ながらこれらの貝斧は出土位置から時期が特定できず、また後続時期の遺物とも混ざっていることから無土器期に帰属するかも判然としないが、宮古島の遺跡で古い段階に特徴的な貝斧が、八重山列島で複数表採されている点は、浦底遺跡における石材の存在と併せて、宮古島と八重山列島の間における人の移動を示唆しているものとして注目できる。

しかし、本章の「3. 無土器期の文化内容と時空間変異の整理」でも示したように、八重山列島の遺跡では、例え石材産地から距離が離れた遺跡においても、貝斧や貝製品の積極的利用へは展開することはなかった[40]。八重山列島では、貝斧ではなく石斧を主体とした道具利用が無土器期の終末まで継続しており、貝斧と同様の平面形成形と刃部形態を有した石斧も確認することができる（図 58）。石斧には内外の概念は無いので、貝斧と同じ分類は適用できないが、撥・短冊・狭刃形の

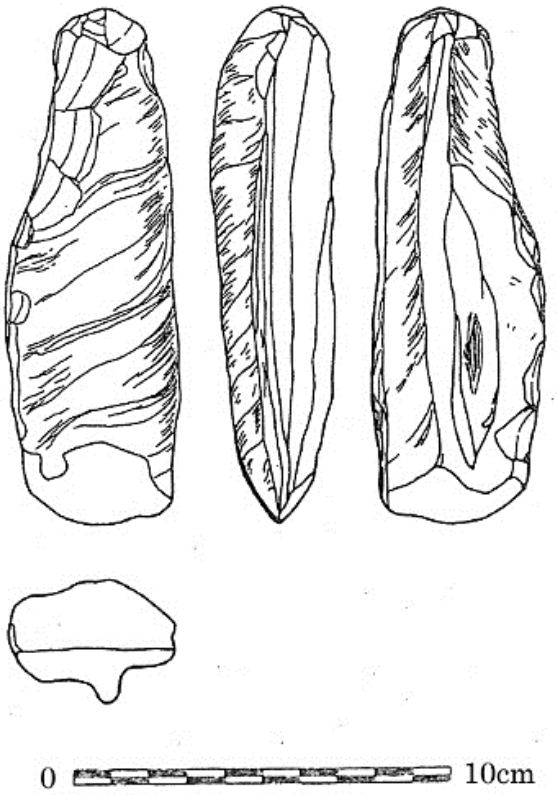


図 59. 崎枝赤崎貝塚Ⅰ層出土の貝斧
（石垣市教育委員会 1987）

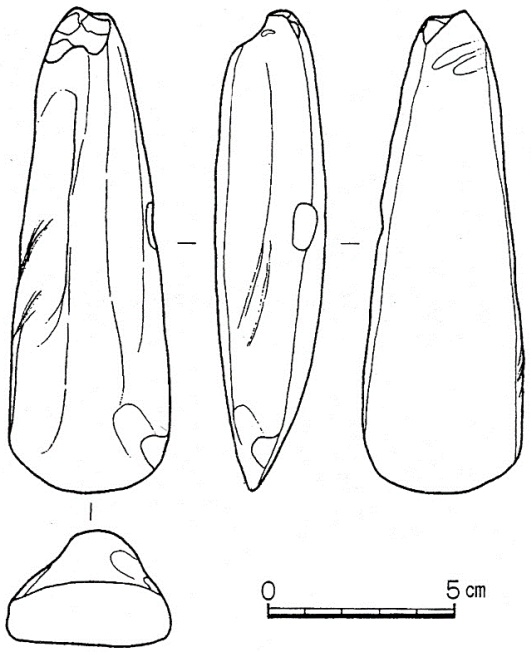


図 60. カンドウ原遺跡表採の貝斧
（沖縄県教育委員会 1979a）

平面形を呈する点、完全な片刃は少なく、両刃或いは片面からの磨きだしが強い両刃が主体で、刃部断面形は直線と弧状によって構成される点は貝斧と共通している。

高宮廣衞（1994）は、八重山列島の遺跡を貝斧主体と石斧主体に分類した上で、貝斧には特徴的な厚型と石斧が補完関係になっていた可能性を示唆したが、宮古島の貝斧の出土状況と、八重山列島の出土状況、そして石斧と貝斧の共通点を考慮すると、貝斧と石斧の違いは、同じ機能の道具に対する材質の置換に拠るところが大きい。そして、石斧主体と貝斧主体と言う八重山列島-宮古島間の資源利用の地域差は、無土器期を通して維持されたものと結論付けることができる。

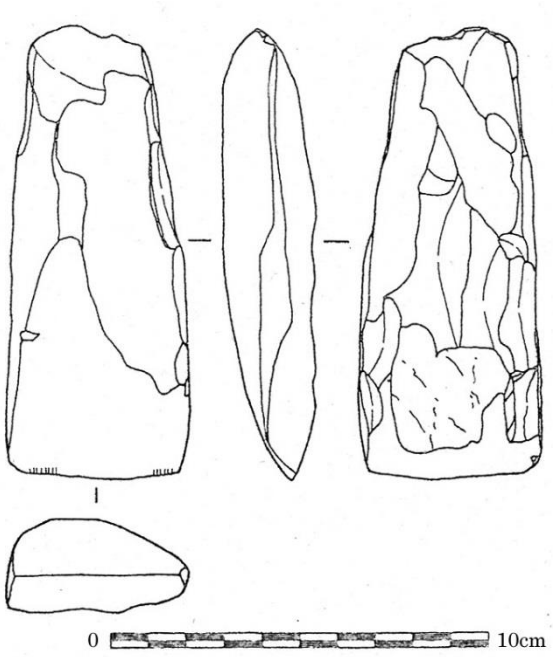


図 61. 崎枝赤崎貝塚Ⅱ層出土の石斧
（石垣市教育委員会 1987）

---

1 下田原期の分析と同様に試掘調査・報告、概報報告の遺跡も含むが、遺構・人工遺物・放射性炭素年代値が確認されていない遺跡や、表採報告のみの遺跡に関しては、同時代性を確保できないことから、分析からは除外した。

2 本論 2 章の遺跡概要を参照。

3 本論 2 章の表 5 を参照。

4 年代の表記方法は報告書に従う。同層位で複数の年代値を示すものは、同層における他の年代値と極端に異ならない限り最も新しい値を採用した。暦年較正年代は基本的に信頼水準が最も高い 2σ を採用し、1σ しか示されていないものは(1σ)、σ の区別ないものは(*)を付して表記した。

5 高宮廣衞（1994・1995・1996a・1999）によって、平面形態・サイズ・研磨面を基にした分類が示されているが、時期内の編年には至っていない。この要因には、無土器期で出土する石斧の量が遺跡間でバラつきがあることと、石斧が出土しない遺跡が存在することが挙げられる。

[6] 開元通寶は唐代の AD621 年に初鋳された銭貨である（永井 2002 など）。流通年代に関しては本資料のみでは判然としないが、帰属年代は初鋳年代より古くならない為、下限年代の指標として利用できる。

[7] 本論 1 章「6. 島嶼文化形成へのアプローチ」参照。

[8] 井上イリーナ（2015）の研究成果によれば、名蔵湾や名蔵貝塚群や神田貝塚が立地する名蔵地区の湿地帯的な環境が無土器期当時にも共通していたと考えられる。

[9] 神田貝塚は海岸から約 1 ㎞、白保竿根田原洞穴遺跡は約 0.5 ㎞、長墓遺跡は約 0.9 ㎞内陸に立地している。

[10] 本論 3 章を参照。

[11] 主に火を受けた石灰岩礫やサンゴ片の集積による遺構。リモート・オセアニア地域のアースオーブン（地炉）との類似が指摘されているが（石垣市総務部市史編集課 2009)、アラフ遺跡では火焼痕のない集石遺構も報告されている（アラフ遺跡発掘調査団 2003)。

[12] 波照間島の大泊浜貝塚（沖縄県教育委員会（以下沖教委）1986)、竹富島のカイジ浜貝塚（同前 1994）で確認されている。しかし、サイズや柱の本数・間隔に関しては両遺跡の遺構は完全には一致していない。大泊浜貝塚のもの（3 号礫床住居跡）は約 2.0×2.5m の 6 本柱構造で、床面にテーブルサンゴの礫を敷き、北東隅に炉跡を有する。一方でカイジ浜貝塚のものは全容が確認できないものの、一辺が 3.0m 前後の推定 6~7 本柱構造のものが 3 基、重なり合って確認されている。

[13] 宮古島のアラフ遺跡で確認されており、全容は未確認であるが、長軸 120-200 ㎝程、短軸 50-100 ㎝程、深さ 10 ㎝程の竪穴遺構が確認されている。また、遺構は楕円や不整円形の灰溜りやピットを伴っており、Ⅴb 層では竪穴遺構同士の切り合い関係が報告されている（アラフ遺跡発掘調査団 2003)。

[14] 名蔵貝塚（1984）のⅡ - Ⅳ地点は攪乱状況、Ⅴ地点はⅢ層が未攪乱の遺物包含層と報告されるが、各地点の層位別の出土報告は無い（沖教委 1985a)。その為、Ⅴ地点の報告遺物を「Ⅲ層出土の可能性が有る資料」として表示した。また、神田貝塚のⅢb 層には、「Ⅳ層（Ⅲb 層相当)」と報告されたもの（沖教委 1980）を含めて記載した。

[15] 図の用語は以下の分類を示す。火焼痕：炭化面・炉跡・炭化物集中部を含む。集石：集石遺構（火焼痕の有無に関わらず)。貝集積：貝の集積が著しいと報告されたもの。溝状：溝状に掘り込んだ遺構で機能は不明。柱穴（様)：柱穴、柱穴様ピットと報告されたもの。配列柱穴：方形配列の柱穴に、L 字状配列（沖教委 1981）も含む。礫敷：礫や枝サンゴを敷き詰めた床面を有する遺構。竪穴：竪穴遺構。

[16] 石器は加工や使用痕跡を基に以下の基準で分類した。磨製刃部：研磨により刃部を有する石器（石斧：短冊形・撥形・狭刃形等の定型を示す。石刃：石斧とは形態が異なるもの)。敲打：敲打痕を有する石器（円礫：円礫状、杵状：円柱・角柱状)。磨面：研磨面を有するが刃部を形成しない石器（磨石：円礫状。砥石：円礫状ではないもの。石皿：大型で片手での利用が困難、且つ中央部に凹面を有する。有孔：磨面と人為的な円形孔を有する)。他：敲打調整、研磨などの加工を施すが、定型化しない石器や石材。なお、敲打痕と磨面両方を有し、「敲石兼磨石」と報告されるものは、敲磨石として表記した。

[17] 崎枝赤崎貝塚（Ⅱ層）で磨製刃部を有する、三角形状の石器が 1 点出土するが、用途は不明で類例も確認されていない。

[18] 宮古島の長間底遺跡では石器の出土が確認されているが、出土位置は「掘り返し盛土」と報告されており、遺物包含層からの出土では無い（沖教委 1984)。盛土の帰属する位置、年代は明らかでは無く、明確な無土器期の層位からは石器が確認されていない。

[19] 石垣島と西表島の間の海域（竹富島を含む）ではサンゴ礁地帯（石西礁湖）が広がっており、外洋に比べ波も穏やかで海上移動が比較的容易である。小林竜太ら（2013）は、石垣島－西表島間の珊瑚礁がこの無土器期には既に形成されていることを示しており、当時も現在に近い海洋環境が想定できる。

[20] 島へ石器を運んだか、石材を運んで加工したかに関しては判然としない。しかし、船浦貝塚（Pearson1978)、長間底遺跡の盛土（沖教委 1984）で報告された石材チップは、産出しない島へ石材が運ばれた後に、人為的な加工が行われたことを示唆している。

[21] 複数方向からの研磨により、先端部を成形する石器。側面部に斜め方向への擦過痕が確認できる。先端部は同心円状に摩耗し、研磨によって先端が形成された際に生じる側面部の角は丸みを帯びている。

[22] 貝製品は加工や使用痕跡を基に以下の基準で分類した。磨刃：研磨により刃部を有する製品＝貝斧。殆どがシャコガイ科を利用するが、貝種不明の貝斧も報告されている（アラフ遺跡発掘調査団 2003)。敲打：敲打痕を有する製品（シャコ：シャコガイ科を利用。蓋：ヤコウガイの蓋を利用)。研磨：研磨を施すが刃部を持たない製品（ソデボラ：スイジガイ等のソデボラ科の突起部を研磨。シャコ：シャコガイ科の一部を研磨。タカラ：タカラガイ科の背面を除去し研磨。イモ：イモガイの胴部を利用し、先端部を有する薄手の製品。基端部に穿孔)。有孔：穿孔する製品（二枚貝：サルボウ科やシャコガイ科の殻腹部に内側から穿孔。巻貝：イモガイ科等の螺頭部のみを残し、中央部に穿孔。ソデボラ：ホラガイの開口部付近に穿孔)。加工（その他）：なんらかの加工を施すが、定型化せず、類例がないもの。

[23] 哺乳類骨牙・魚骨歯利用製品は加工痕跡を基に以下の基準で分類した。イノシシ・クジラ・魚類：利用素材を示す。サメの骨・歯は魚類に含む。研磨・有孔：研磨加工、或いは穿孔を施すもので、利用部位で細分。有孔：穿孔を施すものが基本だが、サメ歯製品は若干研磨するものを含む。椎骨はサメ椎骨の断面中央部に穿孔したもの。

[24] 水生と陸生で大別したが、マイマイなどの陸生貝類に関しては「貝類」で統一した。水生の哺乳類はジュゴン・イルカ・クジラを含み、甲殻類は主にカニを指す。陸生の哺乳類はイノシシ以外のネズミ・コウモリ・種不明の哺乳類遺存体を含む。

[25] 発掘面積の違いの他、最少推定個体の計測法の違い、土壌成分による残存率の違い、貝類に関しては個体数に大きさや貝肉のエネルギー量が反映されないという課題を有する。

[26] ヤコウガイは蓋の残りが良い為、残存し易いが、蓋を除いた場合でもⅡa 層で 6%を示すなど、巻貝の蓋以外の殻の中では最も多い数値を示している。また、全ての遺跡を通しても出土数が群を抜いて多い。

[27] 網取遺跡と、アラフ遺跡の調査報告（アラフ遺跡発掘調査団 2003）では遺物包含層中のプラントオパールや花粉の分析が行われているが、明確に植物栽培を示す結果は得られ

ていない。

[28] R. Pearson（1978）は層位中に夏-秋の種子が多いことから、船浦貝塚の季節的利用を指摘している。

[29] 高宮廣衞（1996b）は、無土器期における貝斧主体文化と石斧主体文化の存在を指摘し、系譜関係は不明としつつも、遺跡における放射性炭素年代値を基に貝斧主体文化が先行するとの見解を示した。

[30] 白保竿根田原洞穴遺跡のS層はBP4200-4500の年代を示すが、下田原期との分層が難しく、無土器期遺跡の年代として採用するのは現時点では難しい。

[31] 2016年4月の時点で宮古島市へ管理が移行した。

[32] 但し、層位に関しては報告書として纏める際に、層位の読み替えが行われる可能性がある（e.g. 1トレンチの2層＝2トレンチの3層など）。その為、本項ではあくまでも注記からの復元とし、報告書に精度は及ばないものの、全体の出土傾向を把握する材料として利用する。

[33] 本論作成に当たって、2015年度まで浦底遺跡出土資料を管理していた沖縄県教育委員会（沖縄県立埋蔵文化財センター）と、2016年度から資料管理が移行した宮古島市教育委員会には許可を得ている。

[34] 一部グリッドではⅣ層からも土器が出土するが、そちらは攪乱と表記されている。

[35] 集石遺構から出土したものは「け-53 111号集石」などと表記されており、以降がどのグリッドに存在するかを確認することができる。但し、遺構出土のものは層位の表記が無い。

[36] 宮古島における別の島の石材の入手手段は、人間が直接産地の島にアクセスする以外に、漂流物による入手の可能性も存在している（註図1）。しかしこちらは偶然性に左右されやすく、浦底遺跡の石器が全てこのような手段で手に入れたものとは考え難い。

註図1. 宮古諸島栗間島海岸に打ち上げられた流木（2015年筆者撮影）。根元に堆積岩・変成岩を抱え込む。

[37] 研磨された刃部が存在しないだけで使用された可能性も残すが、磨製刃部を持った製品と区別する意味で暫定的に「未成品」の語を使用することとする。

[38] ホラガイに穿孔したものに関しては、沖縄の民俗事例からヤカンとしての利用が指摘されているが（岸本2004b）、顕著な被熱面やコゲなどの痕跡は確認できず、ヤカンとして使用されていたとは考え難い。

[39] アラフ遺跡Ⅶ層は、現時点では人工遺物の報告が無い。

[40] この点に関し、大濱永寛（2015）は八重山列島で無土器期遺跡が確認できるようになる時期以降の時点で、石斧にある敲石などへの転用品が貝斧には確認できないことに触れ、石斧と貝斧の機能が異なる可能性を想定している。いずれにせよ、この時点で貝斧は石斧と同様の道具として八重山列島で採用されることはなかった可能性が高い。

第 5 章　下田原期と無土器期の比較

本論のここまでを通して、下田原期・無土器期各々の時期に対し、遺跡の属性や個別の人工遺物の特徴の比較を通して時空間的な整理を行い、その文化内容を明らかにしてきた。本章では、それらのデータを基に、下田原期と無土器期の比較を行い、具体的な共通点と相違点を検証・考察することとする。

1. 遺跡の属性比較から見た両時期の比較

・遺跡の立地環境の違い

まず、下田原期・無土器期の遺跡の立地環境の違いを確認しておきたい。無土器期は下田原期に比べて遺跡の数・分布範囲ともに拡大しており、下田原期では遺跡が確認できなかった竹富島や西表島の北西部、宮古島に遺跡が分布するようになる。しかし、その一方で、下田原期に隣接している無土器期の遺跡も多く、石垣島の西部の名蔵湾周辺地域、同島東部の嘉良嶽周辺地域、西表島東南部の仲間川河口、同島南西部の鹿川河口、波照間島の北部では、ほぼ同じロケーションから両時期の遺跡が確認されている（図 62）。加えて、西表島の鹿川ウブドー遺跡、白保竿根田原洞穴遺跡は下田原期と無土器期の包含層をもった複合遺跡で、大田原遺跡（1978）と神田貝塚、下田原貝塚（1983-85）と大泊浜貝塚は、共有する層位の関係から前後関係が読み取れる。

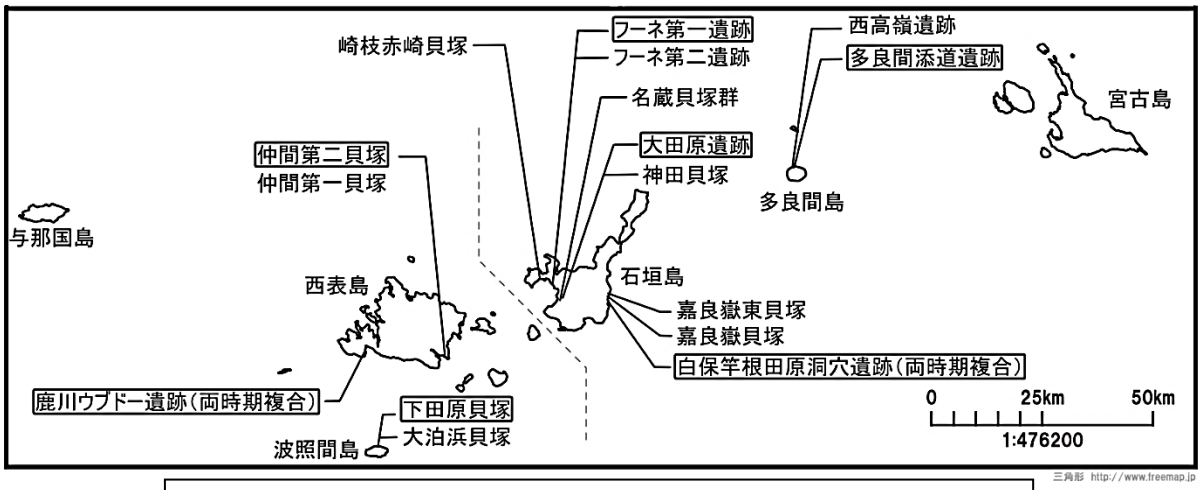


図 62. 下田原期-無土器期で隣接する立地の遺跡
（下田原期の遺跡は囲み文字で表記）

また、西表島の仲間第二・第一貝塚や、波照間島の下田原貝塚（1983-85）・大泊浜遺跡で出土する動物遺存体の種や生息域は各島で共通性が高く、どちらの時期も食糧獲得に特定の選択が存在するのではなく、周辺環境に合わせて採集・狩猟が行われていたことを読み取れる。興味深い点は、現在イノシシが生息しない波照間島の下田原期-無土器期の両遺跡で、多量のイノシシの遺存体が確認できることである。これは、下田原期・無土器期のどちらの時期でも、現在はイノシシが生息しない波照間島でイノシシ利用が行われていたことを示している。イノシシは下田原期における多良間島の多良間添道遺跡でも出土しており、無土器期では宮古島で出土するなど、むしろイノシシが現生しない島でイノシシ利用の痕跡が顕著である点は、下田原期-無土器期を通して共通している。

・遺構から見た両時期の比較

遺構に関しては、二つの時期で明確に違いが現れている。下田原期の遺跡に関しては、炉跡以外には住居などの構造物を示すような痕跡が確認できないのに対し、無土器期の遺跡では八重山列島のカイジ浜貝塚（竹富島）と大泊浜貝塚（波照間島）では方形配列の柱穴痕跡が確認されており（図 63)、宮古島のアラフ遺跡では全体構造は明らかにはなっていないものの竪穴遺構が確認されている。

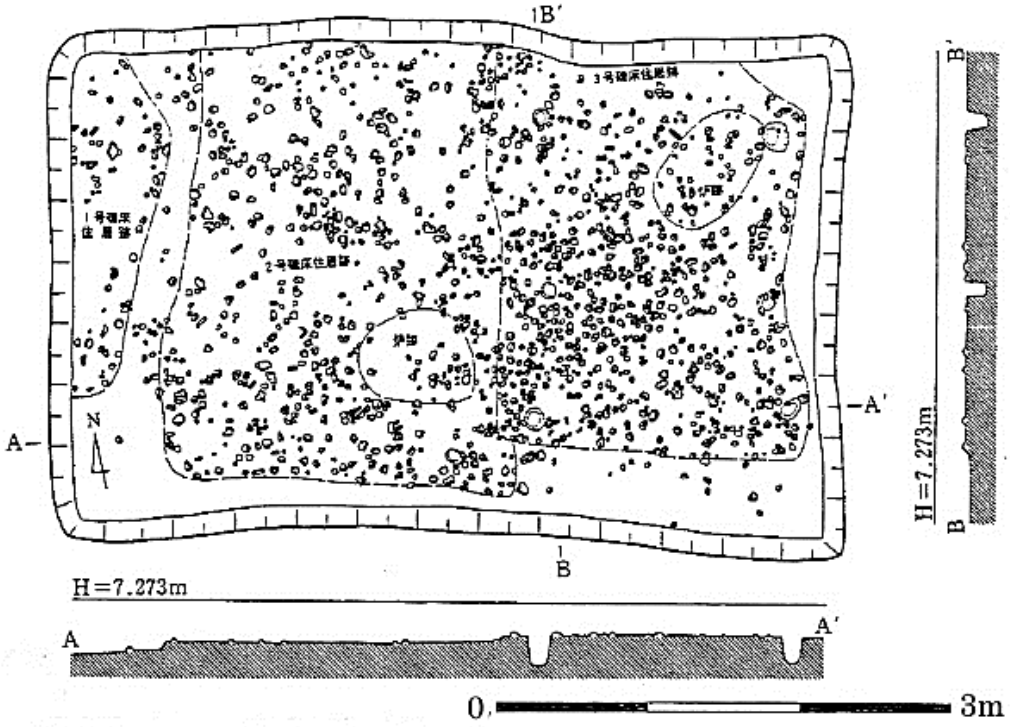


図 63. 大泊浜貝塚（波照間島）10 層にて検出された礫床の配列柱穴（S=1/50）
※他の遺構図と縮尺不同。柱穴は〇で強調表記。（沖縄県教育委員会 1986 に加筆）

下田原期の遺跡における構造物の可能性をもつものとしては、全層が攪乱の可能性を指摘されている大田原遺跡（1980）で直径 2.5m、深さ 20-30 ㎝程度の不整円形の凹面が 4 基確認されており、うち 1 基からは大型の土器が出土したと報告がある[1]（石垣市教育委員会 1982)。また、下田原貝塚（1983-85）では、地山面で柱穴が確認されており（図 64)、幅約 80 ㎝、深さ 5-15 ㎝の溝状遺構（図 65）も報告されているが、こちらも帰属する年代が判然としない。無土器期の遺跡では方形配列以外にも不定形に配列された柱穴の痕跡が確認されているが、下田原期の遺跡で柱穴痕が確認できるのは下田原貝塚（1983-85）の柱穴に限られている。

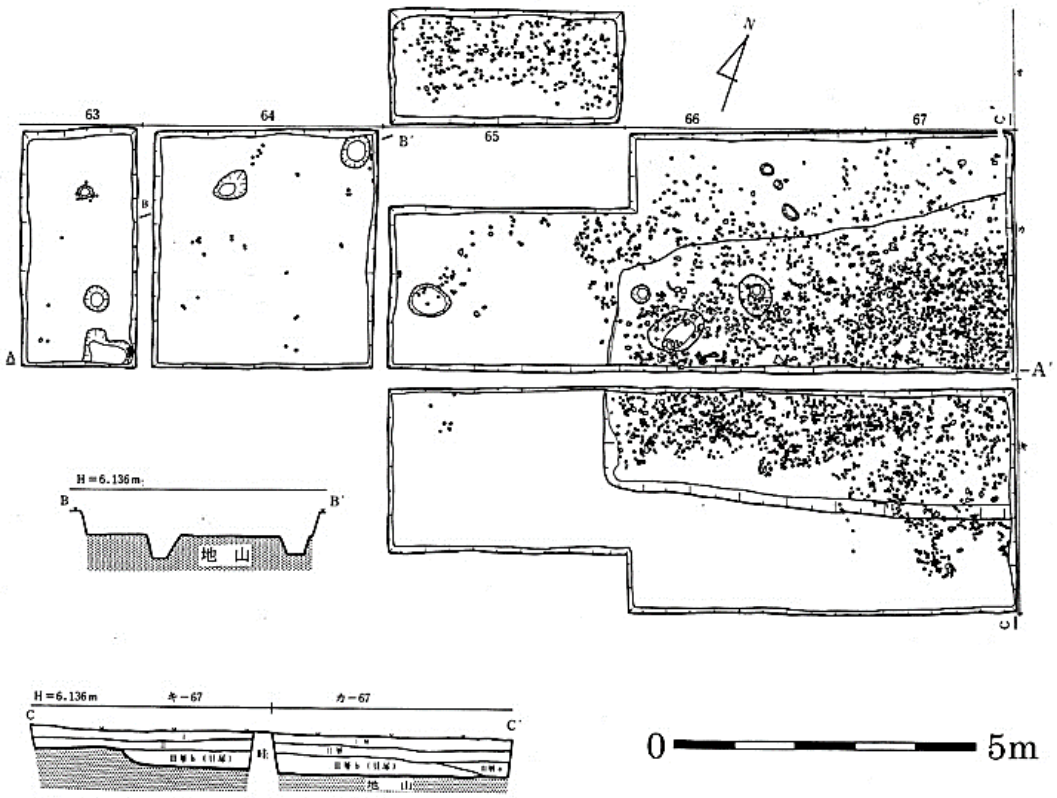


図 64. 下田原貝塚（波照間島）にて検出された不定形配列の柱穴（S=1/125）
※他の遺構図と縮尺不同（沖縄県教育委員会 1986）

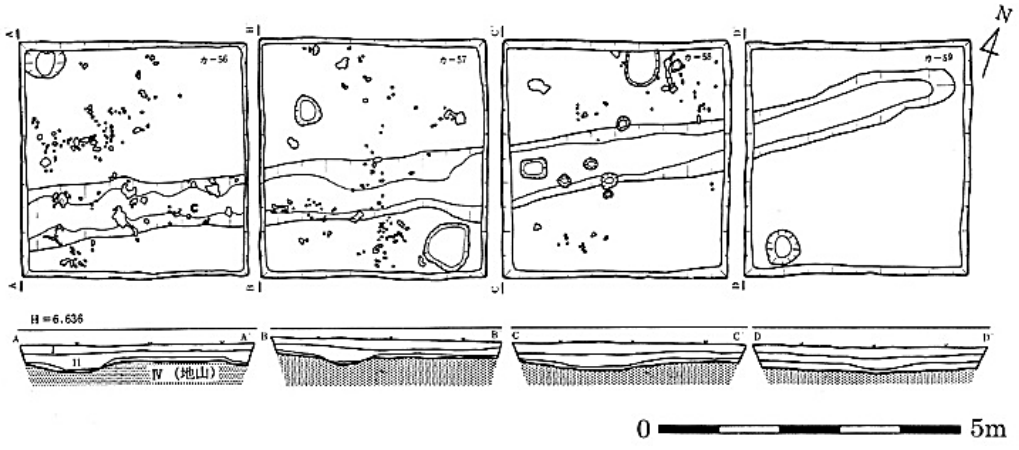


図 65. 下田原貝塚（波照間島）にて検出された溝状遺構（S=1/125）
※他の遺構図と縮尺不同（沖縄県教育委員会 1986）

遺構に関しては、無土器期を特徴づける要素として集石遺構の存在を挙げることができる。集石遺構に関しては、本論第1章で触れたようにアースオーブンの痕跡として見る傾向が強く、宮古島のアラフ遺跡や浦底遺跡、竹富島のカイジ浜貝塚で検出されている。集石にはアラフ遺跡の集石遺構のように被熱していないものも確認できるが、浦底遺跡で検出された物は写真（図66）を見る限り被熱面を伴っており（城辺町教育委員会 1990）、帰属層位が判然としないものの、注記のナンバリングからは検出数が 100 基以上になる可能性が高い。但し、写真を見る限りでは1基1基の大きさは、それほど規模の大きいものではないことが読み取れる。

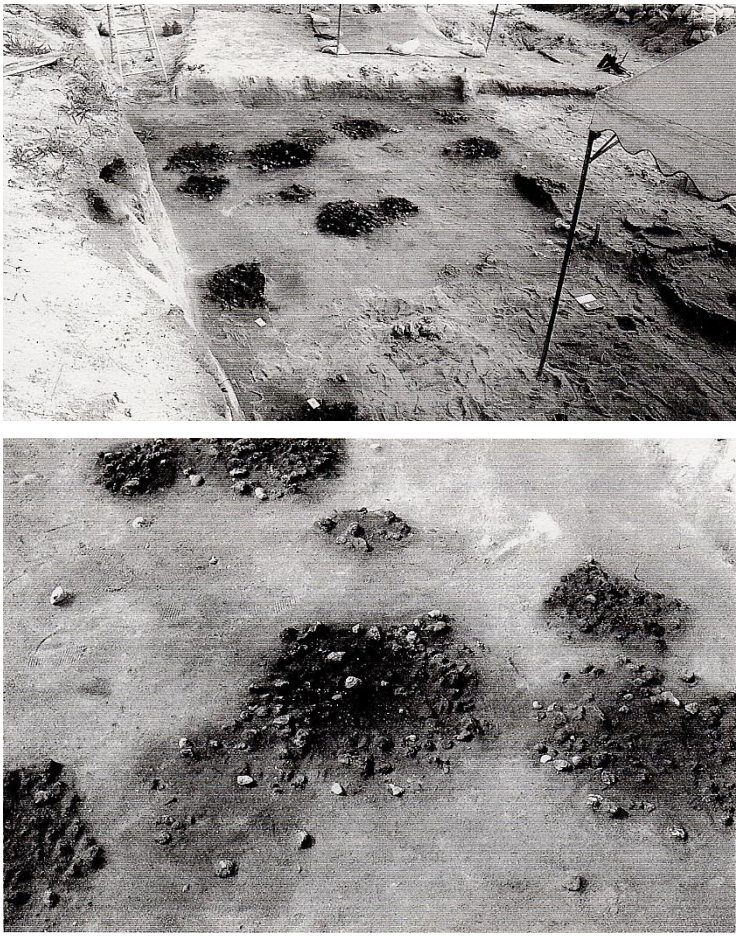


図 66. 浦底遺跡で検出された集石遺構
（城辺町教育委員会 1990）

このような集石遺構は下田原期の遺跡からは全く確認されていない。しかしながら、多良間添道遺跡では、遺物包含層全体に被熱した礫が散らばって確認されており（多良間村教育委員会 1993）、下田原貝塚（1983-85）のⅢ層でも被熱した拳大の角礫が認められるなど、調理に使用された可能性が示唆されている（沖縄県教育委員会 1986）

以上のように、遺構に関しては、下田原期と無土器期の相違点が目立つが、一方で共通要素も確認できる。方形配列の柱穴痕は無土器期のみに見られる遺構の特徴で、これは下田原期と無土器期における相違点の一つとして挙げることができる。しかし、無土器期における宮古島の遺跡では柱穴自体が確認されておらず、無土器期における八重山列島の遺跡では、方形配列だけではなく不定形配列の柱穴も確認されている。下田原期では下田原貝塚（1983-85）で不定形配列の柱穴が確認されており、柱穴と言う点では下田原期と無土器期の遺跡で共通する部分も確認することができる。また、無土器期の遺跡に特徴的な集石遺構に関しても、下田原期の遺跡で焼けた礫が包含層から出土する状況が確認されており、両時期の遺跡における遺構は一見相違点が目立つものの、全く関連性を否定できない程度の共通性を有している。

・人工遺物から見た両時期の比較

人工遺物における、下田原期・無土器期の明確な違いは、土器の利用が無土器期には行われないということである。これは、単純に土器の有無の違いだけではなく、土器の用途や役割が、無土器期には必要とされなくなったか、別の道具に置換された可能性を示している。土器の用途を煮沸や調理とするなら、集石遺構が示すアースオーブンがそれに代わるものとして考えられるが、下田原式土器には顕著なススや火を受けた痕跡が少なく、土器の用途が判然としない。

一方で、土器以外の石器や貝製品、哺乳類骨牙の製品などに関しては共通点が多い。石器に関しては、石斧を主体とし、敲石・磨石に、砥石や石皿などが付随するというセット関係が共通している。石斧に関しては、下田原期から無土器期にかけて、磨面が拡大する可能性（高宮廣 1995）や、大型サイズのバリエーションが増加すること（高宮廣 1996b）が指摘されている。しかし、磨面に関しては高宮廣衛（1995）が指摘するように、局部磨製・半磨製・全磨製の線引きが難しい。また、無土器期の遺跡では位置付けが曖昧なトゥグル浜遺跡を除くと、石斧の出土数は下田原期の 1/2 程度に過ぎず、数や比率の比較で有意な差を示すのは困難である。むしろサイズ・平面形・刃部形態のバリエーションで見ると、下田原期-無土器期では明確な変化を読み取ることはできない（図 67）。

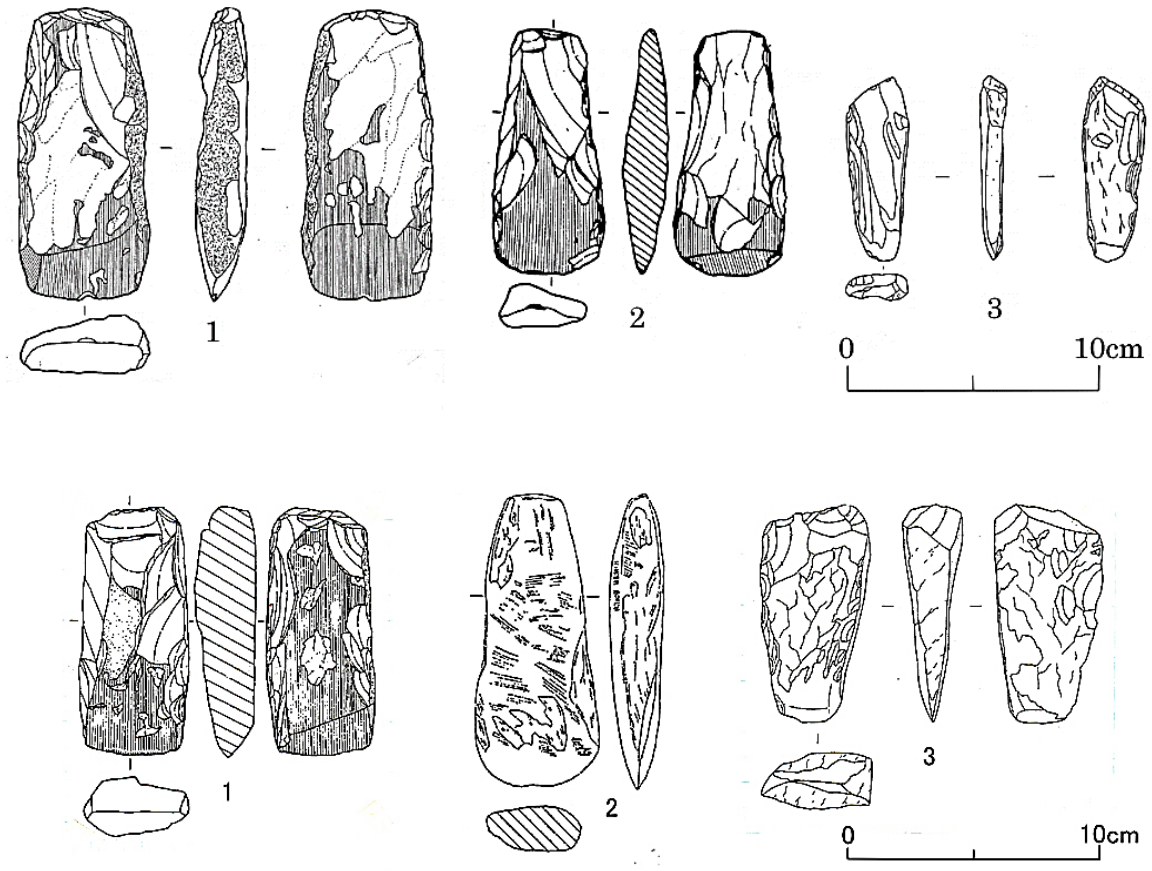


図 67. 下田原期-無土器期における短冊形(1)・撥形(2)・狭刃形(3)石斧（S=1/3）[2]
（上段：下田原期、下段：無土器期）

利用石材に関しても、火成岩（深成岩）・変成岩・堆積岩という石材利用に大きな変化はない。無土器期にはやや変成岩の利用が目立つが、それは変成岩産地に隣接する崎枝赤崎貝塚における石器出土数が多いことなどに拠っている。石器器種においては下田原期では下田原貝塚で錐状・鑿状尖端をもつ小型の石器が特異性を示しているが、土器を出土しないトゥグル浜遺跡でも同様の製品が確認されており、複数方向からの研磨による先端成形、形態、尖端部の角の磨耗が共通しており、ほぼ同じ人工遺物であると考えられる（図 68）。

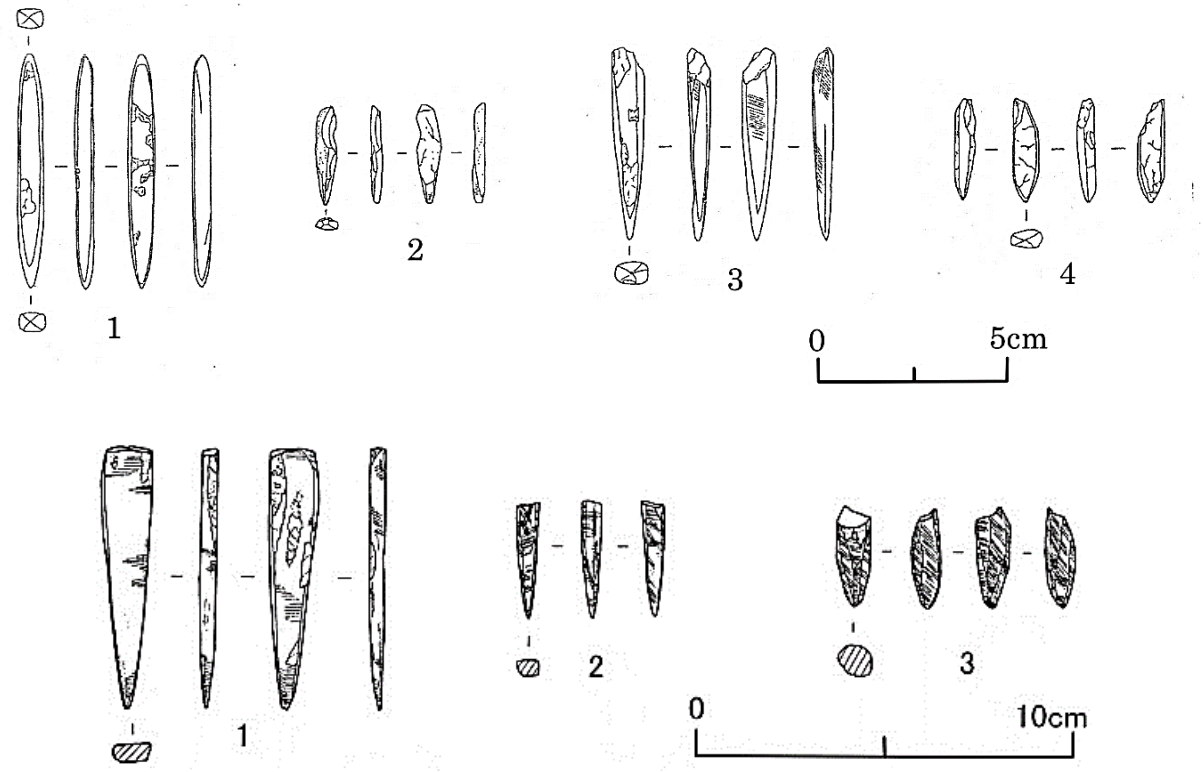


図 68. 特異な尖端部をもつ石器（S=1/2）
上段（1-3）：下田原貝塚（1983－85）出土（沖縄県教育委員会 1986）
下段（1-3）：トゥグル浜遺跡出土（沖縄県教育委員会 1985b）

貝製品に関しては、下田原期に比べ無土器期の遺跡における出土が圧倒的であるが、その殆どは宮古島の遺跡に集中する。宮古島の遺跡を特徴づける貝斧に関しては、下田原期の遺跡では 1 点も確認されていないが、一方で、二枚貝や巻貝に穿孔し、研磨などの加工を施す製品は、下田原期の下田原貝塚（1954、1983-85）でも無土器期と共通したものが複数出土している。また、アラフ遺跡や浦底遺跡で出土するソデボラ科（スイジガイやクモガイ）の突起を研磨して鑿状や錐状の尖端部を作り出す利器は、同様の製作方法と形状を有するものが下田原貝塚（1983-85）で出土しており、トゥグル浜遺跡で出土した敲打に用いたと考えられるヤコウガイ製の蓋製品は、ほぼ同様の痕跡を有するものが下田原貝塚（1954、1983-85）でも出土している。

哺乳類の骨牙製品や、サメ歯を用いた製品に関しては下田原期-無土器期ともに出土する遺跡が限られる。しかし、両時期共に出土する製品に共通点は多い。下田原期の下田原貝塚（1954、1983-85）、土器の出土しないトゥグル浜遺跡、無土器期の浦底遺跡では、イノシシの骨を用い複数方向からの研磨によって錐状の尖端部を作り出す製品が共通して出土しており、下田原貝塚（1983-85）と浦底遺跡ではイノシシの牙の一部を磨く製品が共通して出土している。

サメ歯を用いたい製品に関しては、穿孔と一部の研磨以外の加工を殆ど施さないことが多く、穿孔方法・形態が両時期でほぼ類似した製品が出土している（図 69・70）。いずれの遺跡のサメ歯製品も孔は 1 カ所のものが多いが、下田原貝塚（1983-85）では僅かに 2 孔タイプの製品も確認できる。また、下田原貝塚（1983-85）の一部のサメ歯製品は孔を穿たず、研磨によって尖端部を作り出すタイプのものも確認できる（図 69 の 1・4）。

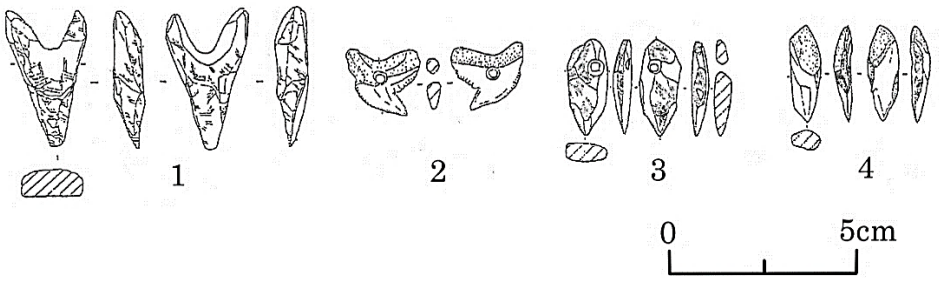


図 69. 下田原貝塚（1983-85）出土のサメ歯製品（沖縄県教育委員会 1986）

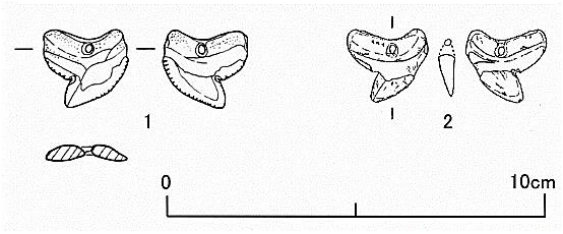


図 70. 無土器期遺跡出土のサメ歯製品
1:長墓遺跡出土（長墓遺跡調査団 2013）
2:アラフ遺跡出土（アラフ遺跡発掘調査団 2003）

これら以外に、無土器期の遺跡では明確に宮古・八重山諸島外から持ち込まれたと考えられる鉄製品・銭貨（開元通寶）が出土している。これは、無土器期において宮古・八重山諸島の外から鉄製品や銭貨をもたらす人の動きが存在したことを示している。しかし、無土器期の時間軸の中でこれらに伴って遺跡の属性が大きく変化する様子は確認できない。

以上のように、下田原期と無土器期は、有土器と無土器と言う大きな違いを有しており、特異な器種や道具の素材に関しては細かな相違点を確認することができる。しかしその一方で、その他の人工遺物に関しては、基本的なセット関係などのマクロな視点では共通点も多いことが確認できる。その中で、土器が出土していないトゥグル浜遺跡の人工遺物の組み合わせは、本論で下田原期の新段階に位置づけた下田原貝塚と、無土器期の比較的古い段階に位置する浦底遺跡の両遺跡と、共通する人工遺物が存在することを読み取ることができる。

2. 資源利用とセトルメントから見た両時期の比較

下田原期・無土器期は、どちらも複数の島の中で人々が頻繁に移動を繰り返す中で、遺跡が形成されたと考えられ、その移動は生態資源の獲得と利用に深く関係している。

下田原期に関しては、遺構・人工遺物・動物遺存体から見て食糧生産を軸とした社会ではなく、主として貝類・魚類・イノシシを、それに次ぐ形で海獣（ジュゴン・イノシシ）や鳥類、カメ類、爬虫類を採捕していた食糧獲得社会であったことが読み取れる。明確な狩猟具や解体のための道具は確認されておらず、特定の生物の狩猟に特化したような社会ではないと考えられるが、D. Yesner（1998）が述べるように、比較的採捕が簡単な貝類に比べ、魚類やイノシシなどはタンパク質とカロリー源として大きな役割を果たしたと考えられる[3]。狩猟採集社会における生存システムに関しては L. Binford（1980）が Forager と Collector の概念を提示しており、Forger では獲り尽くしと新たな資源獲得に合わせて居住ベースを移していくとされる。一方で Collector では資源獲得にタスクチームが派遣され、貯蔵などを行いながら比較的居住ベースが動かずモデルで説明される。これに対し、小川岳人（2001）は日本の縄文時代の例を踏まえながら、両者は対極的な類型ではなく、複合的かつ漸移的な関係と論じているが（本論第 3 章の註 21 を参照）、下田原期における遺跡では貯蔵の痕跡はなく、食糧や道具材利用から見ても、比較的 Forager モデルに近い形で資源獲得と居住ベースの移動が行われていたものと読み取ることができる。

下田原期の遺跡から確認できる食糧利用は、基本的にはその遺跡の周辺環境を反映しており、貝類・魚類ともに基本的にはリーフに囲まれたラグーン（礁湖）生息の種で構成されている。波照間島におけるイノシシに関しては、イノシシを島まで運んだ可能性も示唆されているが、波照間島でほぼ同一の立地を示す無土器期の遺跡でもイノシシが豊富に出土する点から考えると、波照間島にイノシシが生息していた可能性も考慮する必要がある。

一方で、遺跡から普遍的に出土する土器や石器に関しては、いずれの遺跡でも周辺で獲得できるわけではない。土器に関しては、複数の遺跡で石垣島に由来する粘土を利用しており、多良間島・西表島・波照間島では、石垣島とのアクセスが必須であったと考えられる。オセアニア島嶼地域における先史時代の土器作りでは、火山島（陸島）の火成岩（安山岩）地質の分布ラインが、良質な土器粘土の分布と相関しており（印東 2011）、宮古・八重山諸島でも火山島（陸島）である石垣島の粘土に依存した土器作りが行われていた。また、石器作りに必要な石材も、その産地の多くは石垣島を中心として、石垣島 - 小浜島ー西表島間の石西礁湖上に分布しており、石器を作る為にはこれらの産地とのアクセスが必須であったことは間違いない。

下田原期は食糧獲得社会であり、主として遺跡周辺の生態環境から食物を獲得している以上、長期間の定住には獲り尽くしによる資源枯渇のリスクが存在する。明確な居住に関わる構造物を示す遺構がないことや、ピュウツタ遺跡のような繰り返し利用した痕跡は、そのような生活様式と環境の中で、比較的短期的な居住が繰り返されたことを示している。しかしその一方で、土器・石器を作る為には、その産地である石垣島の周辺とのアクセスを維持しなければならなかった。多良間島や波照間島の遺跡では、敲石や磨石などに関しては、島で産出するサンゴや貝類へと材質を置換する工夫も見られるが、石斧や土器の材料は現地で獲得することはできなかった。その様な環境で、土器粘土の産出する石垣島において、花崗岩や変成岩の産地に近い名蔵湾周辺に複数の遺跡が立地することから、移動

を繰り返しながらも、石材や粘土産地に近い一定の地域には複数回戻ってくるという回遊的な動きを読み取ることができる。

下田原期の遺跡は、現時点では無土器期遺跡が分布する宮古島では確認されていない。下田原期の人々が宮古島までたどり着いたか否かは、今後の遺跡の発見に左右される部分もあるが、現資料からみる下田原期の人々は、資源利用と言う面で石垣島への依存度が高い。これは、例え宮古島に辿り着いていたとしても、下田原期の人々は石垣島とのアクセスを維持する必要があったことを示しており、石垣島から距離が離れた宮古島の中だけで長期間生活を続けることは困難であったものと考えられる。

また、下田原期には恒常的な諸島外との接触を示す人工遺物や文化変容は確認できない。動物遺存体にもリーフの外の生息する外洋魚は確認出来ず、稀に確認できる海獣類に関しても、数量やその狩猟に特化した道具が存在しないことから、狙って捕獲していたのではなく、偶発的に採捕したものであると考えられる。生態資源利用において宮古・八重山諸島の島々を移動する下田原期の人々ではあるが､その資源利用は本諸島内で完結しており、諸島外への動きやコンタクトは希薄であったことが読み取れる（図 71)。

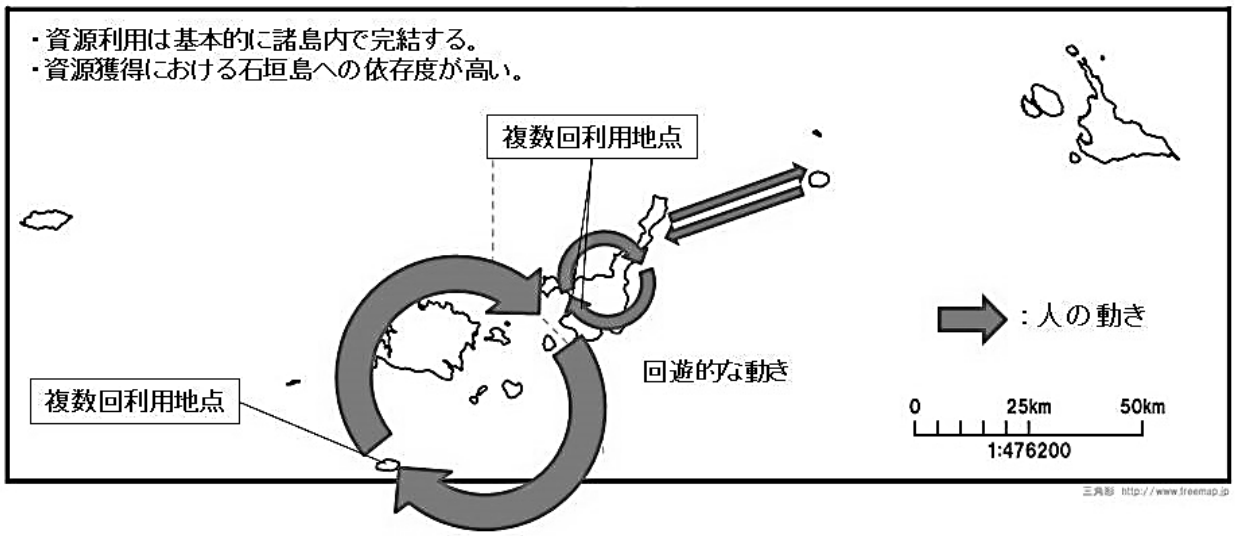


図 71. 下田原期における資源利用とセトルメントパターン

無土器期に関しても、下田原期と同様に遺跡の属性からは食糧生産を軸とした社会ではなく、食糧獲得社会であったと考えられる。この時期も主として貝類・魚類・イノシシを採捕し、それに次いでカメや爬虫類、鳥類が利用されている。下田原期に比べて貝類の種数や魚類の出土数が増加するが、これはこの時期に海水面が低下し、海岸砂丘地に遺跡が形成されるようになったことも影響していると考えられる[4]。しかし、無土器期の時期にはサンゴ礁の形成がさらに進行し、現在に近いサンゴ礁の形成が完了したとされており（小林ほか 2013)、貝類の種数の増加はそれを少なからずその環境的変化を反映していると考えてよいだろう。無土器期の遺跡でも、貯蔵や、一定の遺跡から再分配するなどの遺跡の機能差は見られない。また、繰り返し利用の遺跡が確認できることから、基本的には Binford の Forager モデルに近く、資源獲得とそれに伴う居住ベースの移動が行われていたものと考えることができる。但し、宮古島の一部の遺跡（浦底遺跡）に関しては、貝斧材料の収集・蓄積という Collector モデルに近い要素も確認することができる。

無土器期の遺跡から確認できる食糧利用は、基本的には下田原期と大きな変化は見られない。波照間島の大泊浜貝塚や、西表島の仲間第一貝塚など、下田原期遺跡に隣接する遺跡で出土する動物遺存体の種にそれほど大きな変化が無いことがそれを表しており、貝類や魚類もラグーン生息の種が中心を占める。無土器期では宮古島にまで遺跡の分布が拡大するが、宮古島の遺跡では若干陸産の貝類（マイマイやタニシ類など）が目立つものの、ラグーン生息の貝類や魚類を中心に採捕している点に大きな違いはない。

宮古島の遺跡では現在は生息しないイノシシが出土しており、これに関しては「管理」の可能性や（菅原 2015）[5]、石垣島などの島からイノシシが持ち込まれた可能性が示唆されている（久貝 2014）。しかし、宮古島のツヅキピスアブ洞穴遺跡では約 8,800 年前の層位からイノシシ骨が出土しており（宮古島市教育委員会 2011）、元々宮古島にはイノシシが原生していたと考えられる。現在はイノシシが生息しない波照間島でも、下田原期と同様に無土器期にイノシシが豊富に出土しており、かつては現生していたものが獲り尽くされた可能性は排除できない。波照間島は下田原期でも無土器期でも何度も利用する痕跡が確認できることから、石材や土器粘土が無い島における魅力としては、海産資源の豊富さ以外に、イノシシの存在も考えることができる。比較的面積の狭い島での陸獣資源獲得が効率的だとするフィッツフュー（2002）の指摘は、この点で示唆的であろう。また、宮古島のアラフ遺跡などでは複数の層位に跨ってイノシシが出土しており、宮古島ではイノシシが継続的に利用されていたことが読み取れる。イノシシを他島から搬入したとする場合、かなりの頻度で石垣島などとアクセスする必要があるが、後述する人工遺物からはその様子は確認できないことから、宮古島では元々原生していたイノシシを少なからず利用していたと考えることができる。

一方で、石器に関しては下田原期と同様に、石垣島や西表島・小浜島の一部に由来する石材が多く利用されており、特に八重山列島では石器を作る為にはこれらの産地とのアクセスが必須であった。但し、この時期には土器を利用しなくなるので、土器粘土の確保という資源的制約は存在しない。宮古島では、一部の遺跡で石垣島との結びつきを伺わせる石器と石材が出土しているが、道具の主体は貝製品が占めており、石器の一部も宮古島で産出する石材で製作するようになるなど、石垣島とのアクセスの必要性が比較的低い。宮古島の石材利用に関しては浦底遺跡に見られるように堆積岩が主体で、これは貝斧などの研磨に利用されたと考えられる。宮古島における堆積岩は東海岸部のみに分布しており、これが宮古島東部に遺跡が集中する要因の一つになっているものと考えられる。

無土器期も下田原期と同じく食糧獲得を主とした社会であり、長期定住には獲り尽くしによる資源枯渇のリスクを抱えている。下田原期とは異なり、八重山列島では竹富島や波照間島で柱穴を伴う構造物が確認されているが、竹富島の方形配列柱穴は繰り返しの建て替えが確認でき、波照間島の大泊浜貝塚は層位から無人の時期を挟んだ繰り返し利用が読み取れる。宮古島もアラフ遺跡では竪穴遺構が確認できるが、遺物包含層間に無遺物層を挟み込んでおり、繰り返し利用された可能性が高い。これらは、下田原期と同様に、無土器期でも比較的短期的な居住と移動を繰り返し、一定の場所には再び戻るという回遊的な動きが存在していたことを示している。宮古島に関しては、浦底遺跡における貝斧の出土数が群を抜いており、更に貝斧の未成品・素材、研磨に使用した石皿類など、貝斧の製作に関わる考古学的遺物が多量に出土している。また、層位が判然としないが 100 基以上の

集石遺構が検出されている。浦底遺跡は複数層位で、上層は土器を伴うことから、利用期間が比較的長い。このことから、浦底遺跡は貝斧製作に関して、貝斧の素材の収集と蓄積、生産と生産品の蓄積が行われていた可能性が考えられる。長墓遺跡や長間底遺跡、アラフ遺跡、友利元島遺跡などの他の遺跡でも未成品は出土しており、各遺跡で発掘面積の違いが存在することから、浦底遺跡を Collector モデルにおける資源の蓄積が行われる居住ベースとは断定できないが、宮古島における回遊的な動きの中で、浦底遺跡が貝斧製作においては重要な位置を占めていたことを読み取ることができる。

無土器期は下田原期と異なり、宮古島にまで遺跡の分布が拡大し、宮古島の中でも比較的長期間に渡る継続的な活動が確認できる。この要因には、無土器期の時期に珊瑚礁形成が拡大（小林ほか 2013）するとともに海水面が低下し、宮古島遺跡が立地する海浜砂丘地が形成されるなど、環境面の変化が大きく影響していると考えられる。これに加え、宮古島の遺跡から確認できる生態資源利用は、八重山列島に比べて石垣島や石西礁湖地域との強い結びつきを必要としていない。石斧に代わる貝斧と、それを磨く材料を宮古島東海岸部で獲得できること、更に土器を作らないため土器粘土を必要としないことは、宮古島での生存に有利に働いたものと考えられる。

このように、宮古島と八重山列島は生態資源利用の戦略が異なっている。八重山列島の生態資源利用の形は下田原期に近いと言えるが、八重山列島では波照間島のような石材産地から離れた島でも、宮古島のような資源利用戦略を採用しておらず、また宮古島の遺跡では火成岩や変成岩の利用が希薄である。このことから、二つの地域の間における人の移動は希薄で、無土器期の終末期まで両地域間の変異は継続したものと考えられる（図 72）。

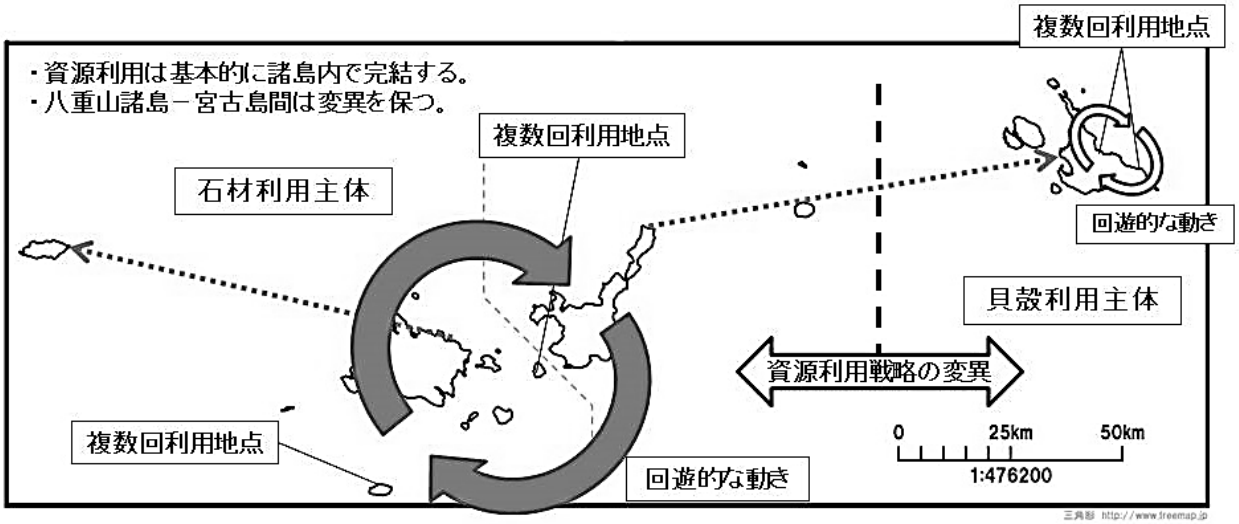


図 72. 無土器期における資源利用とセトルメントパターン

無土器期はこのような諸島内の人の動きに加えて、宮古・八重山諸島の外から持ち込まれた鉄製品や銭貨（開元通寶）が出土している。これらは諸島外からの人の動きを示しており、開元通寶に関しては大陸とのヤコウガイ交易によってもたらされたとする説も提示されている（木下 2000）。しかし、出土傾向は散発的で、宮古・八重山諸島で銭貨が流通していた形跡は確認できない。実際に交易があった場合、銭貨以外にも様々な物質がもたらされ、本地域における 11 世紀後半以降のように少なからず文化的影響があると考えら

れるが、遺跡間や各遺跡の層位間ではそのような様子は読み取れない。宮城弘樹（2012）は『嶺表録異』（888-904 年）における、新羅海商が福建へ向かう際に琉球に漂着し、現地人が鉄釘を求めた記述との関連性を指摘しているが、無土器期における出土傾向や時空間的変異を見る限り、宮城の指摘するように、漂着などの偶発的な要因によって鉄製品や銭貨がもたらされたと考える方が妥当性を有している。無土器期は、下田原期と同様に鉄製品や銭貨以外の生態資源利用は宮古・八重山諸島内で完結しており、外からの偶発的な人や物の移動は、その後の恒常的な往来へは展開しなかったものと考えられる。

3. 下田原期と無土器期の相違点と共通点

下田原期と無土器期は、土器文化と無土器文化という違いや、無土器期における貝斧の存在・遺構に注目すると、物質文化が大きく異なるように見える。しかし、石器の基本的なセット関係は二つの時期で共通しており、貝斧は石器における石斧と共通した平面形と刃部形態を有しており、同様の機能が推察できる。また、貝製品や哺乳類骨牙製品などは、下田原期では後段階に位置づけた遺跡に集中し、無土器期では比較的古い時期の宮古島の遺跡に確認できる。遺構に関しても、方形配列の柱穴遺構、集石遺構は無土器期にのみ見られる特徴ではあるが、下田原期の遺跡にも柱穴痕や焼けた礫の散布など、その萌芽の可能性を示す痕跡は残されている。

下田原期と無土器期の共通性に関しては、資源利用とセトルメントパターンに関しても相違点と共通点を指摘することができる。相違点としては、無土器期に土器利用が存在しなくなり、土器粘土の確保が必要なくなったことで、下田原期とは異なり土器粘土産地とのアクセスを維持する必要がなくなったことが挙げられる。また、無土器期には遺跡の分布範囲も宮古島まで拡大している。

一方で共通点としては、下田原期と無土器期の八重山列島における石材利用と、遺跡の立地環境を挙げることができる。二つの時期では石器における石材の選択（火成岩・変成岩・堆積岩等）、そして遺跡の立地に関しても共通する点が多く、遺跡が集中する地域、繰り返して利用する痕跡が確認できる遺跡にも、共通する点が存在する。下田原期-無土器期ともに、食糧獲得を主とした社会で、八重山列島内を回遊的に移動している点も類似点の一つに挙げることができる。

無土器期における宮古島の人々に関しては、資源利用が同時期の八重山列島とは異なっており、宮古島で入手できる貝類や堆積岩（砂岩・泥岩等）を主体に利用する。この資源利用の戦略は、宮古島における継続的な生存に有利であったと考えられ、実際に遺跡からも宮古島における継続的な人間活動が読み取れる。この資源利用と宮古島における継続的な人間活動は、下田原期とは大きく異なっているが、基本的な食糧獲得社会、回遊的な移動に関しては共通しており、道具のバリエーションも大きく異なるわけではない。宮古島における資源利用の戦略は、宮古島の環境に合わせて展開したものと考えられ、基本的な資源利用とセトルメントのシステムは無土器期の八重山列島と共通している点も多い。

また、下田原期では新段階に位置づけた下田原貝塚（1954・1983-85）が一部の石器（尖頭器）や貝製品（ソデボラ科製品や回転穿孔した貝類）、骨牙製品（骨針など）に特性を有するが、同様の製品が土器を出土しない与那国島のトゥグル浜遺跡、無土器期にて比較的古い時期の浦底遺跡などの宮古島の遺跡で確認されている。この点は、二つの時期の関係

性に関して示唆的であるが、これに関しては既存の研究で示された南方地域との関係性も踏まえて、台湾・フィリピンとの比較を通して次章で検証することとしたい。

---

[1] 出土した土器が図面のどの土器に当たるかは明記されておらず、判然としない。

[2] 下田原期（上段）の 1 は大田原遺跡（1978）Ⅲa 層出土（沖縄県教育委員会 1980）、2 は大田原遺跡（1980）Ⅱ層出土（石垣市教育委員会 1982）、3 は下田原貝塚（1983-85）Ⅲ層出土（沖縄県教育委員会 1986）、無土器期（上段）の 1 は神田貝塚Ⅲa 層（沖縄県教育委員会 1980）、2 は船浦貝塚Ⅲ層出土（Pearson1978）、3 は大泊浜貝塚 6 層出土（沖縄県教育委員会 1986）。

[3] D.Yesner（1998）は、北アメリカの狩猟採集民を例とし、貝類採捕は特殊な技術が必要なく、男女問わず比較的容易に行うことが可能な「採集」に近いものと位置づける一方で、貝類採捕のみでは生存における摂取カロリー不足することを指摘しており、それを補うものとして哺乳類の狩猟や、魚の漁労が必須であると位置づけている。

[4] 酸性土壌の土層に比べ、砂層における動物遺存体の残存率は相対的に高いと考えられる。

[5] 菅原広史（2015）は、友利元島遺跡出土のイノシシ遺存体の分析を基にし、出土したイノシシの年齢分布、雌雄比率・動物遺存体数に対する割合から、若齢のオスのイノシシへの偏りを指摘し、イノシシが人為的「管理下」にあった可能性を指摘した。但し、この「管理」は必ずしも飼育を意味しておらず、ブリーディングを含まない放し飼いなども含む漠然とした管理の意味合いを有している。

第 6 章　南方文化起源論の検証

本論のここまでを通して、宮古・八重山諸島における先史時代における下田原期・無土器期の文化内容を整理し、比較することで各時期の特徴と、その共通点と相違点を抽出した。本章ではこのデータを基にして、更に台湾・フィリピン地域における先史時代と比較を行い、既存の研究で示された南方起源論の可能性を検証することとする。

1. 台湾・フィリピンにおける先史時代

・台湾における先史時代

台湾は、八重山列島最西端（日本列島最西端）に位置する与那国島から西方約 100 ㎞に位置する。天候に恵まれた良好な視界条件であれば、与那国島から台湾の島影を確認することができるが、与那国島は島の面積が小さく、台湾側からは視認することができない。

台湾における最初期の物質文化は、台湾東海岸部の八仙洞遺跡[1]に代表され、約 BP30,000～15,000 年の段階における礫器（図 73）主体の旧石器文化（長濱文化）が確認されている（e.g. 宋 1969、劉 2002、臧 2013b など）。

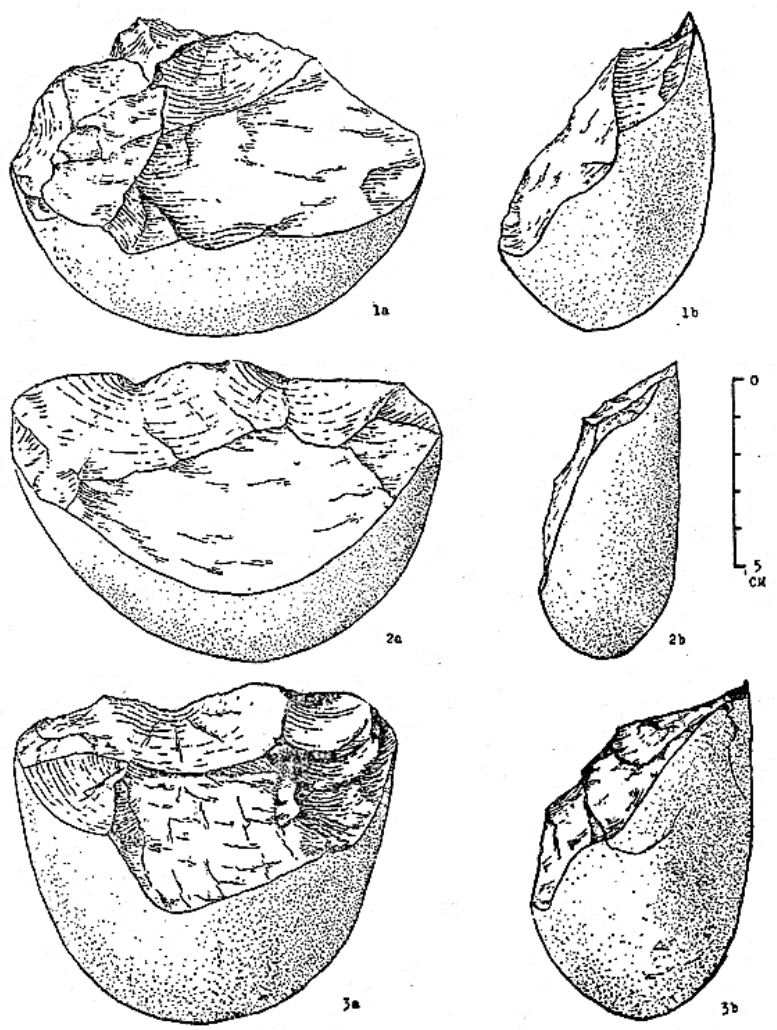


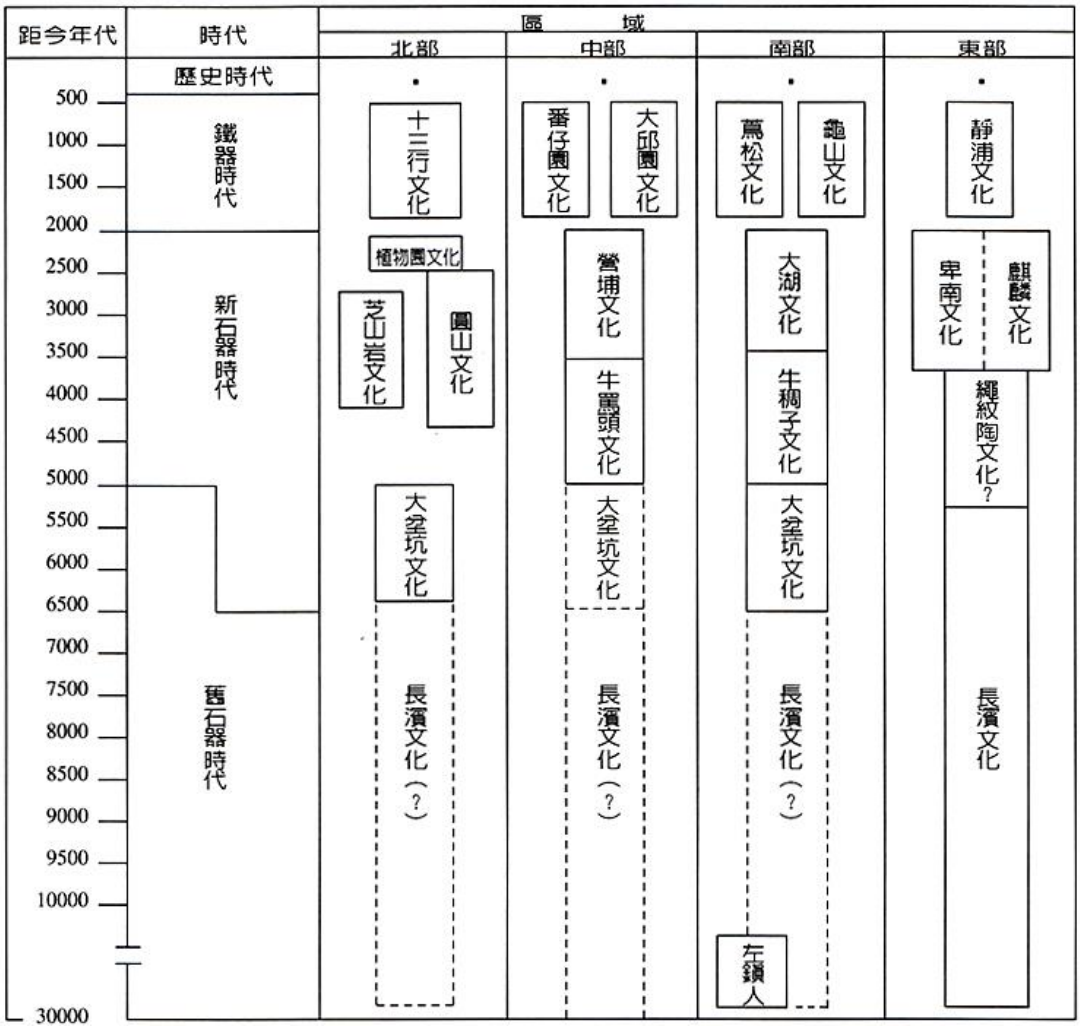
図 73. 長濱文化・海雷洞/潮音洞遺跡出土の礫石器（劉 1969）

台湾における人類活動は、台湾西部の膨湖海域で出土した人骨や、加工痕を残す動物骨などから、約 BP40,000～10,000 年には存在した可能性が指摘されている（何 2001・2010）。また近年では、原人[2]と考えられる人骨が台湾西部沖で発見されており、台湾における人類の活動が約 BP190,000～10,000 年に遡る可能性が提示されているが（Chang et al. 2015）、これらの人類活動と旧石器文化がどう関係するかは判然としていない。

約 BP20,000 年頃の台湾はユーラシア大陸と陸続きであることから、台湾の旧石器文化は現在の中国東南沿海地域との文化的な繋がりが考えられるが（劉 2002）、これらの地域の旧石器文化が必ずしも同一視できないという意見も提示されている（西村 2010）。また、約 BP10,000 年以降の台湾は、温暖期により海水面が上昇して島として大陸から分離されることとなり、これ以降の台湾における旧石器文化は、大陸側とは異なった独自の物質文化が展開していったと考えられている（劉 2002）[3]。

この旧石器時代の後、約 BP6,500 年になると、ユーラシア大陸東南沿海地域から台湾へ、農耕を有した人類集団の移住と文化伝播が発生し（劉 2002・2011）、大坌坑文化と呼称される物質文化が展開した[4]。この時期は、台湾の歴史区分では新石器時代として位置づけられている（表 38）[5]。

表 38. 台湾における先史時代の編年（臧 1995）



大坌坑文化は、焼畑農耕と狩猟漁撈採集とを組み合わせた生業を営んでおり、それに関わると考えられる打製/磨製の石斧、石刀（石包丁）、網墜（網の石錘）等の石器は、後続する文化類型にまで受け継がれている（図 74）。

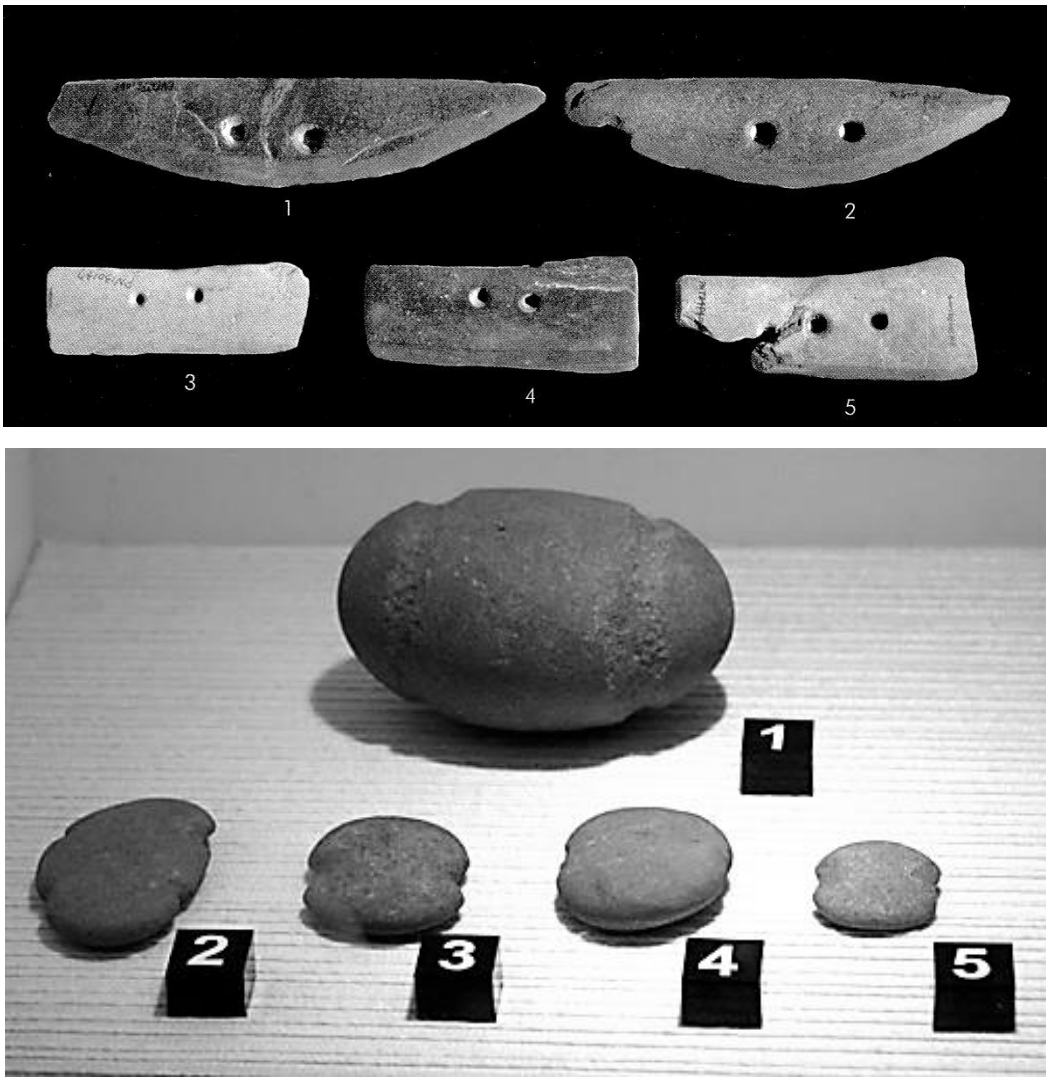


図 74. 台湾新石器時代出土の石刀（上）と網墜（下）（縮尺不同）
（上：台湾東部卑南遺跡出土の石刀（石包丁））（連・宋 2006））
（下：台湾南部の墾丁寮遺跡出土の網墜）筆者撮影・国立台湾博物館所蔵）

また、大坌坑文化を大きく特徴づける人工遺物として縄紋陶[6]と呼ばれる土器の存在が挙げられる（図 75）。この土器は、底が極端に深くならず鉢形を呈し、肩部（胴部が鋭く張り出し、くの字状に折れる）を有する資料が特徴的だが、胴部が丸みを持つ資料も確認されている。底部は板状の工具で叩いて成形することによって丸底に仕上げられており、胴下半部には叩き目が刻まれている。一方で胴部上半、特に肩部から口縁部にかけて、線状の模様が施される。また底部に圏足[7]を有する資料も確認されており、器種バリエーションは幅広い。

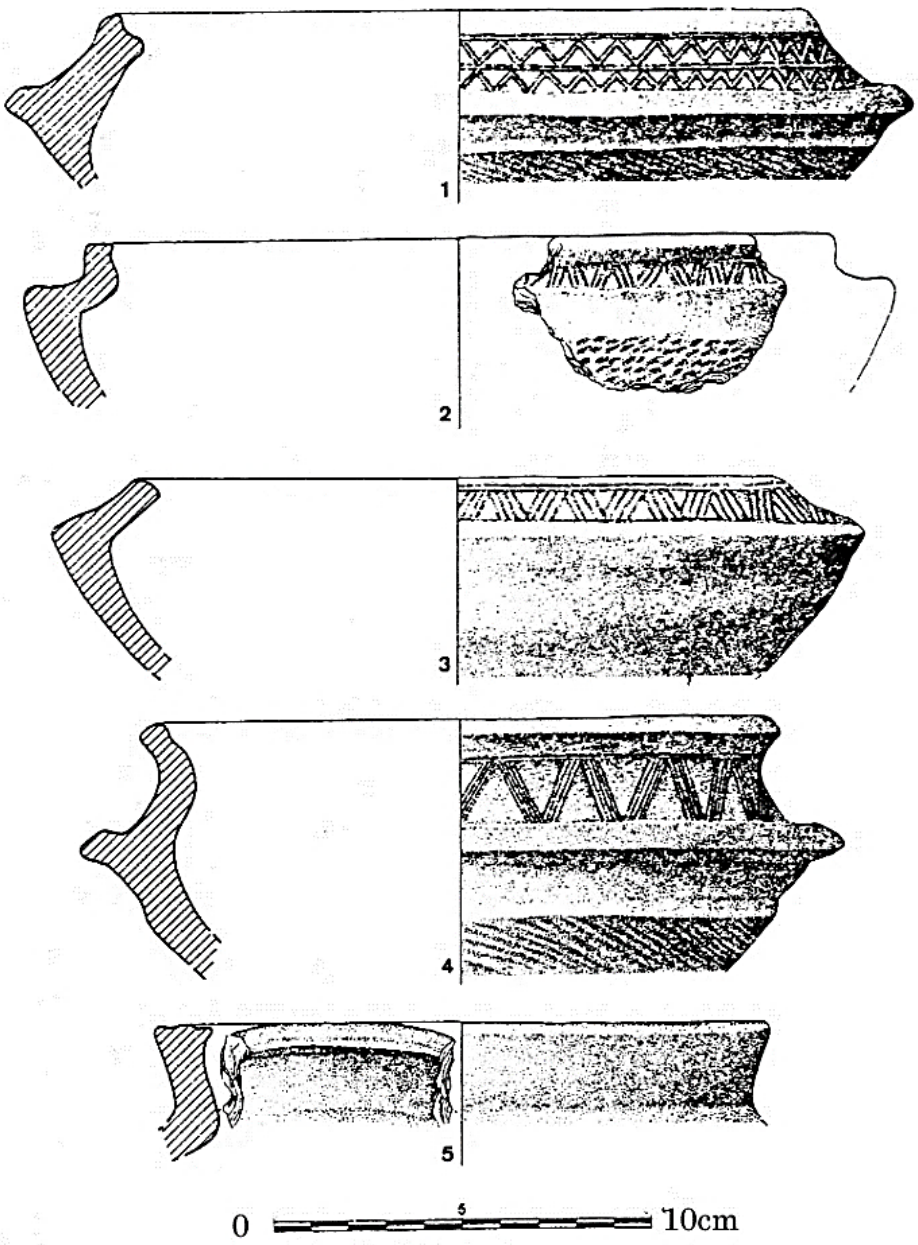


図 75. 台湾北部莊厝遺跡出土の大坌坑文化土器（劉 1996）

台湾西部の南北地域に展開した大坌坑文化は、BP5,000 年頃になると台湾東部へと伝播する[8]。この時期には、台湾南部で石の板を組み合わせて製作された石板棺に、土器や玉製品（ネフライト製品）を副葬する埋葬が確認されているが、これと類似する玉製品（図 76）などの副葬品を伴う石板棺（図 77）埋葬は BP3,500 年以降の台湾東部の卑南遺跡などでも確認することができる（連・宋 2006）。その伝播過程で大坌坑文化からはいくつかの属性が欠落するとともに、一方で新しい属性が付加され、地域的な特徴が表出する「ローカル化」が進んだものと捉えられている（施 2001）。

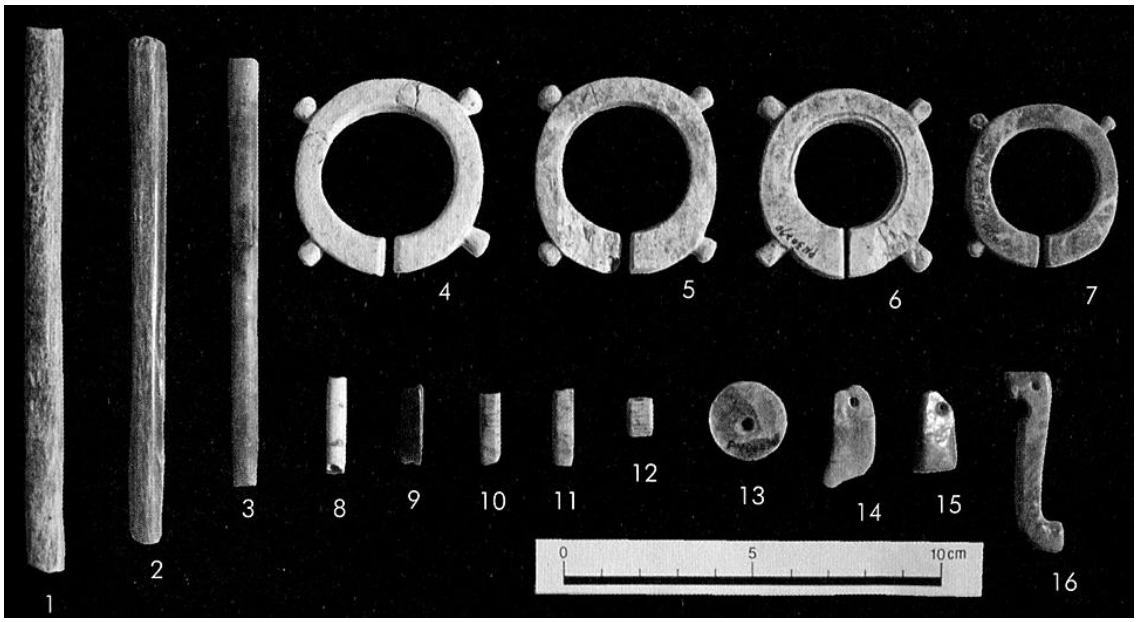


図 76. 台湾東部卑南遺跡出土の玉製品（連・宋 2006）

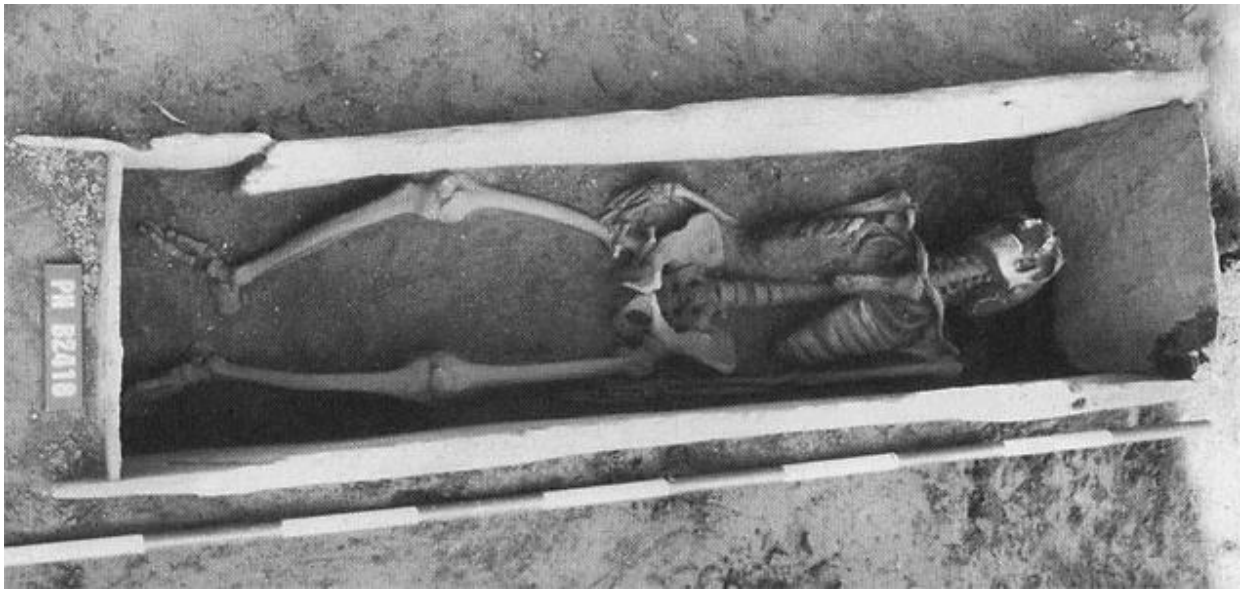


図 77. 台湾東部卑南遺跡出土のスレート製石棺と埋葬人骨（連・宋 2006）

このように、台湾東部地域における新石器文化は、基本的には台湾西部から伝播した大坌坑文化を継承しながらも、ローカル色が反映された物質文化が展開する。その特徴が最もよく現れているのは土器で、BP4,500 年−3,000 年における台湾東部の富山遺跡では、肩を有する折肩罐などの大坌坑文化系統の土器器種を継承しつつ、把手が付く器形の雙耳鉢などの器種が加わった土器類型が確認できる（図 73）。この土器類型は、その後の BP3,000～2,000 年頃に台東地域で展開する卑南文化類型・麒麟文化類型に継承されており（図 74）、土器文化の連続性を読み取ることができる。

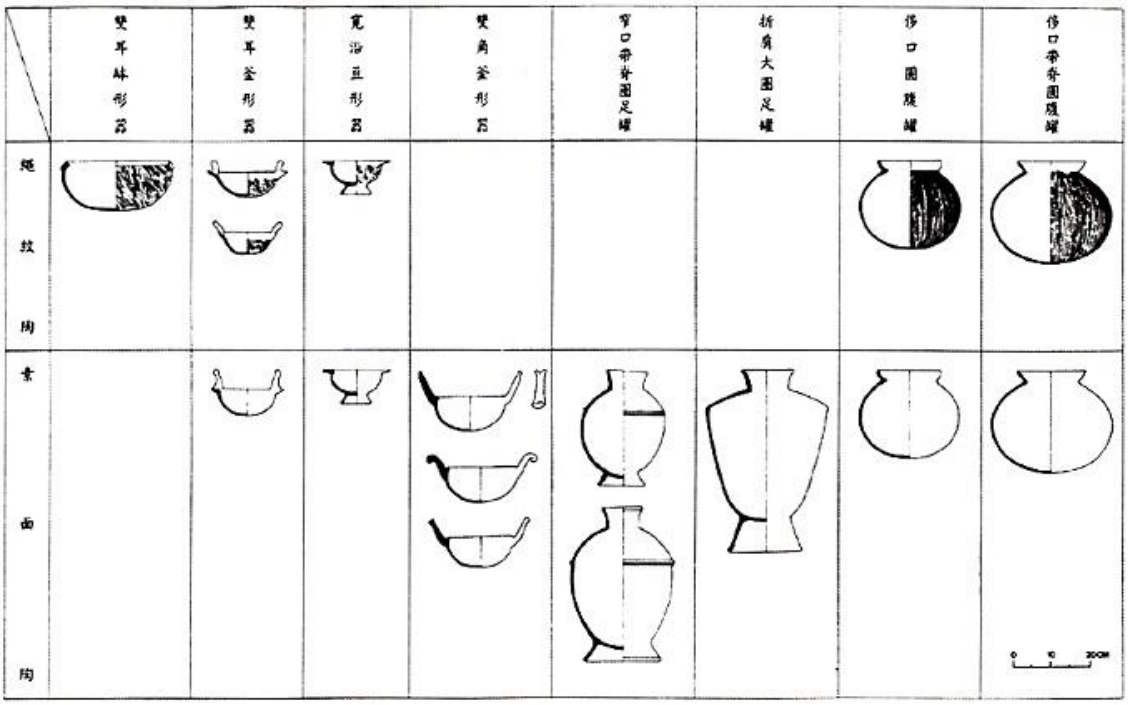


図 78. 富山遺跡出土の土器類型（施 2001）

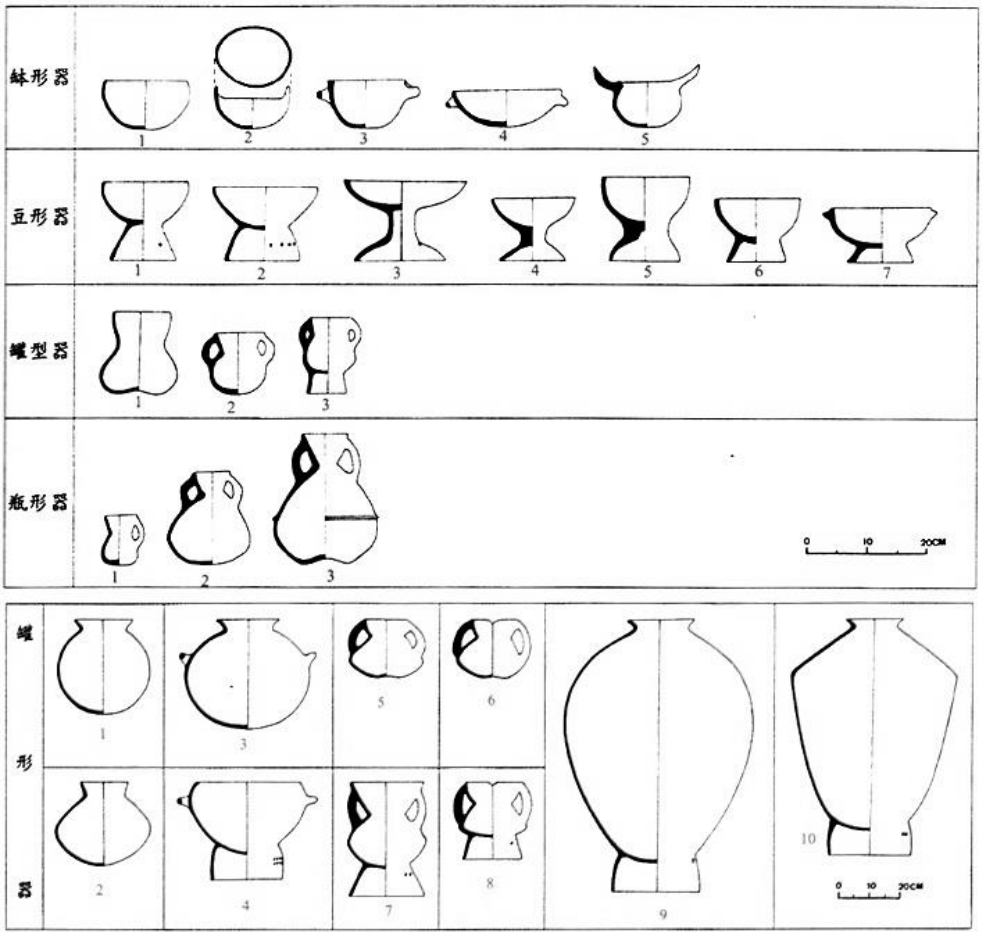


図 79. 長光遺跡における土器類型（施ほか 2001）

台湾は約 BP2,000 年以降、土器や石器などに加えて、鉄器などの金属器を併用するようになる。この時期は「鐵器時代」或いは「金属器時代」と呼称されており、台湾東北部の十三行遺跡などでは鍛冶炉などの製鉄に関わる遺構や、それに伴う鉄滓が出土するなど、ガラス製品などの対外的な交流を伺わせる資料も多数確認されている（臧・劉 2001）。

AD1,624 年になると、オランダの東インド会社が台湾南部を制圧し、台湾はオランダ統治の時代に入る。オランダの統治は AD1,662 年の鄭氏政権の樹立によって終焉するが、このオランダ統治が始まる時期を以て台湾の「歴史時代」が始まると捉えられており、それ以前の時期が先史時代[9]と位置づけられている（施ほか 2001）。

・フィリピンにおける先史時代

フィリピンにおける人類活動は、Tabon 洞穴遺跡の約 BP23,000 年（Fox1970）や、Naulan 遺跡の約 BP12,000 年（Coutts1983）などが古い年代を示すものとして知られている。この時期の遺跡では、石材の剥片を利用した石器や、ハンマーストーンなどが出土しており（図 80）、特に剥片石器に関しては「不定形剥片石器」という名称で、素材選択や製作のシステムが論じられている（小川 1984）。

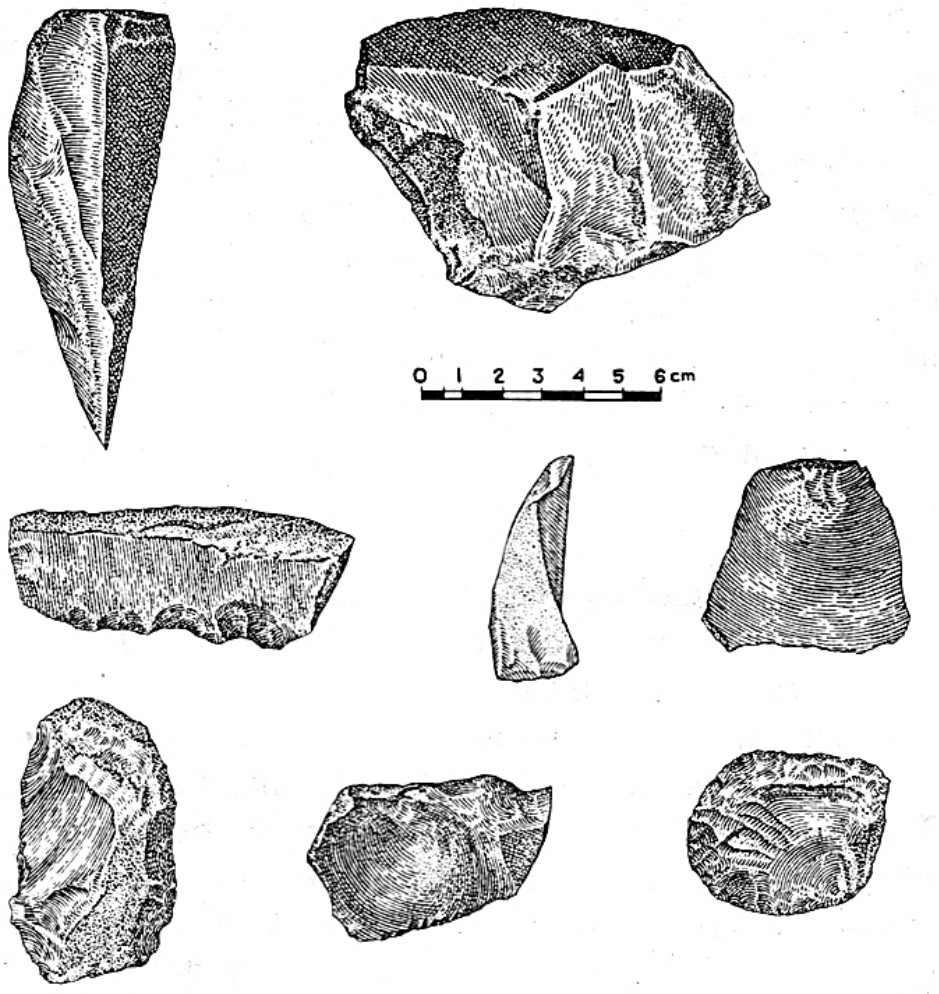


図 80. Tabon 洞穴遺跡（フィリピン）出土の石器（Fox1970）

東南アジアの大陸部においては、ソンヴィー文化（約 22,000 年前）→ホアビン文化（約 11,000 年～7,300 年前）→バクソン文化（約 10,000 年～8,000 年前）→ダブート文化（約 6,000 年前）という連続的な発展の経過が知られているが、不定形剥片石器はこれらの文化的枠組みとは特徴が異なるとされている（今村 2001）。これらの遺跡や石器は、所謂「旧石器（Palaeolithic）時代」に分類される（表 39）。

表 39. フィリピンの先史時代編年
（研究者により異なる時代区分と対応関係を併記）（田中 2013）

	ベイヤー	フォックス	タボン洞穴群の主要洞穴のC14年代など
A.D.1521	陶磁器時代	原史時代 交渉と交易の時代	10世紀後半
	鉄器時代	発展期金属器時代	2,140±100B.P.(マヌングル洞穴 B室)
B.C.200	後期新石器時代	初期金属器時代	B.C.500～300(ドゥヨン洞穴 第Ⅰ層)
		後期新石器時代	2,840±80B.P.(マヌングル洞穴 A室)
B.C.1,750	中期新石器時代	前期新石器時代	B.C.1500(ニーベット・ドゥルドゥグ洞穴)
B.C.2,250	前期新石器時代		4,630±250B.P.(ドゥヨン洞穴 屈葬) 5,680±80B.P.(ドゥヨン洞穴 居住面)
B.C.4,000	原新石器時代	小剥片・石刃アセンブリッジ	
B.C.6,000			7,000±250B.P.(ドゥヨン洞穴 第Ⅳ層)
B.C.8,000	中石器時代	後期旧石器時代	9,350±250B.P.(タボン洞穴 FAⅠ-B)
20,000年前	旧石器時代		23,000±100B.P.(タボン洞穴 FAⅢ)
50,000年前			45,000～50,000年前

フィリピンにおける旧石器時代の遺跡は、北部のルソン島での事例が僅かであったが、近年 Callao 遺跡で発見された人骨に約 BP67,000 年の年代が与えられている（Mijares et al.2013）。しかし、この人骨に関しては新人・原人両方の可能性を残しており、旧石器文化の人々とどう関係するかは判然としていない。

約 BP4,000 年以降になるとフィリピンでも「新石器（Neolithic）」の物質文化が確認されるようになる。この時期の遺跡としては、フィリピン北部ルソン島のカガヤン川流域に複数の貝塚遺跡が確認されており、その内の一つである Nagsabaran 遺跡に関しては、台湾島南部の潮來橋遺跡出土の土器との共通性が指摘されている（図 81）。フィリピン北部と台湾島南部に関しては、土器以外にも玉製品の共通性（Hung2005）や、フィリピン出土の玉製品の産地が台湾であること（Iizuka & Hung2005）が示されている。フィリピン地域は、BP2,000 年頃には鉄製品を利用する鉄器時代に入るが（表 39）、この時期も含め、台湾との間には集団の入れ替わりを含む断続的な交流があった可能性が土器の分析の視点から指摘されており（田中 2013）、台湾との間には断続的な文化関係が存在したことが読み取れる。

このような新石器時代以降の台湾とフィリピンの関係は、BP3,300 年頃に東南アジア島嶼地域を経てリモート・オセアニアへと拡散する、オーストロネシア語族の拡散[10]の過程として解釈されている（図 82）。

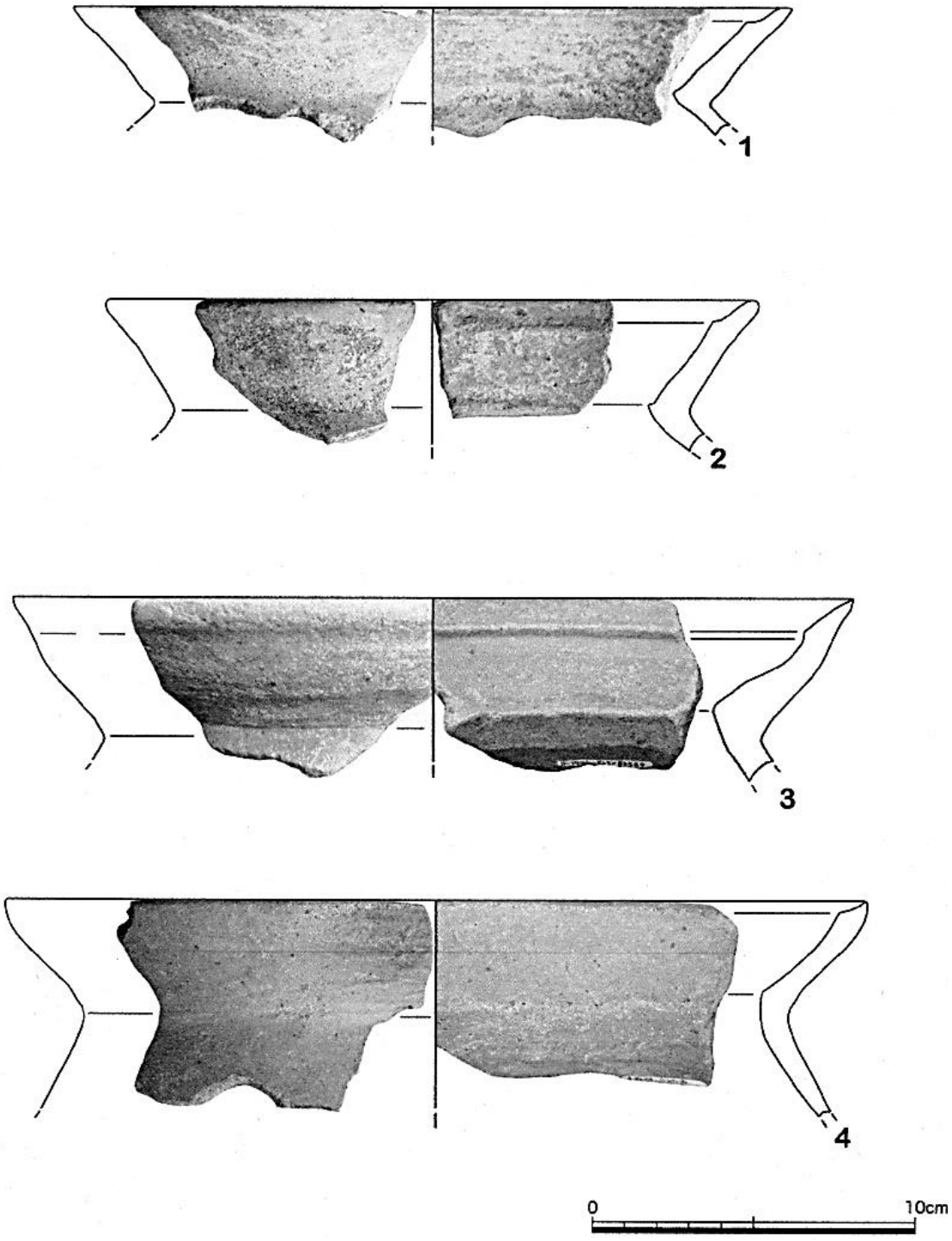


図 81. 台湾とフィリピンの土器（Hung2005）
（1・2：台湾東南部：潮來橋遺跡出土）
（3・4：フィリピン北部：Nagsabaran 遺跡出土）

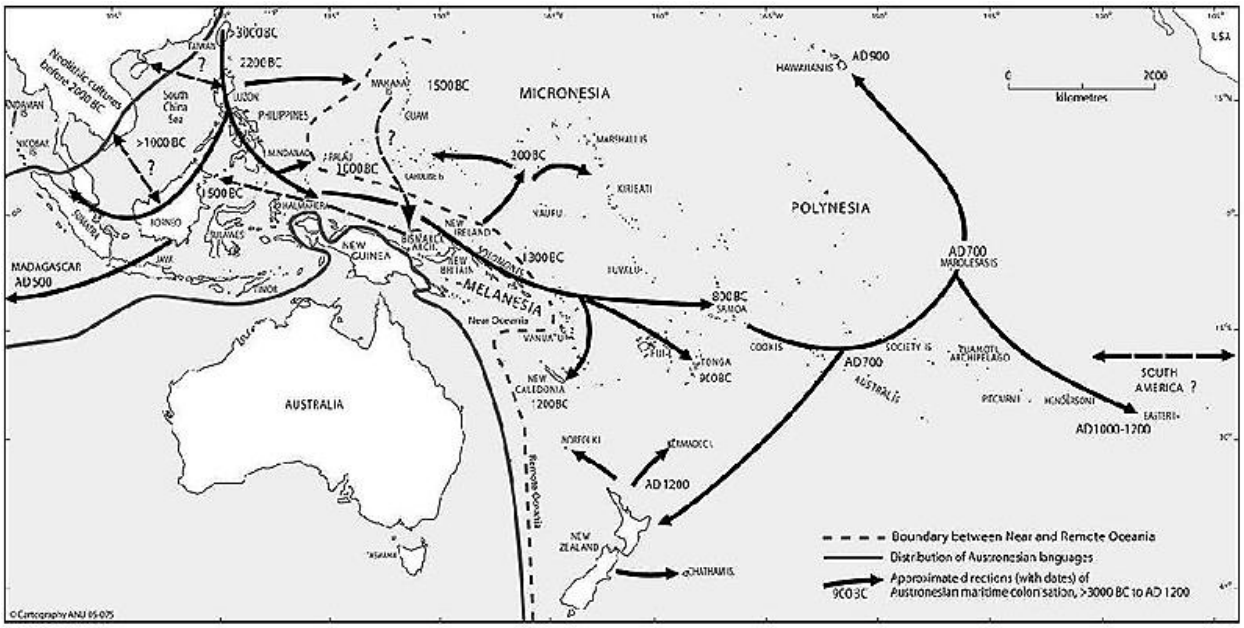


図 82. オーストロネシア語族の拡散経路とその年代（Bellwood2011）

・台湾・フィリピンから見た宮古・八重山諸島の先史時代の位置付け

以上のように、宮古・八重山諸島の先史時代に並行する、台湾・フィリピンでは、オーストロネシア語族の拡散に代表される大きな人や文化の動きが存在していた。

一方で、同じ時期には沖縄諸島以北に九州地域からの縄文土器文化の伝播が生じていた。沖縄諸島以北における縄文土器文化や、その後の九州～奄美群島～沖縄諸島における文化的な関係と、中国東南沿海部～台湾～フィリピン地域における人や文化の動きは、文化的な背景が明確に異なっている。これは物質文化（遺構・人工遺物の特徴など）やその変遷、生業（食糧獲得社会と食糧生産社会）、また言語学的な背景[11]から、説明することができる。

このことは、先史時代における宮古・八重山諸島が、南北の異なる大きな人や文化の動きの境界的な位置に存在していたことを示している（図 83）。既存の研究によって、宮古・八重山諸島の先史時代における物質文化は沖縄諸島とは異なることが明らかにされており、両地

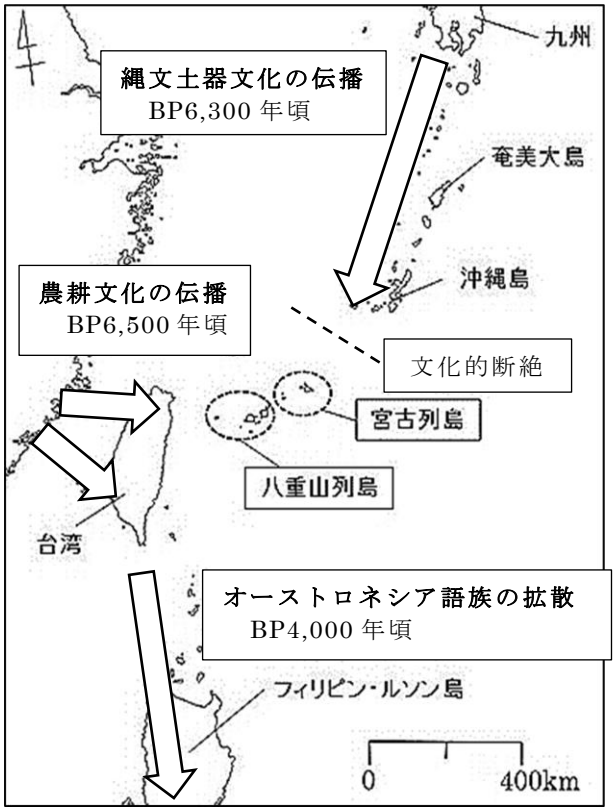


図 83. 先史時代の宮古・八重山諸島を取り巻く大きな人・物の動き

域の間には文化的な断絶が存在すると考えられている（e.g.沖縄県文化振興会 2003）。

宮古・八重山諸島の先史文化は、既存の研究で南方地域との関係が示唆されており、下田原期の土器文化は台湾東部へ、無土器期の貝斧文化はフィリピン南部へと起源関係が求められてきた。これは、台湾-フィリピン間で論じられているオーストロネシア語族の南への拡散が北上した可能性も含め、宮古・八重山諸島の先史文化と何らかの関係性が存在した可能性を示しているが、これまでの南方起源論は具体的にそこまでは言及していない。そこで本章では、台湾東部における物質文化や、オーストロネシア語族の拡散過程、東南アジア-オセアニアにおける貝斧文化の展開との比較を通して下田原期・無土器期の文化起源論を検証し、その関係を探ることとする。

2. 台湾における物質文化の展開と下田原期の比較

宮古・八重山諸島の先史文化と、台湾の新石器文化の関係を考える上では、地理的な条件や、並行する時間軸から、台湾東部の BP5,000 年以降の縄紋陶を利用する時期が比較対象に適当であると考えられる。しかし、この時期における両地域の物質文化は総合的に見ると異なる点が多い。

土器に関しては、宮古・八重山諸島の下田原式土器と、台湾南西部の鳳鼻頭遺跡（図 85）における把手付きの土器（図 84）との関連性が指摘されており（高山 1977、新田 1980）、粘土紐の巻き上げ技法や、平底の器形、胎土に砂が混じる点、把手の形態などの類似点は確認できる。しかし一方で、鳳鼻頭遺跡で同時期の出土する土器は叩き成形技法で製作された土器が混在しており、全体的な器形バリエーションも下田原式土器とは一致しない。また、鳳鼻頭遺跡の土器（図 84）は、器表面に彩色紋様を伴う彩陶が供出しており、人工遺物の供出関係が下田原期の遺跡とは大きく異なっている。

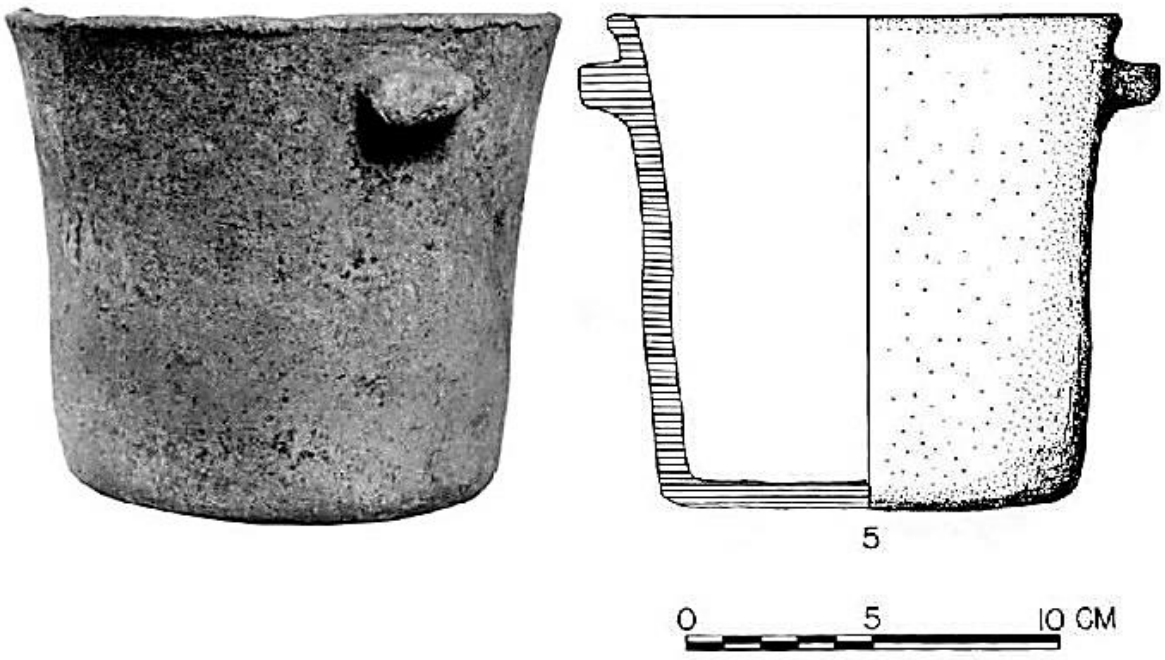


図 84. 台湾南西部鳳鼻頭遺跡出土の Sandy Red Ware（Chang1969）

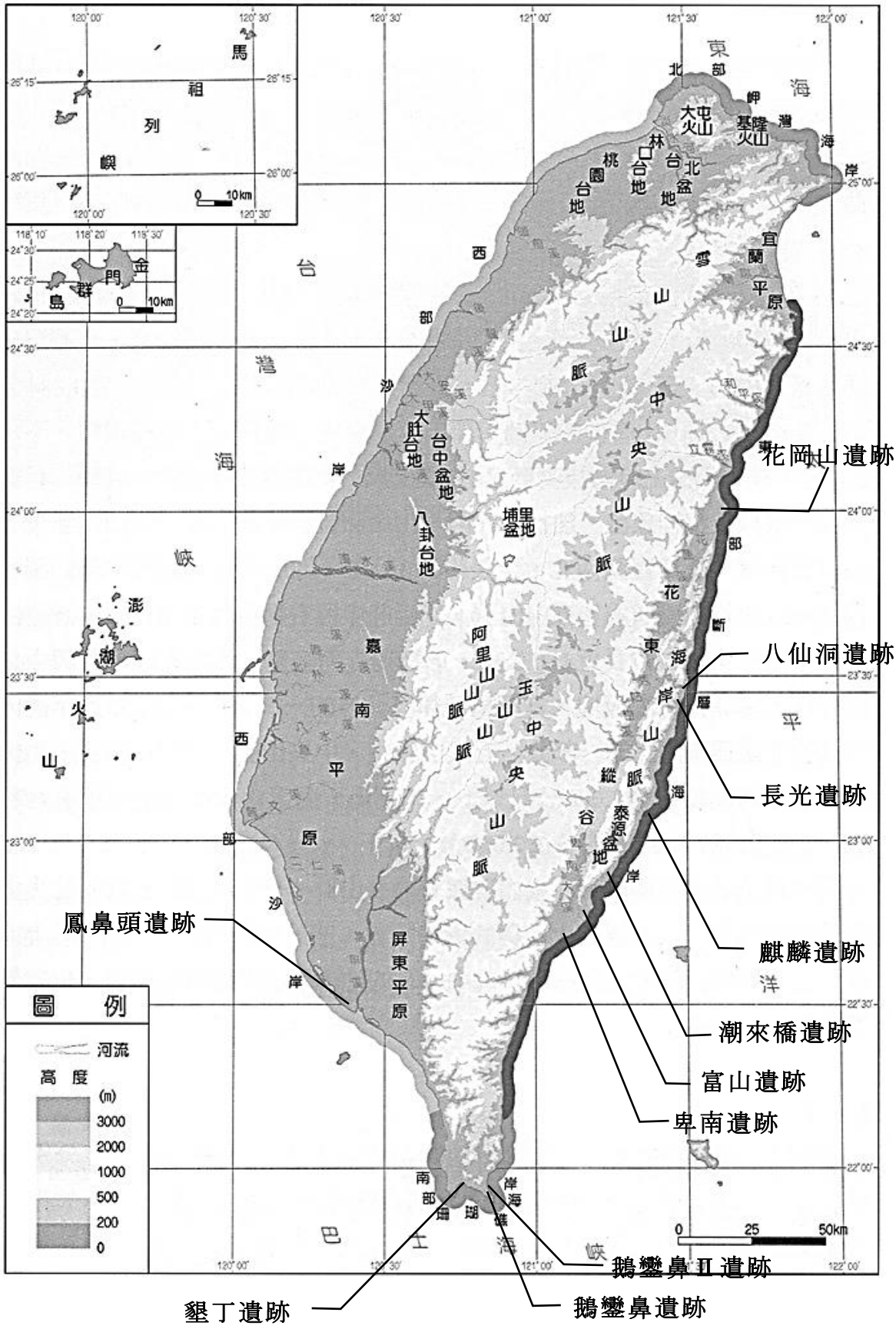


図 85. 本論で取り扱った台湾遺跡の位置関係（張ほか 2008 を基に作成）

下田原式土器と台湾南部から東部にかけての大坌坑文化以降の土器バリエーションは、富山遺跡や長光遺跡（図 85）などに代表される土器類型（図 78・79）を見ても違いが大きく、下田原期で最も復元土器のバリエーションが豊富なピュウツタ遺跡のバリエーションと比較しても直接的な繋がりは読み取れない。また、大坌坑文化系統の土器は叩き成形によって製作され、器表面にその痕跡が付くことが多いが、下田原式土器にはそのような痕跡は確認できない。但し、「把手」の付いた土器に関しては、既存の研究で注目されたように、数少ない類似性を示している。

台湾先史時代における土器の把手は、台湾に土器文化が展開した最初期の大坌坑文化土器のバリエーションには確認されていない。台湾先史時代の把手付きの土器としては「雙耳缽形器」（図 86）や、「雙角缽形器」（図 87）などを挙げることができるが、これらは台湾西部から持ち込まれる大坌坑土器文化には含まれておらず、台湾東部で新たに獲得された土器の特徴であると捉えられている（施 2001）。

図 86. 富山遺跡出土の雙耳缽形器（施ほか 2001）

図 87. 長光遺跡出土の雙角缽形器（施ほか 2001）

図 86・87 に示した把手付き土器は、いずれも下田原式土器の把手付き土器（図 88）と形態的な共通性を示している。また、雙耳鉢などの把手は、下田原式土器の把手付き土器と同様に、器形を成形した後に貼り付けて成形されている。遺跡から出土した資料の中には器表面から剥がれ落ちた把手資料も存在するが（施 2001）、器表面から剥がれ落ちた把手資料は下田原期の遺跡でも確認することができ、把手の制作面での共通性も示している。

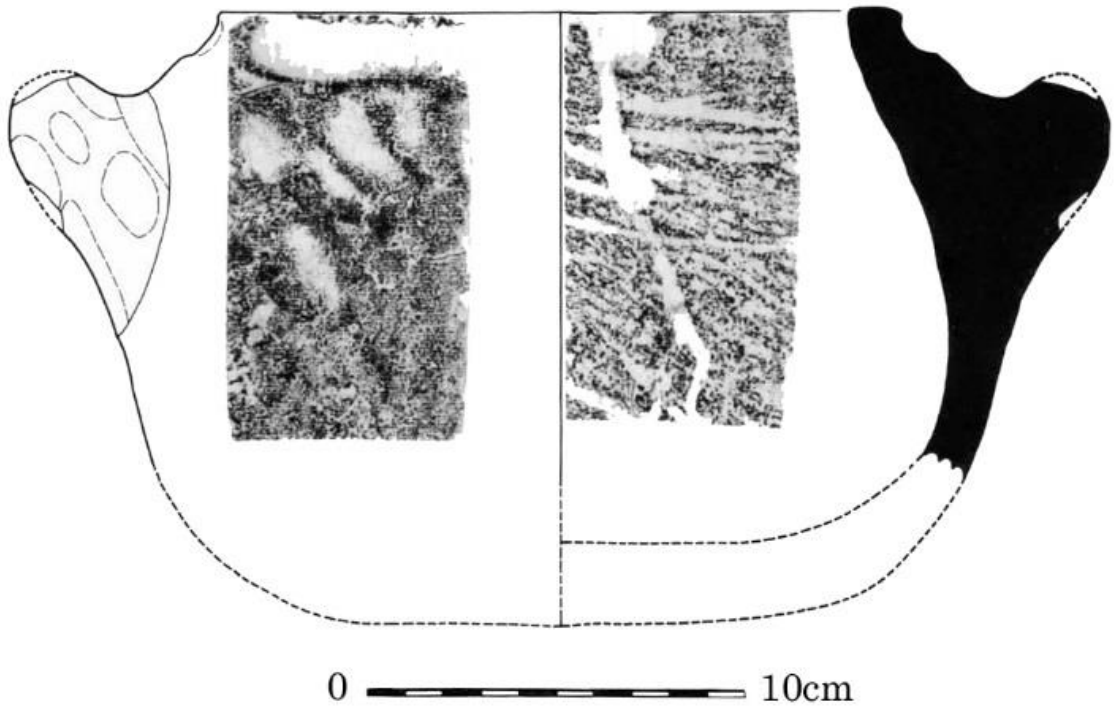


図 88. 下田原貝塚（1983-85）出土の把手付き土器（沖縄県教育委員会 1986）

図 86 の雙耳鉢は、図 87 の雙角鉢に対し年代的に先行し、BP4,500–3,000 年に位置する台湾東部の縄紋陶文化に含まれる。施添福ら（2001）は、この時期を大坌坑文化期に後続する時期に位置づけており、大坌坑文化系統の土器バリエーションを継承しつつ、そこに新たに加わる器形として雙耳鉢などの把手土器を捉えている。

一方、図 87 の雙角鉢は、BP3,000–2,000 年頃に位置し、この時期は無紋の土器が増加することから「素面陶[12]文化」とも呼称される（施 2001）。雙角鉢は台湾東部の長光遺跡の土器類型（図 74）に含まれるが、長光遺跡の土器は台湾東北部の花岡山遺跡や、東南部に位置する卑南遺跡とも類似性を示している。卑南遺跡は、表 38 にあるように BP3,000–2,000 年頃の台湾東部における文化類型の指標になっている。卑南遺跡にて出土した土器にも下田原式土器と類似した土器が確認できるが（図 89）、この土器は叩き成形によって製作されており、器壁も薄く、把

図 89. 卑南遺跡出土の土器
（筆者撮影・国立臺灣博物館所蔵）

手や器形以外の点では下田原式土器と直接的な繋がりが読み取れない。すなわち、宮古・八重山諸島の先史時代（下田原期）と台湾の先史時代の土器の間には、一部の器形に関しては共通点が確認できるものの、土器全体の器種構成や、土器製作の際に用いる叩き成形の存在など、共通点以上に異なる点も多いということである。

土器以外では、石器に関しても同様のことを指摘することができる。R. Pearson（1968）は卑南遺跡における打製石斧と、仲間貝塚（第一/第二は不明）・下田原貝塚（1954）出土の石斧の共通点を指摘しており、一部の石斧に関しては類似したものも確認できる（図 90）。しかし一方で、卑南遺跡を含む台湾東部の多くの遺跡で確認できる石斧の両側面に段を有する有肩石斧（図 90：1・6・9）は宮古・八重山諸島では確認することはできない。

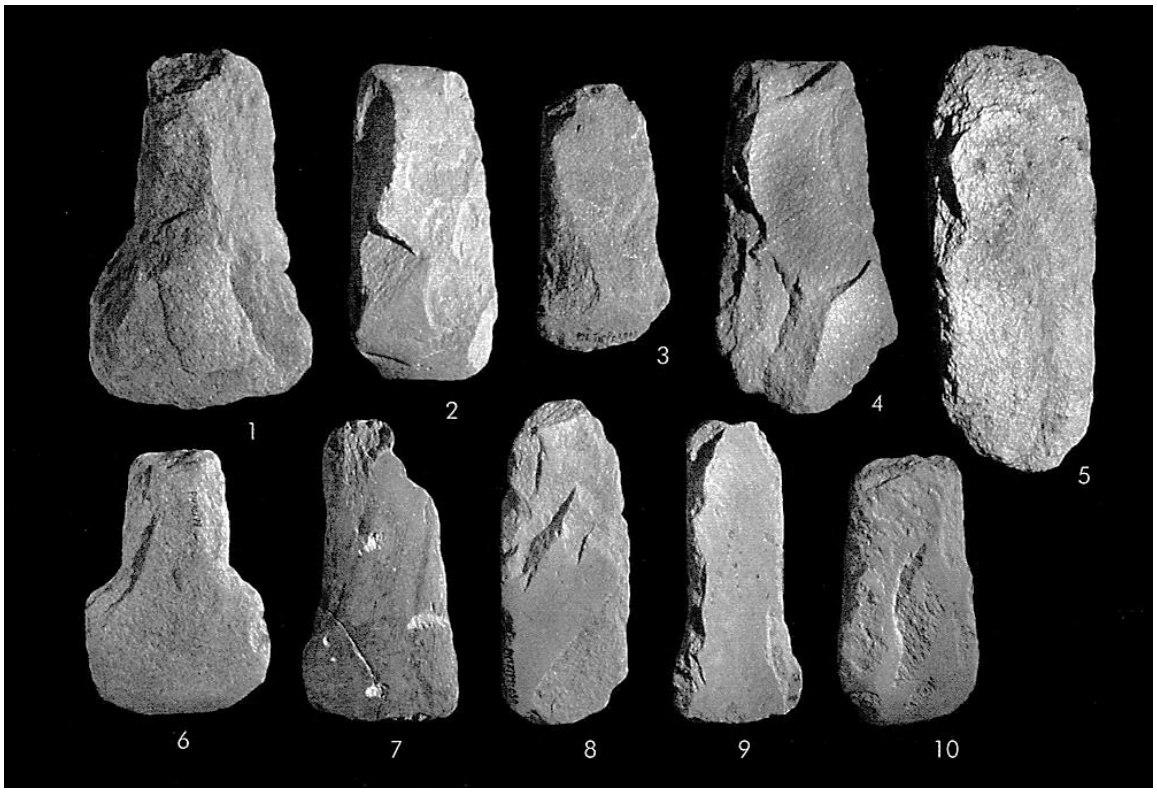


図 90. 卑南遺跡出土の石斧（連・宋 2006）

石斧以外では、敲石や磨石などに関しては類似した点は見られるものの、このような複雑な加工を施さない比較的単純な道具に関しては、様々な地域で形状は類似することが多い。更に台湾東部の遺跡では石刀（石包丁）や石錘（図 66）に加え、鎌の刃先に似た形状を示す石鎌や、槍の刃先のような矛鏃が出土しており、全体的な器種バリーションは宮古・八重山諸島の先史文化とは大きな違いを有している。

しかしその一方で、卑南遺跡で出土する板岩（スレート）を研磨して錐状の尖端を形成する細長尖器（針状の石器）（図 91）は、材質や長軸サイズが異なるものの、形状は下田原貝塚（1983-85）やトゥグル浜遺跡で出土する尖端部を有する石器と共通性を示している。また、卑南遺跡では擂鉢状の断面を有する真円に近い孔が穿たれた石器や、玉製品が出土しており、尖端部を有する石器に回転穿孔された製品を伴うという点も類似した状況を確認することができる。この他にも、卑南遺跡では鑿状尖端の道具（図 92）が出土しており、特に小型のものに関しては、下田原貝塚（1983-85）やトゥグル浜遺跡における鑿状

尖端の石器や、ソデボラ科利器の尖端形状共通性を示している。図 92 は全てネフライト製であるが、最も多いのは緑色片岩製で、蛇紋岩・スレート・砂岩を利用したものも確認されている（連・宋 2006）

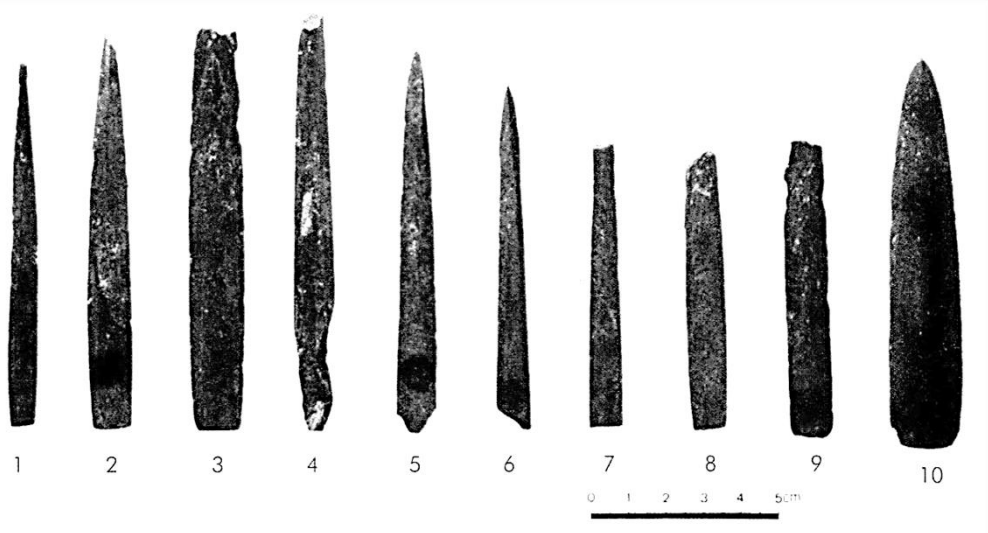


図 91. 卑南遺跡出土の細長尖器（連・宋 2006）

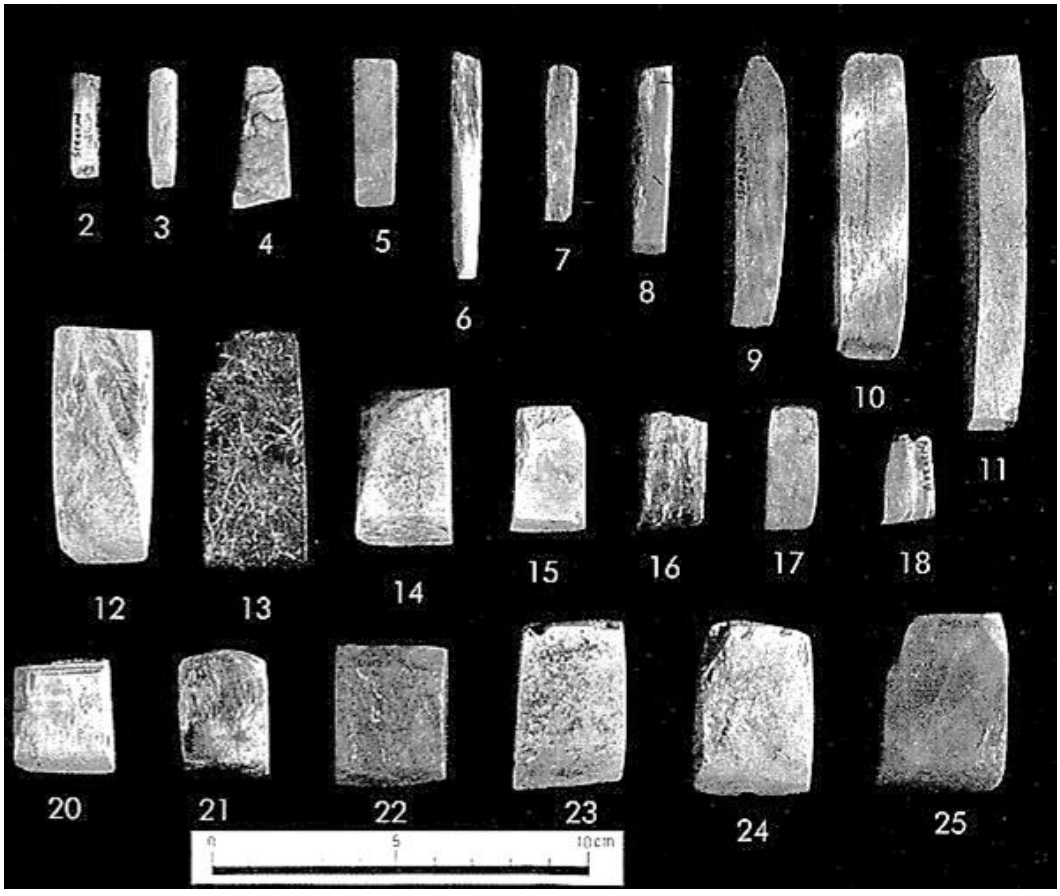


図 92. 卑南遺跡出土の鑿状石器（連・宋 2006）

このような石器に対し、貝製品は卑南文化類型に代表される台湾東部では出土事例が少なく、台湾南部の墾丁遺跡や鵝鑾鼻遺跡に顕著な出土が見られることが指摘されている（連 2002)。墾丁遺跡や鵝鑾鼻遺跡などでは、下田原期における新段階や、無土器期における宮古島の遺跡に共通する巻貝螺頭に穿孔・研磨した製品（図 93）が出土し、下田原貝塚（1954・1983-85)、トゥグル浜遺跡に共通するヤコウガイの蓋を打ち欠いた製品（図 89）も出土している。ヤコウガイの螺貝製品に関しては螺貝括器とされており（連 2002)、スクレイパーとしての用途が推察されているが、宮古・八重山諸島で出土するものと同様の剥離がなされており、伊藤慎二（1999）が指摘するように、宮古・八重山諸島と同様に敲打に利用された道具である可能性も存在する。

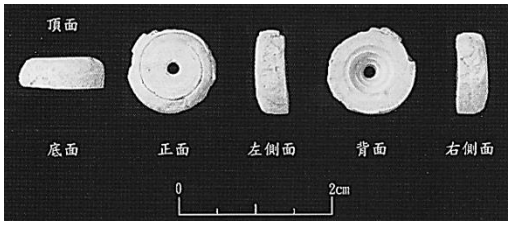


図 93. 鵝鑾鼻遺跡出土の貝珠（連 2007）（S=1/1）

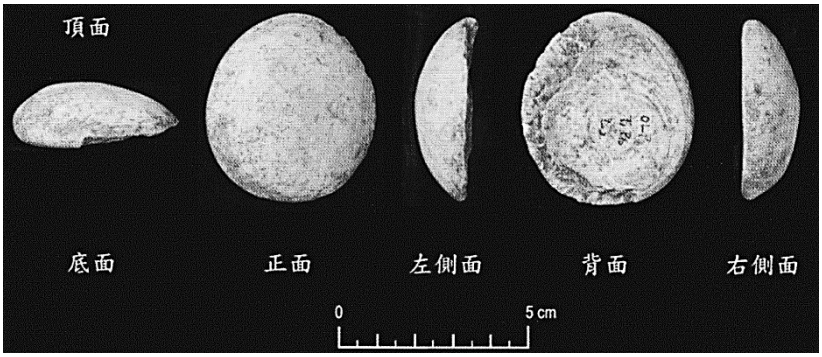


図 94. 鵝鑾鼻遺跡出土の螺貝貝括器（連 2007）

これらの貝製品は鵝鑾鼻遺跡では、土器文化以前の第一史前文化層（BP4,820±100 年、BP4,790±120 年、BP5,560±90 年）と、彩陶などと供出する第三史前文化層（BP2,730±120 年）から出土しており、墾丁遺跡では土器文化の墾丁史前文化層（BP3,985±145 年）から出土している（李 1999)。墾丁遺跡では大坌坑文化の特徴を示す器形と、叩き目のついた土器が出土しており、台湾南部における牛稠子文化期に属する（表 38)。

これら貝製品に関する台湾と宮古・八重山諸島との共通性は既に大濱永亘（1999）によって指摘されているが、その一方で、貝製品も石斧と同様に全体的なバリエーションでは異なる点が多い。鵝鑾鼻遺跡に隣接する鵝鑾鼻Ⅱ遺跡や、鵝鑾鼻遺跡の第三史前文化層ではヤコウガイの貝匙や、貝鏃、ウミギク製の貝環などが出土しており（李 1999、連 2002)、これらは宮古・八重山諸島には確認できない貝製品である。また反対に、台湾における新石器時代の遺跡ではシャコガイ製の貝斧の出土が確認されておらず、これは台湾－宮古・八重山諸島の間における物質文化大きな違いとなっている。

このように、台湾と宮古・八重山諸島の物質文化は、一部の人工遺物で断片的な共通点が確認できる一方で、全体的なバリエーションでは異なると言う状況が存在する。これは台湾地域に文化起源が求められてきた下田原期に関して顕著な傾向で、下田原期で最も古い段階に位置づけたピュウツタ遺跡の段階に、台湾から大規模な人の移動が八重山諸島に存在し、それによって文化形成が生じたとは考え難い。また無土器期に関しては、台湾では土器文化が継続しているという点や、無土器期に並行する BP2,000 年には台湾が鉄器時

代に入るなど、下田原期以上に共通性が希薄になる。

考古遺物の類似性という面だけではなく、生業や葬墓の面でも宮古・八重山諸島と台湾は明確な違いが確認できる。BP6,500 年の新石器時代以降、台湾島では焼畑農耕を伴った生業や、長期居住型の生活様式、石棺や副葬品を伴う葬送の痕跡が確認されている。一方で宮古・八重山諸島は、BP4,000 年から 11 世紀後半頃まで狩猟漁労採集が生業の主体となる食糧獲得社会として、宮古・八重山諸島内の島々を行き来しながら生存しており、現時点で埋葬人骨やその明確な痕跡は確認されていない[13]。陳有貝（2004）は、生業の違いを基に、台湾から宮古・八重山諸島への移住の可能性に否定的な考えを示しているが、宮古・八重山諸島の先史時代は下田原期・無土器期を通して、台湾地域の物質文化の影響を強く受けた痕跡が確認できない。このことは、少なくとも宮古・八重山諸島の先史時代を通して、台湾―宮古・八重山諸島間における大規模な集団的移住や、恒常的な人や物の行き来は存在しなかったことを示している。

3. オーストロネシア語族北上の可能性

以上のように、宮古・八重山諸島の先史時代と、並行する時期の台湾の物質文化は断片的な共通点を有している一方で、総合的には相違点が多い。そこで本項では、それを踏まえた上で、この時期に台湾－フィリピン地域に生じたオーストロネシア語族の拡散と、宮古・八重山諸島との関係の関係について検証してみたい。

オーストロネシア語族の拡散と宮古・八重山諸島の関係に関しては、G. Summerhayes ら（2009）が主に石器の類似を基に、オーストロネシア語族の拡散が宮古・八重山諸島へも生じた可能性を提示している。しかし、Summerhays らも石斧以外の物質文化の違いは大きいことを認めており、台湾から南方へ拡散する動きとは異なるパターンであったと指摘するに止まっている。

オーストロネシア語族の拡散に関しては、P. Bellwood（ベルウッド 1989（初出 1978））が示した、太平洋島嶼地域（リモート・オセアニア）への人類拡散のシナリオの寄与が大きい。リモート・オセアニアへは BP3,300 年頃に、ラピタ人（ラピタ文化）と呼ばれる人々による最初の人類拡散と移住が起こるが（e.g. 印東 2013 など）、Bellwood は言語学の成果（e.g. Blust1984 など）と、考古学・人類学的な成果を組み合わせ、ラピタ人の出現をオーストロネシア語族の言語集団の拡散と関連付け、その根源的な起源地を台湾に設定している。更に Bellwood はこのオーストロネシア語族の「出台湾」を農耕文化の拡散と結び付けており、大坌坑文化以降の台湾の農耕文化が BP4,500–4000 年頃に南進し、フィリピン北部地域の土器文化が展開したものと考察している（ベルウッド 2008（初出 2005））。

この Bellwood の「出台湾」のシナリオは、その後 H. C. Hung によって考古学的なデータから補強される。Hung は台湾東南部の潮來橋遺跡を主とした台湾の遺跡と、フィリピン北部の Nagsabaran 遺跡の比較から、土器の器形（図 76）・赤色スリップ・紋様（籠目紋・蓆紋）（図 95）、土製品（図 95）、玉製品（ネフライト製品）（図 96）の共通性を確認し、Bellwood の人類拡散シナリオを援用して、BP4,000 年頃に台湾からフィリピン地域へ人の移動があったことを指摘した（Hung2005）[14]。フィリピン地域における土器文化は、新石器時代の赤色スリップ土器から金属器時代の黒色土器への編年が組まれており、赤色スリップ土器の来源に関しては、Nagsabaran 遺跡の他にもフィリピン北部の Magapit 貝

塚出土の土器などからも、台湾東南部の潮來橋遺跡における「くの字」口縁の土器と共通性を持った土器の出土が確認されている（田中 2013）。

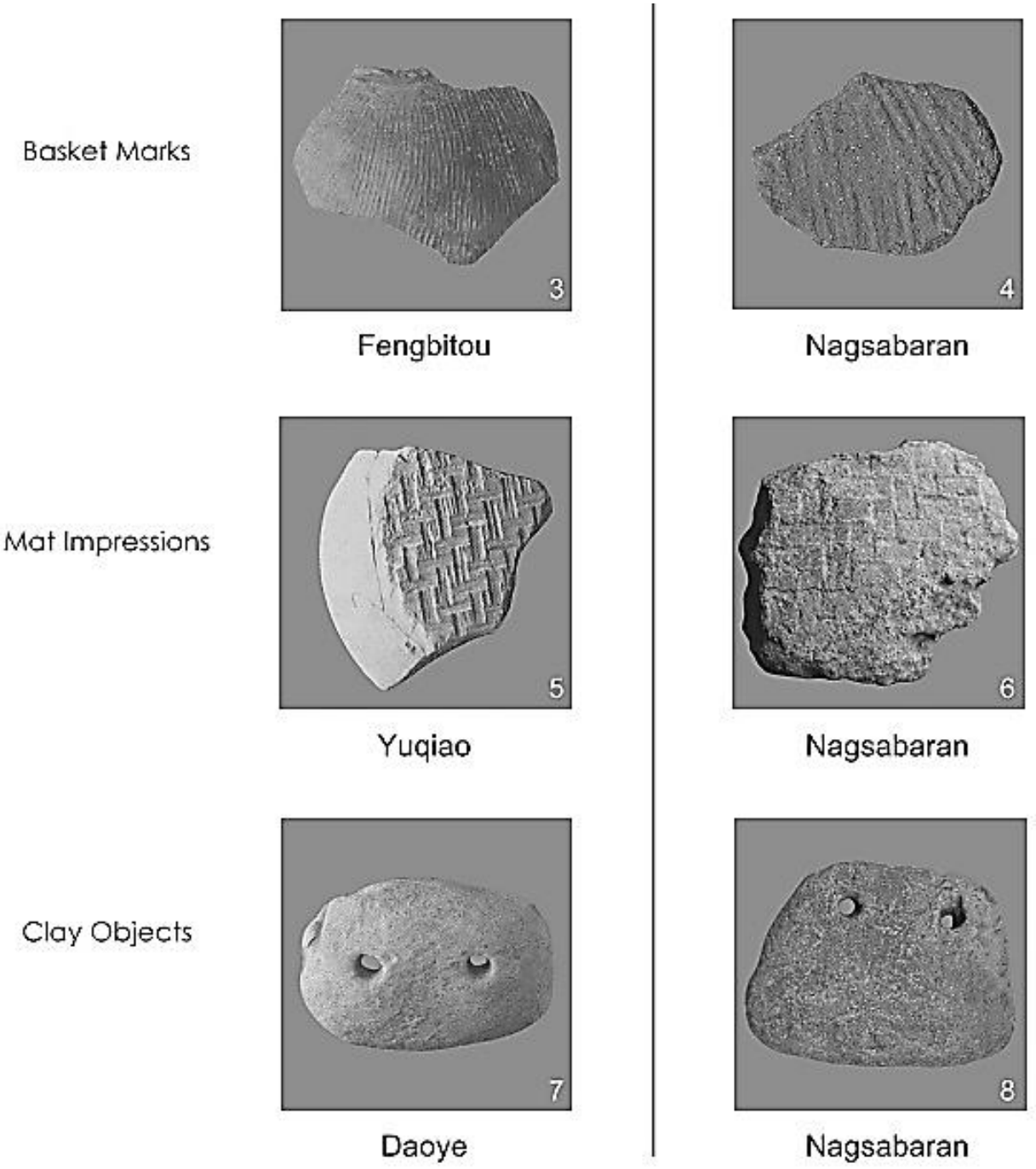


図 95. 土器の紋様と土製品の比較（Hung2005）
左が台湾の遺跡出土資料、右がフィリピンの Ngsabaran 遺跡出土の資料

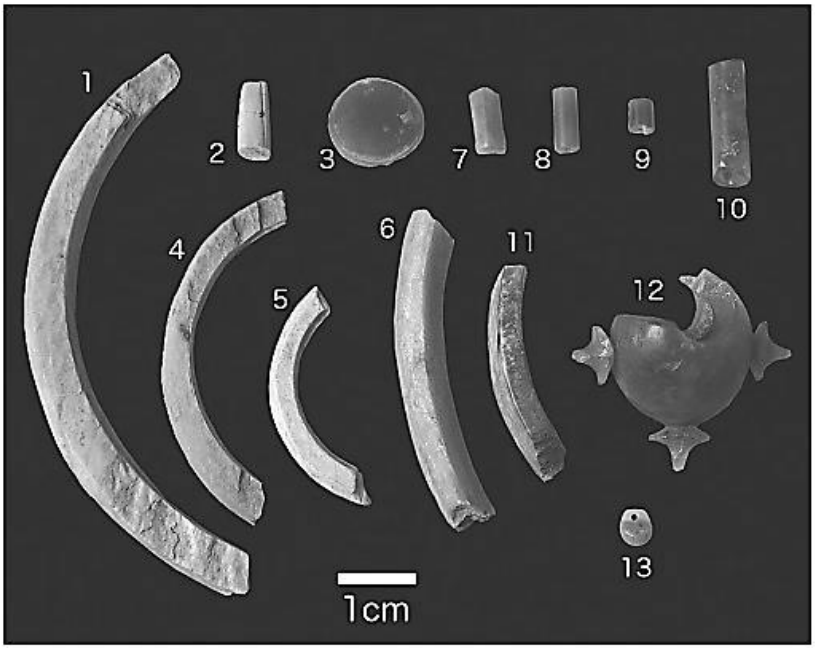


図 96. 台湾・フィリピン遺跡出土のネフライト製品（S=1/1）（Hung2005）
全て台湾産ネフライト（1-7：台湾の遺跡出土品、8-13：フィリピンの遺跡出土品）

このように、土器やネフライト製品を中心とした様々な共通点によって支持されているオーストロネシア語族の「出台湾」であるが、これらの共通点は北の宮古・八重山諸島との間には確認することができない。台湾とフィリピンの関係は、物質文化や生業の面で共通性を示していることから、単純に一度の移住で伝播しただけとは考え難く、台湾産のネフライト製品がフィリピン各地の複数の遺跡で確認されていることから（Hung2005）、台湾からフィリピンへの文化伝播はバックミグレーション[15]を含んだ双方向の人の移動であった可能性が考えられる。また、フィリピンでは初期鉄器時代に赤色土器から黒色土器への転換が存在し、この時期にも土器文化に変化をもたらす大きな人の移動が存在したと捉えられている（田中 2013）。宮古・八重山諸島と、台湾との物質文化の違い、そして台湾-フィリピンに共通する考古学的属性との違いは、このような新石器時代における台湾－フィリピン間で生じた人の移動とそれに伴う文化伝播が、宮古・八重山諸島には存在していなかったことを示している。

4. シャコガイ製貝斧における南方起源の検証

以上に示したように、下田原期と台湾に展開した新石器文化やオーストロネシア語族の南方拡散は、共通点以上に異なる点が多い。特に台湾東南部からフィリピンへと伝わるオーストロネシア語族の拡散と同様の移住と文化伝播が宮古・八重山諸島にまで及んだ可能性は、現時点の考古学資料を見る限り可能性が低いと言わざるを得ない。また、無土器期に関しては並行する時期の台湾 - フィリピン両地域共に土器文化を継続しており、BP2,000 年頃には鉄器生産を含む鉄器利用の時代に突入する。これは、宮古島で無土器期の貝斧利用遺跡が確認できる時期であり、新石器時代以上に物質文化の違いが大きい。

しかし、無土器期のシャコガイ製貝斧に関しては、既存の研究でフィリピン地域を主とした南方起源の可能性が指摘されており、実際にフィリピンを含む東南アジア地域では新

石器時代を含む古い時期からシャコガイを利用した貝斧が確認されている。そこで、本項では、東南アジア地域におけるシャコガイ製貝斧の展開との比較から、無土器期における貝斧文化の南方起源論を再度検証してみることとする。

東南アジアにおける最古のシャコガイ製貝斧の事例の一つとしては、北部マルク諸島ののゲベ洞穴遺跡（BP12,000−9,000 年）（図 98）が挙げられるが、これは貝斧と言うよりは貝製利器に近いものであると捉えられている（小野 1999）。無土器期との比較でしばしば取り上げられるのは、フィリピン南部パラワン島のドゥヨン洞穴遺跡（図 98）出土の貝斧（図 97）で、これは埋葬人骨に、二枚貝有孔製品、巻貝螺頭部有孔製品、磨製石斧とともに副葬された形で出土した（Fox1970）。埋葬人骨は ^{14}C で BP4,630±250 年の年代が示されており、年代的には新石器時代に属するが、土器は伴わない。貝斧は蝶番部（Hinge）を利用し、殻外面の溝などを若干残すものの、全体的によく磨かれている。図 92 の 1 に関しては、側面部に剥離の痕跡も見られる。

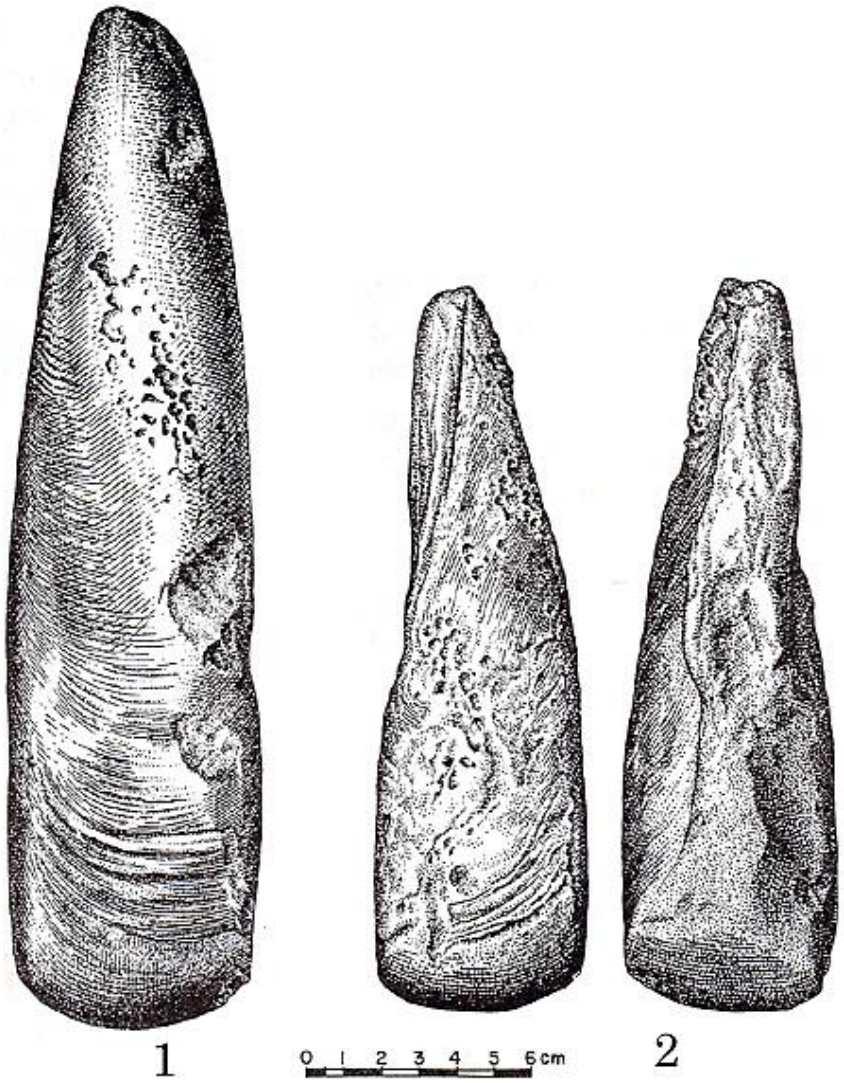


図 97. フィリピン・パラワン島ドゥヨン洞穴出土のシャコガイ製貝斧（Fox1970）

図 98. 本文記載の東南アジアにおける遺跡の位置関係
（Google Map を基に作成）

ドゥヨン洞穴遺跡では隣接する地点でも、壺形土器が出土する下層から炉跡やフレーク・ブレイドの剥片石器に伴って貝斧状の貝製品が出土している。こちらの年代は ^{14}C で BP5,680±80 年が示されており、図 97 とは異なりシャコガイの肋（rib）を利用したものである[16]（図 99）。

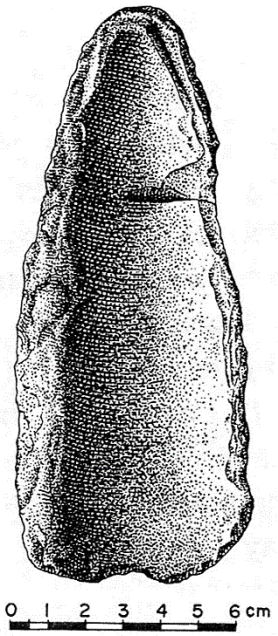


図 99. ドゥヨン洞穴遺跡出土の貝斧状製品（Fox1970）

ドゥヨン洞穴遺跡出土の貝斧の特徴に関しては、いずれも表面をよく研磨して滑らかであることや、化石化したシャコガイの利用が見られること、刃を両面に付けること、キール状の自然面を残すことなどが挙げられている（Fox1970、小野 1999）。東南アジア・オセアニアの貝斧の比較研究を行った小野林太郎（1999）は、この特徴の中で化石化した貝類の利用や、キール状の自然面を残す点が、ミクロネシア各遺跡の最古層（BP3,000 年頃）から出土する貝斧と共通することを指摘している。

フィリピンでは、ドゥヨン洞穴遺跡が立地するパラワン島より更に南に位置するタウィタウィ島のバロボク岩陰遺跡からも貝斧が出土している（安里ほか 1993）。バロボク岩陰遺跡はⅠ層で青銅器や剥片石器など、Ⅱ層で土器や貝製品・目製石斧などを出土し、Ⅲ層で剥片石器と共に打製貝斧が 1 点出土している（図 100）。この貝斧は、研磨が無く、それによって形成される刃部も見られない。また、図を見る限りは敲打剥離なども行われていないようである。利用部位は蝶番に近い部位を利用しているが、蝶番（hinge）の分厚い部分ではなく、比較的薄い部分が選択されている。

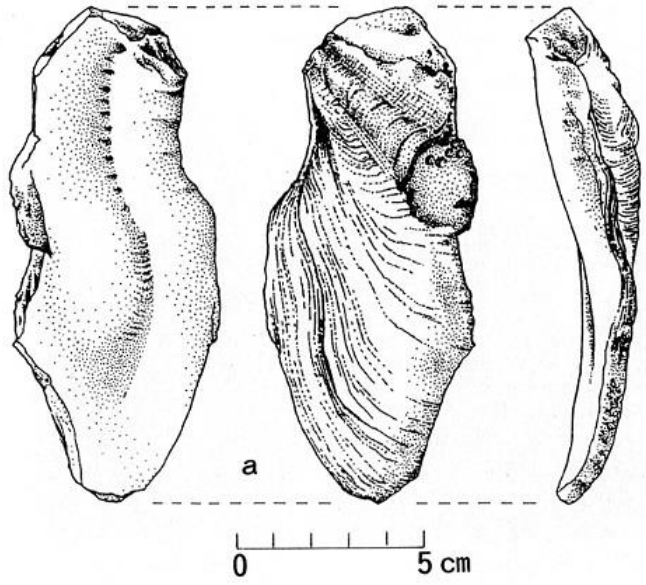


図 100. バロボク岩陰遺跡出土の打製貝斧（安里ほか 1993）

このバロボク岩陰遺跡における貝斧も土器を伴っておらず、安里ら（1993）はこの打製貝斧を、ドゥヨン洞穴などに見られる全体研磨の貝斧の祖形と位置付け、打製貝斧に磨製石斧の研磨技術が加わることによって磨製貝斧へと展開するものと考察している。これに

対し、小野（1999）はバロボク岩陰遺跡出土の貝斧を研磨したとしてもドゥヨン洞穴の貝斧にはならないとしつつも、新石器時代以前の古い段階から貝殻利用があったことは事実との見解を示している。

このように、東南アジアにおける貝斧の存在は、新石器時代より古く遡る可能性が示唆されてきた。これは、台湾から南下するオーストロネシア語族の伝播より以前に、フィリピンを含む東南アジア島嶼地域に貝斧を利用する物質文化が展開していた可能性を示している。これに関し、近年フィリピン中部の Budog I 岩陰遺跡で出土した貝斧（図 101）の存在は、その説を補強する形となっている。Budog I 岩陰遺跡の貝斧は、土器が出土する 1-3 層より下の 8 層で出土しており、cal BP7,550-7,250 の年代が与えられている。A.F.Pawlik ら（2015）によって行われた Budog I 岩陰遺跡の調査では、包含層中の炭化物、貝斧、貝斧に付着した鉱物などから年代のクロスチェックが行われており、上層の 4 層で約 BP4,200-4,000 年、5 層で約 BP5,900−5,500 年の年代も示されていることから、年代の信頼性は比較的高いものと考えられる。

Budog I 岩陰遺跡の貝斧（図 101）は、局部（刃部）磨製であると報告されているが図を見る限り刃部付近における殻外面の凸部も研磨している。刃部に関しては複数方向からの研磨が存在しており、Pawlik らはこれを再研磨の痕跡としている（Pawlik et al.2015）。また、基端部には磨滅した痕跡があり、こちらは着柄の痕跡であるとされている（同前）。

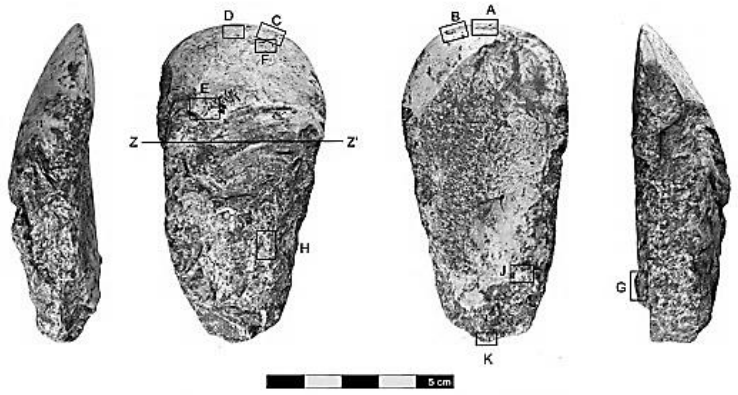


図 101. Budog I岩陰遺跡出土の打製貝斧（Pawlik et al.2015）

Pawlik ら（2015）は、Budog I 岩陰遺跡の貝斧を東南アジア・オセアニア地域の貝斧との比較を基に完新世初期の遺物と位置づけており、オーストロネシア語族が拡散する以前の考古遺物であることが強調されている。一方で、貝斧の発生については、ニューギニア周辺の磨製石斧技術からの派生や、地域的な local innovation としての発生などの可能性が提示されるも、未だに決着を見ていない。

BP4,000 年頃になると、フィリピン北部地域に台湾との文化関係の影響を経て土器文化が展開する。この人々は更に東南アジア島嶼地域を南下し BP3,300 年頃にはリモート・オセアニアへと拡散していくのだが、小野林太郎（1999）は新石器以前にフィリピン南部の多島海地域で展開した貝斧の伝統が、これと同じ段階でオセアニア地域へ伝播したものと考察している。また、小野は更に BP4,000 年頃にこの貝斧の伝統が北上し、フィリピン中部の土器文化を伴った上でマリアナ諸島（図 102 参照）まで展開した可能性を示唆してい

る。フィリピン中部からマリアナ諸島への人類移動に関しては、マリアナ諸島北部の遺跡で出土した土器を根拠に、BP3,500 年頃における移動の可能性が提示されているが（Hung et al.2013）、距離（約 2,000 ㎞）や海流の関係から否定的な見解も多く（e.g. 印東 2013）、遺伝学的な見地からは BP5,000−3,000 年頃におけるウォーレシア多島海地域からマリアナ諸島への移動が示唆されているなど（Vilar et al.2013）、フィリピン中部からマリアナ諸島への移動説には問題も多い。

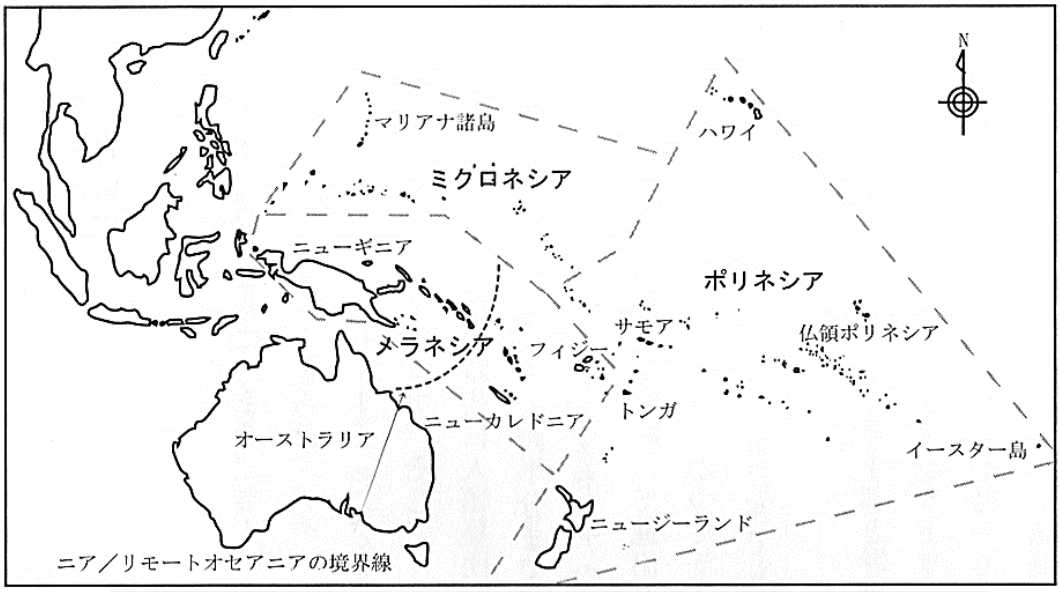


図 102. フィリピン以南・以東の地域の位置関係（石村 2011）

このように、東南アジア地域におけるシャコガイ製貝斧は、フィリピン南部の多島海地域で新石器時代以前の段階の完新世初期頃に発生し、BP4,000−3,000 年の段階で南下するオーストロネシア語族の文化との接触を経て、メラネシアやミクロネシアなどのリモート・オセアニア地域へと伝播したと考えられる。一方で、BP4,000 年頃にフィリピン南部から北上し、マリアナ諸島まで伝播した可能性も示唆されるがこちらは問題点も多く、フィリピン北部地域の土器出土遺跡では貝斧の出土は確認されていない。

では、これらの貝斧文化に対して、宮古・八重山諸島における無土器期の貝斧は、どのような関係に位置づけることができるのだろうか。無土器期遺跡の最も古い年代は、アラフ遺跡Ⅶ層で BP2,760±40 年（cal BC1000-820 年）、西高嶺遺跡 10 層で BP2,940±180 年が示されているが、実際に貝斧が出土している年代では浦底遺跡のⅣ層の BP2,340±75 年が最古になる。BP3,000 年頃までは下田原期が継続することから、南から貝斧の伝播が存在したと仮定する場合、BP3,000－2,300 年頃に位置づけることができる。この時期のフィリピン地域は、後期新石器時代から初期鉄器時代への移行期に該当し、貝斧がフィリピン南部の多島海地域からリモート・オセアニアや、マリアナ諸島へと伝播した時期よりも数百年ほど新しい時期に当たる。

無土器期の貝斧の南方からの伝播に関しては、小野林太郎（1999）が蝶番部（hinge）利用主体である点と、キール状の自然面を残す点、化石化した貝類を利用する点がフィリピンの貝斧と共通している点を指摘し、貝斧文化がフィリピン南部多島海地域からフィリピン北部、台湾を経由せずに、ダイレクトに宮古・八重山諸島へ急速拡散した可能性を提示

している。これに関し、R. Callaghan らの漂流のコンピュータ・シミュレーション（Callaghan and Fitzpatrick2008）では、フィリピンのミンダナオ島やパラオから、季節によっては宮古・八重山諸島へ到達可能であることが示されている。

しかし、フィリピンで出土する貝斧はいずれも新石器時代以前に属する可能性が高く、移住や伝播を想定するには年代的な開きが大きい。年代的に合致するのは新石器時代以降ではあるが、この時期のオーストロネシ語族の拡散に伴い伝播する文化は土器文化が基本であり、台湾とフィリピン北部、フィリピン地域とマリアナ諸島における土器の類似関係が示すように、移動・拡散した先で元々持っていた物質文化が比較的再現されている。これらに比べると、無土器期における物質文化は異なる点が多く、少なくともフィリピン以南へと拡散していく人類移動・文化伝播と同じ現象として捉えることは出来ない。

また、無土器期で比較的古い年代を示す浦底遺跡の貝斧は、下層では B-c-2、B-c-3 タイプに代表される、全磨製で殻外面を平坦に整形し、刃断面が弧状の製品が多く、フィリピンの貝斧に完全に一致するとは言い難い。蝶番部（hinge）利用の製品が多いことは一致しているが、大型で自然面を残し局部を磨製するタイプは友利元島遺跡などの比較的年代の新しい遺跡に目立っている。

南方へと拡散したオーストロネシア語族の新石器文化は、メラネシア周辺でラピタ文化と呼ばれる土器文化を展開し、更にリモート・オセアニアを東進して BP2,800 年頃にポリネシアにまで到達する。この人々は貝斧も利用しており、ミクロネシアやポリネシアの人々は BP1,000 年頃には複数の島で土器の利用を止めて「無土器化」するため、無土器期の物質文化とも一見類似しているように見える。しかし、BP2,000 年まではメラネシアからミクロネシア、西ポリネシアを含む地域では土器文化が展開しており（e.g. 印東 1995）、リモート・オセアニアの無土器文化が、BP3,000－2,300 年頃に形成される宮古島の無土器期の祖形になるとは考えられない。

以上ように、宮古・八重山諸島の無土器期とフィリピン以南の南方地域は、貝斧と言う存在以外では相違点が非常に大きいことが読み取れる。貝斧の伝播ということに関しては、漂流などによる偶発的な文化伝播の可能性は残しているものの、無土器期とフィリピン以南の地域の文化変遷を見比べると、バックミグレーションを含む恒常的な人や物の移動には展開しておらず、集団的で戦略的な移住は存在しなかったものと考えられる。

6. 宮古・八重山諸島南方起源の考察

ここまでの検証を踏まえ、宮古・八重山諸島の南方文化起源の可能性について纏めてみたい。まず、下田原期に関しては、BP5,000 年以降に台湾南部から東部へと展開する土器文化との共通点が確認できる。その共通点は、土器の器形（把手や鉢形）や、石器の器種（石斧・錐状/鑿状尖端の小型石器）を挙げることができるが、一方で物質文化全体のバリエーションから見ると、台湾と宮古・八重山諸島の違いは大きく、断片的な共通性を示しているに過ぎない。また貝製品に関しては、台湾南部の墾丁遺跡や鵝鑾鼻遺跡などと共通点が確認できる。こちらも断片的な共通性だが、台湾南部の貝製品利用は、卑南遺跡などに代表される台湾東部の文化類型には見られず（連 2002）、下田原期は台湾の東部と南部の文化類型に跨った断片的な共通性を有していることが読み取れる。

下田原期に関しては本論で時期差を設定しており、土器に関しては比較的古い段階に位

置づけたピュウツタ遺跡や大田原遺跡で台湾と断片的に共通する鉢形と牛角状の把手を有する土器が出土する。一方、錐状/鑿状尖端の小型石器（或いはそれに類似する尖端部をもつ人工遺物）や貝製品は、比較的新しい段階の下田原貝塚（1954・1983-85）でのみ出土している。下田原貝塚の段階と、台湾東部/南部地域は、霧状先端工具と回転穿孔の組み合わせという点でも共通しており、この時期に何らかの文化伝播を引き起こす人の移動があった可能性が考えられる。しかし、それはあくまでも断片的な共通性をもたらすに留まっており、積極的な移住や、恒常的な人やものが行き来するネットワークへは展開しなかった。この関係性は、台湾・フィリピンの間におけるオーストロネシア語族の拡散の過程とは明確に異なっており、台湾から南方に向けたものと同様の拡散と文化伝播が、台湾の「北」へも存在したという可能性は否定することができる。

無土器期に関しては、下田原期以上に台湾との相違点が多く、また BP2,000 年以降の台湾東部が土器文化を継続しつつ鉄器生産を伴う鉄器時代に入るため、採集狩猟と石器・貝製品利用を継続する無土器期と台湾の間には文化的な隔たりが大きい。同時期のフィリピン地域も土器文化を継続し、BP2,200 年頃には発展的な鉄器時代へと変遷する。フィリピン北部の土器に関しては、鉄器時代への転換期に大きく変容するが、これは台湾南部との文化関係で捉えられている（田中 2013）。

無土器期におけるシャコガイ製貝斧は、フィリピン南部の多島海地域において完新世初期から展開した貝製品利用との共通性を示しているが、新石器文化以前の段階の貝斧とは年代的な開きが大きい。BP3,000-2,300 年頃のフィリピン南部の多島海地域は、台湾・フィリピンから南下するオーストロネシア語族の拡散と、それに伴う新石器文化の展開が生じている。この時期の海流やマリアナ諸島への植民の存在は、漂流などによる宮古・八重山諸島への人の到達の可能性は示唆しているが、BP2,000 年までのフィリピンからオセアニア地域の物質文化と比較すると、それらの地域から宮古・八重山諸島への集団的な移住や、恒常的なネットワークが存在した可能性は支持することができない。

無土器期には鉄製品や開元通寶が出土しており、これらの人工遺物を通しても周辺地域からの人の移動の痕跡が確認できるが、こちらも集団的な移住や、恒常的な人や物のネットワークへは展開しておらず、偶発的なものであったと考えられる。

このように、下田原期・無土器期ともに、人類集団の大規模な移住を示す証拠は読み取ることができない。下田原期に関しては、今後より古く遡る遺跡と土器などの人工遺物が発見されることによって、台湾東南部により類似する土器が確認される可能性は有しているが、それでも下田原期を通して台湾と八重山諸島の間に恒常的な人や物のネットワークが展開することはなかったものと考えられる。これは無土器期に関しても同様で、宮古・八重山諸島は先史時代を通して、周辺地域からは孤立的な状況下に存在しており、その様な環境で文化形成が展開したものと結論付けることができる。

---

1 複数の洞穴遺跡からなる遺跡群の総称で、海雷洞遺跡や潮音洞遺跡を含む。

2 現生人類の直接祖先である新人（*Homo Supience*）より以前に出アフリカを果たしたとされる人類で、新人が世界に拡大して以降絶滅した。

3 劉益昌（2002）は、この独自化した石器文化を、「旧石器持続型文化」と呼称し、完

新世の時期にまで継続する可能性を指摘している。しかし、近年新たなデータに基づき、長濱文化の上限年代は 25,000～30,000 年前、下限は 15,000 年前とされるなど（臧 2013a・b)、帰属年代や系統関係には再検討が必要であるという見方も示されている（後藤 2015)。

4　近年、ユーラシア大陸側で大坌坑文化の前段階となる「前大坌坑文化期」を設定する考えも提示されているが（洪 2013)、年代的な位置づけや相関関係は ^{14}C 年代に拠るところが大きく、層位論や型式論的な検証に課題を残していることが指摘されている（後藤 2015)。

5　台湾における大坌坑文化期は、焼畑農耕を有していた文化と考えられている為、Lubbock や Child が定義する「新石器（Neolithic)」の枠組みに近い。

6　台湾では「陶器」が日本語の「土器」を意味する。縄紋陶や罐形器など、台湾の考古学的研究の中で提示されている型式名に関しては齟齬や誤解を防ぐ為、本論では本来の名称で使用することとする。

7　底部に円周状の器台となる突起を持つ器形。

8 台湾島の中央部には山脈地帯（雪山山脈・中央山脈・玉山山脈など）が広がっており、通行が困難な地形を示している。その為、東海岸部へは山脈地帯の切れる南北の沿海平野部を通る必要があり、現在の交通網や都市もこの山脈地帯を除いた東西南北の沿海地域に発達している（張ほか 2008)。

9　台湾では「史前時代」と表記されるが、どちらも Prehistory を意味する。

10　オーストロネシア語族とは、オーストロネシア諸語を話す人々の事を指しており、現在は台湾や、東南アジアの一部、オセアニア島嶼地域（リモート・オセアニア)、アフリカのマダガスカル島など幅広い地域に分布する。この人々は約 3300 年前にオセアニア島嶼地域へと急速に拡散したと考えられており（Diamond1988)、その起源地としては台湾が有力な候補として考えられている（Bellwood2011)。

11　台湾～フィリピン、そしてオセアニア島嶼地域におけるオーストロンシア語族の拡散過程は、現在のオーストロネシア諸語を話す人々の分析からも示されている（Blust1984)。一方で、現在の沖縄方言に関しては日本語の地域方言として位置づけられており（上村 1997)、オーストロネシア諸語を話す集団は現在の沖縄諸島、宮古・八重山諸島には確認できない。

12 素面陶は、縄紋陶や彩陶と異なり、器表外面に装飾を施さない土器を指す。素面陶は、細縄紋文化期にも出土が確認できるが、縄紋陶・彩陶と混在して出土しており、素面陶の割合が増加することが、素面陶文化期における特徴の一つとなっている。

13 白保竿根田原洞穴遺跡における崖葬墓は、解剖学的な位置を保っておらず、副葬品もないことから、まだ明確に葬墓であるとは言いきれない。また、先史時代における他の遺跡で埋葬事例が確認されていないため、類例と言う点でも課題を残している。

14 フィリピンの遺跡出土のネフライト製品に関しては、ネフライトに含まれる酸素安定同位体の X 線解析によって、台湾産である可能性が高いことが指摘されており（Iizuka & Hung2005)、Hung（2005）の論はこの成果も援用している。

15 移住（migration）に対し、移住元への逆方向の移動（back migration）を指す。

[16] ただ、報告では「shell implement」（Fox1970：146,fi.2.(e)）と報告されており斧（Adez 或いは Axe）とは表記されていない。図からも研磨した刃は確認できないことから、貝斧ではない可能性がある。

第 7 章　結論：先史宮古・八重山諸島の文化形成論

ここまで本論を通して、宮古・八重山諸島先史時代における文化内容の整理と、台湾・フィリピンにおける人類移動・物質文化の展開の比較を通して、周辺地域との文化関係を整理した。本項ではその成果を踏まえ、本論の結論として宮古・八重山諸島における先史時代の文化形成を考察する。

1. 下田原期における文化形成

・下田原期の古段階（継続的な先史文化の開始期）

下田原期は現時点で物質文化が確認されている最古の時期となる。すなわち、考古学的に継続的な宮古・八重山諸島の人類活動が確認できる最初期であると言えるだろう。この下田原期は、大きく古段階と新段階の二つの時期に分類できる。古段階の中でも約 BP3,900 年の年代を示すピュウツタ遺跡のⅤ層は比較的古く、ピュウツタ遺跡Ⅴ層からは土器・石器が出土している。ピュウツタ遺跡で出土する土器は、一部の器形や把手に関して並行する時期の台湾東部地域の縄紋陶文化に共通する。しかし、台湾東部の土器・石器の全体的なバリエーションや、玉製品、石棺利用の墓葬、焼畑農耕を含む生業は下田原期の文化要素には欠落している。下田原期の土器文化形成に関しては、創始者効果・ボトルネックの可能性が指摘されているが（Pearson1969）、周辺地域と比較して最も類似性を示す台湾東部とも全体的に異なる点が多い。台湾からの移住を前提とした場合、これはピュウツタ遺跡Ⅴ層の時点で既に移住元の物質文化が完全に再現し切れていなかったことを示していると言えるだろう。また、ピュウツタ遺跡Ⅴ・Ⅲ層や大田原遺跡Ⅲ・Ⅱ層などで出土する下田原式土器からは、土器内面底部の顕著なコゲや、口縁部内外面のススなど、煮沸用途を明確に示す痕跡が殆ど見られない。土器内面の器面調整も入念ではないものが多く、下田原式土器は下田原期の比較的古い段階で繰り返し煮沸に利用するという使い方を殆ど失っていたのではないかと考えられる。

下田原期における遺跡のセトルメントは、資源利用と強く結びついており、下田原期の人々は八重山列島から多良間島までの間で島々を移動しながら生活を営んでいた。下田原期における食糧獲得は、貝類・魚類・イノシシ等の哺乳類の利用が確認できるが、必ずしも特定の生息環境を選択しているわけではなく、様々な島の環境に合わせて柔軟に食糧獲得を行っている。また、石垣島・西表島では河川の近くが、多良間島や波照間島では海岸線の湧水水源に比較的近い立地が選択されており、どの島でも水資源の確保の重要性が伺える。一方で、物質文化において普遍的に出土する土器と石器の製作に関しては、下田原期の人々はその素材に関して資源的制約を抱えており、石垣島との定期的なアクセスが必要不可欠となっていた。下田原期は比較的食糧獲得に依存した社会であると考えられるため、遺跡周辺での食糧資源などの季節性や、獲り尽くしによる枯渇リスクなどの問題から頻繁に移動する必要があったものと考えられる。その移動は居住ベース自体を移動させていく生活様式であったと考えられるが、それでも石垣島とのアクセスなしでは土器や石器を製作・利用することができなかった。これは様々な島に遺跡が立地するも、表採を含めて比較的石垣島に遺跡が集中していることに繋がっている。石垣島は地質的には火山島（陸島）の性質を有しており、下田原期は火山島（陸島）に依存した資源利用と移動を行っていたものと考えられる。

下田原期の遺跡はいずれも海岸線に近い立地を示す。石垣島や西表島は現在のように陸路が整備されているわけではなく、明確なランドマークも存在しない。西表島に至っては非常に起伏の激しい地形を示しており、現在でも人が居住するエリアは限られている。このことから、当時の移動は陸上

ではなく海上が主体であったものと考えられる。下田原期には珊瑚礁形成が始まっており、ラグーンに囲まれた海岸線沿いは比較的波が穏やで海上交通に適していたものと解釈できる。海上を移動するのには当然船などの移動手段が必要となる。木材で製作される船は腐敗し分解されやすく遺跡に残存し難いため現時点で発見例はないが、どの遺跡でも普遍的に確認できる磨製刃部をもった石斧の存在は、造船のための木材加工の可能性を強く示唆していると言えるだろう。

このように、八重山列島・多良間島の地域の中で移動を繰り返していた下田原期の人々であるが、その一方で周辺の地域との恒常的な交流を示す物質的な証拠は殆ど確認できない。石垣島を中心とした下田原期の古段階では、台湾地域と断片的な土器の共通性が見られるものの、物質文化全体では相違点が多く、ピュウツタ遺跡Ⅴ層以降の大田原遺跡（1978）や白保竿根田原洞穴遺跡の物質文化もその特徴が継続している。断片的な物質文化の類似は、下田原期の物質文化の祖形が台湾地域に由来する可能性を示しているが、その一方で八重山列島に入植して以降、下田原期の人々の移動は多良間島を含めた八重山列島の内部で完結しており、宮古・八重山諸島は周辺地域からは孤立的な状況に存在していたと考えられる。この点は、土器の粘土や石材の獲得と利用、動物遺存体から見た食糧利用に反映されており、貝類や魚類に関しては基本的にはラグーン周辺に生息するものが採捕されるなど、ラグーンを越えた外洋での活動の痕跡は希薄である。動物遺存体にはジュゴンなどの海獣類も見られるが、全体的な出土数に対する比率は僅かで、海獣狩猟に特化した道具や解体工具も確認できないことから、ラグーンへ迷い込んだ個体、或いは漂着した個体を利用したものと考えられる。

・下田原期の古段階から新段階へ

BP3,700−3,600 年頃になると、波照間島のようなサンゴ島に遺跡が形成されるようになる。波照間島や多良間島では、貝殻やサンゴ・サンゴ石灰岩を石器に利用しており、一部の石器器種において地元で獲得できる材質への転換が行われるなど、サンゴ島環境に適応した資源利用を確認することができる。また、波照間島の下田原貝塚（1954・1983-85）では、明確に他の遺跡とは異なる小型の錐状・鑿状尖端を有する道具が人工遺物のバリエーションに加わる。錐状尖端の道具は回転穿孔に利用されたと考えられ、遺跡からは回転穿孔された製品（貝製品やサメ歯製品）も出土している。下田原貝塚（同前）ではこのような道具に加えて貝製品のバリエーションが豊富で、これらは台湾東部の卑南文化類型の石器や、台湾南部の牛稠子文化類型の貝製品の特徴と断片的な共通性が読み取れる。BP3,600 年頃という時期は台湾南部の牛稠子文化類型の終末期と台湾東部の卑南文化類型の最初期に該当することから、このような台湾東南部の動きと連動して一部の物質文化がこの時期八重山列島まで伝播した可能性を考えることはできるだろう。いずれにせよ、それまでの古段階の遺跡にはこのような変化が殆ど確認できないことから、この時期の波照間島の遺跡に文化伝播や新しい道具の登場といった文化的画期が存在したことは間違いない。しかし、基本的な生業や資源利用とそれに基づく島嶼間移動に関しては、それまでの下田原期の様式を踏襲しており大きな変化は見られない。これは、この段階でも周辺地域との間で恒常的な人や物の行き来が展開しなかったことを示している。

・下田原期の文化形成

このように、下田原期の物質文化は、基本的には周辺地域との間では恒常的な人や物の行き来を伴うネットワークが存在しない状況下で形成されたものと捉えることができる。残念ながら現資料から下田原期文化の起源に関して明確な答えを提示することはできないが、島嶼環境に突然人と文化

が生まれてくることはないことから、その文化的起源はいずれかの地に求める必要がある。これに関し、下田原期古段階の物質文化が示す断片的な台湾との共通点は、八重山列島へした下田原期の最初期の人々が台湾東部に展開した縄紋陶文化との関連している可能性を示している。しかし、ピュウツタ遺跡Ⅴ層の時点では既に移住元の地域との間での恒常的な行き来は途絶えていた。下田原期の新段階になると、台湾南部の牛稠子文化との類似する文化要素が再び確認できるようにもなるが、それは既存の物質文化や生活様式を大きく変容させるようなものとはならず、台湾のみならず沖縄諸島などのも含めた周辺との恒常的なネットワークの不在は古段階から新段階まで継続したものと理解することができる。しかしその一方で、当時の人々は火山島（陸島）とサンゴ島で構成された地域で生存するため、宮古・八重山諸島の島々の中で短期居住と移動を繰り返し、土器や石器製作の為に火山島（陸島）とアクセスするというセトルメント・パターンを構築していた。

R. Pearson（1969）は下田原期文化の形成に関して創始者効果などの多様性の喪失という方向性を提示したが、現資料から確認できる下田原期の状況からは、創始者効果に加えて移住元集団との恒常的コンタクトの喪失、宮古・八重山諸島という環境における生存適応上の工夫が、下田原期の人々の生活や物質文化の形成に影響を与えていたことを示している。この観点から見るのであれば、現時点で最も類似性を示し妥当性を有している文化起源地は台湾島南部（e.g. 富山遺跡などに代表される富山文化類型）であると言えるだろう。

2. 下田原期から無土器期への文化形成

下田原期の後、土器を持たない文化が展開する時期が無土器期と呼ばれる。無土器期の年代に関して人工遺物から無土器期の人類活動が明確に読み取れるのは、宮古島における BP2,400–2,300 年頃からであるが、宮古島のアラフ遺跡のⅦ層や西高嶺遺跡の 10 層は、BP3,000 年頃における宮古列島で人類活動が存在した可能性を示している。

無土器期の遺跡は、特に八重山列島では下田原期の遺跡との年代的な開きが存在することから、下田原期との文化的断絶と人類集団の入れ替わりの可能性も示唆されているが（金武 1994）、フィリピン南部やマリアナ諸島・ミクロネシアの貝斧文化と比較すると、それらの人々が直接移住して入れ替わったと考えるのは難しい。そこで、改めて注目できるのが下田原期の新段階と、宮古島の浦底遺跡などに代表される無土器期の古段階、そして与那国島のトゥグル浜遺跡の存在である。

・下田原期の終末期とトゥグル浜遺跡

下田原期で最も新しい年代を示している遺物包含層は、下田原貝塚（1983-85）のⅢ層の BP3,600 年頃で、Ⅱ層でも下田原式土器が出土していることから、少なくとも BP3,600 年以降まで下田原期は継続した可能性は高い。この時期の下田原貝塚では石器・貝製品・イノシシ骨牙製品にそれまでの遺跡には見られない特異な器種が確認できる。そして、これらと非常に類似した人工遺物を出土しているのが与那国島北部に立地するトゥグル浜遺跡である。

トゥグル浜遺跡は土器が一切出土していないが、人工遺物の属性は下田原貝塚（1954・1983-85）と類似している点が多いことが指摘されている（安里 2003a）。一方で、無土器期の遺跡と比較すると、トゥグル浜遺跡の属性は八重山列島の無土器期遺跡の属性とは異なる点が多く、反対に宮古島の浦底遺跡と共通する属性が見られる（本論 4 章参照）。トゥグル浜遺跡では遺物包含層から出土した

貝類から下田原期よりも古い年代が示されているが、貝類は海水のリザーバー効果[1]や、資料となる貝類自体が土中に埋没する時点で化石化している可能性など、土層本来の年代よりも古い値を示している可能性が高い。リザーバー効果の年代的な誤差も踏まえて考えると、トゥグル浜遺跡は下田原期から無土器期の最初期までに属する可能性を有している。安里嗣淳（2003a）は、トゥグル浜遺跡を下田原期と無土器期の繋ぐ架け橋のような存在と位置づけているが、今回の分析と比較結果からもトゥグル浜遺跡はまさに下田原期の新段階と、宮古島における無土器期の最初期の間に位置づけることができる属性を示していると捉えることができる。

・下田原期から無土器期をつなぐ浦底遺跡とトゥグル浜遺跡

宮古島の無土器期遺跡の中で比較的古い段階であると考えられる浦底遺跡Ⅳ層や、アラフ遺跡のⅣ層では、磨製刃を有する石斧や研磨面を有する変成岩石器が出土する。これは、無土器期の比較的古い段階で「宮古島以外の島の石材利用」と「変成岩を石斧に利用する」という資源利用が宮古島の人々にも認識されていたことを示している。浦底遺跡Ⅳ層で出土した石斧は扁平で平坦面を有し、基端は磨滅し、刃部は平面形が蛤刃、刃部断面形が弧状を呈する。同じⅣ層では石斧に共通するような胴部を研磨して平坦面を作り出し、基端が磨滅する B-c-3 タイプという貝斧が出土していることから、石斧と貝斧が無関係ではないと考えられえる。また、多良間島の西高嶺遺跡で出土した火成岩も、比較的古い時期に宮古島の近くまで石材を運ぶ人の動きが存在したことを示している。そして、この様な石材を利用した道具製作は、アラフ遺跡の上層や長墓遺跡、友利元島遺跡のような比較的新しい段階では確認することができない。

浦底遺跡では全層を通じて多量の貝斧と、研磨面を有した石皿の出土が他の遺跡に比べて目立っている。これは宮古島における無土器期の初期から、研磨して刃を付ける製品の製作が非常に重視されていたことを示している。これは与那国島のトゥグル浜遺跡でも同様の状況を確認することができる。トゥグル浜遺跡では下田原期・無土器期を通じても最多の石斧が出土しており、磨面を有した石皿の出土も見られる。その反面、二つの遺跡ではサンゴ島という環境が類似しているものの資源利用が異なっている。浦底遺跡では、宮古島で獲得できる貝殻を主な道具材料として利用していたのに対し、トゥグル浜遺跡では与那国島では獲得できない緑色片岩を利用しており、二つの島の遺跡では環境に対する資源利用の戦略が異なっていたことが読み取れる。

トゥグル浜遺跡は、年代の幅や、遺跡属性から総合的に判断すると、下田原期の新段階と無土器期の最初期の間に位置づけられる可能性が高い。しかし、無土器期の古い年代の遺跡は宮古島に位置していることから与那国島とは距離が離れており、同じサンゴ島環境でありながら資源利用の戦略が異なっている。このことから、トゥグル浜遺跡から宮古島の浦底遺跡へと単純に変遷するのではなく、むしろ無土器期の最初期に、宮古島と与那国島の両地域で無土器の遺跡が形成された可能性を考えることができる。

・無土器化（土器文化の消失）が起こりえた可能性

下田原貝塚と、それに類似した属性を示すトゥグル浜遺跡、浦底遺跡を連続した物質文化の系統であると捉えた場合、下田原期の終末期から無土器期の最初期にかけて「無土器化（土器文化の消失）」という現象が生じたということになる。

無土器化という現象は、先史リモート・オセアニアでも確認されており、BP2,000 年頃までにポリ

ネシアまで分布していた土器文化は、BP1,000 年にはポリネシアのほぼ全域や、ミクロネシアの多くの地域で消失する（印東 1995）。その要因に関しては、創始者効果説（Irwin1981）、土器で調理する作物の転換による土器の必要性の消失（Leach1982）、土器における容器機能の別の材質（木・椰子の実等）への置換（Green1974）、島嶼間交易の衰退に伴う土器の交換材としての価値の低下（Marshall1985）、以上全ての要因が複合的に影響し消失したとする説（Le Moine1987）が挙げられている。これに対し、印東道子（1995）は複合要因を支持しつつ、社会的要因と技術的要因からオセアニアの無土器化を説明しており、社会的要因には交易活動に伴う装飾土器の減少と土器製作の衰退や、煮炊きから地炉（アースオーブン）へ調理の転換、木製容器の発達と容器・調理・儀礼機能の移行が、技術的要因には各々の島への資源環境に合わせた技術適応が挙げられている。環境に対する技術適応では、火山島（陸島）に豊富な土器粘土が、他の地質の島（洋島やサンゴ島）などでは欠乏すること（Claridge1984）が述べられており、土器作りに不向きな生態環境が無土器化を促進したことが指摘されている（印東 2011）。

八重山列島の下田原期における土器は、土器粘土の獲得を火山島（陸島）である石垣島に依存しており、リモート・オセアニアにおける生態環境と土器の関係に共通している。波照間島・多良間島のようなサンゴ島の遺跡における土器も石垣島の粘土を利用しており、サンゴ島で土器文化を維持するには多くの労力が投下されることとなる。土器を作らなくて済むという点は、石垣島から遠いサンゴ島での生存に有利に働いたことは間違いない。

また、下田原式土器における装飾や紋様は台湾や沖縄諸島に比べると施文面積は僅かで、有紋の個体自体が少ない。更に、器表面の痕跡から見て煮沸用途に繰り返し利用されたとは考え難い。現時点の出土資料からは、下田原式土器の明確な使用用途は判然としないが、少なくとも交易交換材や威信材、煮炊きの為の調理器具としての機能や、副葬品としての用途は読み取れない。もし下田原期に八重山列島へ移住してくる集団の移住元の土器文化が装飾・調理具の機能を持っていたのだとすれば、それは八重山列島へ伝わった段階で大部分の土器の機能を失っていたと解釈できるだろう。加えて、無土器期の遺跡からは集石遺構が検出されており、これは地炉（アースオーブン）として使用された可能性を有している。地炉は必ずしも土器の消失を促すわけではないが[2]、集石を伴う無土器期の遺跡は宮古・八重山諸島の食糧獲得をベースとしたと考えられる社会において、土器を利用しなくとも生活・生存が可能であったことを示している。

下田原期の波照間島や多良間島の遺跡では、敲石などの石器においてサンゴ島で獲得できる材料への材質置換が行われており、サンゴ島環境への技術適応が見られる。無土器期になると、トゥグル浜遺跡では斧状製品には石材を利用するものの敲打用途には貝類を用い、宮古島の遺跡では斧状製品自体をサンゴ島で獲得できる貝で製作するようになるなど、サンゴ島環境への技術適応を読み取ることができる。土器を利用しなくなることは、火山島地質の粘土への資源的依存度を必然的に低下させることにも繋がる。土器利用の消失はサンゴ島環境への進出と継続的な生活という点ではメリットでもあり、材質置換を行いながら活動域を拡大させていった先史時代の人々に有利に働く現象でったとも捉えることができる。

・下田原期文化集団をベースとした無土器期文化の展開

このように、宮古・八重山諸島の無土器化（土器文化の消失）は、土器の装飾や調理機能の欠落、

地炉（集石遺構）の登場、サンゴ島環境における資源利用の技術適応といった点で、リモート・オセアニア地域の無土器化プロセスと類似する点が確認できる。リモート・オセアニアの人々は農耕や家畜などの食糧生産手段を有しており、その歴史的背景は異なっていることから、安易に結びつけることはできないが、土器を利用せずとも人類がこの環境で生存できることを証明する無土器期遺跡と、下田原期・無土器期に見られるサンゴ島環境への技術適応は、宮古・八重山諸島の環境へ人々が文化的に適応していく過程で土器利用を失う可能性が十分に存在することを示している。

本論の分析で示したように、無土器期の最初期における別の地域からの大規模な人類集団の移住や、恒常的な文化的接触の可能性は現時点では低いと言わざるを得ない（本論第 6 章参照）。周辺地域から移住があったと仮定する場合、並行する時期の沖縄諸島や台湾・フィリピン、リモート・オセアニアに至るいずれもの地域も土器文化を展開しており、いずれの地域の文化集団が無土器期文化の起源であると仮定しても、宮古・八重山諸島に移住してきた初期段階で無土器化したと考えなくては説明ができないのである。

漂流などの偶発的な他地域からの文化伝播の可能性は否定できないものの、下田原期新段階の下田原遺跡とトゥグル浜遺跡の類似、浦底遺跡との共通性、下田原期と無土器期の生業や資源利用・セトルメント・パターンの類似、そして周辺地域との相違点から総合的に考えると、無土器期の文化集団は下田原期の文化集団をベースとしつつ、サンゴ島環境を含む宮古・八重山諸島への技術的適応の一つとして土器を消失し、無土器期へ移行したと解釈する方が妥当性を有しているものと筆者は結論する。そして、土器を持たない文化として成立した無土器期の文化集団は、その後約 2000 年の時間の中で宮古島と八重山列島という地域差を形成し、11 世紀後半頃まで継続することとなる。

・宮古島における無土器期の展開

無土器期の遺跡は、年代的には宮古島で確認できる BP2,400−2,300 年頃が最も早い。更に、宮古島のアラフ遺跡Ⅶ層や多良間島の西高嶺遺跡 10 層を考慮すれば、BP3,000 年頃まで遡る可能性が存在する。BP2,400−2,300 年の宮古島では、浦底遺跡Ⅳ層に見られるようなシャコガイを用いた貝斧生産が顕著で、貝斧全体を研磨し、刃部形態も比較的共通した、丁寧な作りの貝斧が多い。

貝斧の存在に関しては、周辺地域からの文化伝播の可能性を完全に否定することはできない。漂流・漂着の可能性も含めて、貝斧の伝播が全くなかったことを示すのは非常に困難だからである。しかし、これまで述べてきたように、無土器期の最初期における周辺地域からの大規模な集団移住や、恒常的な人や物のネットワークが存在した可能性は、現資料からは支持できない。

浦底遺跡における貝斧は、比較的平面形が整った天然の貝素材の採取や、大きな打撃に細かい敲打で剥離を促すことによって平面形の整った貝素材を獲得し、胴部・刃部を研磨して貝斧を製作する。平面形態・刃部形態は石斧に類似しており、平らな面を整形すること[3]、基端部の磨滅[4]も含めて石斧に共通する点が多い。これは石斧との機能面での類似性を示すだけではなく、貝斧製作において、石斧製作と同じ技術やノウハウが適用されていたことを示している。これを示す証拠として、浦底遺跡やアラフ遺跡では磨面を持った石器が出土している点、浦底遺跡でトゥグル浜遺跡と同様に砂岩や泥岩背の研磨面を持った石皿などが比較的多数確認できる点を挙げることができる。「貝を利用した斧」という道具の存在が他地域から伝播した可能性は否定できないが、貝斧が定着した背景には石斧の製作・利用と言う文化的な下地が存在したものと考えられる。

宮古島における無土器期の人々は、食糧獲得をベースとした社会と考えられる点は下田原期と比べて大きな変化はない。動物遺存体からみる生物資源利用も、新たにマイマイやヤマタニシなどの陸産貝類が見られるものの、基本的にはラグーン（礁湖）内の貝類魚類、イノシシを主体に採捕している。そのため、この時期も食糧資源の季節性、獲り尽くしによる枯渇リスクなどから移動を繰り返していたと考えられる。アラフ遺跡に見られる遺物包含層間の無遺物層の存在は、そのような移動が繰り返されたことを示す存在であると言えるだろう。しかし一方で、浦底遺跡における貝斧の出土、貝斧の未成品の出土、研磨面を有した石皿などの石器の出土は群を抜いており、宮古島の遺跡の中でも重要な位置づけであったことが伺える。浦底遺跡は上層のⅡ層で少量ながら 11 世紀以降の時期の土器と考えられる土器片が出土している。報告書が刊行されていないため詳細な層位関係に課題を残してはいるが、11 世紀後半以降の文化期に接する時期まで浦底遺跡に人類活動が存在した可能性が高い。これは浦底遺跡が無土器期を通して利用されていたことを示している。

宮古島における無土器期遺跡は、殆どが東海岸部に集中している。宮古島の東海岸部は切り立った急峻な地形を示すが、その麓の海岸部は砂丘が堆積しており、西風を避けられるのと同時に湧水にも恵まれている。また、研磨に利用されたと考えられる砂岩などの堆積岩は、東海岸部付近にしか産出しない[5]（木崎 1985）。宮古島における無土器期の人々は、下田原期と異なり土器の粘土を必要とせず、変成岩の石器に代わり貝殻を用いた斧を利用した。これはサンゴ島環境である宮古島での生存に有利に働いていると考えられるが、一方で、貝斧を研磨する為に堆積岩を必要としており、その上で、水資源や鉱物資源を獲得できる宮古島東海岸部が主たる活動エリアになったものと考えられる。このような東海岸部を行ったり来たりする生活様式の中で、浦底遺跡は何度も戻りながら貝斧を製作する場所であったことが読み取れる。

・八重山列島における無土器期の展開

八重山列島の無土器期遺跡は、筆者が無土器期の初期に位置付けたトゥグル浜遺跡を除くと BP1,600-1,500 年頃まで確認されていない。しかし、波照間島の大泊浜貝塚は BP1,500 年頃を示す 6 層の更に下層（10・11・12・17 層）で人工遺物が確認されていることから、八重山列島における無土器期の人類活動は更に年代を遡る可能性が高い。

八重山列島における無土器期の人々も、食糧獲得をベースとした社会と考えられる点や、生物資源利用に関しては宮古島と大きな違いは見られない。しかし、人工遺物のとりわけ斧状製品の製作に関しては大きな違いが存在する。トゥグル浜遺跡を始め、八重山列島の遺跡では石斧を主体に利用しており、貝斧の利用は殆ど見られない。石材に関しては石斧の多くが変成岩を利用して製作されており、石材と器種の関係や利用方法は下田原期における石材利用とほぼ共通している。一方で、貝類を利用した人工遺物は八重山列島では少なく、これは八重山列島と宮古島の間に道具に対する素材利用の地域差が存在していたことを示している。八重山列島では船浦貝塚や崎枝赤崎遺跡など、石斧が出土する層位よりも更に上層の、かつ年代的にも新しい層位[6]で貝斧が出土しており、比較的新しい時期に八重山列島でも貝斧の遺跡からの出土が確認できるが、それらは石材が産出せずシャコガイが豊富な波照間島の遺跡においても、石斧に取って代わるようなことはなかった。同じように、宮古島の無土器期遺跡も、石斧が貝斧に取って代わるような状況は確認できず、無土器期の終末まで宮古島と八重山列島はこのような地域差を継続したと考えられる。

トゥグル浜遺跡は下田原貝塚との類似や、浦底遺跡との共通点から本論では八重山列島の無土器期に位置づけているが、八重山列島での他の遺跡ではトゥグル浜遺跡と類似して属性はソデボラ科の貝製品など一部に止まる。この点から、八重山列島では一時、人類活動が断絶している可能性も考えられるが、宮古島と八重山列島の変異からは、単純に BP1,600−1,500 年頃に宮古島から八重山列島へ人が移住したとは考え難い。

宮古島と八重山列島の間には、遺構に関しても竪穴遺構と方形配列柱穴遺構と言う違いが存在しており、集石遺構も宮古島の遺跡に顕著である。江上幹幸（2015）は、このような宮古島と八重山列島との遺構の違いや、八重山列島における遺跡の年代が新しいことを踏まえ、宮古島・八重山列島各々で文化系統が異なる可能性を示唆している[7]。しかし、同時期の周辺地域の台湾やフィリピン以南の地域と比べると、生業や資源利用に基づくセトルメントや無土器文化であるという点、斧状の製品を普遍的に利用するという点で宮古列島と八重山列島は共通点を有しており、周辺地域を含んだマクロな視点で見れば、宮古・八重山諸島で一つの物質文化の纏まりを示している。また、集石遺構は八重山列島では事例が少ないものの竹富島のカイジ浜貝塚で確認されており、浦底遺跡やアラフ遺跡における変成岩製石器の存在は、宮古島の人々が八重山列島の存在と、石材の利用を認識していたことを示している。宮古島の石器石材に関しては、あくまでも「もの」の獲得で、八重山列島から文化を携えて移住したわけではないという指摘もあるが（同前）、石斧と貝斧の製作技術や形態には共通点が多く、それに伴う石器（石皿・磨石）にも共通性が確認できる。江上（2015）の指摘は、少なくとも八重山列島の遺跡で年代が示される BP1,600-1,500 年頃において、宮古島と八重山列島の間に変異が大きいという点では本論で示してきた成果とも相反しない。問題はこの地域間の違いの解釈であり、ここまで本論で述べてきたように宮古島の無土器期と八重山列島の無土器期が全く異なる文化集団によって形成されたとは考え難いのである。

しかし、この二つの地域の文化系統が元々は同一の系統と考えた場合も、BP1,600-1,500 年の段階で宮古島から八重山列島へ移住があったとは考えられない。もしこの移住を仮定するのであれば、両地域の人工遺物の属性や資源利用の戦略により近い共通性が存在するはずであり、波照間島の大泊浜貝塚などでは環境的に貝斧を含む貝製品の利用が展開していたものと考えられる。これらの状況から考えると、BP1,600-1,500 年以前の段階で宮古島-八重山列島の地域的な分岐が生じていた可能性が高いと言えるだろう。この点に関して、大泊浜貝塚の層位的な状況は八重山列島における無土器期の人類活動が BP1,600-1,500 年よりも遡る可能性を支持している[8]。

また、八重山列島では比較的新しい層位で貝斧が確認されているが、宮古島の遺跡で貝斧利用の物質文化が展開したことから、これらは宮古島との人の行き来でもたらされたと解釈することができる。宮古島の浦底遺跡Ⅳ層などの古い時期では、全面や胴部を入念に研磨し、殻内側へカーブする弧状の刃縁をもった小型の貝斧が多いが、比較的新しい段階の浦底遺跡の上層や、友利元島遺跡で出土する貝斧は自然面をより多く残した刃部磨製で大型の貝斧が多い傾向を示す。製作技術の視点から見ると、新しい時期になると刃部機能以外への研磨加工が簡略化される傾向を示しているが、八重山列島の崎枝赤崎貝塚から出土する貝斧はその傾向とも合致する。八重山列島では複数の貝斧が表採されており、その中には浦底遺跡の小型貝斧と類似するものも確認できる。表採品は時期が確定できないが、宮古島の古い時期の貝斧が八重山列島へ伝わっていた可能性も否定はできない。しかし、現時点の八重山列島における遺跡からは、いずれの時期においても貝斧利用が拡大することはなかっ

たものと考えることができる。

この他に、宮古島・八重山列島の両地域の無土器期の一部遺跡では鉄滓や鉄製品、銭貨（開元通寶）が出土している。これは明確に周辺地域から人や物が移動したことを示しているが、これに伴う大きな文化変容は、無土器期の物質文化や生業などには見られない。鉄製品や銭貨以外の交易品や陶磁器類も出土しておらず、この時期にユーラシア大陸や台湾・フィリピン地域、或いは日本列島の九州地域などとの間で交易のような恒常的な人や物の行き来が存在したと考えるのは妥当ではない。宮古・八重山諸島は近世においても漂流の事例が多数報告されており（e.g. 宮良芳 2011 など）、宮城弘樹（2012）が指摘するように、鉄製品や銭貨は漂流や漂着のような偶発的、或いは一時的な人の移動によってもたらされたものと捉えることができる。

宮古・八重山諸島の先史時代は、下田原期・無土器期を通して、周辺地域との間では人や物の行き来を生み出す恒常的な海上ネットワークが展開しなかったものと考えられる。これは、沖縄諸島からの人や物の移動に伴う文化的な影響を受ける 11 世紀後半以降の状況とは大きく異なっており、宮古・八重山諸島の先史時代は、周辺地域からは比較的孤立した状況にある中で、文化形成が展開したと理解することができる。

3. 無土器期の終焉とグスク文化に影響を受けた物質文化の展開

・11 世紀後半以降における物質文化の変化

11 世紀後半以降になると、宮古列島・八重山列島ともに沖縄諸島で展開したグスク文化の影響を受け、沖縄諸島を経由してもたらされたと考えられる人工遺物が出土するようになる。その中でも八重山列島の遺跡で出土する長崎産の滑石製石鍋の破片や、徳之島産のカムィヤキの破片、大陸産の玉縁口縁の白磁碗はこの時期を特徴づける外来遺物で、大泊浜貝塚やカイジ浜貝塚といった無土器期遺跡の上層からも出土している[9]（沖縄県教育委員会 1986・1994）。滑石製石鍋やカムィヤキ、玉縁白磁碗は 11 世紀末以降における沖縄諸島で確認されており（金武 1998）、これらに関しては奄美群島から九州地域における商業集団の介在が指摘されている（池田 2012）。11 世紀中期は、九州の博多で宋商人が日本に定住して交易を行う「住蕃貿易」が行われるようになり（亀井 1986）、これ以降に博多 - 五島列島 - 寧波（宋代）を結んで東シナ海を横断する「大洋路」を軸とした貿易が展開していったと考えられている（佐伯 2010）。この時期、寧波と博多を行き来する宋商人が琉球列島に赴いたという文献史学からの裏付けはないものの（同前）、長崎県西彼杵半島を産地とする滑石製石鍋は一度博多に集められた後に、住蕃貿易に携わる宋商人によって琉球列島へ運ばれたとの解釈が示されている（鈴木 2008）。滑石製石鍋や現時点でカムィヤキは台湾やフィリピンでの出土は確認されておらず、今後の発掘調査で膨大な量が出土する可能性は低い。宮古・八重山諸島で出土するものに関しても、北方から沖縄諸島を経て運ばれたものとして理解することができる。

11 世紀後半以降の宮古・八重山諸島は、このような外来遺物に伴って物質文化に明確な変化が生じており、その一つとして土器の利用を挙げることができる。八重山列島では 11 世紀後半以降、竹富島のカイジ村遺跡[10]（沖縄県教育委員会 1994）や新里村東遺跡（沖縄県教育委員会 1990）などで新里村式土器という鍋形土器が出土し、12 世紀後半から 13 世紀後半には同じく鍋形のビロースク式土器、13 世紀後半からは鍋形に加え壺形や鉢形などの器形が増加する中森式土器が製作・利用されるようになるなど、土器文化が継続する。一方、宮古列島では八重山列島とは土器の形式学的な変

遷に変異が存在しており、11 世紀代の滑石製石鍋模倣土器から、13 世紀前半の外耳[11]を有した野城式土器、14 世紀後半の宮古第一式土器へと展開する。宮古列島と八重山列島は土器の変遷に違いが見られるが、宮古列島では新里村式に類似した土器やビロースク式土器も表採されており、型式学的には八重山列島の土器群と平行するものとして捉えられている（新里 2004）。

11 世紀以降の土器利用は、無土器文化から再び有土器文化へと変遷したことを示している。しかし、これを単純に「土器を作らなかった人々が土器を作るようになった」と捉えるわけにはいかない。11 世紀後半段階の土器は滑石製石鍋を模倣したと考えられる鍋形の器形が見られるが、土器を製作するには土器作りに適した粘土の選択、焼成時に割れないようにするための混和剤を用いた胎土作り、器形の成形、器面調整などの器表面整形、焼成などの技術的背景が必要となることから（印東 2011）、外からもたらされる土器や容器などに影響を受けた人々がすぐさま土器を製作できるようなるわけではない。特に 11 世紀以降は宮古島のようなサンゴ島でも土器が製作されている。これらの土器の胎土には炭酸カルシウムを含む海砂や貝殻・サンゴ片が含まれることが多く、下田原期とは異なる土器胎土の製作技術が存在していたことが読み取れる。11 世紀後半以降の土器は土器の底部内面に顕著なススやコゲが見られ、鍋形と言う器形も併せて煮沸容器としての機能を示しており、土器製作技術と煮沸調理を含んだ土器利用文化をもった集団の移住が存在したものと考えられる。

土器以外では遺構にも大きな変化が現れている。12－13 世紀の宮古列島では、住屋遺跡（沖縄県教育庁文化課 1981）やミヌズマ遺跡（久貝 2015）などの掘立柱建物の痕跡を残す遺跡が確認されており、11 世紀後半の八重山列島では新里村東遺跡（沖縄県教育委員会 1990）・カイジ村遺跡（沖縄県教育委員会 1994）で掘立柱建物跡や石積みの遺構が確認されるなど、遺跡の属性には無土器期と比べて大きな変化が読み取れる。

11 世後半から 12 世紀頃のビロースク遺跡では少量ではあるものの炭化麦と炭化米が出土しており（石垣市教育委員会 1983）、ビロースク遺跡出土の土器の胎土からはイネのプラント・オパールが確認されている（宇田津 2005）。9-10 世紀頃の沖縄諸島では農耕などの食糧生産手段が存在した可能性が示唆されており（高宮広 1996）、11 世紀後半以降の八重山列島にも沖縄諸島を経由して農耕作物や農耕技術が持ち込まれていた可能性が高い。また、宮古列島では 12 世紀頃の遺跡では無土器期と異なりウシの利用比率が増加する傾向が指摘されており（菅原 2015）、農耕のみならず家畜利用も導入されていた可能性が読み取れる。

このように 11 世紀後半以降の宮古・八重山諸島は沖縄諸島を含む北方地域との繋がりが強く確認できる一方で、台湾やフィリピン地域との関係はこの時期においても殆ど確認できない。BP1,500–500 年頃は、台湾東北部で十三行遺跡を代表とする十三行文化が展開しており、叩き成形と独特な叩き施文を施した特徴的な土器（印紋陶）や、紡錘車、土偶などが出土するが（臧・劉 2001）、これらは宮古・八重山諸島には確認できない。また、十三行文化では大陸から台湾西部を経由、或いは東南アジアからもたらされる青銅器や銭貨・ガラス製品が出土しており、鉄器生産も行われている（同前）。並行する時期の台湾東部に展開する靜浦文化は十三行文化の系統の土器とはやや異なるが、鉄器やガラス製品が確認されており、甕棺を用いた墓葬も確認されるなど（施ほか 2001）、こちらも宮古・八重山諸島との違いが非常に大きい。11 世紀以降、北方の沖縄諸島の間で人や物の行き来するネットワークが開かれていく宮古・八重山諸島であるが、その一方で南方へのネットワークは希薄であったものと解釈できる。

・無土器期と 11 世紀以降の文化期の関係

以上のように、11 世紀後半以降、宮古・八重山諸島共に物質文化や生業に大きな変化が確認できる。そして土器利用の導入や、遺構に見られる居住様式、生業から考えると、この時期は従来宮古・八重山諸島に居住していた人々（無土器期人）が外からの文化的影響を受けて変化していくという構図ではなく、沖縄諸島からある程度の纏まりを持った集団の移住があり、比較的ドラスティックに物質文化の変容が生じたと考える方が妥当性を有している。

現時点で得られる考古学的データからは、無土器期の物質文化と 11 世紀後半以降のグスク文化の物質文化を持った人たちが明確に並存していた様子は確認できない。宮古島の浦底遺跡のⅡ層や、アラフ遺跡のⅡ層では貝斧と土器が供出しており、これは無土器期の終末期に無土器期遺跡の人々が土器を持った人々と接触した可能性を示している[12]。しかし、無土器期としての遺跡属性・特徴を持った遺跡は長くは継続せず、最終的にはグスク文化の影響を受けた新しい物質文化へと収斂していく。すなわち、北からもたらされた文化的影響によって成立する 11 世紀以降の物質文化の影響に飲み込まれる形で、無土器期的な物質文化は終焉を迎えるものとして理解することができる。

ただ、宮古・八重山諸島の 11 世紀後半以降の文化は、沖縄諸島のグスク文化と完全に同一になることはなく、貿易陶磁器などの外来遺物に代表される断続的な文化的影響を受けながらも、この時期においても宮古列島と八重山列島における地域性が発揮されていった。すなわち、大きくネットワークが開かれる画期となった 11 世紀後半以降においても、島々を隔てる海域は恒常的な人や物の移動と、物質文化の均質化を阻む存在であったということである。

4. 結論：先史宮古・八重山諸島の文化形成論

これまでの宮古・八重山諸島の研究は、基本的には文化起源論という方向性を軸としており、下田原期・無土器期の特徴的な考古学的遺物を以て文化起源地を追い求める傾向が強く示されてきた。この背景には、今の宮古・八重山諸島の人々の「ルーツ」がこの先史時代に存在するという意識も少なからず存在していたものと考えられる。これはアイデンティティの問題とも関わっており、かつての波照間島下田原貝塚の調査成果に端を発した起源論争（本論 1 章参照）にもその意識が強く表現されていると言えるだろう。すなわち、現在の宮古・八重山諸島の「文化」の核になる要素が、先史時代から受け継がれているという考え方である。

考古学は歴史学としての一面も有しており、時間軸上の物質文化の変遷に従って編年を構築する。これは一見、脈々と継承される文化的な系統関係に見えるが、実際には遥か 4,000 年や 2,000 年も前の物質文化が現在にまで継承されているということはない。編年はあくまでも時間的な変化を表しているに過ぎず、その過程では失われて断絶する文化要素もあれば、集団間の混血や入れ替わりも存在する。本論で扱った宮古・八重山諸島に関して言えば、下田原式土器に見られる土器文化は途中で失われて断絶しており、現代の宮古・八重山諸島には継承されていない。また無土器期の貝斧文化も 11 世紀後半以降に沖縄諸島のグスク文化の影響を受ける時期には失われる存在であり、宮古列島と八重山列島の資源利用の変異も現在まで継承されてきたわけではない。すなわち、現代の宮古・八重山諸島の物質文化と先史時代の物質文化との間には、直接的な継続性はないと言えるだろう。また、近年は DNA の核ゲノムデータを用いた解析によって、宮古・八重山諸島の人々を含む現代沖縄人の

DNA が台湾やフィリピンの原住民に由来する南方的要素ではなく、九州以北の日本列島に由来する可能性が高いことが示されており（Sato et al. 2014）、DNA の推定分岐年代と考古学的なデータを合わせると、現代における宮古・八重山諸島の DNA グループは 11 世紀後半以降に形成された可能性が高い。これらのことから、宮古・八重山諸島における先史時代の人々の物質文化や DNA が、現代の宮古・八重山諸島人の直接的な起源になるとの考えは、様々な面から支持できない。

しかし、以上のことは決して現代の宮古・八重山諸島の人々のアイデンティティを損なうものではなく、むしろ現代の宮古・八重山諸島人の直接的起源やルーツと言う過去と現在を結びつけてしまう視点から一度開放し、先史時代や中世・近世という各々の時期で文化内容を捉え直し、どのように各時期の文化が形成されたかを捉え直すという方向性が求められることを示している。その地域の文化・歴史というものは、必ずしも血縁的系譜関係や、連続した継承関係を必要とするものではなく、それによって価値が変動するものではない。むしろ、いずれの文化集団であれ人々が同じ環境で生存・生活していく上で知恵を絞り、工夫をしてきた積み重ねの連続体こそが、その地域の文化・歴史であり、我々が現在を捉え未来を生き抜く上で糧となる価値ある存在であると考える。

本論はこのような視点に立ち、宮古・八重山諸島と言う島嶼環境において先史時代の物質文化がどのような人類活動によって形成されたかを、先史宮古・八重山諸島の遺跡属性や資源利用、そして周辺地域における物質文化の展開との比較を通して解釈を試みた。その中で明らかとなったのは、宮古・八重山諸島の物質文化は、基本的には孤立した島嶼地域の中での人類活動によって形成されたということである。更に、地質や環境の異なる島で生存する上で資源利用など様々な工夫が行われ、それは宮古・八重山諸島の中における移動や居住のシステムや、無土器期の石斧主体の物質文化と、貝斧主体の物質文化と言う地域的変異などへ繋がっている。これは宮古・八重山諸島の物質文化の形成には、単純な文化起源地との類似関係という要素だけではなく、宮古・八重山諸島という島嶼環境で生存するために当時の人々が採用した戦略が大きく影響していることを示している。このような文化形成プロセスと背景は、同様の環境を示すリモート・オセアニア島嶼地域における先史文化形成とも共通する点が多く、人類の海域世界・島嶼世界への進出において環境に対応した生存戦略が物質文化の形成と深く相関するものであると理解できる。

一方で、宮古・八重山諸島における 11 世紀後半以降の文化形成は先史時代のものとは大きく異なる。こちらは沖縄諸島を含む北方地域からの文化的影響を強く受けて形成されたと考えられ、物質文化や DNA グループの成立過程を踏まえると、この時期以降に周辺地域（特に沖縄諸島）からの集団的な移住が生じたものと考えられる。すなわち、外からの文化的な接触やその影響が強く働く状況を背景として、物質文化が形成されていく過程を示している。

本論において示した宮古・八重山諸島の文化形成は、他の海域世界や島嶼地域と共通する「島」の環境における文化形成の共通性を示す一方で、同じ環境おいても文化的・歴史的背景によっては異なる文化形成過程も生じるという、島嶼環境における文化形成の多様性を示している。この点は、宮古・八重山諸島における先史時代研究、或いは歴史時代の研究が単なる文化起源の追求に止まらず、他の海域世界や島嶼地域を含む様々な地域との比較研究へ展開する可能性を示していると言えるだろう。

また、本論で示した結論は、新たに孤立した環境に存在した先史宮古・八重山諸島の人々がなぜ本地域外へ出なかったかという問いと[13]、南へ積極的に動いたオーストロネシア語族がなぜ北へは積極的に移動しなかったかという問いを生み出している。これに関して陳有貝（2004）は、農耕を有した

食糧生産社会の台湾東部の人々にとって、宮古・八重山諸島が積極的入植を図るほど魅力的ではなかったとの見方を示しているが、これらは台湾におけるより詳細な移動や伝播のプロセスや、地域的なセトルメント・パターンとの比較や、リモート・オセアニアなど他の島嶼環境における人の移動や生存のシステムとの比較を通して、アプローチしていくべき課題であると考えている。

---

[1] パリノサーヴェイ株式会社（2007）によると、放射性炭素年代は 1950 年（核実験開始年代）の大気中の二酸化炭素における ^{14}C 濃度を基準として、測定資料（通常は植物）の中の炭素の ^{14}C 濃度がどの程度減少しているかによって年代を計測する。大気中の ^{14}C 濃度はある程度の幅の中で上下するので、樹木年輪などによる推定年代と併せて較正する。これに対し、貝殻は植物よりも固定される ^{14}C 濃度が高く、400 年ほど新しい年代にずれることが確認されている。これに加え、海水中には大気中の 100 倍の炭素が溜まっており、海水中における炭素の滞留時間が長くなることによって海水中の炭素における ^{14}C 濃度は大気中よりも低くなる。これによって年代に換算して平均 400 年古い値が出るとされる。これがリザーバー効果と称されるが、海域によっては 200-1200 年の誤差が生じることが確認されている。

[2] フィジーなどでは土器と地炉が共存することが確認されており、必ずしも土器消滅の主要因とはならないことが指摘されている（印東 2011）。

[3] 柄を取り付ける際の接着面に有効であると考えられる。

[4] 柄を取り付けた際の接地面で、摩擦によって磨滅している可能性が考えられる（Pawlik2015）。

[5] 浦底遺跡出土の砂岩や泥岩にはガラス質の微細粒子が混入しているものも見受けられる。このガラス質が火成岩などに由来する場合は、砂岩や泥岩の中には石垣島産出の石材がある可能性が考えられ、無土器期やグスク時代の砥石に関しては石垣島由良であるという指摘もされている（大堀 2015）。

[6] 開元通寶（初鋳 621 年）が出土するⅡ層直上を指す。未攪乱であるとされ、なおかつ開元通寶が出土するため少なくとも 621 年以降に位置づけることができる。

[7] 無土器時代の前半を担う宮古島の人々は、八重山列島を経由せずに宮古島へ移住・居住したとし、その人々は焼石調理（アースオーブン）を携えていたとする（江上 2015）。宮古島への移住者がいずれの土地から移住したかに関しては、明言されていない。

[8] 大泊浜貝塚では、BP1,600 年頃の年代を示す層位よりも下層で人工遺物が出土している。層位学的にはその遺物は BP1,600 年の層よりも古いということになる。

[9] 無土器期の包含層ではなく、無土器期遺物とも混在はしていない。

[10] カイジ浜貝塚の第 2 層を指す。新里村式土器・ビロースク式土器が供出。

[11] 器外面のつまみ状の出っ張り、把手を指す。

[12] 八重山列島でも大泊浜遺跡やカイジ浜貝塚（カイジ村遺跡）で、無土器期遺跡の上層からグスク文化期の人工遺物が出土しているが、こちらは無土器期の遺物と明確に供出しているかは判然としない。大泊浜遺跡に関しては無土器期の遺物包含層との間に無遺物の包含層を挟み込んでおり、時間差が確認できる。

[13] 宮古列島と沖縄諸島の間は有視界域にないので、海域が人の移動を妨げた可能性は考えられる。しかし、その関係は台湾と八重山列島の間には適用されない。

謝辞

本研究を進めるにあたりご指導をいただくとともに、研究の機会や多くのご教示をいただきました琉球大学の論文指導教員および主査である池田榮史教授、副査である山里純一教授・豊見山和行教授に深甚なる感謝を申し上げます。また、本博士課程では国立民族学博物館の特別共同利用研究員制度を利用することで、同博物館の印東道子教授にも得難いご指導と研究機会を賜りました。加えて、琉球大学の後藤雅彦准教授には調査・研究において多大なるご協力とご教示を頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。

また、本論の分析を進めるにあたって、沖縄県教育委員会、沖縄県立埋蔵文化財センター、石垣市教育委員会、石垣市立八重山博物館、竹富町教育委員会、宮古島市教育委員会、多良間村教育委員会、多良間村民俗学習資料館、国立民族学博物館、國立臺灣大学人類学系及び、その関係者の皆様にも温かいご協力を賜り、琉球大学考古学研究室の学生の皆様にも実験・論文作成にご助力いただきました。結びに記して感謝を申し上げます。

引用文献一覧

安里嗣淳

1993 「南琉球の原史世界」、比嘉政夫(編)『海洋文化論』環中国海の民俗と文化第一巻、凱風社、pp.61-84。

1994 「シャコガイ製貝斧文化の発生と展開－バロボク岩陰遺跡（フィリピン）発掘調査の成果を中心に－」、「復帰 20 周年記念沖縄研究国際シンポジウム」実行委員会(編)『沖縄文化の源流を探る－環太平洋地域の中の沖縄－』、「復帰 20 周年記念沖縄研究国際シンポジウム」実行委員会、pp.138-160。

2003a「与那国島トゥグル浜遺跡の編年的位置の再検討」、沖縄埋蔵文化財研究センター編『沖縄埋文研究』1、沖縄県立埋蔵文化財センター、pp.11-24。

2003b「総説」、財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編『沖縄県史』各論編第二巻考古、沖縄県教育委員会、pp.1-58。

2010 「南琉球の先史文化と東南アジア」、今村啓爾編『南海を巡る考古学』、同成社、pp.159-182。

安里嗣淳・ロンキリオ P ウィルフレド・サンチャゴ A レイ・田中和彦

1993 「バロボク岩陰遺跡発掘調査概報」『史料編集室紀要』18 号、沖縄県立図書館史料編集室、pp.162-178。

アラフ遺跡発掘調査団

2003 『アラフ遺跡調査研究Ⅰ - 沖縄県宮古島アラフ遺跡発掘調査報告』、六一書房。

家田淳一

1983 「しゃこがい科貝錘の機能」『琉大史学』第 13 号、琉球大学史学会、pp.88-99。

1998 「名護市稲嶺にしゃこがい科製沈子追補」『名護博物館紀要』8、名護博物館、pp.1-39。

池田榮史

2012 「琉球国以前-琉球・沖縄史研究におけるグスク社会の評価を巡って-」鈴木靖民（編）『日本古代の地域社会と周縁』、吉川弘文館、pp.277-300。

石垣市教育委員会

1982 『大田原遺跡－沖縄県石垣市名蔵・大田原遺跡発掘調査報告書－』、石垣市教育委員会。

1983 『ビロースク遺跡　沖縄県石垣市新川・ビロースク遺跡発掘調査報告書』、石垣市教育委員会。

1987 『崎枝赤崎貝塚-沖縄県石垣市崎枝赤崎貝塚発掘報告書-』、沖縄県教育委員会。

1997 『名蔵貝塚ほか発掘調査報告－名蔵貝塚・ピュウツタ遺跡発掘調査報告書－』、石垣市教育委員会。

2000 『石垣島の岩陰遺跡－沖縄県石垣市内岩陰遺跡分布調査報告書』、石垣市教育委員会。

石垣市総務部市史編集課

2007 『研究史－八重山考古学のあゆみ－』石垣市史考古ビジュアル版 1、石垣市。

2008 『下田原期のくらし－八重山諸島最古の土器文化－』石垣市考古ビジュアル版 2、石垣市。

2009 『有土器から無土器へ－先島諸島先史時代無土器期のくらし－』石垣市史考古ビジュアル版 3、石垣市。

石村智

2011 『ラピタ人の考古学』、渓水社。

伊藤圭

2014 「ヤブチ式前後の土器相について」新里貴之・高宮広土編『琉球列島先史・原始時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集』第 1 集、六一書房、pp.17-30。

伊藤慎二

1999 「琉球縄文文化の基礎的研究」、國學院大學大學院。

2006 「縄文文化南の境界」、伊藤慎二・山添奈苗編『東アジア世界における日本基層文化の考古学的解明』國學院大學 21 世紀 COE プログラム　国際シンポジウム予稿集、國學院大學 21 世紀 COE プログラム第 1 グループ考古学班、pp.1-14。

印東道子

1995 「オセアニア土器文化の諸相」吉田集而（編）『生活技術の人類学』、平凡社、pp.185-206。

1999 「オセアニアの島嶼環境と人間居住」『熱帯研究』vol.3(1)、日本熱帯生態学会、pp.87-108。

2002 『オセアニア暮らしの考古学』、朝日新聞社。

2007 「生態資源と象徴資源」、内堀基光・菅原和孝・印東道子編『資源人類学』、放送大学教育振興会、pp.37-51。

2011 「土器文化の「生態」分析　粘土から「もの」へ」、床呂郁哉・河合香吏（編）『ものの人類学』、京都大学出版、pp.91-110。

2012 「海をこえてオセアニアへ」、印東道子(編)『人類大移動』、朝日新聞出版、pp.89-118。

2013 「海域世界への移動戦略」、印東道子(編)『人類の移動誌』、臨川書店、pp.232-245.

井上イリーナ

2015 「八重山の自然と考古―石垣島名蔵地区の遺跡環境の研究事例―」石垣市教育委員会市史編集課(編)『石垣市史』各論編 考古、石垣市教育委員会、pp.193-218。

今村啓爾

2001 「原始東南アジアの展開」、池端雪浦・石井良昭・加納啓良・後藤乾一・斎藤照子・桜井由躬雄・末廣昭・山本達郎（編）『原始東南アジア世界』岩波講座 東南アジア史 第 I 巻、岩波書店、pp.29-54。

上村俊雄

2007 「九州と南島の文化交流について」『月刊考古学ジャーナル』564、ニュー・サイエンス社、pp.3-5。

上村幸雄

1997 「琉球列島の言語」、亀井孝也編『言語学大辞典』、三省堂。

上原静

1995 「西表島、仲間第一貝塚の調査概要」『沖縄県教育庁文化課紀要』第 11 号、沖縄県教育委員会。

宇田津徹朗

2005 「石垣島における稲作の起源を追って－プラント・オパール分析法を用いた検討」『石垣市史のひろば』第 28 号、石垣市総務部市史編纂課、pp.24-34。

江上幹幸

2007 「宮古島アラフ遺跡のシャコガイ製貝斧と利器–貝斧埋納遺構の考察を中心に－」『南島考古』第 26 号、pp.305-326.

2015 「無土器期の位置付け」、久貝弥嗣・大堀皓平（編）『いま、宮古の考古学が面白い！-無土器期からグスク時代への移り変わり-』、沖縄考古学会、pp.60-68。

大濱永亘

1999 『八重山の考古学』、先島文化研究所。

大濱永寛

2015 「八重山の貝斧文化」、石垣市教育委員会市史編集課（編）『石垣市史』各論編 考古、pp.267-275。

大堀皓平

2014 「琉球列島の石器・石器石材」新里貴之・高宮広土編『琉球列島先史・原始時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集』第 1 集、六一書房、pp.263-275。

2015 「宮古島 石の流通史 −ミヌズマ遺跡出土資料を中心に−」『久貝弥嗣・大堀皓平（編）『いま、宮古の考古学が面白い！-無土器期からグスク時代への移り変わり-』、沖縄考古学会、pp.4-14

岡村道雄

2011 「旧石器時代・旧石器文化」、田中琢・佐原真（編）『日本考古学辞典』、三省堂、pp.197-201。

小川岳人

2001 『縄文時代の生業と集落－古奥東京湾沿岸の社会』、株式会社アム・プロモーション。

小川英文

1984 「不定形剥片石器考-フィリピン・ルソン島ラトゥラトゥ洞穴の石器群の分析について」『史観』111 号、早稲田大学史学会、pp.88-120。

沖縄県教育委員会

1979a『石垣島の遺跡―詳細分布調査報告書―』、沖縄県教育委員会。

1979b『ナガタ原貝塚・船越貝塚－発掘調査報告書－』、沖縄県教育委員会。

1980 『石垣県道改良工事に伴う発掘調査報告：大田原遺跡・神田貝塚・ヤマバレー遺跡・附編：平地原遺跡表面採集遺物』、沖縄県教育委員会。

1981 『沖縄県八重山石垣市－名蔵貝塚群発掘調査報告』、沖縄県教育委員会。

1984 『長間底遺跡発掘調査報告書』、沖縄県教育委員会。

1985a『名蔵貝塚群発掘調査報告書－県道改良工事に伴う緊急発掘調査－』、沖縄県教育委員会。

1985b『トゥグル浜遺跡-与那国空港整備工事に伴う緊急発掘調査報告-』、沖縄県教育委員会。

1986 『下田原貝塚・大泊浜貝塚―1・2・3 次発掘調査報告』、沖縄県教育委員会。

1990 『新里村遺跡－竹富島一周道路建設工事に伴う緊急発掘調査報告』、沖縄県教育委員会。

1992 『新空港拡張建設計画予定地周辺の遺跡－新石垣空港・久米島空港建設計画予定地内詳細分布調査報告書－』、沖縄県教育委員会。

1994 『カイジ浜貝塚－竹富町一周道路工事に伴う緊急発掘調査報告－』、沖縄県教育委員会。

2000 『空港整備予定地周辺の遺跡-与那国・新多良間・波照間空港整備予定地周辺における遺跡詳細分布調査-』、沖縄県教育委員会。

沖縄県教育庁文化課（編）

1981 『宮古平良市住屋遺跡緊急発掘調査報告』、沖縄県教育委員会。

沖縄県立埋蔵文化財センター

2009 『嘉良嶽東貝塚・嘉良嶽東古墓群 - 新石垣空港予定地内遺跡発掘調査報告書－』、沖縄県立埋蔵文化財センター。

2013 『白保竿根田原洞穴遺跡: 新石垣空港建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』、沖縄県立埋蔵文化財センター。

沖縄県文化振興会（財団法人沖縄県文化振興会 公文書管理部 史料編集室）

2003 『沖縄県史』各論編 第二巻 考古、沖縄県教育委員会。

沖縄県立博物館・美術館

2014 『サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告書Ⅰ』、沖縄県立博物館・美術館。

2015 『サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告書Ⅱ』、沖縄県立博物館・美術館。

沖縄県立埋蔵文化財センター

2009 『嘉良嶽東貝塚・嘉良嶽東古墓群－新石垣空港予定地内遺跡発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター。

2013 『白保竿根田原洞穴遺跡: 新石垣空港建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』、沖縄県立埋蔵文化財センター。

小野林太郎

1999 「東南アジア・オセアニアの貝斧について－ミクロネシアにおける貝斧の型式分類と比較研究－」『東南アジア考古学』第 19 号、東南アジア考古学会、pp.19-56。

小畑弘己・森本勲・角縁進

2004 「琉球列島出土の黒曜石製石器の化学分析による産地推定とその意義」『Stone Sources』4、石器原産地研究会、pp.101-136。

鹿児島県歴史資料センター黎明館

2015 『南からみる中世の世界―海に結ばれた琉球列島と南九州－』、「南からみる中世の世界」実行委員会。

片桐千亜紀・山崎真治・藤田祐樹

2012 「白保竿根田原洞穴遺跡の発掘調査概要」『石垣市立八重山博物館紀要』第 21 号、石垣市立八重 山博物館、16-30 頁。

何傳坤

2001 「臺灣陸橋史前動物及人類化石的新發現」珠江三角洲與臺灣地區考古近年來的新發現和新評估研討會論文。

2010 「水下考古與臺灣陸橋動物群」『館訊』266 期科学文摘、a-1。

金関丈夫

1954 「波照間－琉球通信 4」、『朝日新聞』西部版、昭和 29 年 4 月 14 日号。

1955 「八重山群島の古代文化－宮良博士の批判に答う－」『民族学研究』第 19 巻第 2 号、pp.107-141。

金関丈夫・国分直一・多和田真淳・永井昌文

1964 「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」『水産大学校研究報告』人文科学篇第 9 号、水産大学校、pp.1-85。

金子エリカ

1993 「巨石遺跡－先島の例－」、比嘉政夫編『海洋文化論　環中国海の民俗と文化』第一巻、凱風社、pp.85-12

亀井明徳

1986 『日本貿易陶磁史の研究』、同朋社。

木崎甲子郎

1985 『琉球弧の地質誌』、沖縄タイムス社。

岸上興一郎

1971 「宝貝の錘」『民族学研究』第 35 巻、日本民族学会、pp.262-263。

木村正昭・安里嗣淳・中村俊夫

2004 「C14 年代測定による与那国島トゥグル浜遺跡の年代」『南島考古』23 号、沖縄考古学会、pp.43-50。

岸本義彦

1995 「西表島中野西崎貝塚から発見されたシャコガイ製貝斧」『沖縄県教育庁文化課紀要』第 11 号、沖縄県教育委員会、pp.41-60。

2000 「南琉球新石器時代の諸問題」『史料編集室紀要』第 25 号、沖縄県教育委員会、pp.41-54。

2004a「下田原式土器の編年試案」『沖縄埋文研究』2、沖縄県立埋蔵文化財センター、pp.1-12。

2004b「先島諸島の貝製品・骨牙製品」、高宮廣衞・知念勇(編)『考古資料大観』12 貝塚文化後期、小学館、pp.331-334。

岸本義彦・森本孝房・西銘章

1995 「西表島中野西崎貝塚から発見されたシャコガイ製貝斧」『沖縄県教育庁文化課紀要』第 11 号、沖縄県教育委員会、pp.41-60.

木下尚子

2000 「開元通宝と夜光貝」、高宮廣衞先生古希記念論集刊行会（編）『琉球・東アジアの人と文化：高宮廣衞先生古希記念論集』上巻、高宮廣衞先生古希記念論集刊行会、pp.187-219。

2012 「琉球列島における先史文化の形成と人の移動」『文学部論叢』第 103 号、熊本大学文学部、pp.13-27。

金武正紀

1994 「土器→無土器→土器−八重山考古学編年試案−」『南島考古』第 14 号、沖縄考古学会、pp.83-92。

1998「沖縄における貿易陶磁」『日本考古学協会 1988 年度沖縄大会 資料集』、沖縄大会実行委員会事務局、pp.147-158。

2015 「八重山の土器文化」、石垣市教育委員会市史編集課(編)『石垣市史』各論編 考古、石垣市教育委員会、pp.229-266。

久貝弥嗣

2014 「宮古島の無土器期-平成 24 年度友利元島遺跡発掘調査成果から考える-」『宮古島の無土器期』宮古島市総合博物館 26 回企画展示関連行事シンポジウム資料、宮古島市総合博物館、10-15 頁。

2015 「ミヌズマ遺跡・友利元島遺跡の調査成果に見る無土器期からグスク時代への変遷」久貝弥嗣・大堀皓平（編）『いま、宮古の考古学が面白い！-無土器期からグスク時代への移り変わり-』、沖縄考古学会、pp.14-22。

久貝弥嗣・大堀皓平（編）

2015 『いま、宮古の考古学が面白い！-無土器期からグスク時代への移り変わり-』、沖縄考古学会。

城辺町教育委員会

1990 『THE URASOKO SITE A Sketch of Excavation in Photographs』、城辺町教育委員会。

国分直一

1968 「南島先史時代の技術と文化」『史学研究』東京大学文学部紀要第 66 号、東京大学教育学部、pp.1-41。

1971 「南島の民族文化ー特に日本祖語の形成の時期をめぐる問題によせてー」、谷川健一編『起源論争』叢書わが沖縄第三巻、木耳社、pp.225-250。

1972 『南島先史時代の研究』、慶友社

後藤雅彦

2015 「東アジア亜熱帯沿海地域の新石器文化にみる継続性と断続性」、池田榮史（編）『継続性と断続性ー自然・動物・文化』平成 26 年度中期達成プロジェクト経費（戦略的推進経費）研究成果報告書、琉球大学考古学研究室、pp.47-56。

小林正史

1999 「煮炊き用土器の作り分けと使い分けー「道具としての土器」の分析ー」櫛原功一（編）『食の復元ー遺跡・遺物から何を読み取るか』、帝京大学山梨文化財研究所、pp.1-60。

小林竜太、山口徹、山野博哉

2013 「リモートセンシングによる石垣時サンゴ礁形成史の地域差推定ー先史資源利用研究に向けてー」『考古学研究』60 巻第 2 号、考古学研究会、55-72 頁。

佐伯弘次

2010 「博多と寧波」荒野泰典・石井正敏・村井章介（編）『通交・通商圏の拡大』日本の対外関係 3、吉川弘文館、pp.138-164。

島袋綾野

2002 「波照間島下田原貝塚採集の石器資料」『南島考古』21 号、沖縄考古学会、pp.37-48。

2011 「先島諸島の先史時代：八重山諸島を中心に」、高宮広土・伊藤慎二編『先史・原始時代の琉球 列島：ヒトと景観』

六一書房、pp.264-289。

島袋春美

1997 「県内出土の「タカラガイ製品」について」『南島考古』第 16 号、沖縄考古学会、pp.61-70。

2003a「奄美・沖縄諸島における漁網錘の形態的研究（その 1）—民俗事例の漁網水の形態的研究—」『地域文化論叢』、沖縄国際大学大学院地域文化研究科、pp.25-54。

2003b「奄美・沖縄諸島における漁網錘の形態的研究（その 2）—研究史—」『南島考古』第 22 号、沖縄考古学会、pp.41-52。

2004 「奄美・沖縄諸島における漁網錘の形態的研究（その 3）—考古資料の検討—」『南島考古』第 23 号、沖縄考古学会、pp.1-13。

新里貴之

2004 「先島諸島におけるグスク時代煮沸土器の展開とその背景」、今帰仁村教育委員会編『グスク文 化を考える』世界遺産国際シンポジウム〈東アジアの城郭遺跡を比較して〉の記録、今帰仁村教育委員会、pp.307-324。

菅原広史

2015 「宮古島における脊椎動物遺体出土様相の変遷と生業形態について－近年の遺跡出土資料に見る生業史の変遷－」久貝弥嗣・大堀皓平（編）『いま、宮古の考古学が面白い！-無土器期からグスク時代への移り変わり-』、沖縄考古学会、pp.33-34。

鈴木康之

2008 「滑石製石鍋の流通と琉球列島」池田榮史（編）『古代中世の境界領域』、高志書院、pp.213-234。

諏訪元・藤田祐樹・山崎真治・大城逸朗・馬場悠男・新里尚美・金城達・海部陽介・松浦秀治

2011 「港川フィッシャー遺跡（沖縄県八重瀬町）の更新世人骨出土に関する新たな知見」『Anthropological science. Japanese series』119(2)、日本人類学会、pp.125-136。

施添福（総編）、劉益昌（編）

2001 『臺東縣史　史前篇』、臺東縣政府。

臧振華

1995 『臺灣考古』、行政院文化建設委員會。

2013a「台湾新石器時代早期居民的環境認知與資源利用」、邱斯嘉・臧振華(主編)『考古学與永続発展研究』、中央研究院歴史語言研究所、pp.237-260。

2013b「八仙洞考古学的新發現兼論台湾旧石器文化的年代與類縁問題」、陳光祖・臧振華(主編)『東亜考古的新發現』中央研究院第四届国際漢学会議論文集、中央研究院歴史語言研究所、pp.379-416。

宋文薰

1969 『長濱文化　台湾首次發現的先陶文化（簡報)』、中國民族學會。

高宮廣衞

1961 「沖縄本島の先史文化－概観」『沖縄文化』第四号、沖縄文化協会。

1992 「八重山考古學研究略史」、陳捷先主編『陳奇祿院士七秩榮慶論文集』、陳寄祿院士七秩榮慶論文集編輯委員会。

1994 「八重山地方新石器無土器期石斧の推移（予察)」『南島考古』第 14 号、沖縄考古学会、pp.1-31。

1995 「八重山型石斧の基礎的研究（3）－磨面に関する若干の考察－」『南島考古』第 15 号、沖縄考古学会、pp.1-31。

1996a「南島考古雑録（Ⅱ)」『沖縄国際大学文学部紀要』社会学篇第 20 号第 2 巻、沖縄国際大学文学部、pp.43-59。

1996b「八重山地方新石器無土器期出土の石斧のサイズ」、劉茂源編『ヒト・モノ・コトバの人類学』國分直一先生米寿記念論文集、慶友社、pp.457-467。

1999 「八重山型石斧の基礎的研究（4)」『沖縄国際大学総合学術研究紀要』第 3 巻第 1 号、沖縄国際大学総合学術学会、pp.51-126。

2001 「南島考古雑録（Ⅲ)」『沖縄国際大学総合学術研究紀要』第 3 巻第 1 号、沖縄国際大学総合学術会、pp.181-222。

高宮廣衞・金武正紀・鈴木正男

1975 「那覇山下町洞穴発掘経過報告」、日本人類学会編『人類学雑誌』Vol.83, No.2, 日本人類学会、pp.125-130。

高宮廣衞・知念勇（編）

2004 『考古資料大観』12 貝塚文化後期、小学館。

高宮広土

1996 「古代民族植物学的アプローチによる那崎原遺跡の生業」『那崎原遺跡－那覇空港ターミナル用地造成工事に伴う緊急発掘調査報告－』、那覇市教育委員会、pp.83-100。

高山純

1977 「南島と太平洋のシャコガイ貝製斧」『沖縄県立博物館紀要』第 3 号、沖縄県立博物館、pp.78-98。

2001 「先島のシャコガイ手斧はフィリピン起源か」『南島考古』20 号、沖縄考古学会、pp.1–27。

竹富町教育委員会

2009 『鹿川ウブドー遺跡－埋蔵文化財発掘調査概要報告』、竹富町教育委員会。

田中和彦

2013 「ルソン島北部における新石器時代から金属器時代の土器編年と人々の移動」『古代文化』第 64 巻第 4 号、古代学協会、pp.85-97。

谷川健一

1971 「解説」、谷川健一編『起源論争』叢書わが沖縄第三巻、木耳社、pp.289-291。

多良間村教育委員会

1993 『多良間添道遺跡－発掘調査報告－』、多良間村教育委員会。

張伯宇・高慶珍・珍君臨(編)

2008『臺灣地理圖説』、南天書局有限公司。

陳有貝、森威史（訳）

2004 「生業の視点で捉えた台湾と先島諸島の先史文化」『南島考古』23 号、沖縄考古学会、pp.31-42。

東海大学網取遺跡・カトゥラ貝塚発掘調査団

2007 『網取遺跡・カトゥラ貝塚の研究』、東海大学文学部歴史学科考古学第一研究室。

長墓遺跡調査団

2013 『南嶺の長墓遺跡調査研究Ⅰ』、西九州大学持続的環境文化研究所。

名島弥生

2014 「放射性炭素年代から見た琉球列島における考古学的時期区分の現状と課題」、新里貴之・高宮広土編『琉球列島先史・原始時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集』第 1 集 琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化、六一書房、241-260 頁。

名島弥生・安斎英介・宮城弘樹

2007 「琉球列島における考古学的時期区分と放射性炭素年代」『南島考古』27 号、沖縄県考古学会、pp.23-48。

西村正衛・玉口時雄・大川清・浜名厚
1960 「八重山の考古学」、滝口宏編『沖縄八重山』早稲田大学考古学研究室報告第七冊、校倉書房、pp.101-164。
西村昌也
2010 「東南アジア・南中国における旧石器時代」、稲田孝司・佐藤宏之編『旧石器時代＜下＞』講座日本の考古学 2、青木書房、pp.511-560。
日本地図センター
1977『土地分類図（沖縄）』、日本地図センター。
服部四郎
1955 「琉球の言語と民族の起源」、『琉球新報』昭和 30 年 12 月 18 日号。
1956 「琉球の言語と民族の起源（補遺）」、『琉球新報』昭和 31 年 4 月 9 日号。
ハドソン・マーク
2014 「先島諸島における先史時代のヒトと生態史」、新里貴之・高宮広土編『琉球列島先史・原始時 代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集』第 2 集、六一書房、pp.181-194。
パリノ・サーヴェイ株式会社
2007 「網取遺跡・カトゥラ貝塚出土遺物の放射性炭素年代」、東海大学網取遺跡・カトゥラ貝塚発掘調査団『網取遺跡・カトゥラ貝塚の研究』、東海大学文学部歴史学科考古学第一研究室、pp.297-300。
ベルウッド・ピーター（著）、植木武・服部研二（訳）
1989 『太平洋：東南アジアとオセアニアの人類史』、法政大学出版局。（初出は 1978 *Conquest of the pacific*）。
ベルウッド・ピーター（著）、長田俊樹・佐藤洋一郎（訳）
2008 『農耕起源の人類史』、京都大学学術出版会。（初出は 2005 *FIRST FARMERS*）。
羽生淳子
1990 「縄文時代の集落研究と狩猟・採集民研究との接点」『物質文化』53 号、pp.1-14。
フィッツヒュー・ベン、佐々木史郎（訳）
2002 「北太平洋における海洋狩猟採集民の起源」、佐々木史郎編『先史狩猟採集文化研究の新しい展開』国立民族学博物館調査報告 33、pp.49-82。
宝来聰
1997 『DNA 人類進化学』岩波化学ライブラリー52、岩波書店。
前田保夫
2007「19000 年前以降の海面上昇（縄紋海進）について」、日本地形学連合編『地形』第 28 巻第 4 号、日本地形学連合、pp.349-364。
益富寿之助
1955 『原色岩石図鑑』、保育社。
松葉崇
2007 「先島諸島における先史時代の石斧と貝斧」『南島考古』第 26 号、沖縄考古学会。
宮城弘樹
2012 「八重山諸島の開元通宝」『先島地域における先史時代の終焉とスク遺跡出現に関する研究-研究成果報告書-』第 39 回三菱財団人文科学研究助成 人文科学 31、pp.13-21.
宮古島市教育委員会

2011 『宮古島の岩陰遺跡－沖縄県宮古島市内遺跡発掘調査－』、宮古島市教育委員会。

宮良当壮

1954 「琉球民族とその言語」『民族学研究』第 18 巻第 4 号、国書刊行会、pp.369-379。

宮良芳和

2011 「八重山への漂着及び来航事例集」『石垣市立八重山博物館紀要』第 20 号、石垣市立八重山博物館、pp.24-40。

山極海嗣

2014 「宮古・八重山諸島における先史研究の現状と課題」『貝塚』70 号、pp.1-8。

2015 「宮古・八重山諸島無土器期における地域間変異と生態資源利用」『物質文化』95 号、pp.153-170。

山崎真治

2014 「旧石器時代から貝塚時代へ－起源論研究の現状とその行方－」、新里貴之・高宮広土編『琉球列島先史・原始時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集』第 1 集、六一書房、pp.3-16。

2015 「南城市サキタリ洞遺跡の発掘調査と沖縄先史文化の起源」沖縄県立博物館文化講座・公開シンポジウム資料（2015 年 3 月 7 日）。

山野ケン陽次郎

2014 「先史琉球列島における貝製品の変化と画期 ―貝製装飾品を中心に－」、新里貴之・高宮広土編『琉球列島先史・原始時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集』第 1 集、六一書房、pp.277-291。

山崎真治・仲里健・仲座久宣

2012 「胎土分析から見た下田原式土器」『沖縄県立博物館・美術館紀要』No.5、pp.37-50。

横尾昌樹

2014 「貝塚時代前 2 期の土器編年について－室川下層式土器の研究を主体として－」新里貴之・高宮広土編『琉球列島先史・原始時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集』第 1 集、六一書房、pp.31-46。

李光周

1999 『墾丁国家公園的史前文化』文化資産叢書［古蹟類］、行政院文化建設委員会出版。

李光周・尹建中

1996 『墾丁史前住民與文化』、稻鄉出版社。

劉益昌

1996 『臺灣的史前文化與遺址』、台灣省文獻委員會、台灣史蹟源流研究會。

2002 『台湾原住民史 史前篇』、國史館臺灣文獻館。

2011 「台湾考古学における近年の研究概要」『東南アジア考古学』第 31 号、東南アジア考古学会、pp.1-16。

連照美

2002 「臺灣史前時代貝器工業初探」、宋文薰・李亦薰・張光直（主編）『石璋如院士百歲祝壽論文集―考古・歷史・文化』、南天書局、pp.299-327.

2007 『臺灣新石器時代墾丁寮遺址埋葬研究報告』、國立臺灣大学出版中心。

連照美・宋文薰

2006 『卑南遺址發掘 1986～1989』、國立臺灣大学出版中心。

Bellwood, P.

2011 Holocene population history in the Pacific region as a model for worldwide food producer dispersal. *Current Anthropology* 52(4), S363-378.

Binford, L.R.

1980 Willow smoke and dogs' tails: hunter–gatherer settlement systems and archaeological site formation. American Antiquity 45, 4–20.

Blust, R.

1984 The Austronesia homeland: A linguistic perspective. *Asian Perspectives* 26, LYNNE RINNER PUBLISHERS: 45-67.

C.H. Chang, Y. Kaihu, M. Takai, R.T. Kano, R. Grün, S. Matsu'ura, L. Kinsley & L.K. Lin.

2015 The first archaic Homo from Taiwan. *Nature Communications* 6:6037, Macmillan Publishers Limited, pp.1-10.

Chang K. C.

1969 *FENGPITOU, TAPENKENG, AND THE PREHISTORY OF TAIWAN*. New Haven, Department of Anthropology Yale University.

Childe V. G.

1936 *Man Makes himself*. London : Watts.

Claridge, G.G.C.

1984 Pottery and the Pacific: the Clay Factor. *New Zeeland Journal of Archaeology* 6, pp.37-46.

Coutts, P.J.

1983 *An Archaeological Perspective pf Panay Island, Philippines*. San Carlos Publication, University of San Carlos, Cebu City.

Diamond, J.M.

1988 Express Train to Polynesia. *Nature* 336, pp.307-308.

Dye, T.

1990 The Causes and Consequences of decline in the prehistoric Marquesan fishing industry. Yen, D.E. & Mummery, J.M.J. (eds.), *Pacific production systems: approaches to economic prehistory*. Occasional Papers in Prehistory No.18, Dept. of Prehistory, Australian National University, pp.70-84, 1990.

Fox, R.B.

1970 *The Tabon Caves: Archaeological Explorations and Excavation on Palawan Island, Philippines*. Monograph of the National Museum no.1, Manila.

Green, R.C.

1974 A Review of Portable Artefacts from Western Samoa. Green, R.C. and Davidson, J.M. (eds.), *Archaeology of Western Samoa. Auckland: Bulletin of the Auckland Institute and Museum* 7, Vol.2, pp.245-276.

Hung, H.C.

2005 Neolithic Interaction between Taiwan and Northern Luzon: The pottery and Jade Evidences from the Cagayan Valley. *Journal of Austronesian Studies* 1(1), Taiwan: National Museum of Prehistory, pp.118-133.

Hung, H.C., Carson, M.T., Bellwood, P., Campos, F.Z., Piper, P.H., Dizon, E., Bolunia, M.J.L., Oxenhum, M., Chi, Z.

2011 The first settlement of Remote Oceania: the Philippines to the Mariana. ANTIQUITY, vol.85, no.329: pp.909-926.

Iizuka, Y. & Hung, H.C.

2005 Archaeomineralogy of Taiwan Nephrite: Sourcing Study of Nephritic Artifacts from the Philippines, *Journal*

of Austronesian Studies, vol. 1, no. 1, pp. 35-81.

Irwin, G.

1981 How Lapita lost Its Pots: the Question of Continuity in the Colonization of Polynesia. *Journal of the Polynesian Society* 90, pp.481-494.

Kirch, P.V. and Yen, D.

1982 Tikopia：the prehistory and ecology of a Polynesian outlier. *B. P. Bishop Museum Bull.* 238, Honolulu: Bishop Museum Press, pp.1-396.

Leach, H.M.

1982 Cooking without Pots: Aspect of Prehistoric and Traditional Polynesian Cooking. *New Zeeland Journal of Archaeology* 4, pp.149-156.

Le Moine, G.

1987 The Loss of Pottery in Plynesia. *New Zealand Journal of archaeology* Vol.9, New Zealand Archaeological Association, pp.25-32.

Lubbock J. S.

1913 *Prehistoric times, as illustrated by ancient remains, and the manners and customs of modern savages*. London：Williams and Norgate.（初版 1865 年）

MacArthur, R.H. and Wilson, E.O.

1967 *The Theory of Island Biogeography*. Princeton University Press: New Jersey.

Marshall, Y.

1985 Who made the Lapita Pots?: A Case Study in Gender Archaeology. *The Journal of the Polynesian Society* 94, pp.205-233.

Mijares AS, Détroit F, Piper P, Grün R, Bellwood P, Aubert M, Champion G, Cuevas N, De Leon A, Dizon E.

2013 New evidence for a 67,000-year-old human presence at Callao Cave, Luzon, Philippines. *Journal of Human Evolution* xxx (Leiden, 2010), pp.1-10.

Nakagawa, R., N, Doi, Y. Nishioka, S. Nunami, H. Yamauchi, M. Fujita, S. Yamazaki, M. Yamamoto, C. Katagiri, H. Mukai, H. Matsuzaki, T. Gakuhari, M. Takigami, M. Yoneda.

2010 The Pleistocene human remains from Shiraho-Saonetabaru Cave on Ishigaki Island, Okinawa,Japan, and their radiocarbon dating. In: The Anthropological society of Nippon (eds.), *Anthropological Science*, vol.118 (3), The Anthropological society of Nippon, pp.173-183.

Pawlik, A.F., Philip, J.P., Wood, R.E., Lim, K.K.A., Faylona, M.G.P., Mijares, A.S.B., and Port, M.

2015 Shell tool technology in Island Southeast Asia: an early Middle Holocene Tridacna adze from Ilin Island, Mindro, *Philippines. Antiquity*, vol.89, pp.292-308.

Pearson R.J. 森威史（訳）

1968 「台湾東部の先史文化」『交流文化』5、古代交流文化研究会

Pearson R.J.

1969 *Archaeology of the Ryukyu Islands*. University of Hawaii Press.

1978 Excavations on Kume and Iriomote,Ryukyu Islands. In: *Asian Perspectives* 21(1), Honolulu: University of Hawaii Press, pp.7-26.

2013 *Ancient Ryukyu: An Archaeological Study of Island Community*. Honolulu: University of Hawai'i Press.

Pearson R. and Asato S. Monks G. Pkotylo D.

1980 Excavations of Kume and Iriomote, Ryukyu Islands. In: Jonker, L. and Carson, M. (eds.), *Asian Perspectives*, vol.XX1(1), The University Press of Hawaii, pp.7-26.

Sato, T., Nakagome, S., Watanabe, C., Yamaguchi, K., Kawaguchi, A., Koganbuchi, K., Haneji, K., Yamaguchi, T., Hnihara, T., Yamamoto, K., Ishida, H., Mano, S., Kimura, R. and Oota, H.

2014 Genome-wide SNP analysis reveals population structure and demographic history of the Ryukyu Islanders in the southern part of the Japanese Archipelago. Molecular Biology and Evolution Advance Access published August 24, 2014, pp.1-12.

Summerhayes, G.R. and Anderson, A.

2009 An Austronesian Presence in Southern Japan: Early Occupation In The Yaeyama Islands. In: *IPPA BULLETIN* 29, pp.76-91.

Vilar, M.G., Chan, C.W., Santos, D.R., Lynch, D., Spathis, R., Garruto, P.M. and Lum J.K.

2013 The origins and genetic distinctiveness of the Chamorros of the Mariana Islands: An mtDNA perspective. *American Journal of Human Biology* 25, pp.116-122.

Whittaker, R.J.

1998 *Island Biogeography: Ecology Evolution and Conservation*. Oxford University Press: Oxford.

Yesner, D.

1998 Origins and Development of Maritime Adaptation in the Northwest Pacific Region on North America: A Zooarchaeological Perspective. *Arctic Anthropology* 35(1), University of Wisconsin Press, pp.204-222.